

兵庫県三田市
溝 口 遺 跡
—北摂工業地区—

住宅・都市整備公団関西支社
財團法人 古代學協會

昭和61年

目 次

例 言	ix
はじめに	(山下) 1
第Ⅰ章 調査の経過と方法	3
第1節 調査に至る経過	(鈴木) 3
第2節 試掘調査	(南) 4
1. 調査の目的・方法	4
2. 調査の経過	4
3. 調査の結果	6
第3節 本 調 査	(山下) 6
第4節 発掘調査及び整理作業におけるコンピューターの利用	(南) 8
1. 導入の経緯	8
2. システムの開発・整備	9
3. システムの概要	9
1) ハードの構成 2) プログラムの構成	
4. 作業概要及び手順	11
1) 光波距離計の設置 4) 基本データの作成	
2) 遺物のとりあげ 5) 分布図の作成	
3) 生データの追加・訂正	
5. 成果と問題点	11
第Ⅱ章 遺跡の立地と堆積	15
第1節 遺跡周辺の地形	(青木) 15
第2節 遺跡周辺の地質	(上田) 17
第3節 遺跡内の堆積	(山下) 19
第4節 火山ガラスの抽出分析	(竹村) 22
1. はじめに	22
2. 方 法	23
3. 試料と結果	23
4. 火山ガラスをもたらした火山灰について	25
第Ⅲ章 先土器時代	27
第1節 資料の選別	(山下) 27
第2節 磚ブロック及びその他の磚	(保坂) 29
1. 磚ブロック	29
1) 出土状態 3) まとめ	
2) 構成磚の諸属性	
2. その他の磚	33

第3節 遺物	（井上、黒坪、柴田、竹内、田中、土江、山下）	34
1. ナイフ形石器		34
2. スクレイパー		35
3. 尖頭器様石器		38
4. 加工痕ある剥片（R F）		38
5. 使用痕ある剥片（U F）		43
6. 敷石類		43
7. 石斧		48
8. 剥片		50
9. 石核		50
10. 受熱石器		56
11. 光沢ある石器		57
第4節 石材		（徳永） 58
第5節 剥片剥離技術		（土江、井上、山下） 60
第6節 石器の分布		（鈴木） 83
1. 石器の分布と遺跡の広がり		83
2. ブロックの設定		84
3. 石器の器種別分布		89
1) ナイフ形石器	7) 砕片	
2) スクレイパー	8) 石核	
3) R F	9) トゥール類とその他の資料	
4) U F	10) 受熱石器	
5) 敷石・櫛石・石斧	11) 単独個体	
6) 剥片	12) 石材別分布	
4. ブロック別の石器組成		95
1) 全器種	3) ブロック内とブロック外	
2) トゥール	4) 第1ブロック外の性格	
5. 石器の分布及び組成から見た特徴		101
第7節 石器の分布と地表の傾斜		（青木） 102
第8節 個体別資料の検討とブロック間関係		107
1. 個体別資料の抽出		（山下） 107
2. 個体別資料と剥片剥離作業		（山下） 108
3. 個体別資料の分布		（井上、土江、鈴木、山下） 115
1) 広域分布個体	3) 個体別資料分布の概観	
2) 狹域分布個体	4) ブロックと剥片剥離個体別資料の分布	
4. 接合個体別資料の分布		（鈴木） 137
5. ブロック間関係		（鈴木） 138
1) 個体別資料から見たブロック間の関係		
A) ブロック間共有関係 B) ブロック間相対強度と相互強度		
2) 接合資料から見たブロック間の関係		
A) ブロック間接合関係 B) ブロック間相対強度と相互強度		
第9節 小結		147
1. 石器群の特性		（山下） 147
1) 石器	3) 剥片剥離技術	
2) 石材	4) 編年の位置	

2. 集落の景観と構造	（鈴木、山下）	152
1) 石器の分布とブロック		
2) ブロックの石器組成	4) 造構とブロック	
3) 個体別資料から見た	5) 世帯ユニット	
ブロック間関係	6) 集落の景観と構造	
第IV章 縄文・弥生時代		163
第1節 資料の抽出		（大下） 163
第2節 遺 物		（大下） 164
1. 石 錫		164
2. 模形石器		173
3. 削 器		175
4. RF		175
5. UF		175
6. 石 核		177
7. 破 片		177
1) 石錫製作に関連する資料	2) 模形石器碎片	
8. 接合資料の検討		180
9. 剥片剥離技術の検討		181
第3節 石器の分布		（大下） 181
1. 石器の分布と遺跡の広がり		181
2. 石器の時間的関係		183
3. 石器の種類別と接合資料の分布		184
1) 石 錫	6) 石 核	
2) 模形石器	7) 「石錫チップ」	
3) 削 器	8) 模形石器碎片	
4) RF	9) 接合資料	
5) UF		
4. J1集中部の検討		185
5. J2集中部の検討		187
6. 小 結		187
第4節 遺跡の特性		（南） 188
第V章 古墳時代		（藤平） 192
第VI章 平安時代		（藤平） 193
第1節 遺 物		193
第VII章 中 世		（藤平） 197
第1節 遺 構		197
第2節 遺 物		203
第VIII章 結 語		（山下） 204
註		205
参考文献		205
さいごに		208
図 版 (17図)		
別添図 (34葉)		

図 版 目 次

- 図版1 遺跡全景
 図版2 上：遺跡全景，下：遺跡近景
 図版3 上：試掘調査，中：7D区土層断面，下：光波距離計とコンピューターによる遺物とりあげ
 図版4 上：発掘風景，中：先土器時代の礫ブロック，下：第1土壤の礫配置状態
 図版5 中世の土壤
 図版6 上：ナイフ形石器，尖頭器様石器，スクレイパー，下：石斧，敲石，槌石
 図版7 上：R F A・B・C類，下：R F D・E・F類，その他
 図版8 上：石核A・B類，下：石核C・D・E・F類
 図版9 個体別資料Te ①3 E
 図版10 個体別資料Te ④3 E
 図版11 個体別資料Te ②4 D
 図版12 個体別資料Te ①7 C
 図版13 個体別資料Te ④7 C
 図版14 個体別資料Te ⑧8 C
 図版15 個体別資料Cha ①3 D
 図版16 石 鐵
 図版17 上：石 鐵，下：削器，楔形石器，R F，U F他

別 添 図 目 次

- 別添第1図 遺跡出土石器全点分布図
 別添第2図 先土器時代の石器全点分布図
 別添第3図 先土器時代の石器分布等量線図
 別添第4図 第1ブロック周辺器種別石器分布図
 別添第5図 第2・3・6ブロック周辺器種別石器分布図
 別添第6図 第4・5ブロック周辺器種別石器分布図
 別添第7図 先土器時代のトゥール類全点分布図
 別添第8図 先土器時代のU F全点分布図
 別添第9図 先土器時代の剥片(B)，碎片(C)，石核(D)全点分布図
 別添第10図 先土器時代のトゥール類(A)とそれ以外識別分布図
 別添第11図 先土器時代の石器石材別分布図
 別添第12図 個体別資料分布範囲図

- 別添第13図 個体別資料中心分布図
 別添第14図 個体別剥片剥離作業域分布図
 別添第15図 接合資料分布範囲図
 別添第16図 剥片剥離作業の明瞭な個体別資料分布図
 別添第17図 剥片剥離作業の不明瞭な個体別資料分布図
 別添第18図 繩文・弥生時代石器全点分布図

挿 図 目 次

第1図 試掘・本調査のグリッド配置関係図	5
第2図 本調査掘り下げ深度図	7
第3図 遺物とりあげ・データ入力システムフローチャート	10
第4図 とりあげデータ打出し例	11
第5図 各種データ打出し例	12
第6図 遺跡周辺の地形	15
第7図 地形分類図	16
第8図 溝口遺跡周辺の地質略図	18
第9図 基盤地質略図	19
第10図 第1瀬戸内海時代	19
第11図 第2瀬戸内海時代	19
第12図 遺跡中央D列南西一北東セクション	20
第13図 8列南東一北西セクション	21
第14図 サンプル採取位置	23
第15図 試料分析結果	24
第16図 火山ガラス検出状況概念図	25
第17図 磚分布及び接合図	30
第18図 磚ブロック出土状態	32
第19図 磚ブロック構成磚の重量	32
第20図 磚ブロック構成磚の形	32
第21図 ナイフ形石器・スクレイパー	36
第22図 スクレイパー	37
第23図 尖頭器様石器	38
第24図 加工痕ある剥片（R F）	40
第25図 R F	41
第26図 R F	42
第27図 使用痕ある剥片（U F）	44

第28図	U F	45
第29図	U F	46
第30図	U F	47
第31図	U F	48
第32図	敲石, 槌石, 石斧	49
第33図	石核	52
第34図	石核	53
第35図	石核	54
第36図	石核	55
第37図	石核	56
第38図	個体別資料Te ① 3 E接合図	61
第39図	個体別資料Te ② 3 E接合図 [折込み]	63 • 64
第40図	個体別資料Te ③ 3 E接合図 [折込み]	65 • 66
第41図	個体別資料Te ④ 4 D接合図	68
第42図	個体別資料Te ⑤ 7 C接合図 [折込み]	71 • 72
第43図	個体別資料Te ⑥ 7 C接合図 [折込み]	73 • 74
第44図	個体別資料Te ⑦ 7 D接合図	77
第45図	個体別資料Cha ① 3 D接合図	79
第46図	水洗選別域と先土器時代の石器出土点数	85
第47図	水洗選別資料を加えた石器分布等量線図	86
第48図	受熱石器分布図	93
第49図	単独個体分布図	94
第50図	ブロック別石材構成図	96
第51図	ブロック別石器組成図	96
第52図	ブロック別トゥール組成図	97
第53図	石器器種のブロック内外構成比	99
第54図	第1ブロック外石器分布図	100
第55図	調査区微地形図	104
第56図	発掘地域における傾斜分布図	105
第57図	傾斜別石器出土数・平均出土数	106
第58図	個体別資料Cha ① 3 D分布図	116
第59図	個体別資料Te ② 3 E分布図	118
第60図	個体別資料Ch ① 3 E分布図	119
第61図	個体別資料Ch ④ 4 E分布図 [折込み]	121 • 122
第62図	個体別資料Sh ① 6 D分布図	123
第63図	個体別資料Te ⑤ 7 D分布図	124
第64図	個体別資料Te ⑥ 8 C分布図 [折込み]	125 • 126
第65図	個体別資料Te ⑦ 3 E分布図	127

第66図 個体別資料Te ④ 3 E分布図	128
第67図 個体別資料Te ② 4 D分布図	129
第68図 個体別資料Te ① 4 E分布図	130
第69図 個体別資料Cha ② 4 E分布図	131
第70図 個体別資料Te ① 7 C分布図	132
第71図 個体別資料Te ④ 7 C分布図	133
第72図 個体別資料のブロック間分有关係図	135
第73図 個体別資料のブロック間共有関係図（細別ブロック）	140
第74図 個体別資料のブロック間共有関係図（大別ブロック）	140
第75図 個体別資料から見たブロック間相互強度（幾何平均）	143
第76図 接合資料のブロック間共有関係図（細別ブロック）	144
第77図 接合資料のブロック間共有関係図（大別ブロック）	145
第78図 接合資料から見たブロック間相互強度（幾何平均）	146
第79図 石 鐵	165
第80図 石 鐵	166
第81図 石 鐵	167
第82図 石 鐵	168
第83図 楔形石器，削器，R F	174
第84図 U F, 剥片, 石核	176
第85図 「石鐵チップ」分類別長幅分布グラフ	178
第86図 「石鐵チップ」背面構成分類模式図	178
第87図 「石鐵チップ」，楔形石器碎片	179
第88図 個体別資料Ch ① 6 D分布図	183
第89図 須恵器時期別分布図	194
第90図 須恵器	195
第91図 中世の土壤配置図	198
第92図 第1土壤と出土土器	199
第93図 第2・3土壤	200
第94図 第4土壤	201
第95図 第5・6・8土壤	202

表 目 次

第1表 確観察表	31
第2表 先土器時代の石器組成表	34
第3表 石材別・器種別光沢出現率	57

第4表	先土器時代の石器石材表	59
第5表	ブロック別石器組成表	87・88
第6表	ブロック内・外別石器組成表	90
第7表	ブロック別石器石材組成表	95
第8表	ブロック別間における器種別および全トゥール占有比	98
第9表	構成資料点数別個体別資料数	108
第10表	個体別資料構成表	109~113
第11表	剥片剥離工程類型別個体別資料数	114
第12表	広域分布個体の中心ブロック内・外別石器組成	136
第13表	個体別資料のブロック間共有関係表	139
第14表	個体別資料から見たブロック(大区分)間相対強度	141
第15表	個体別資料から見たブロック間相互強度(幾何平均)	142
第16表	接合資料のブロック間共有関係表	144
第17表	接合資料から見たブロック間相対強度(大区分)	145
第18表	接合資料から見たブロック間相互強度(幾何平均)	146
第19表	縄文時代石器組成表(1)	163
第20表	縄文時代石器組成表(2)	163
第21表	石鏃一覧表	169・170
第22表	集中部別石器組成表	182
第23表	三田市域の縄文時代遺跡一覧表	190

例　　言

1. 本書は、兵庫県三田市下相野字殿垣1537他に広がる溝口遺跡の発掘調査報告書である。地籍では殿垣になるが、溝口集落のそば、溝口城址の山側に当っているために溝口遺跡とした。
2. 頁数の関係から、遺物台帳等は省略した。報告書の刊行後、遺物は三田市教育委員会に保管されるが、遺物の出土位置、器種分類等のデータも同所に揃えておく。
3. 図・表類の凡例で、同種のものが連続して使用される場合は、最初の図・表にまとめて示すように努めた。
4. 個体別資料の表記は以下のように行なった。例をもって示す。

ex. Te④3 E……Te(鉄石英の略), ④(3Eグリッドにおける鉄石英を石材とする個体別資料の通し番号),
3 E(大グリッド名)

このようになっているため、個体別資料名から石材とおよその分布位置を知ることができる。石材の略号は以下の如くである。

Te(鉄石英), Cha(玉鮎), Ch(チャート), Sh(頁岩),
Tu(凝灰岩), Qu(石英), San(サスカイト), An(安山岩)
Obe(黒曜石)。
5. 執筆者は目次とともに、各文末にも明記した。
6. 参考文献及び註は、巻末に一括した。

執筆者一覧

(五十音順)

青木 哲哉	立命館大学大学院
井上 千津	京都女子大学学生
上田 健夫	花園大学非常勤講師
大下 明	関西大学卒業
黒坪 一樹	京都府埋蔵文化財センター
柴田 潮音	同志社大学学生
鈴木 忠司	平安博物館考古学第一研究室
竹内 朋世	京都女子大学学生
竹村 恵二	京都大学理学部
田中 智子	京都女子大学学生
土江 伸明	関西大学学生
徳永 裕	平安博物館嘱託
藤平 寧	関西大学学生
保坂 康夫	山梨県教育委員会
南 博史	平安博物館考古学第二研究室
山下 秀樹	平安博物館考古学第一研究室

はじめに

三田地方は阪神地区に程近い条件にありながら、国鉄福知山線の整備の遅れから長らく大規模開発から守られて来た。ところが国鉄の電化・複線化、近畿自動車道舞鶴線の通過と相次ぐ開発の発表に伴って、北摂ニュータウンの大規模宅地開発も実施に移された。北摂ニュータウンはおよそ1,240haに及ぶ大規模なもので、これによって数多くの遺跡が発掘される所となった。ここ溝口遺跡も同様で、工業用地への転用が企られている。

三田地方はこのように開発の波及が遅れたためか比較的調査された遺跡も少なく、特に先土器時代の遺跡に至っては溝口遺跡が初めての例である。近年自動車道路の北進に伴って、兵庫県山間部でも良好な先土器時代遺跡が知られるようになったが、いずれもかなり独自性を持つ資料群(山口1985、藤田1985)である。従来の知見からすると、少なからず瀬戸内海地方の先土器文化と脈絡を持つと予測されたが、縦年的位置の相違からかそうした推測とは大いに異なっていた。溝口遺跡はそれらの遺跡よりもさらに瀬戸内海寄りであり、北摂の平野部まで直線で20~30Kmの距離にある。このため瀬戸内系の石器群の伴出が当然と考えられた。また、前記のより山間部の遺跡と瀬戸内との中間に位置しており、両者を繋ぐような資料の出土も考えられた。ところが兵庫県教育委員会による試掘の結果は鉄石英・玉髓・チャートなどを石材としており、いずれの石器群とも極めて異質なものようであった。そこで、まずは溝口遺跡の石器群の性格そのものを明らかにするという大きな目的が生まれて来た。

第二には、遺跡の立地と集落の広がりに興味が持たれた。これまで我々は中部・関東地方で発掘することが多かった。そこでは遺跡は地勢の判断し易い段丘縁辺部に立地するのが普通であった。そのため遺跡の広がりや規模など、比較的予測がし易かつた。ところが溝口では神戸層群と河岸段丘、それらの開析の進展などによって段丘端部は丘陵緩斜面状になっており、地形面の区分があまり明瞭ではなかった。そのため最も基本的な所では、本当にそうした所に集落を営んだのか否かから始まり、どのような集落形態・構造であったのかまで、良好な資料を提供してくれる可能性を含んでいた。瀬戸内は堆積に恵まれず、中国・近畿の山間部では発掘面積が狭いなどの理由で、こうした丘陵緩斜面上の遺跡の展開については不明瞭な部分が多い。類例はおそらく早風A地点(平井1979)のみに留まるであろうが、石器群の相違とともに集落形態の違いを検討するためには重要な遺跡となる可能性を秘めている。

(山下)

第Ⅰ章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

溝口遺跡の発見は、昭和57年のことであった。当遺跡は、早くから溝口城遺跡として知られていた。南西から北東に向けて突き出した台地の先端部は、空堀と土塁によって画され、土塁の内側には、往時の造構の存在が予想されていた(第1図)。

その後、付近一帯が北摂ニュータウンの建設予定地内に組み入れられたため、同年兵庫県教育委員会によって試掘調査が実施された。発掘に際しては、土塁の外側(南西)につづく広大な台地の中央部に、溝口城関連の遺跡の存在を予想して、トレンチが設定された(第1図)。土塁内における発掘所見は予期したとおりであったが、土塁外の台地内奥部から、ナイフ形石器や石鏃などが発見され、先土器時代・縄文時代の遺跡であることも同時に確認された。

このような経緯を経て昭和59年1月、県教委より、発掘調査の実施の必要性の検討を含めて、現地臨検の依頼があった。遺跡の分布密度は濃厚とはいえないが、先土器・縄文両時代の石器が広範囲に出土しており、発掘調査の必要性には明確なものがあった。

こうして、県教委、住宅・都市整備公団関西支社、平安博物館の間で数度の協議が行なわれた。協議の要点は、県教委のトレンチの及んだ範囲だけを考えても、1万数千m²を超す台地全域に調査を実施しなければならない可能性もあり、再度詳細な試掘トレンチをもうけ、これによつて調査対象面積と日程を考える必要があるということであった。こうして、本調査に先立つて再度の試掘調査が昭和60年3月20日～4月23日の間に実施された。この結果6500m²にわたつて精査の要ありと判断された。

試掘調査の結果について、三者間協議の後、平安博物館は本調査の委託をうけることに決し、同年6月からの本調査を迎えることになった。

試掘調査

期 間 昭和60年3月20日～同4月23日

調査担当 南 博史 (平安博物館考古学第2研究室、調査主任)

山下秀樹 (平安博物館考古学第1研究室、調査員)

鈴木忠司 (平安博物館考古学第1研究室、調査員)

調査面積 1,202 m²

本 調 査

期 間 昭和60年6月3日～同10月17日

調査担当 山下秀樹 (平安博物館考古学第1研究室、調査主任)

南 博史 (平安博物館考古学第2研究室、調査員)

鈴木忠司 (平安博物館考古学第1研究室、調査員)

調査面積 6,500 m²

第2節 試掘調査

1. 調査の目的・方法

試掘調査は、県教育委員会の試掘結果に基づき、先土器・縄文時代の遺物がどのように分布するかを把握し、本調査の指針とするのが目的であった。

県教委の試掘トレンチは、丘陵の中央南西～北東方向に幅3m、長さ120m(北東より10m単位で1～12区)、幅2mで長さ30m・10m(北東より10m単位で25～27、28区)で設けられた。さらに、これに直交する南東～北西方向の3本(北東から長さ30m、40m、50m)のトレンチ(北東より10m単位で13・14・15区、17・16・18・19区、21・20・22・23・24区)がある(第1図)。いずれも丘陵の中央部に位置しているものの、遺物の分布状況の概容を知るには不十分であった。そのために、遺物が分布する可能性がある範囲を、できるだけ広くカバーする調査区を配置すること、また、遺物分布をできるだけ正確に把握するために、調査区間隔を小さくした小調査区を多く配することにした(第1図)。

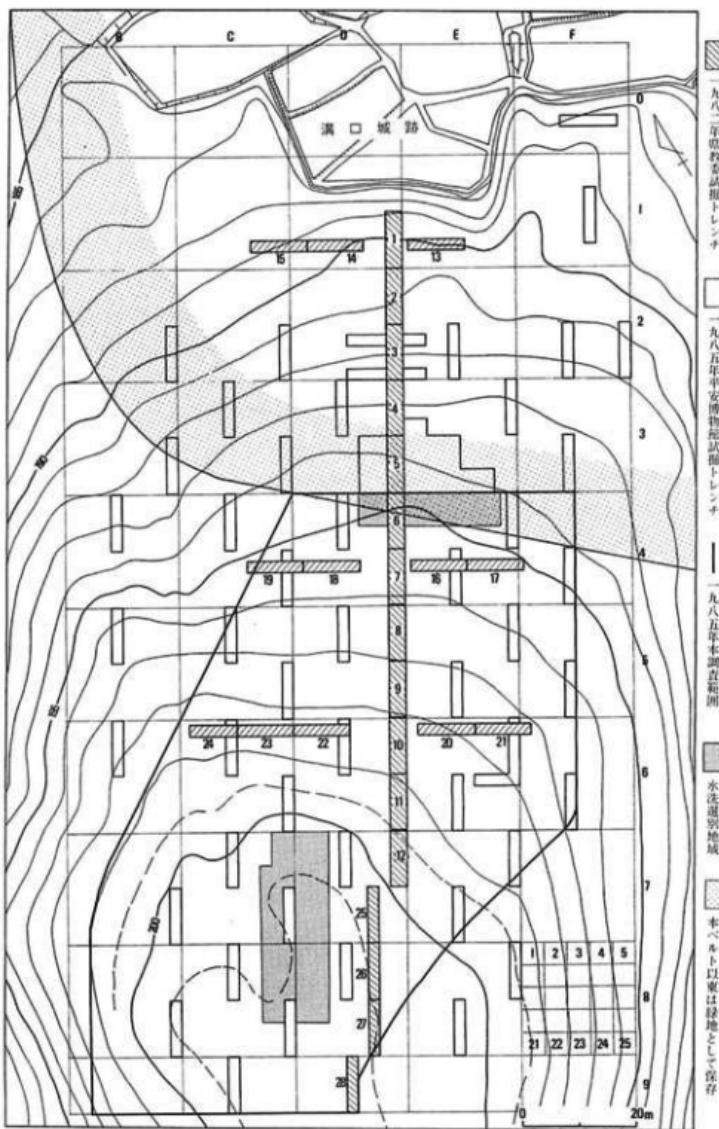
まず、南西～北東方向の県教委試掘トレンチ南東側ラインを基線とし、1グリッド20mとして北西方向へ3グリッド、南東方向へ2グリッドを配した。したがって南東～北西幅は100m。また、南西～北東方向は県教委27トレンチ南東端を基線とし、北東方向へ9グリッド、南西方向へ1グリッドを配した。南西～北東幅は200mである。そして、南東～北西方向は北西よりB～F、南西～北東方向は北東より0～9とし、その組み合わせを各グリッドの名称とした。さらに1グリッド20m四方を4m四方の小グリッドに分割し、1～25区とした。そして、試掘トレンチは南東～北西2m、南西～北東10mとし、第1図のように1グリッド2ヶ所、全体に千鳥状になるように設けることを基本とした。発掘深度の下限はⅢ層上半までとし、遺物の実際の出土状況に応じて適宜変更あるいは拡張トレンチを設けることにした。なお、4列より北東は、緑地帯として開発される予定ではなかったが、当遺跡の性格を知る上で最小限の調査が必要であり、他地域と同様のトレンチを設けた。

2. 調査の経過

調査は3月20日より1ヶ月の予定で開始したが、調査地内の樹木伐採作業がおくれていたため、調査はそれに併行して北東から南西へ順次進めて行くことにした。

3月22日、2列南西側のトレンチから発掘を開始する。2列北東側及び1列については、近世館跡南西側の堀、土塁にあたっているためにトレンチは設けなかった。

5列まで調査が進行した時点で比較的多くの石器が出土し、県教委の試掘でも石器の集中が見られた2D・2E区、3D・3E区について拡張区を設けた。しかし、その他のトレンチでは遺物が出土しない所が多かった。このため遺物が出土しないトレンチにおいては、2×10mのトレンチを長軸にそって2分し、一方は比較的石器を多く含むと思われるⅢ層上面まで



第1図 試掘・本調査のグリッド配置関係図（数字はトレンチ番号）

掘り下げを止め、他方のみⅢ層上面まで掘り下げるにした。これによって1トレンチの調査に要する時間を短縮し、石器の出土しているトレンチの拡張を行なうことで石器分布範囲を確認するように努力した。また、この丘陵の先端部にあたる0F区にもトレンチを設けたが、溝口域に關係してかすでに削剥されており遺物は全く出土しなかった。

6列より南西部の調査でも石器の出土量は少なかったが、7C・8C区に数点の石器が出土し、石器集中部が存するものと思われた。また、地形傾斜面が比較的緩やかな5~7C・D区においても石器が散見でき、全面調査では少なくとも2~3ヶ所以上の石器集中部が検出できる可能性があった。もっとも明瞭な石器集中部は2D・2E・3D・3E区に位置している。3D・3E区にその中心があり、4D・4E区の方に拡がっているものと思われた。

縄文時代の遺物については石鏃が全域に散見できたが、縄文土器は全く出土しなかった。また他時期については、須恵器の小片が5・7・8・9列中央部に数点検出された程度であった。しかし、3D拡張区においては土師器を伴う土壠の掘り下げは、本調査で行なうことになっためその性格は不明であるが、平安時代から中世にかけての土壠と判断でき、同様な構造が遺存している可能性が高いと思われた。また、5E区でも遺構の一部と思われる落ち込みが検出された。出土遺物がなく時期も不明であるが注目される。

以上のような経過をもって、4月22日予定の発掘作業を終了し、翌23日残余の実測作業、撤収作業を行ない、調査の全作業を終了した。

3. 調査の結果

試掘の結果、約210点の石器が出土した。これらの分布は、3・4D、3・4E区平坦面の集中部を除くと散漫な分布にとどまる。また先土器時代の遺物は通常部分的・集中的に発見されることが多いが、当遺跡ではわずかに認められる程度である。しかし、その中でも調査地南西側の平坦面(8・9C、8・9D区)、および3・4D、3・4E区集中部とを結ぶ緩斜面にまとまっている傾向があり、未調査部分に遺物集中部が位置している可能性も否定できない。したがってこのラインを中心に東西幅60m、緑地保存地帯より南側約100m内については全面調査が必要と判断された。

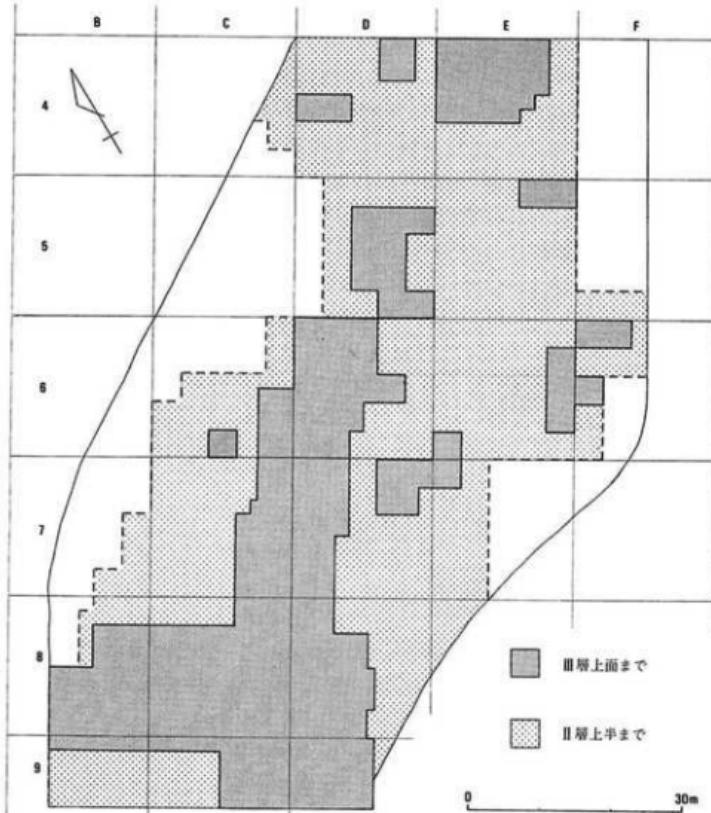
(南)

第3節 本 調 査

本調査は1985年6月3日から同10月17日に行なわれた。調査範囲は、試掘調査で遺物の発見されたトレンチから少なくとも10m外側までを含むこととした結果約6500m²となった(第1図)。グリッドの配列・遺物の取上げ番号は、試掘調査時と整合させた。また、試掘調査時から懸案となっていた本当に本遺跡には碎片が少ないので否かを検討するために、2ヶ所で86区画合計344m²の水洗選別区を設定した。土が固くしまっているため掘り下げには、手ジョレンを専ら利用した。遺物の取上げ方法については、作業の迅速と正確さを期して光波トランシット

とコンピューターによる記録を採用した。この方法の詳細については次節に譲る。

発掘調査は、現地がかつては雑木林であったことから、落ち葉搔き→地表面に浮き上がって生える網目状の細い木根・草・コケ等の除去から開始された。試掘調査によって、石器が地表面からも採集されることがわかつっていたので、これらの作業も慎重に行なわれた。地表面の根は予想以上に密に固くからみあつていていたために、思わぬ日数を費してしまった。次いで、調査域内の眞の遺物分布の大要を把握するために、全域にわたって5~10cm位掘り下げた。この過程で中世と思われる遺構を数基検出した。依然表土層中には細い根が張っており、ようやく全体を掘り上げた時にはすでに7月も下旬に至っていた。また、調査日程からして、この段階ですでに半月以上の遅れが考えられたため、6,500m²全域を完掘することを断念し、遺物のやや



第2図 本調査掘り下げ深度図(調査域内の白抜き区域はI層上半まで掘り下げ)

8 第4節 発掘調査及び整理作業におけるコンピューターの利用

まとまって発見された区域についてのみさらに掘り進めることとした。掘り下げ範囲は、約5,200m²とした(第2図)。この範囲について、主たる遺物包含層であるⅠ層を掘りあげる意図で、2回に分けて各々約10cm、計15~20cmを掘り下げた。その結果遺物の出土する範囲がさらに限定されることがわかった。

この段階に至り、試掘調査の時には遺物がめり込む程度と考えられていたⅡ層中にも少なからず遺物が含まれていることが判明した。そこで最終工程として、部分的にはだめ押しの意味も含めて、遺物集中部についてはⅡ層の完掘からさらにⅢ層にまで掘り下げる必要が生じてきた。前段階で遺物がある程度まとまって出土した約2,100m²に限ってこの詰めを行なった(第2図)。この過程で8C19区で本遺跡で初めての疊のまとまった分布が認められた。

水洗選別の結果は、サンプリング・エラーを明瞭に物語っていた。発掘された土砂を5mm目の電動フルイを通した後水洗した結果、2×2m、厚さ10~20cmの区画から、多い所では通常の発掘によって得られた資料に倍する、20点以上の碎片・剥片が発見された(第46図)。しかしこの原因は、何も発掘従事者の不慣れや未熟さに帰されるものではない。むしろ発掘者は、それらの区画がサンプリング・エラーを検討するためのものと知られた上で掘っており、通常の発掘よりエラーが減少しているはずである。にもかかわらずこれ程の見落としが生じているのは、むしろ土層の性状に起因すると考えられる。第Ⅲ章第3節で詳述するように、水性堆積物の再堆積と考えられるⅠ・Ⅱ層中には、大量の径2~20mmの小礫を含んでいる。ローム層等、通常礫をほとんど含まない土層の発掘では、掘り具がカチッとかガリとか石器に当る時の音で注意が喚起され、目で確かめるという手順が普通であろうが、小礫を大量に含む本遺跡のような場合、音に常時注意を傾けることにはならない。専ら目のみを頼りに発掘するために注意力が限界を越えることになり、エラーが生じると考えられる。ある種の生理的な限界とでも言えようか。したがってこのような地質条件の遺跡での発掘では、通常の方法にのみよった場合、結果には大きなバイアスがかかっていると考えておく必要があろう。

(山下)

第4節 発掘調査及び整理作業における コンピューターの利用

1. 導入の経緯

本調査の経過で記したように、試掘調査の結果約6,500m²について全面調査が必要になった。しかし、本調査を行なうについて、調査期間が長期になること、調査補助員・作業員の長期確保が難しいこと、整理時間が短いことなどの問題があった。つまり、発掘・整理作業にまつわる時間を、短縮することだけでなく、より精度の高い調査を行なうことも必要である。これらは、遺跡を発掘調査・報告するうえで常に問題となる点であるが、とくに先土器時代の遺跡調査の特殊性(全資料の出土地点の記録、多量の微細資料を回収するための発掘作業の精度、整理報告作業における多量の分布図作成など)を十分考慮しなければならない。

以上の点を解決する一つの方法として、光波距離計とハンドヘルドコンピューターによる遺物出土地点の記録を考えた。この方法は、すでに京都大学構内埋蔵文化財センターにおいて開発・利用されており(浜崎1984), その有効性は高く評価されていた。またその後、奈良国立文化財研究所においても同様の方法をさらに一步進めたシステムが開発され、兵庫県教育委員会による春日・七日市遺跡にも導入されたとのことであった。このような状況において、溝口遺跡の調査にこのシステムを導入する方向で検討を開始し、各機関との調整作業に入った。

2. システムの開発・整備

このシステムを導入するにあたり次に問題となったのは、奈良国立文化財研究所などから教示を受けた方法では溝口遺跡の調査は難しく、かなり改良を必要とすることであった。整理報告作業における分布図の作成についてのシステムも未完成であった。そこで検討の結果、このシステムに関してノウハウをもつ(株)京都コンピューターシステムと協同開発という方法で、今回の調査に適した新しい遺物とりあげシステムと、整理報告作業における分布図作成システムを開発・整備して行くことになった。

3. システムの概要

1) ハードの構成

検討の結果、以下のハード構成を考えた。

《遺物出土地点の記録》

光波距離計……AGAジオジメーター-140, インターフェース

ハンドヘルドコンピューター……エプソンHC-40, プリンタ, 増設RAM

《遺物分布図作成》

パーソナルコンピューター……NEC PC9800F3, プリンタ

XYプロッター……ローランドDX-Y-2000

2) プログラムの構成

《遺物出土地点の記録》(第3図)

ハンドヘルドコンピューター

①光波距離計より送られてきた遺物出土地点のデータを計算し、その地点をX・Y・Z座標に変換する。さらに手入力によって出土地区、遺物の種類、遺物番号、層位のデータを付加しRAMファイルに格納する。

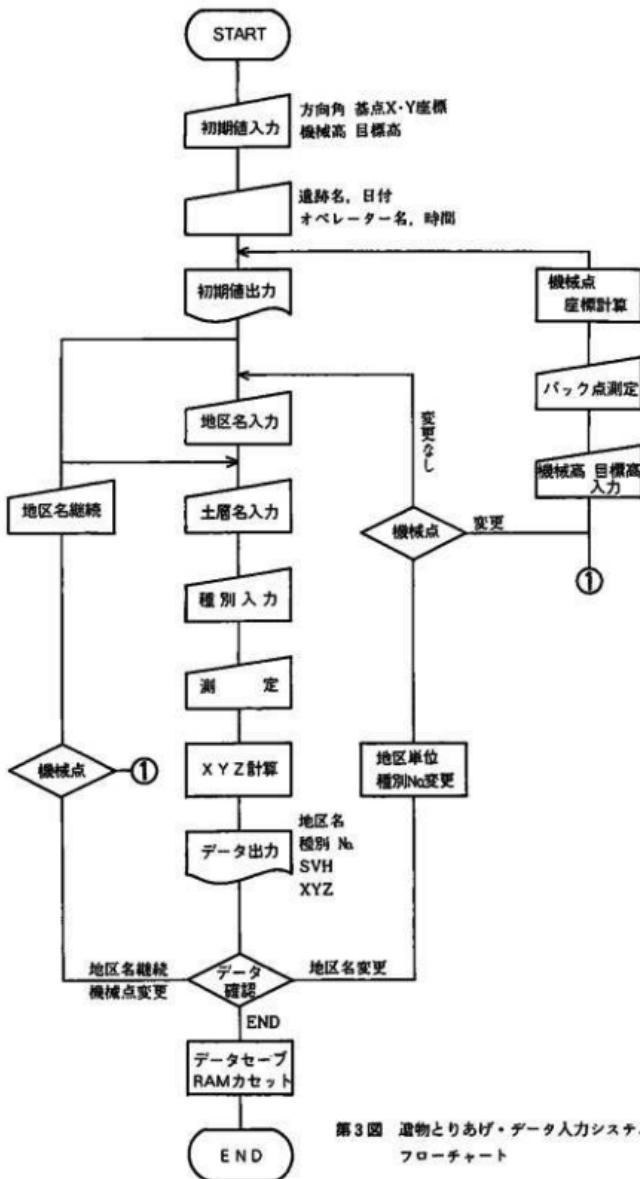
パーソナルコンピューター

①ハンドヘルドに格納されたデータをコンバートし、パーソナルコンピューターに格納する。

②手入力によって、データの追加や修正を行なう(生データ)。

③この生データに遺物の分類や分析結果などの属性を付加し基本データを作成する。

各地区ごとや遺物別などの台帳の作成。

第3図 遺物とりあげ・データ入力システム
フローチャート

プロッターによって各属性ごとの水平・垂直分布図の作成。

4. 作業概要および手順

1) 光波距離計の設置

光波距離計を設置する位置は自由であり、基準杭の測距と機械高さを入力することによって、機械の位置を計算させておくだけがよい。

2) 遺物のとりあげ

回収の対象となる遺物の出土地区、種別、遺物No.、層位をハンドヘルドのキーボードから手入力する。そして、出土地点にミラーを設置し測距する。約3秒で測距が終了し、そのデータをハンドヘルドで計算させ、出土地点のX・Y・ZをRAMファイルに格納する。この際手入力によったデータも付加される(生データ)。同時にデータが破壊される事態に備えて、プリンタでも打出させておき、データの復旧ができるようになっている(第4図)。なお、ハンドヘルド増設RAMファイルには、約1000点のデータの格納ができる。

3) 生データの追加・訂正

ハンドヘルドからデータをパーソナルコンピューターの方へコンバートする。

パーソナルコンピューターに移された生データの訂正、追加を行なう。この際、種類別や地区別にデータを並べかえ、プリンタで打出すことによって遺物台帳を作成する。

4) 基本データの作成

整備された生データに、各遺物の分類や分析結果などの属性を付加し遺物基本データを作成する。当然、追加・訂正も可能であり各属性ごとのリスト作成も容易である(第5図)。

5) 分布図の作成

作成された基本データの属性を基に、分布図を作る。分布図の種類は水平・垂直分布図で、いくつかの属性ごとに記号・ドット・色を使い分けられる。また水平分布図は全体図、大グリッド、小グリッドの3種になっているが、いずれも任意のスケールで描くことができ、ほとんどの状況に対応できる。垂直分布図は、投影幅・角度も任意に設定できる。

5. 成果と問題点

以上の結果から、今回溝口遺跡で行なったシステムは、旧来のメジャー・レベル・遺物カ-

```
***** AGFA48 & EPSON HC-48 By C.S *****  
DATE 85/10/16 TIME 09:17:44  
C774/M6 DPE.M4 MINAMI  
  
#H No. 3 PHO. 1499  
#X 679' 54" 57"  
#Y -33.639 V= -28.383 Z= 200.689  
#E no 936 E.no 79 C.no 366 D.no 117  
  
#H 1499 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 132  
#X 45.696 U= 92.356 Z= 296.2742  
#Y 45.331 V= 19.945 Z= 198.101  
  
#H 1500 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 133  
#X 45.704 U= 92.342 Z= 297.4733  
#Y 45.285 V= 25.157 Z= 197.582  
  
#H 1501 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 134  
#X 48.908 U= 92.352 Z= 296.5566  
#Y 58.246 V= 9.028 Z= 198.511  
  
#H 1502 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 135  
#X 36.799 U= 92.352 Z= 283.2566  
#Y 58.100 V= 4.567 Z= 198.677  
  
#H 1503 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 136  
#X 32.716 U= 92.356 Z= 288.6222  
#Y 49.998 V= -8.089 Z= 198.584  
  
#H 1504 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 137  
#X 24.394 U= 92.348 Z= 268.1220  
#Y 49.815 V= -10.197 Z= 199.471  
  
#H 1505 PHO. 11XII 1'59" 1 3a 1"9" D 138  
#X 19.354 U= 92.4638 Z= 247.2130  
#Y 49.933 V= -19.992 Z= 199.473
```

第4図 とりあげデータ打出し例

12 第4節 発掘調査及び整理作業におけるコンピューターの利用

【 基本データ・チェック リスト 】			1 (ページ)						
(N=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)
123	01230	A 1	1	33.268	95.2458	172.2644	72.605	-4.625	196.875 HE12
128	01280	A 2	1	32.962	95.2598	172.5948	72.471	-4.625	196.895 HE12
130	01300	A 3	1	33.130	95.2165	172.1110	72.644	-4.515	196.907 HE12

【 基本データ アクセス リスト 】			1 (ページ)						
(X=3)	(Y=3)	(Z=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(Z=3)
1	82	02022	A 12	2	1	P	AF	IF	Tz
2	82	02021	A 9	X	1	P	AF	IF	Tz
3	70	02111	A 8	X	1	P	AF	IF	Tz
4	70	02112	A 3	X	1	P	AF	IF	Tz
5	152	02212	A 12	1	1	P	AF	IF	Cla+2E
6	152	02222	A 26	1	1	P	AF	IF	Cla+1E
7	228	02223	A 1	1	1	P	AF	IF	Cla+1E
8	228	02203	A 1	1	1	P	AF	IF	Cla+2E
9	373	04001	A 13	1	1	P	AF	IF	Cla+2E

【 基本データ アクセス リスト 】			2 (ページ)						
(X=3)	(Y=3)	(Z=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(X=3)	(Y=3)	(Z=3)
10	02015	A 1	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
11	02014	A 1	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
12	02014	A 1	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
13	02029	A 1	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
14	02029	A 1	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
15	02024	A 3	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
16	02024	A 6	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E
17	02024	A 11	X	1	P	0	IF	IF	Cla+2E

図5 図 各種データ打出し例 上：生データ 中：基本データ器別 下：同個体別

ドを用いた方法に較べ、かなりの作業時間の短縮が可能であった。たとえば、遺物のとりあげは、3名の補助員で1時間に約200点可能であった。それだけでなく、発掘作業の手を止めることなく遺物がとりあげられ、また光波距離計の特質から、見える範囲(1素子ミラーで約1Km)においては、高い精度(1秒読み)で測ることができた。また、生データからの分布図作成も容易で、発掘調査を進める中で有効であった。

整理作業においては、分布図作成に要する時間が大幅に短縮できた。例をあげれば、約2000点の分布図を約30分程で仕上げることができる。

しかし一方、多くの問題点も発生した。以下列挙してみる。

1) 遺物番号のつけ方を通し番号ではなく旧来と同様にしたため(たとえば4 E 15-A 16は、4 E 15区での16番の石器)、遺物Noを各小地区ごとに記憶しておくことができず(ハンドヘルドコンピューターの容量の問題)、その地区の最初の遺物についてのみ番号を入力する方法をとった(後は同じ地区名が続くかぎり自動的に番号をつけて行く)。この問題については、現在改良中であり、地区自動発生(遺物の出土位置から逆に地区名を判断させる方法)、遺物番号の判断をパーソナルコンピューター側で処理する方法を考えている。いずれにしても手入力部分を少なくすることによって、作業時間の短縮や入力ミスを減らすことが重要である。また、地区名も手入力しなければならず、後にX・Yを調べてみると、地区名をまちがって手入力している場合多かった。

2) 測距計、ハンドヘルドコンピューターの可動時間が短く、特にハンドヘルドの方は内部バッテリーのみでは2時間程度しか使用できなかった。外部バッテリーの利用などが必要であろう。

3) 分布図の作成についても一応の成果が上がっているが、当然手入力部分が多くなると入力ミスが増えることなどがあり、細かい部分においてソフトの整備が必要である。また、今後、接合関係の図示やCRTの開発、各種統計処理ソフトの開発など、基本的作業に必要な部分の

整備が必要である。

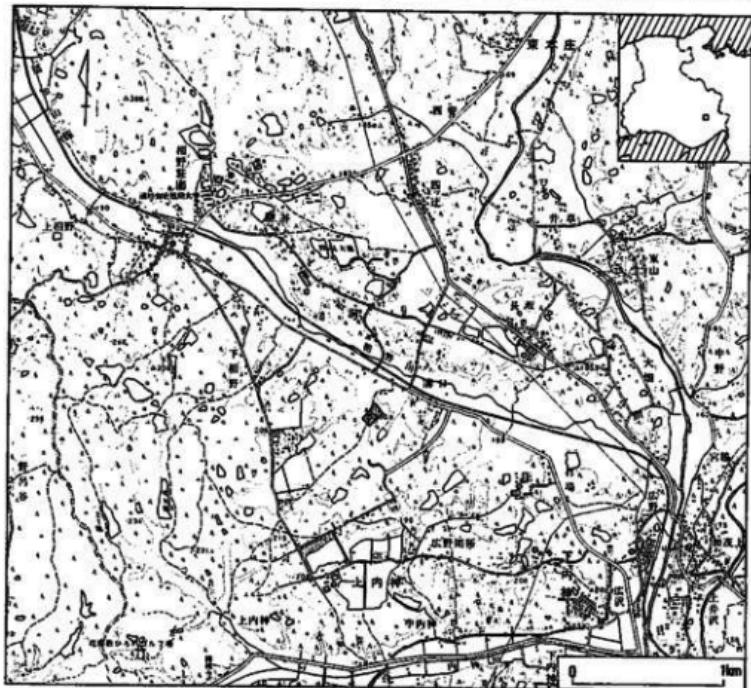
今回開発したシステムは、身近にせまつた調査に急拠対応した形で作られたものであった。その点問題点も多くあるが、考古学におけるコンピューターの利用という最近の流れの中で、一つの有効な方法といえる。しかし、時間の短縮がイコール調査・報告期間の短縮につながるという訳ではなく、より精度の高い調査・分析を目指すということを忘れてはならないのである。

(南)

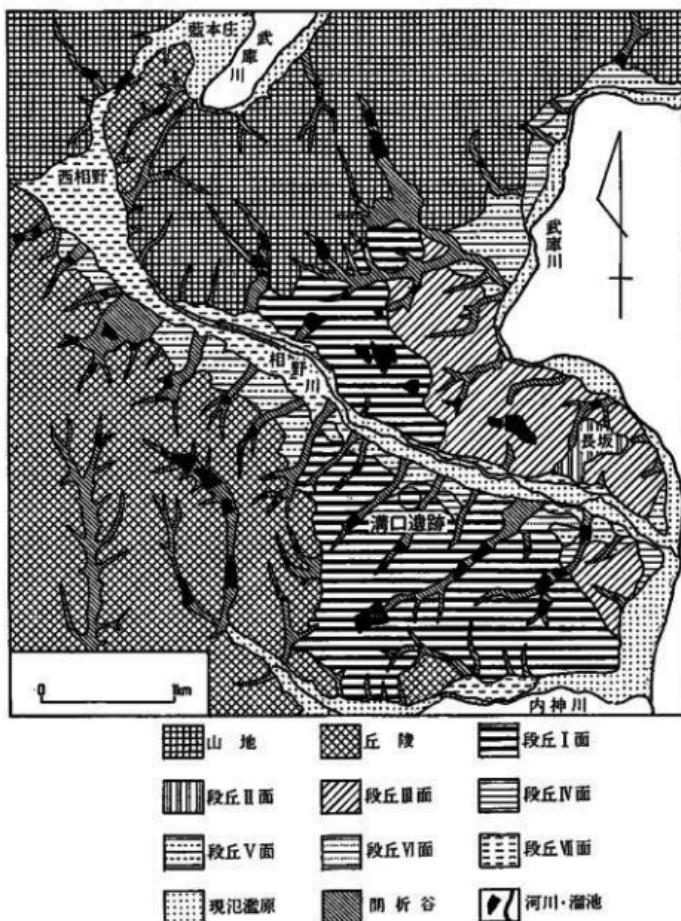
第Ⅱ章 遺跡の立地と堆積

第1節 遺跡周辺の地形

溝口遺跡は、武庫川の支流である相野川の右岸に位置する。国鉄福知山線広野駅の西北西約1,800mの地点にある(第6図)。ここは三田盆地の北縁に当り、相野川流域の周辺には山地、丘陵、段丘および現氾濫原が認められる(第7図)。山地は、遺跡からおよそ2.5Km以北にみられる。これは、標高300~400mの比較的低い山々からなり、それらの間を現在武庫川が曲流している。しかし、西相野と藍本庄の間には相野川と武庫川との谷中分水界がみられ、過去において現相野川流路を流れていた武庫川が、ここで河川争奪されて現在の流れとなったことを思わせる。丘陵と段丘は、この山地より南側に分布する。丘陵は、相野川右岸で明瞭に認められ、神戸層群によって構成されている。一方、この付近の段丘は、三田盆地周辺で最もよく



第6図 遺跡周辺の地形(網点部が溝口遺跡)



第7図 地形分類図

発達しており、相野川の両岸で広範囲にみられる。この段丘は7面に区分され、ここでは上位のものから段丘Ⅰ面、Ⅱ面、Ⅲ面……Ⅶ面と呼ぶことにする。

相野川流域の周辺には、段丘Ⅰ面とⅢ面が広範囲にわたって連続して認められる。段丘Ⅰ面は相野川流域で最も大きい面積をもっており、特に右岸においてその発達が著しい。これに対して、段丘Ⅲ面は相野川左岸で明瞭にみられ、他に右岸の打場付近にも分布している。これらの段丘面のうち、前者は、相野川の現河床から15~25mくらい、後者が10~15m高く、両者と

も非常に平坦である。しかし、段丘が形成された後侵食が進み、面は多くの開析谷に刻まれている。これらの開析谷は、相野川右岸の段丘Ⅰ面および左岸の段丘Ⅲ面において、それぞれ南部より北部で長く発達している。一方、段丘Ⅱ面、Ⅳ面、Ⅴ面、Ⅵ面、Ⅶ面は相野川流域において断片的にしか認められない。これらのうち段丘Ⅱ面は武庫川の左岸で広くみられるものの、右岸では長坂付近に分布するにすぎない。また、段丘Ⅳ面、Ⅴ面、Ⅵ面、Ⅶ面は山地、丘陵、段丘Ⅰ面、Ⅱ面およびⅢ面に挟まれた武庫川、相野川、内神川の細長い谷中にみられ、その連続性が悪い。現氾濫原は、武庫川、相野川、内神川に沿って細長く認められる。ここは最も低く、段丘Ⅴ面、Ⅵ面、Ⅶ面はこれより数m高い。なお、現氾濫原を流れる河川のうち武庫川のみに、現在人工的な堤防が造られている。こうした相野川の流域周辺に分布する各地形の中で、溝口遺跡はその右岸に広がる段丘Ⅰ面に立地している。

この遺跡の西北側と東南側には開析谷が認められる。こうした開析谷に刻まれたため、遺跡付近の段丘Ⅰ面は西北側が緩やかに傾斜し東南側が急斜面となっている。また、北側は10数メートルのゆるい段丘崖となっており、その下には現在相野川が流れている。すなわち、溝口遺跡は段丘Ⅰ面の縁辺に位置しており、そのため遺跡付近の段丘面はおよそ5.8%の傾斜をもって東北へその高度を下げている。このように、溝口遺跡は相野川右岸にみられる段丘Ⅰ面の北縁に立地し、この付近の段丘面はかまぼこ状の形態をとて、東北へ緩やかに傾斜しているのである。

(青木)

第2節 遺跡周辺の地質

溝口遺跡の周囲は平地と丘陵とから成り、遺跡は標高約200mの一つの丘陵上にある。遺跡をほぼ中心にして東西約34km、南北約31kmに亘る範囲の地質略図を描いてみると第8図のようである(×印は遺跡の所在地)。

段丘層 これらの丘陵は洪積世後期(50万年前～1万年前)に堆積した段丘層でおおわれ、その厚さは遺跡の所在地では40～50cmである。段丘層には礫、砂が多い。段丘層は溝口遺跡の周辺に小規模に且つ断続的に分布しているが、溝口遺跡の西方及び西南方に当る社町のほぼ中央部から三木市の西部に到る台地・丘陵地帯にも断続的に、また伊丹平野にはかなり広く分布している。

大阪層群 溝口遺跡の西方吉川町の北部地域、及び上に述べた社町のほぼ中央部から三木市の西部に到る台地・丘陵地帯に、また伊丹平野を囲む北・西・東部に小規模に断続的に大阪層群が分布している。大阪層群は礫・砂・粘土などからできている。この層群はまた猪名川町南部と川西市との境界地域にも断続的に分布している。

大阪層群は鮮新世晚期から洪積世前期に古明石湖(初期には内海)に堆積した地層である。この時代を第2瀬戸内海時代と呼んでいる。

神戸層群 溝口遺跡の南方に広がる広い範囲に亘る丘陵・台地地域には中新世に堆積した地層が分布している。この堆積層は礫岩、砂岩、泥岩、凝灰岩などの地層で神戸層群と呼んでい



現世 洪積世(段丘層) 鮮新世-洪積世(大阪層群)
 中新世(神戸層群) 白亜紀後期-古第三紀(花崗岩)
 白亜紀後期-古第三紀(閃緑岩など) 白亜紀後期-古第三紀
 (生野層群, 有馬層群) 白亜紀前期(篠山層群) 二疊紀
 (丹波層群) 二疊紀(チャートなど)

第8図 溝口遺跡周辺の地質略図

びその凝灰岩、流紋岩及びその凝灰岩が分布する。これらをそれぞれ生野層群、有馬層群と呼んでいる。また同じ時代に进入した花崗岩(一部は石英閃緑岩、花崗閃緑岩、閃緑岩)が六甲山地や猪名川町北部から能勢町北部に亘って分布する。

丹波層群 多紀・氷上の両郡、川西市中・北部の山地、大阪湾岸地帯には二疊紀の地層が分布している。これらを丹波層群¹⁾と呼んでいる。丹波層群は著しく褶曲した地層であって、主として粘板岩、砂岩から成る厚い地層で、チャート、輝緑凝灰岩、輝綠岩、石灰岩を挟んでいる。

西方の八千代町南部・加西市北部・市川町北部の山地を経て、飾磨郡・佐用郡には時代未詳の古生層が横たわっている。

篠山層群 篠山盆地には白亜紀前期の火山噴出物を多量に含む地層が上記の丹波層群を不整合におおっている。これを篠山層群と呼んでいる。

池辺層生は第1瀬戸内海時代の海陸の分布を第10図のように、また第2瀬戸内海時代のそれを第11図のように想像している。

る。神戸層群は1,500～2,000万年前の古神戸湖(初期には内海)に堆積した地層である。この時代を第1瀬戸内海時代と呼んでいる。

以上の段丘層、大阪層群、神戸層群は新第三紀の地層で、これらの地層の下位に位置するより古い地層や岩体を被覆する表層地層群として括ることができる。それ故、現世層とこれらの表層地層群を剥ぎ取った場合の地質略図を描いてみると第9図のようになる。

生野層群・有馬層群・花崗岩 即ち溝口遺跡を中心として広範囲に亘る地域に白亜紀後期-古第三紀に噴出した安山岩及



第9図 基盤地質略図

最初に述べた段丘層は大小の礫を多數含み、所によっては礫層を形成している。これらの礫はチャートを主体とするが、赤色の珪石・玉髓なども稀に含んでいる。このうち主体となるチャートはもともとは丹波層群などの古生層を構成していたものであろう。

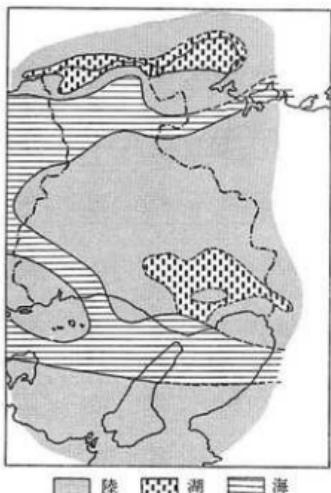
(上田)

第3節 遺跡内の堆積

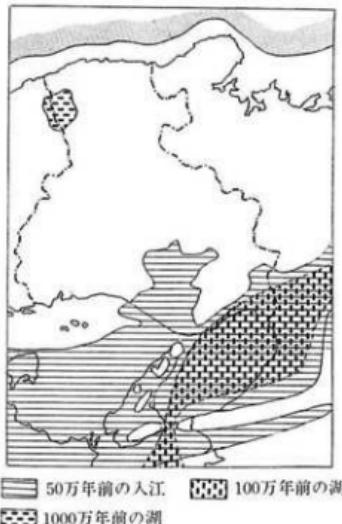
表層に近い堆積は、本遺跡の基盤を形成する段丘堆積物・神戸層群(青木 1983)の流出・再堆積したものと考えられ、色調を基準とする分層では地表面にはほぼ平行する厚さ10~20cmの土層が数層識別できる。以下に、7D3区

の土層断面を基本層序(第12・13図)として、層相の説明をする。

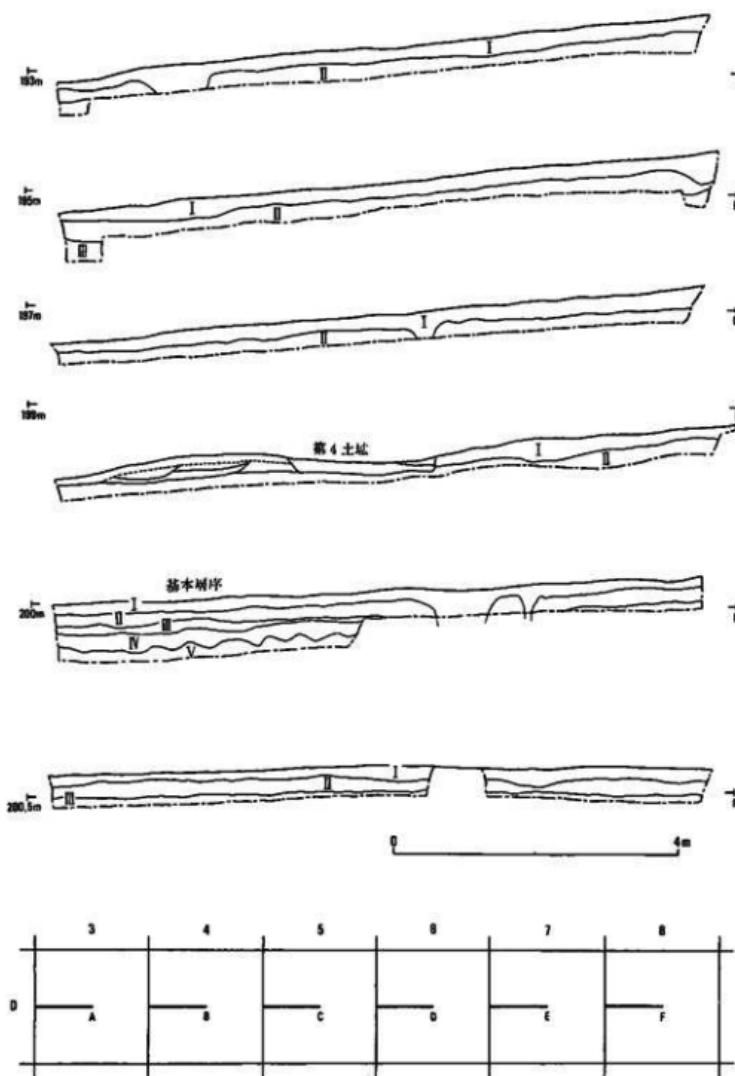
I層 黄色土層 粘性は弱い。表面には厚さ1~2cm程の薙植土層が形成される。径2~



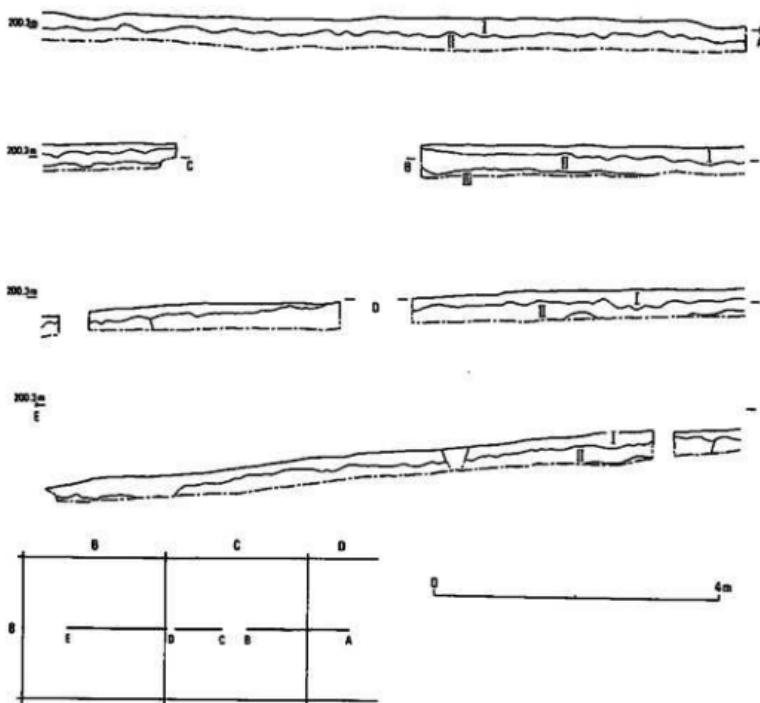
第10図 第1瀬戸内海時代



第11図 第2瀬戸内海時代



第12図 遺跡中央D列南西—北東セクション



第13図 8列南東一北西セクション

20mm程の礫を含む。礫の量は場所によって極端に異なっており、5mm目のフルイを通した結果、およそ0.4m²当り少ない所でコンテナ16位、多い所では2~3箱にも達する。遺物包含層。層厚は10~20cm。

II層 赤黄色土層 粘性はやや強い。礫の含み方はI層と似るが、さらに径5~10cm位のものをまれに含むようになる。遺物包含層。厚さ10~30cm。

III層 黄褐色粘質土層 遺跡最高部の平坦面では特に粘性が強く不透水層となる。このためか部分的に環元状態になり、黄白色を呈する所もある。礫の含み方はII層と同じである。遺物は上層部にまれにめり込む程度であり、本来的な包含層ではない。厚さ5~15cm。

IV層 黄褐色土層 粘性は強いが、III層に較べるとやや劣る。径20mm程の礫を少量含む。本層以深については、7D 3区のみの所見である。厚さ15~30cm。

V層 黄褐色土層 粘性はやや強い。赤色土がブロック状に混じる。径10mm程の礫を多量に含む。非常によくしまっている。厚さ10~20cm。

VI層 礫層 堀り抜いてはいないが、V層の下には径1~15cm位の礫を多量に含む礫層

が広がっている。

以上のうち、土層のしまりの良さや粒度の齊一性などから判断して、V層以深は本来の段丘堆積層であろう。III・IV層については判断が困難であった(本章第4節参照)。

遺物包含層はI・II層を中心とするが、帰属時期によって遺物の出土レベルに若干の差が認められる。古墳・平安時代の須恵器はI層に限って発見される。これに対し、縄文・先土器時代の遺物は、I・II層全体に亘って含まれている。遺跡が緩傾斜面を中心に広がっているために、遺物の出土レベルの厳密な比較は難しいが、両者をさらに詳細に検討すると、先土器時代と判断された遺物の方がより下位にまで分布を広げているようである。先土器時代の遺物がII層から一部はIII層にめりこんだような状態でも発見されるのに対し、縄文時代の石器ではII層上半部で出土したものが最も深い。もっとも、4E3区を中心に認められる石器の製作場と思われる遺物集中地点では、碎片類がII層下半にまで及んでおりこの限りではない。

V1層とした疊層は、段丘疊層としては水平に堆積しており、調査区後線上6D区北半で地表面と交叉する。したがって7D3区で観察される層序も、確実に再堆積層と考えられるI・II層については遺跡全域を覆うものと考えることができるが、それ以深については水平堆積であるとすれば、遺跡のより高い部分、すなわち南北に限られているものである可能性が高い。また5D区以北、すなわち段丘疊層の下には神戸層群が広がっており、I・II層以深の様相は6D区以南とは異なっていると考えられる。深掘りはしていないが、4D・E区のII層が地表下50cm以深にも及ぶ点は、こうした再堆積層の生成状況の違いを物語るものと思われる。

(山下)

第4節 火山ガラスの抽出分析

1. はじめに

考古学上の編年を考える上でのテフラの役割は、最近広域テフラが認められるに伴い、一層重要視されてきている。しかし、堆積環境の差異などから必ずしも、いつでも露頭(現地)で明らかに肉眼で判別しうるとは限らない。したがって、特に細かい地層対比や編年が要求され、乾燥上堆積層を取り扱うことの多い考古学の分野においては、堆積物中に含まれる火山ガラスなどのテフラ起源物質の量や質を系統的に調査することによって肉眼観察困難なテフラの降灰層準を推定していくことが望まれる。

肉眼観察が困難な堆積物中のテフラの分析については、吉川(1981)や町田・新井(1983)などの研究がある。吉川(1981)は大阪平野のボーリング試料から洗い出した火山ガラスの量の変化を検討して降灰層準を認定し対比の手段にしている。町田・新井(1983)は、福井県鳥浜目塚の試料を5~10cmおきに検討して、鬼界一アカホヤ火山灰(K-Ah)の降灰層準の認定を行なっている。これらの研究は、堆積物中の火山ガラスなどのテフラ物質を系統的に調査することが

編年上有効な方法であることを示している。

また、最近櫻原ほか(1985)は温度変化法による屈折率測定装置を開発し、個体ごとの屈折率を測定し、ヒストグラムで表現し、その試料の特徴としている。この装置は個体ごとに測定が迅速にでき、屈折率のちがうガラスや鉱物がまじりあっている場合にその量比を計算することができる。この装置を用いることにより、類似した形態をもつガラスや鉱物であっても、対象とするテフラ固有の屈折率レンジをこえて、屈折率に差があれば、種々の割合でまざりこんでいることを正しく表現することが可能になった。

竹村・櫻原(1986)は、この装置の利用と連続的試料採取により、兵庫県篠山板井(寺ヶ谷)遺跡の旧石器産出層準と火山灰降灰層準の関係を明らかにしている。

このように、連続的試料採取と温度変化型屈折率測定装置の利用による土壤中の火山灰抽出分析は、火山灰降灰層準の推定に役立つか、堆積物の再移動や生物による擾乱の推定にも寄与できると考えられ、発掘時に平行して行なうと有意義な方法と考えられる。

今回は、兵庫県三田市溝口遺跡を対象にして行なわれた結果について報告する。なお、分析は(株)京都フィッショントラックに依頼して行なわれた。

2. 方 法

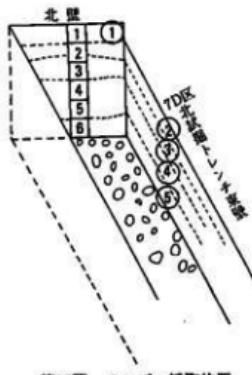
1. 地層断面を観察後、試料採取。
2. 乾燥後、秤量し水洗する。60, 120, 250メッシュのふるいで篩別し、乾燥後秤量する。
3. 125~63μ(120~250メッシュ)の粒子を分散剤と超音波洗浄器を用いて洗浄する。
4. 上記の試料で岩石薄片を作成する。
5. 重鉱物、軽鉱物、火山ガラス含有比を求め、重鉱物組成、ガラスタイルプ分けを行なう。
6. 火山ガラスの屈折率を横山ほか(1986)の温度変化法によって測定する。

3. 試料と結果

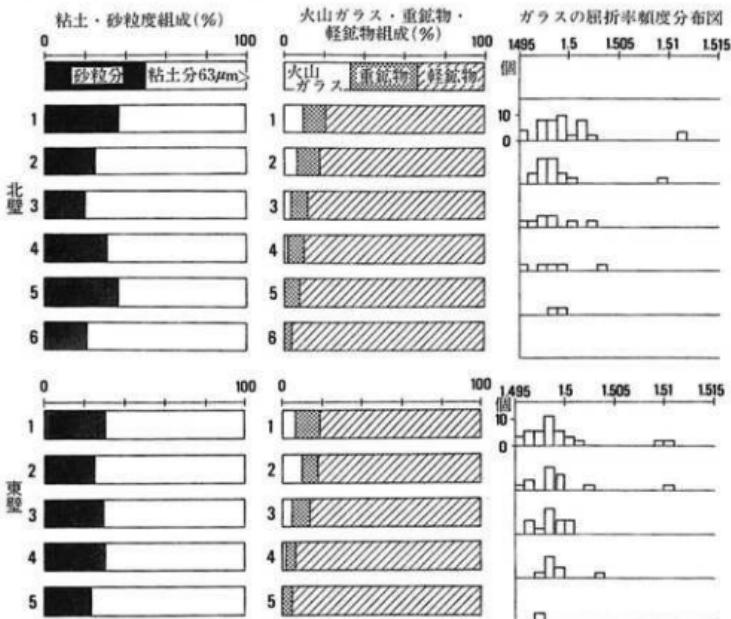
試料採取地点は発掘区中央部の7D区トレント北壁と東壁北部の2ヶ所である(第14図)。以下、各地点での分析結果をまとめる。

<北壁試料>(第15図)

北壁試料は10cmごとに6個連続的に採取され、上位より1(0~10cm), 2(10~20cm), 3(20~30cm), 4(30~40cm), 5(40~50cm), 6(50~60cm)である。火山ガラス含有量では、最下位の6で全く含まず、上位に向かってやや増加する傾向がみられるが、はっきりしたピークは認められず、最高でも10%程度である。火山ガラスは、ほとんどバブルウォール型からなる。1や2で褐色



第14図 サンプル採取位置



第15図 試料分析結果

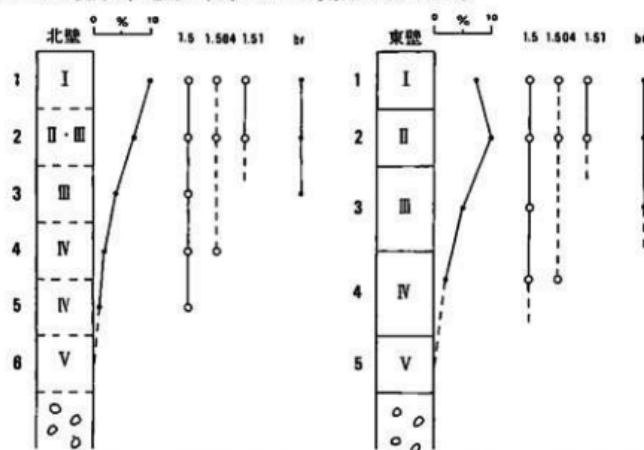
の色つきガラスが含まれる。屈折率では、1.498~1.501を中心とした屈折率をもつ火山ガラスが5から1までまんべんなく産し、1.503~1.504の屈折率をもつ火山ガラスが1と3、4に極少量認められる。また1.510付近の屈折率をもつ火山ガラスは1と2のみに産する。以上のように大きく三種の火山ガラスが混合しており、火山ガラスの量が少なく、明瞭な火山灰降灰層準は認め難いが、1.510付近の屈折率をもつ火山ガラスの影響は1と2のみに認められるので、この火山ガラスをもたらした火山灰の降灰は1または2の層準であろうと思われる。

<東壁試料> (第15図)

東壁試料は層位に基づいて、I層からV層までの計5個採取された。火山ガラス含有量では、最下位のV層で全く含まず、上位に向かってやや増加する傾向がみられるが、はっきりしたピークは認められず、最高で10%程度である。火山ガラスはほとんどバブルウォール型からなる。I層やII層の試料では褐色の色つきガラスが含まれる。屈折率では、1.498~1.501を中心とした屈折率をもつ火山ガラスがIV層からI層までまんべんなく産し、1.503~1.504の屈折率をもつガラスがI層、II層、IV層に極少量産する。また1.510付近の屈折率をもつ火山ガラスはI層とII層のみに産する。この結果は北壁試料と非常に類似した傾向を示している。

4. 火山ガラスをもたらした火山灰について

溝口道跡については、三種の火山ガラスが認められた。この三種の火山ガラスをもたらした火山灰について検討し、地層の年代について考察する(第16図)。



第16図 火山ガラス検出状況概全図 (アラビア数字はサンプル番号、ローマ数字は土層名)

1.498~1.501を中心とした屈折率をもつ火山ガラスをもたらした火山灰は、その特徴から始良一-Tn火山灰(A-T)(町田・新井 1976)に対比される。1.503~1.504付近の屈折率をもつ火山ガラスは大山ホーキ火山灰や弥山火山灰(町田・新井 1979)の大山系の火山灰に由来すると思われる。1.510付近の屈折率を示す火山ガラスは鬼界一アカホヤ火山灰(K-Ah)(町田・新井 1978)に由来すると考えられる。年代的にはA-T火山灰21,000~22,000年前、大山ホーキ火山灰が20,000年前頃、弥山火山灰が16,000年前頃、K-Ah火山灰が6,300年前頃の降灰とされている(町田他 1984)。

したがって、今回の結果からは溝口道跡のV層は21,000~22,000年前頃より以前の堆積と推定され、I層またはII層堆積の頃、6,300年前のK-Ah火山灰が降灰したと考えることができる。

(竹村)

第Ⅲ章 先土器時代

第1節 資料の選別

本遺跡からは、兵庫県教育委員会による試掘調査資料も合わせると、計1,525点の石器が発見されている。ところがこれらは必ずしも単一の時期に帰属する訳ではなく、明らかに複数の異なる時期のものが混じり合っている。おそらく、大きくは先土器時代と縄文時代のものに分けられよう。

先土器時代の一群はわずかにナイフ形石器を含み、不定形ではあるが安定して石器素材を供給している。これらが全資料の80%近くを占めると考えられる。一方縄文時代の遺物には、帰属の明瞭なものとして80点の石鎌を含んでいる。しかもこれらは一定地域に集中する訳ではなく、むしろ先土器時代の遺物に重なってほぼ調査区全域に広がって分布する(別添第2・15図)。縄文時代の遺物が石鎌に限定されることは考えられず、他の組成内容も明らかにされなければならない。そこでこれら先土器時代以外の資料群を識別するために、以下、形態・石材・分布について検討したい。

形態的に明瞭に識別し得るものには、石鎌以外にも楔形石器があげられよう。楔形石器は先土器時代以来存在する器種ではあるが、瀬戸内地域でも二上山周辺を除くとそれほど一般的な石器ではない(岡村1983)。むしろ当地方では縄文時代に入ってから急増する傾向が強い。また、後述するように楔形石器関連資料が、石鎌関連資料と結びついたような分布を見せる点も、これを縄文時代とすることの妥当性を示している。これらの他、石鎌や楔形石器の製作に関わる剥片・碎片類もこれらと同列に扱ってよい資料であろう。以上から、形態的に縄文時代に入ると判断される資料としては、石鎌80点、楔形石器6点、石鎌製作資料123点、楔形石器製作資料13点の計222点をあげることができる。

石材では、石鎌80点中75点と石鎌製作資料・楔形石器製作資料全てがサヌカイトで占められる。残りわずかに5点がチャートである。楔形石器ではややバリエーションが認められるものの、サヌカイト3点、チャート2点、頁岩1点である。全体としてサヌカイトの利用率が高く、先土器時代に属すると判断した資料が鉄石英・玉髓・チャートを主体とする事とは対照的である。このため、形態上は縄文時代と判断できなかった資料についても、サヌカイト製のものについてはその多くが縄文時代に属するのでは、という疑惑が生じてくる。

分布では、石鎌は前述の如く散漫である。一方石鎌製作資料は4E3区周辺に密集部を作り、6D区西半にわずかにまとまる傾向を示しながらも、部分的にかなり広範に分布している。楔形石器と製作資料も石鎌製作資料と似た分布を示すが、量が少ないだけに傾向は不明瞭である。全体としては、4E3区周辺には強い、6D区西半にはわずかな縄文時代の遺物集中部があると見ることができる。特に4E3区周辺は、石鎌や楔形石器の製作を明瞭に物語っており、こ

の周辺から出土するサヌカイト製石器は全て縄文時代に属すると判断してもよいように思われる。

ここで全石器分布中のサヌカイト製石器の分布を見てみる(別添第1図)と、4E3区周辺は前述の如く3D・E、4D・E区に広がる先土器時代のブロックと縄文時代のサヌカイト製石器集中部が重複分布したと考えることができる。ところが、6D区西半については明らかに縄文時代の遺物もあるが、圧倒的に多くの所属時期不明のサヌカイト製石器を含むことがわかる。このため、6D区西半については、この集中部が全体として縄文時代に属する可能性も生じてくる。しかしここで留意すべきは、4E3区周辺にても6D区西半にても、サヌカイト以外の先土器時代と判断した遺物も分布するという点である。4E3区周辺については、時期の異なるブロックが重複しているという解釈にたてば、当然の結果ではある。しかし6D区西半については、さらに詳細な検討を要する。ここからはわずか2点ではあるが、明らかに先土器時代のものと考えられるサヌカイト製の石核が出土している(第36図17・18)のである。

そこで6D区西半に分布する資料全てと、関連する個体別資料の全てを抜き出し、主として形態について検討してみた。まず、鉄石英・玉髓については全く所属時期を明示するような要素には欠けていた。ほとんどの資料が数点で構成される。個体別資料として識別はされたものの、いずれの個体もあまりに貧弱であるために技術的な検討は不可能であった。そこで、遺跡全体の趨勢である縄文時代のこうした石材利用の低調さに鑑み、これらを一応先土器時代のものとした。チャートには、性格不明瞭なものと楔形石器を含む個体が認められた。前者は一応先土器時代のものとし、後者は縄文時代のものとした。前者には、遠く4E区や8C区と同一個体別資料も含まれていた。

最後にサヌカイト製石器についてみると、先土器時代の石核も縄文時代のものも風化の程度には違いなく、こうした観点からの区分はできない。剥片には先土器時代の石核との関連が問われる資料が数点認められたが、これらも縄文時代の技術的背景からは生産され得ないという性質のものではない。これら数点を除くと、他は全く時期決定の要素に欠けている。本遺物集中部については、4E3区周辺のように石鐵や楔形石器に関連する資料が密集する訳ではないため、単純にこれらを一括して縄文時代に帰することもできない。しかし一方で、遺跡全体での時期別サヌカイト使用頻度の差も認められるため、ここでは留保条件付きで全サヌカイト資料を一応縄文時代に含めて考えてみたい。

遺物集中部に含まれないサヌカイト製石器群についても同様で、決定的な時期決定要素に欠ける資料についても、全て一応は縄文時代のものとして処理したい。

作業経過が繁雑であったために、ここで最終的な遺物の処遇をまとめておく。縄文時代とするのは①石鐵80点と楔形石器6点、及びこれらの製作に関する資料136点、これらと同一個体と判断される資料16点、②信頼度に欠ける二次資料とはなるが、2点を除く全サヌカイト資料166点の合計404点である。これら以外は全て先土器時代として処置した。

この結果、縄文時代についても不確実な要素を含むことになったが、同時に先土器時代につ

いても本来含まれていた可能性のあるものまで排除したのでは、という危惧を残すことになった。特に6D区西半には先土器時代のサスカイト製石核がある事から、ある程度はそこから生産された剥片類が分布すると考えられるのである。

(山下)

第2節 磚ブロック及びその他の磚

本遺跡では、自然堆積中にも拳大から人頭大の磚を少なからず含んでおり、特に通常ならば議論の対象となり得る配石については現地において識別が困難であった。したがってここで取り扱う磚は、磚そのものが人為的な何等かの痕跡を留めるものといいくつかの磚が集合して発見されたものに限った(第17図)。磚個々の観察表を後に示す(第1表)。

1. 磚ブロック

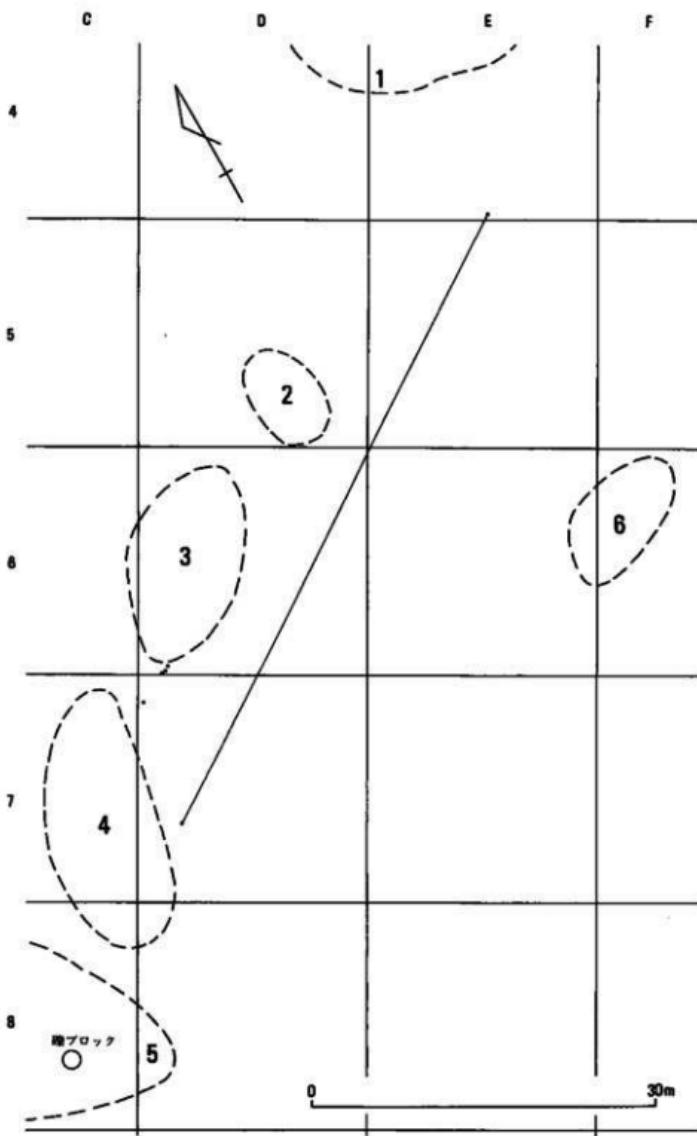
1) 出土状態

8C19区西部中央で、直徑1mほどの範囲にまとめて拳大の磚が出土した(第18図)。遺物包含層には多量の磚が含まれているが、遺跡の最高所である8C区付近は相対的に磚が少なくなっていた。そうした地域にあって、かなりの密度で磚がまとめて出土した。さらに、遺物包含層に含まれる磚は、一般に白っぽいものが多いが、この磚のまとまりでは赤色を呈するものばかりであった。こうした点からこの磚のまとまりを人為的なものと考えた。ここでは、これを磚ブロックと呼ぶ。磚ブロックは、II層下部から出土した。石器のまとまりである第5ブロックを精査中に発見したが、本ブロックの遺物の垂直分布のピークをすぎ、石器の出土が少なくなったレベルで見い出した。さらにその位置は、第5ブロックの石器の分布が最も高密度となる部分である(別添第2図)。9個の構成磚は、大きなレベル差もなく、ほぼ同一面に乗っていた。

2) 構成磚の諸属性

構成磚は、9個である。すべて赤色のチャートである。4個が完形磚、他は破損磚である。焼けについては、一般的にチャートについては判断が難しい。本遺跡の自然状態と思われる赤色のチャートは、表面の風化や河床での円磨作用にもかかわらず、やや光沢がある。構成磚中の赤色チャートの中にも同様なものが含まれるが、第1表の焼?としたものは、光沢がまったくなく、また色調も黒味が強い。本遺跡の他の磚にはみられないこのような特徴を焼けによるものと考えることもできるかもしれない。焼けについては、他の要素も加味して後に考えたい。5個ある破損磚は、5割程度の完形度が1個、7割程度が1個、9割でほとんど完形のものが3個ある。これらに接合するものは本遺跡では見い出されていない。9割のものはともかく、5割と7割のものは割れ面の角がかなり丸くなっている、自然状態で割れていたものが持ち込まれた可能性もある。

重量について見てみよう(第19図)。100g未満のものはない。100~199gが2点、200~299gが3点、300~399gが3点、400g台がなく、500~599gが1点である。パーセンテージに



第17図 塊分布及び接合図

第1表 磁観察表

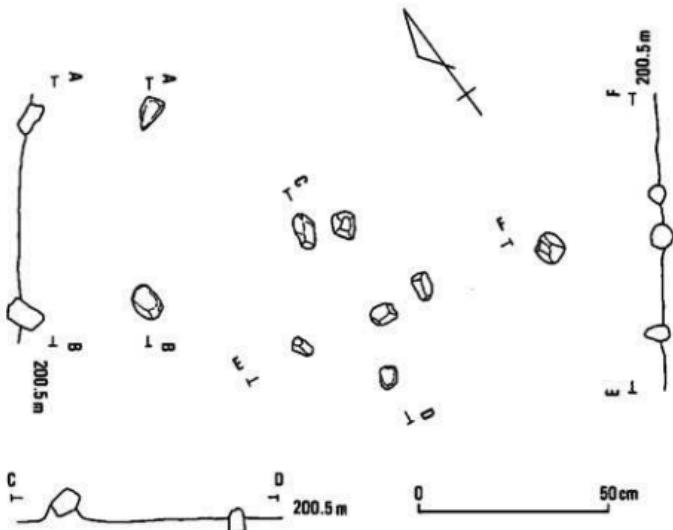
	遺物番号	重量	長cm	幅cm	厚cm	完形度	石材
礫	B C 19・B 2	500 g	9.9 65.7	6.5 80.0	5.2 52.5	非赤完 (焼?)	10+ - チャート(赤)
	B 4	320 g	10.5 59.0	6.2 58.1	3.6 34.3	非赤完	10+ - チャート(赤)
	B 6	174 g	7.1 69.0	4.9 89.8	4.4 62.0	非赤破	9+ - チャート(赤)
ブ	B 8	300 g	9.1 78.0	7.1 46.5	3.3 36.3	非赤破	5+ - チャート(赤)
	B 10	391 g	8.5 98.8	8.4 60.7	5.1 60.0	非赤破 (焼?)	9+ - チャート(赤)
ロ	B 12	203 g	7.6 78.9	6.0 58.3	3.5 46.1	非赤破 (焼?)	9+ - チャート(白黒 茶)
	B 14	172 g	6.8 76.5	5.2 86.5	4.5 66.2	非赤完 (焼?)	10+ - チャート(赤)
ク	B 16	250 g	7.4 90.5	6.7 59.7	4.0 54.1	非赤完	10+ - チャート(赤)
	B 18	290 g	7.7 89.6	6.9 79.7	5.5 71.4	非赤破 (焼?)	7+ - チャート(赤)
焼 磨	6 D 21・B 4	577 g	12.7	7.2	6.0	全赤破	8+10 チャート(白)
打撃痕のある砾	7 D 1・B 1	1778 g	15.1	12.7	7.2	非赤完 ^{**}	10+ - チャート(茶)
接合	6 D 21・B 1	140 g	6.6	4.5	3.8	非赤破	5+ - チャート(赤)
	B 3	90 g	6.3	4.0	3.2	非赤破	5+ - チャート(赤)
接合	(接合後)	230 g	6.9	6.6	4.0	非赤破	9+ -
	7 D 16・B 1	338 g	11.3	5.5	5.0	非赤破	3+ - チャート(赤)
礫	4 E 23・B 1	467 g	11.7	6.8	4.7	非赤破	3+ - チャート(赤)
	(接合後)	806 g	18.1	6.6	5.4	非赤破	5+ -

*) 赤味を帯びる **) 一部に加熱によるつぶれ

すると、200g台と300g台が最も多く33%である。完形砾だけで見てみると、400g台を除く100gから500g台全てに1点ずつある。破損砾は、100g台が1点、200g台と300g台がそれぞれ2点である。両者に大きな違いはない、この点からも当初から割れた砾が完形砾といっしょに持ち込まれたと考えられる。

形についてみてみよう(保坂 1982)。平面形は59%から99%である(第20図)。よこ形は47%~90%である。たて形は34%から71%である。特に注目されるのは、たて形である。寺谷(鈴木編 1980)・野沢(鈴木編 1982)・広野北(山下編 1985)の各遺跡で同様な方法で形を検討しているが、いずれの遺跡の砾の群集と比較しても、本遺跡のたて形は100%の方向にずれて分布しているようである。すなわち、砾の細長さという点では印象が少なく、短胴で球に近い形態のものが多いのである。

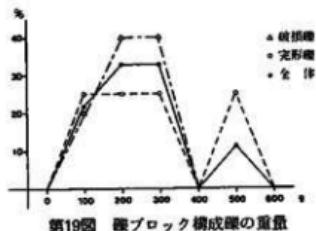
他の特徴では、砾表面には付着物がみられず、ヒビなどもない。加熱によるつぶれ等はまったく認められない。



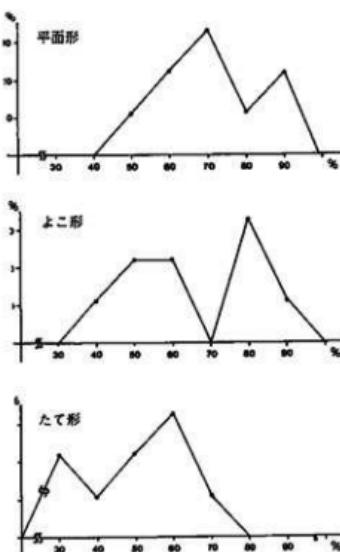
第18図 磚ブロック出土状態

3) まとめ

本遺跡の磚ブロックの特徴の一つは、赤色のチャートばかりで構成される点である。赤色のチャートは本遺跡でみるかぎり、自然状態で含まれる磚の中ではより少ない存在である。したがって、赤色のものを故意に集めてきた可能性がある。第二の特徴として、焼けについての痕跡が非常に乏しい点がある。完形でないものが半数強含まれるが、いずれも完形度が大きく、重量も完形磚と同様である。これらに接合する磚が



第19図 磚ブロック構成磚の重量



第20図 磚ブロック構成磚の形

本遺跡には存在しないばかりか割れた礫もあまりない。チャートは硬質の上に節理が多く、加熱によって容易に割れてしまう。本遺跡のこうした状況は、礫を焼く行為が本遺跡でなされなかったことを示すものとみてよいのではないだろうか。割れ面の縁部も丸味があり、礫採集場所ですでに割っていたものを、完形礫と同じ規準で集めてきたと考えられよう。焼けによるものらしい黒ずんだ色や光沢がないといった特徴を持つ礫もあるが、礫採集場所にこのような礫が自然状態で存在している可能性もある。以上の点から、礫ブロックの礫は焼けていないと考えたい。第三の特徴は、その形が短幅であるという点である。本遺跡付近の礫層の礫と対比した訳ではないので断定できないものの、こうした形の礫を故意に集めた可能性も考えねばならない。第四の特徴は、石器ブロックの最も密集する部分に位置する点である。

以上の特徴からして、本遺跡の礫の群集は、いわゆる礫群ではない。礫ブロックと呼んだ所以である。本遺跡の石器群はAT以前の様相を持つと考えられるが、近畿・中国地方でAT以前の遺跡として兵庫県板井遺跡(山口1985)、岡山県野原遺跡群早風A地点(平井1979)、広島県地宗寺遺跡(三枝編1982)、西ガガラ遺跡(藤野他1986)などで礫群が報告されている。かなり高率で礫群が見出されているといえる。AT以後のナイフ形石器文化では、近畿・中国地域は70%前後以上の多出地域、北陸地域は礫群保有率が30%前後以下の稀薄地域と考えた(保坂1986)が、本遺跡の礫のあり方がこうした地域性出現の先駆けであるとも考えうる。礫ブロックは、富山県野沢遺跡で見出されているが、割れ礫が多く、接合するものも多い点、200gより重いものは割れるよう扱われ、200gより軽いものは割れないよう扱われた様子がある点、ブロックの中心から離れて分布する点など、本遺跡のものとは違った様相も持つ。一方、静岡県広野北遺跡K3文化でも礫ブロックがある。これは、8個の礫があるが、2個の微小礫を除くと、完形礫4個、割れ礫2個で、割れ礫は接合して完形礫となるが、全て200g前後の重量である。またブロックの中心と重なっている。本遺跡のものはこれに近似する特徴を持つ。赤色のチャートを集めめた点が相違するが、礫採集地にこれが多かったのであろうか。今後の類例の増加を待ちたい。

2. その他の礫

焼け礫と思われるもの1個、加筆痕を有する礫1個、接合礫2個ずつ2個体がある。これらは、自然状態で包含層に含まれる多量の礫の中にあって、人の手の加わったと思われるものの全てである。

焼け礫と思われるものは、完形度8割の割れ礫であるが、577gと非常に重い。地色が白色のチャートであるが、自然状態で白色ないしは褐色がかかった色をしたものが多い中で、赤味の強い礫である。自然状態でも鉄分の付着がみられるものもあるが、かなり赤いものでもシマ状に赤かったり、黒ずんだ鉄分のかたまりが付着したものもみられる。本例は非常に均一に赤化しているので、一応焼けと判断した。割れ面も赤くなっている。

加筆痕を有する礫は、完形で1,778gと非常に重い。1Kgを起える礫も自然状態で多く含ま

れているが、本例にのみ加筆痕がみられた。赤色のチャートである。

接合跡は2個体ある。1つは、完形度5割の140gと90gの接合例で、230g完形度9割となつた。赤色チャートである。割れ面にはフィッシャーがみられ、1点に収束する。加筆されたものと思われる。両者は6D21区に近接して遺存していた。もう1つは、完形度3割の338gと467gの疊が接合し、完形度5割の806gの疊となつた。やはり赤色チャートである。本例は、7D区と4E区の60mもの距離の接合である。割れ面は節理面である。

以上の疊のうち、1Kgを越える加筆痕を有する疊と、接合後に完形度5割の806gの疊となつた接合個体に注目したい。後者は、完形の状態を復原すると1,612gと1Kgを越える。富山県野沢遺跡では、1Kgを越える疊を置石と呼んだが、この中に加筆痕を有する疊や約4割の割れ疊(旧置石)が含まれる。静岡県広野北遺跡や寺谷遺跡では、1Kgを越える疊を配石と呼んだが、非常に多数あるにもかかわらず、加筆痕を有するものや割れたものはほとんどない。野沢遺跡の置石に近い様相を持つと考えておきたい。

(保坂)

第3節 遺物

本章第1節のような方法で識別された先土器時代に属する石器は合計1,121点である(第2表)。尖頭器様石器については他と帰属時期を違える可能性もあるが、一応本章で取り扱うこととする。以下、石器の形態別に説明し、後に形態レベルから外れる諸特性によって纏められる石器について述べる。

第2表 先土器時代の石器組成表

	A (トゥール)							B (剝片)	C (碎片)	D (石核)	計	
	ナイフ形 石 器	スレ イバー 石	尖頭器 様 石 器	R F	石斧	敲石	梯石					
点数	4	8	1	25	1	1	1	264	587	163	66	1121
割合(%)	0.3	0.7	0.1	2.2	0.1	0.1	0.1	23.6	52.4	14.5	5.9	100

1. ナイフ形石器

発見されたナイフ形石器はわずか4点に過ぎない(第21図1~4)。しかも、この中には必ずしも全幅の信頼をおけないものが含まれていることを考慮すると、石器総数に対する出現率は極めて低いことになる。以下、個別に記載する。

1は綫長の比較的整った剥片を素材としている。打面は自然面である。他の資料に較べやや風化が進行しているよう見える。加工は右側先端寄りの肩の部分にわずかに行なわれているが、プランティングの先端側末端が角状に突出しており、あまり整ってはいない。刃部側下半腹面には角度の緩い小さな剥離が連続的に認められるが、調整と認めるか否かは問題である。刃部は左側縫上半が利用されたと考えられ、わずかに刃こぼれが観察される。背面中央やや上方の2×3mm程の範囲にわずかに光沢が認められる。石材は鉄石英である。

2は不整形な縦長剥片を素材としている。表裏で異なる剥離方向が認められる。素材の先端を斜めに切り取るように背面から腹面に向けてプランティング加工を施すが、素材の形状を大きくは変更していないようである。刃部となる左側縁には明瞭な刃こぼれが認められる。Te③ 3 D個体に属する。

3は整った縦長剥片を素材としている。背面左半は、ほぼ全面が節理面で被れる。打面を大きく残す。右側縁上端部に腹面からわずかにプランティング加工が施されている。刃部側先端にも加工と考えても良いような剥離がわずかに認められ、このために先端部はドリルのように見える。右側縁下半の剥離は、調整加工とするには不整形である。刃部にはわずかに刃こぼれが認められる。背面・腹面・プランティング部分の各所に弱い光沢が認められる。本資料は、本遺跡で最も定型的なものである。Te① 3 D個体に属する。

4は破片のため、素材剥片の形状は不明である。ナイフ形石器としての認定そのものに問題の残る資料ではあるが、ここではプランティング途中で破損した先端部片と考えて説明する。加工は右側縁に背・腹両面から集中的に行なっている。しかしこのプランティング加工は、ナイフ形石器に施された加工としては角度が緩いように思われる。腹面下半部は折れ面である。腹面右側縁、すなわち打面と背面によって形成された刃部に残る刃こぼれとも考えられる剥離痕から、この石器は折れによる破片をナイフ形石器に再利用したものとも考えられる。光沢は認められない。Ch④ 4 E個体に属する。

これらの他、加工痕ある剥片B・C類に分類した6点はナイフ形石器に含まれる可能性もある。プランティッド・ツールとして加工の大きさ・角度など厳密に見ればそれらは当然ナイフ形石器の外におかれるべきものであろう。しかし刃部を有する点とか全体の形状を印象として捉えるならば、一方的にナイフ形石器から除外されるものではない。

(竹内)

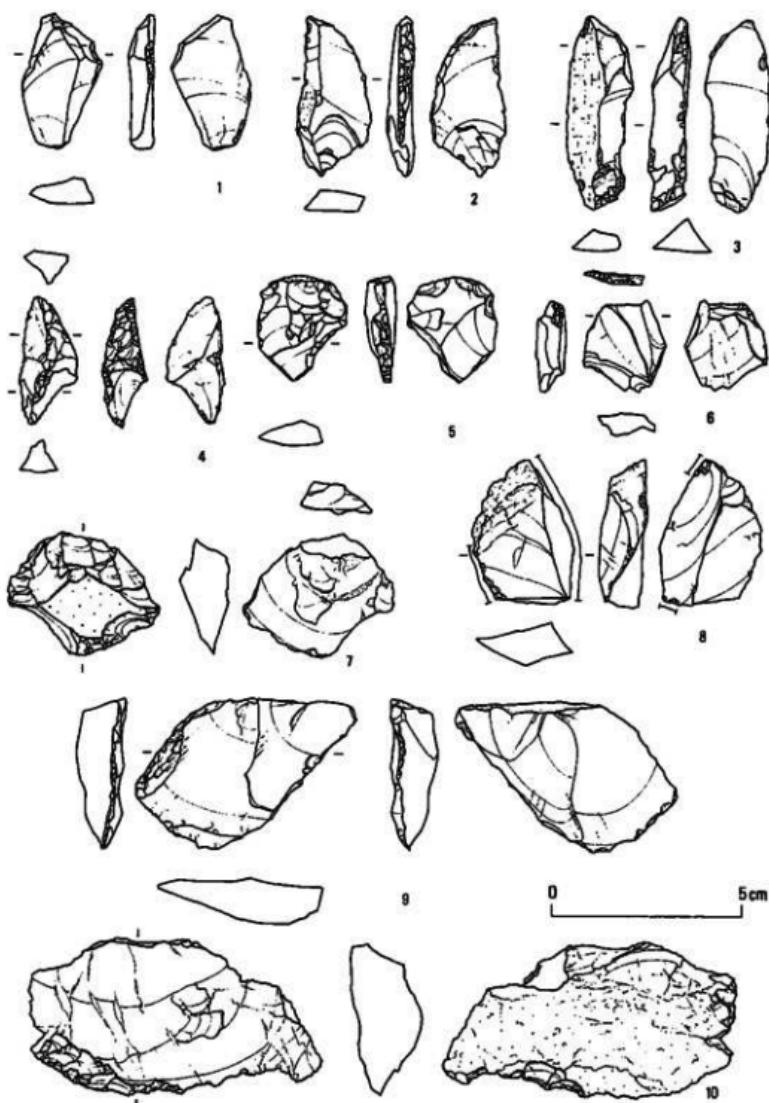
2. スクレイバー

スクレイバーは8点を数える(第21図5～第22図)。表採品を1点含む。以下、個々に記す。

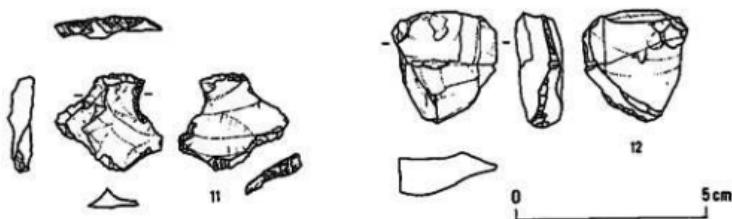
5は礫表を打面として剥離された不定形剥片を素材とする。下部の一部を欠損する。刃部は右側縁にある。抉入型刃部と直線的な刃部がある。抉入型の刃部は1回の打撃で大きく抉り、更に2～3重の細部加工を行なっている。直線的な刃部にも同様に2～3重の細かな加工が連続する。また刃部には使用によると思われる潰れがある。刃部角は83°と直角に近い。左側縁にも僅かながら加工痕があり、使用痕も残る。Cha⑥ 4 D個体に属する。

6は小型の不定形剥片を素材としている。節理が多くそのため剥片も不整形である。刃部は腹面右側縁上端部から打面にかけて連続している。1～3mmの整った加工が施される。打面部の刃部角は81°と急峻であるが、右側縁にかけてゆるやかになり68°となる。打面部と右側縁とは114°で交わっている。石材はチャートである。

7は不定形剥片を素材とする。大きさの割には厚身である。上部には剥片剥離前の加工痕が不規則に連続している。部分的に自然面を残す。打面は剥離面である。刃部は下縁右半部にあ



第21図 ナイフ形石器・スクレイパー



第22図 スクレイパー

る。左半部には抉りの部分があるが、その箇所には加工を加えず、その右側によりしっかりとした刃部加工を行なっている。刃部角は 56° 。腹面の右下方に長さ5mm程度の線状の光沢がある。不透明なチャート製。

8は10と同一個体(Cha④ 4 E)である。本例は、接合によって一枚の不定形剥片を分割して利用したことがわかる。下部は欠損しているが、本来は縦長であったかと思われる。左側縁の刃部加工も欠損部分に連続していたと考えられる。加工はあまりしっかりとしたものではない。刃部角 72° 。剥片右側縁には使用痕が不連続にある。刃部腹面側に光沢を持つ。

9は不定形の中型剥片を素材とする。礫表をわずかに背面に残す。打面はかなり風化している。寸まりの剥片の左側縁から下端部にかけて不規則な刃部加工が見られる。下半部は使用痕とすべきかもしれない。刃部角は 48° を測る。腹面から背面に向かっての加工である。下端には使用による剥離痕が不連続にある。頁岩製。

10は大型で分厚い縦長剥片を素材としている。打面部は消失する。背面には礫表を95%以上残っている。刃部加工は、背面側下端部の左半に、腹面側は下端部の左側にそれぞれ見られる。背面側の加工は不規則で一見すると使用痕のようでもある。腹面側の加工は5mm前後の大きさの剥離痕で、その部分は潰れている。中央部分は細かな加工痕がみられる。刃部角は腹面側 86° である。腹面側のほうはしっかりととした刃部となっている。腹面左上部にわずかに光沢がある。Cha④ 4 E個体に含まれる。

11は小型の剥片を素材としている。全周に加工痕あるいは使用痕がある。刃部加工は3ヶ所である。上端の加工は打面部に施されており、約1cmにわたり細かな加工が連続して平らな刃部となっている。刃部角 68° 。右側縁上部は抉入型の加工である。上部2ヶ所の刃部がいずれも背面側への急傾斜の加工であるのに対し、下端部は腹面側への 90° と直角の刃部になっている。頑丈な整った加工が連続する。刃部周辺には細かな使用痕が見られる。下端右側の一部を欠損する。Ch④ 3 E個体に属する。

12は厚みのある剥片の割れた一部を素材とする。刃部は右側縁にある。厚さ7mm程の側縁の破損面に、2mm程度の加工が背面から腹面に行なわれている。刃部としては安定する。刃部角 76° 。石材はチャートで節理面が多い。

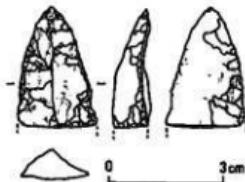
5と11の2点は、他6点に較べてノッチが綺麗にできておりエッジがしっかりとしている。

特に意味のあるものかもしれない。また本遺跡では、鉄石英が多く出土しているにもかかわらず鉄石英製のスクレイパーは検出されていない。

(田中)

3. 尖頭器様石器

1点出土しているのみである(第23図)。素材は整った縦長剥片を利用するが、背面の一次剥離面から判断すると真正の石刃といつたものではないようである。



第23図 尖頭器様石器

調整は背面を主とし、腹面では右側縁にわずかに施されるのみである。素材の形状をよく生かしており、平坦で伸びのある加工を多用するとともに、素材の先端と基部をそのまま石器の尖頭部と基部に加工している。形状からは一応尖頭器の半成品と考えたいが、折れ面と調整加工の前後関係は判然としない。折れ面の起点は正面図の左端に当る。むしろ背面左側下端の調整加工などは欠損後に施されたものとも判断でき、そうであるならば、再加工・再利用をも含めて、一応本資料を完成品を見る必要もありそうである。背面下端右半部の折損面から施された明瞭な細部調整もこうした推測を助長するものである。ともあれ、「完成品」の持つ形態的特異性故に、ここでは尖頭器様石器なる名称を用いた。

石材は黒曜石であるが、本遺跡で唯一の資料であることから完成品の持込みも考えられる。腹面に三ヶ所ある欠けから推測すると、全体的にはかなり風化が進んでいる。風化した部分を見ると黒曜石と考えることは難しいが腹面の欠けた部分はガラス質で、透明感のない少しぬめった感じがある。非常に良質の玻璃質安山岩との識別は難しいが、ここでは一応黒曜石と判断しておくる。これは必ずしも隕石で採集されている黒曜石と似ているということではないが、遺跡の地理的位置を勘案するとその可能性が高かろう。

本資料は少なくとも他のものとは所属時期を異にし、少し時期が新しくなる可能性が高い。このような形態の「尖頭器」は、関東・中部地方を中心に、ナイフ形石器終末期に出現するものであり、当地方では類例を知らない。

(井上)

4. 加工痕ある剥片 (R F)

ここでRFとしたものは、定型的石器とは判断しにくいもので、使用痕と考えるには安定した剥離を持つものである。よって基準は曖昧で、分類上定型的石器と使用痕ある剥片の間をうめるものである。23点含まれる(第24~26図)。以下調整加工の特徴を基準に四類に大別し、各類について記載した後に、各類型に入らないものについては個々に言及する。

A類は調整加工が1~2cm位と大きいもので、石核との類縁性が考えられるものである。4点含まれる(1~4)。素材には大型の不定形剥片を利用し、その一部に数回の加工を施す。加工が大きいために、その部分は大きく鋸歯状になる。素材の刃部には刃こぼれの認められることが多い。1の腹面下縁に認められる左方からの剥離痕は縦に長く伸びており、他のリタッ

チが寸詰まりであることと対照的である。1・3に光沢が認められる。1はTe②4 E個体に、3・4はCha②4 E個体に属する。2の石材は鉄石英である。

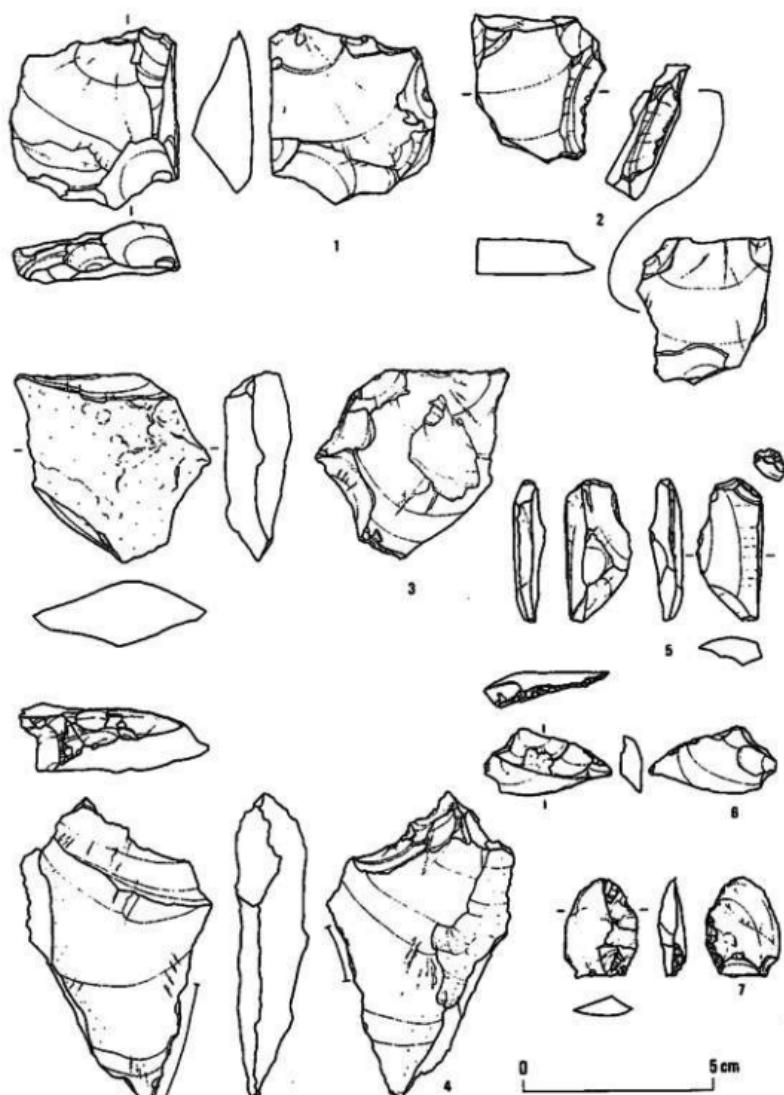
B類はプランディング状の調整加工を施すものである。5点含まれる(5~9)。素材は縦長・横長・不定形剥片とさまざまである。調整加工は急角度であるが、剥離の大きさが不ぞろいであったり連続していかなかったりするために、ナイフ形石器とはしなかった。6と7は本類を最も特徴づける資料かと思われる。二次加工の特徴から、立野ヶ原型ナイフとの関連が想起されるが、類例が少ないために定かでない。6は他の4点がごく一部にのみ調整加工を施すのに対して、一側縁全てに施している。5は一見すると先端を斜めに切断するナイフ形石器のようにも思えるが、二次加工がわずかであることと素材の使用があまりに特異であるために除外した。8は加工が不明瞭でスクレイバーの可能性もあるが、素材と加工部位からここで説明した。9は左側縁上部に背面から2~3回の調整が施されるのみで、プランディングとするには荒く不整形である。右側縁下端に明瞭な刃こぼれが認められる。7・9は光沢をわずかに残す。6・7はCh④4 E個体に、5はTe③3 D個体に、9はTe③3 D個体に属する。8の石材は頁岩である。

C類は素材の一側縁に、両面より交互剥離状の調整加工を施し、他辺には直線状の素材による刃部をそのまま残すことを特徴とする。3点含まれる(10~13)。10は調整縁を横から見ると、稜がジグザグに走る。刃部には刃こぼれが認められる。調整加工のあり方に特異性があるが、性格的にはナイフ形石器に近いものが考えられるかもしれない。12・13は接合している(11)。接合面は腹面より力が加わって折れている。12は、13が折れた後に再加工されたものであり、13が折れる以前の加工を13の上端部に留める。また、12の上端中央より右側縁にかけての加工も折れる以前のものである可能性がある。12の接合面には腹面よりの小さな剥離があり、使用痕とも再加工したものとも考えられる。12から13に続く刃部には刃こぼれが認められ、特に下端は激しい。C類を個々にみると、10は細長く、12・13は半月状・三角形状と大きな差があるように思えるが、接合すると、12・13も本来的には細長いものであったとわかる。10はCh①3 E個体、12・13はCh④4 E個体に属する。

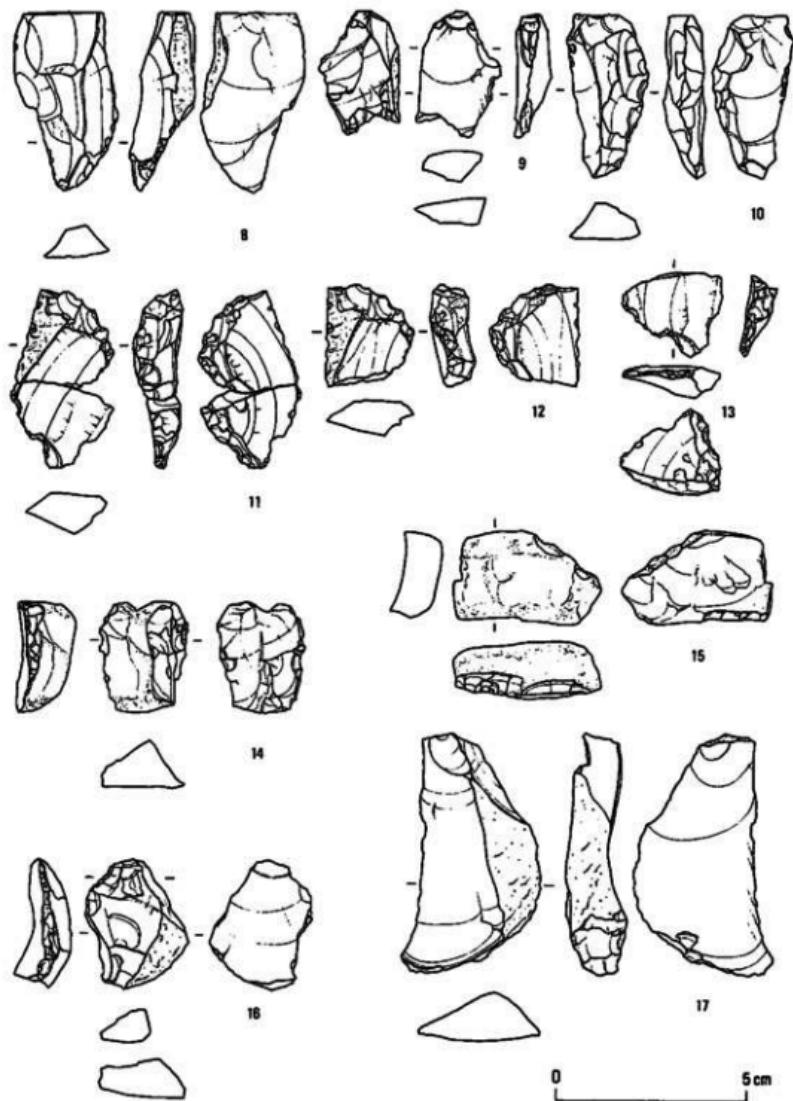
D類は急角度の細かな調整加工を施すものでスクレイバーとの類縁性が考えられる。3点含まれる(14~16)。素材は全て不定形の疊表を大きく残す剥片である。16は両極剥片である。14と15は石質が悪く、簡便に強く影響されながら割れている。調整剥離は連続的に行なわれるが、微細なものとやや大きな剥離の関係・施され方が不自然で、自然に生じる刃部の潰れとも酷似する。16は加工部も含め全体的に自然の磨滅を強く受けている。以上から、この3点については調整加工を施したのではなく、自然による二次剥離の可能性も考えておく必要がある。14・16の石材は鉄石英、15の石材はチャートである。

以下には類型化できなかった資料について記載する。

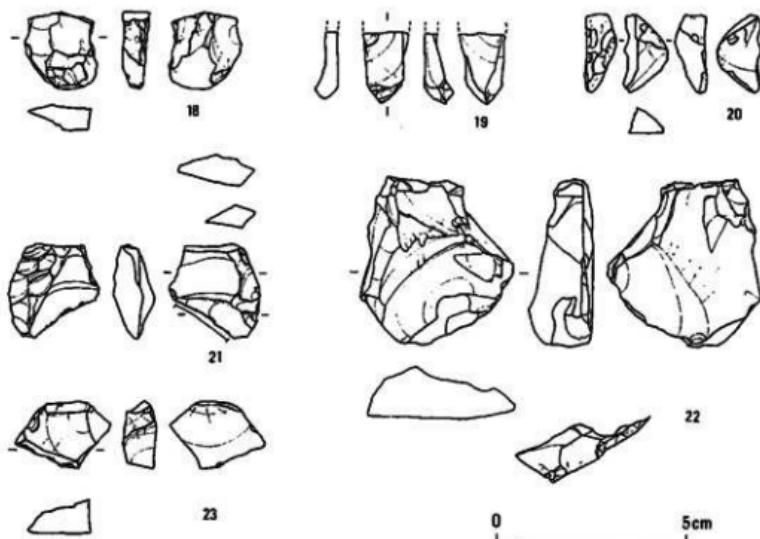
17は本遺跡でも最も整った縦長剥片の一つを利用する。右側縁には大きく自然面を留める。リタッチは素材の下端に施される。直角に近い急角度の調整加工を裏面より施す。リタッチに



第24図 加工痕ある剥片 (RF) (1~4 : A類, 5~7 : B類)



第26図 RF (8・9 : B類, 10~13 : C類, 14~16 : D類, 17 : その他)



第26図 R.F. (18~23: その他)

はやや大型の剥離と小型の剥離が並用され、スクレイパー的様相を呈するが、調整が一部にしか施されておらず整っていないためスクレイパーとはしなかった。左側縁には刃こぼれがわずかに認められる。Te④ 3 E 個体に属する。

18は小型の剥片を素材とするが、折損しているため原形は不明である。左側下部には自然面を留める。調整加工は裏面に1枚の剥離を施されるのみである。剥離は大型で主剥離面の1/4程度を占める。また正面左上部には階段状剥離がある。この剥片は、主剥離面や加工の前後関係が不明瞭で分類に問題を残す。石材は鉄石英である。

19は小型の剥片を素材とする。主剥離面を縦に截断するような右側面の剥離と、基端部の折損により形は不明である。調整加工は先端部左側にあり、裏面より直角に近い急角度で施されている。リタッチは細長く明瞭である。光沢が左側面中央部にある。Te③ 8 C 個体に属する。

20は小型の不定形剥片を素材とする。調整加工は左側縁の節理面に施す。背腹両面より急角度にプランティング様の細かな剥離を施すが、連続していない。全面に転磨の痕跡を残す。自然による剥離の可能性もある。石材は鉄石英である。

21は不定形剥片を素材とする。素材に対する加工の程度、剥離の順序とも不明瞭で分類に問題の残る資料である。リタッチは左側縁に施される。調整には小型と中型の剥離が並用される。下縁には刃こぼれがわずかに認められる。下縁刃部沿いと、腹面中央の稜線上に光沢が認められる。石材はチャートである。

22は大型の不定形剥片を素材とする。素材右側と下端の一部に自然面を留める。正面には打

点及び剥離痕が数ヶ所あり、調整剥片の可能性が考えられる。調整加工は基部右端に裏面より施される。リタッチには小型と大型の剥離が並用される。Te④ 4 D個体に属する。

23は小型の不定形剥片を使用する。左側縁上半に自然面を留める。調整加工は下端左と上端右の一部にある。両縁の加工とも直角に近い急角度で施されており、剥離は小さい。石材は鉄石英である。

最後に図示はしなかったが、小型の不定形剥片を素材とする資料がある。調整加工は腹面左右両側縁に施される。右側縁は、侧面より細かな剥離が入っている。左側縁は、背腹両面より細かい剥離を施し、腹面よりの剥離は急角度である。材質は悪く、調整加工の剥離も節理に影響されている。加工後は2つに折れている。何かを意図して製作途中で折損し放棄したようである。Ch③ 3 E個体に属する。

最初に記したように、RFには定型的でない二次加工のある石器が全て含まれている。本遺跡の石器群が全体的に非常に特異な様相を示すだけに、石器の処置も若干慎重になり過ぎている感があり、石器群全体の理解をより困難なものにしているとも考えられる。大方の御教示を賜わりたい。

(土江・柴田)

5. 使用痕ある剥片 (UF)

UFは合計264点出土している。刃こぼれと認定した微小剥離痕の大きさは、最大のもので幅2~3mm、奥行き4mm位である。刃こぼれの認定には、大きさよりもむしろそうした微小剥離痕の連続性の方に重きを置いている。ここでは数では3枚以上、連続する長さでは5mm以上を一応の認定の目安とした。

実資料を検討してみると、刃部の安定感には大きなバリエーションがある(第27~31図)。図示した例では、一応刃部の明瞭なものから順に並べておいた。また素材となる剥片も変化に富んでおり、一定の傾向を認めることは難しい。小さい素材には碎片と考えられかねないものもある一方で、大きいものでは長さ5cmを越える例もある。さらに第31図52を代表に、大きな剥片の折れた破片の個々をUFとしている例も多い。

光沢との整合性はあまり高くなく、出現率は約26%である。

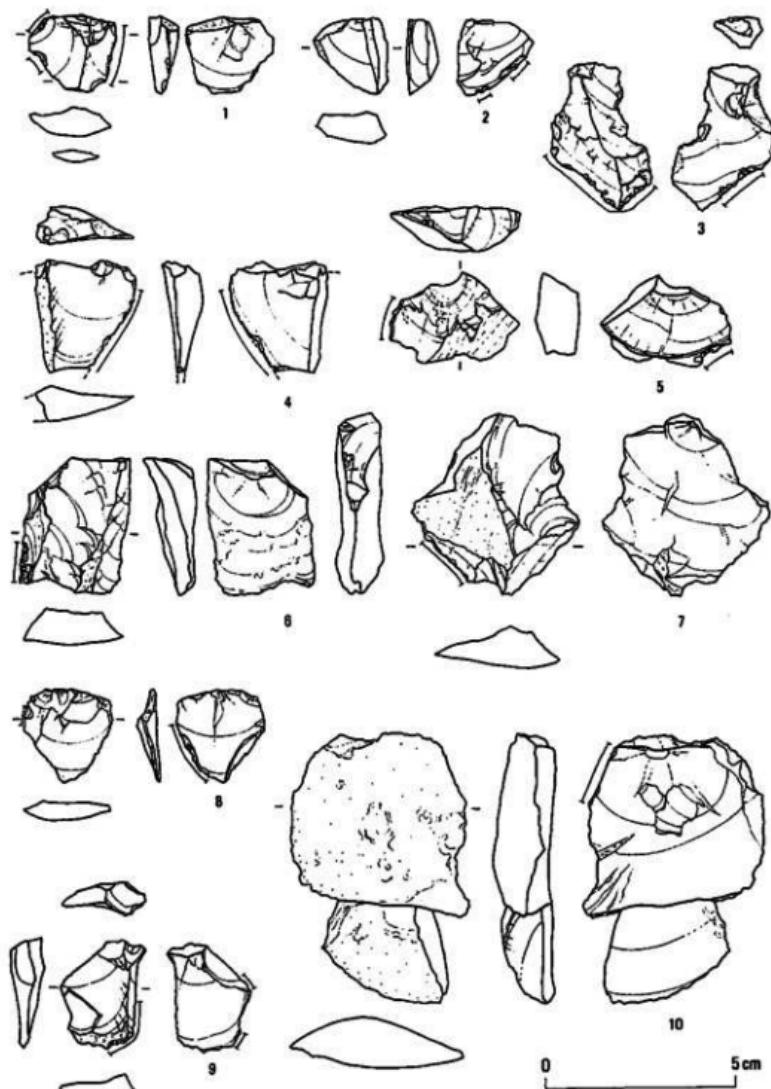
(山下)

6. 敷石類(敷石・槌石)

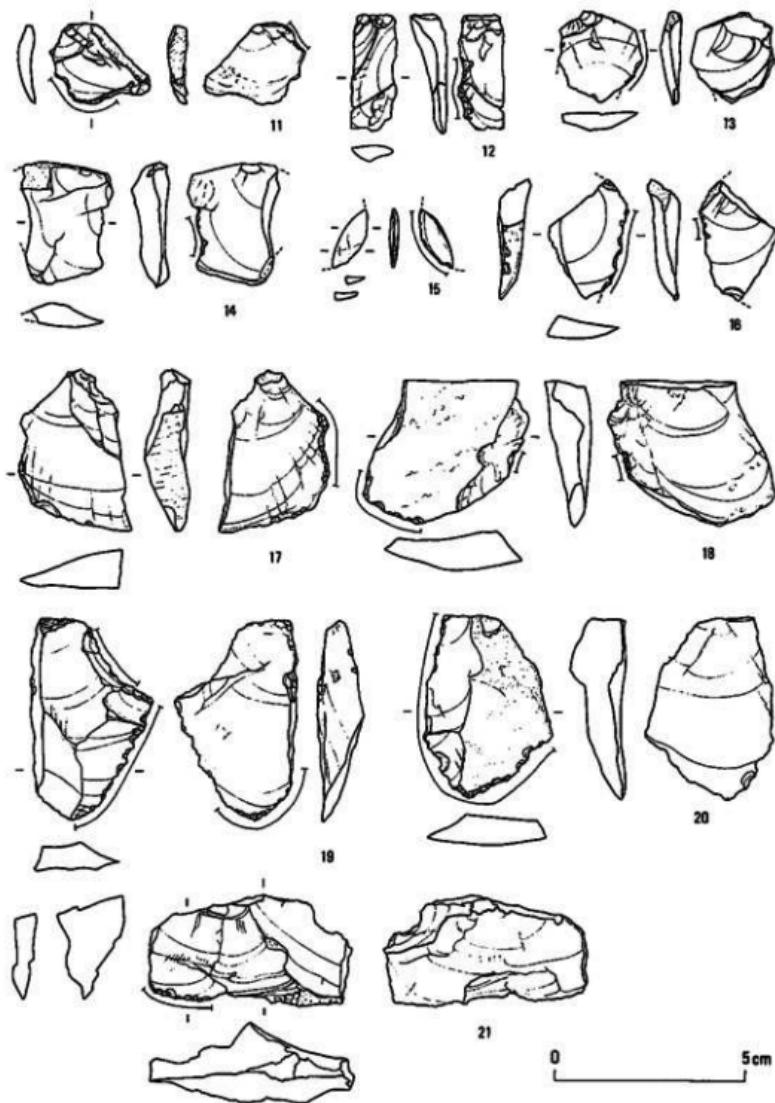
敷石類は、2点出土している(第32図1, 2)。

1は、やや扁平な円礫を用い、表面中央部付近に敲打痕を留める敷石である。大きく半分以上を欠損しており、残存する大きさは長さ7.1cm、幅5cm、厚さ4.5cmを測る。こつこつと連続して敲かれた使用痕は、ごく軽微なもので、明確な凹みを形成するには至っていない。安山岩を石材とする。重量は175gである。

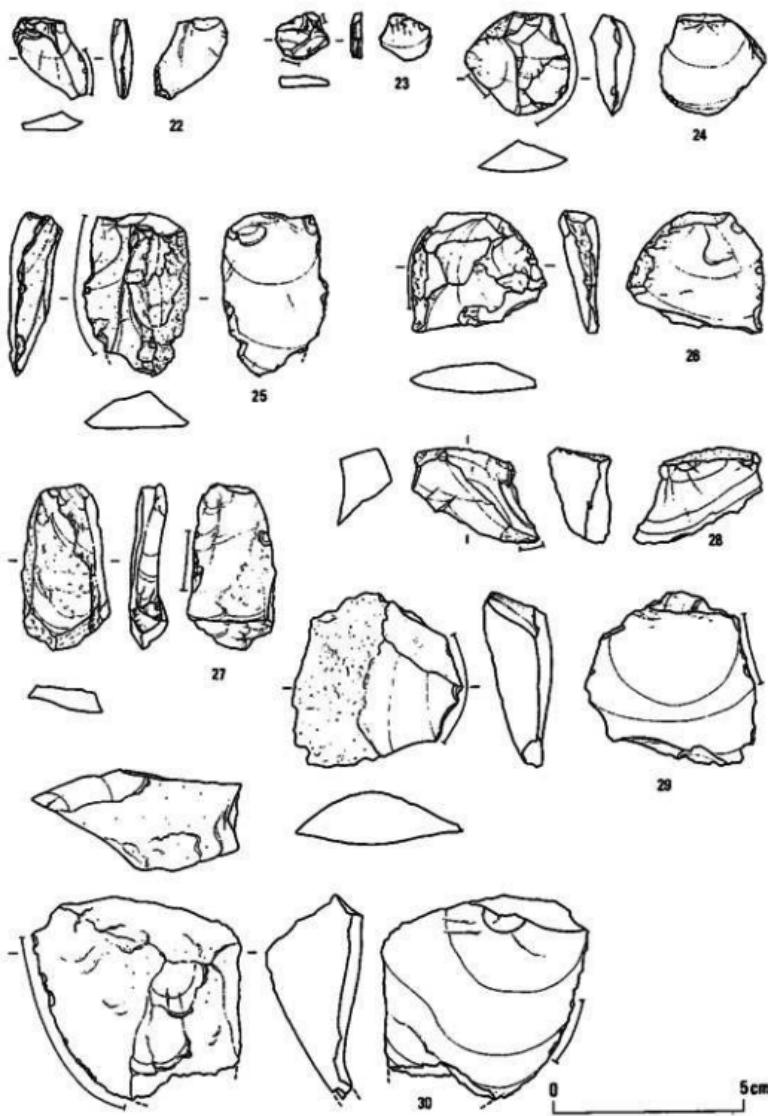
2は、細長い礫を用い、その先端部に打撃による剥離痕が認められる槌石である。中間部から半折しており、残存値で長さ6.9cm、幅4.4cm、厚さ3cmを測る。使用痕は軽微な薄い剥離



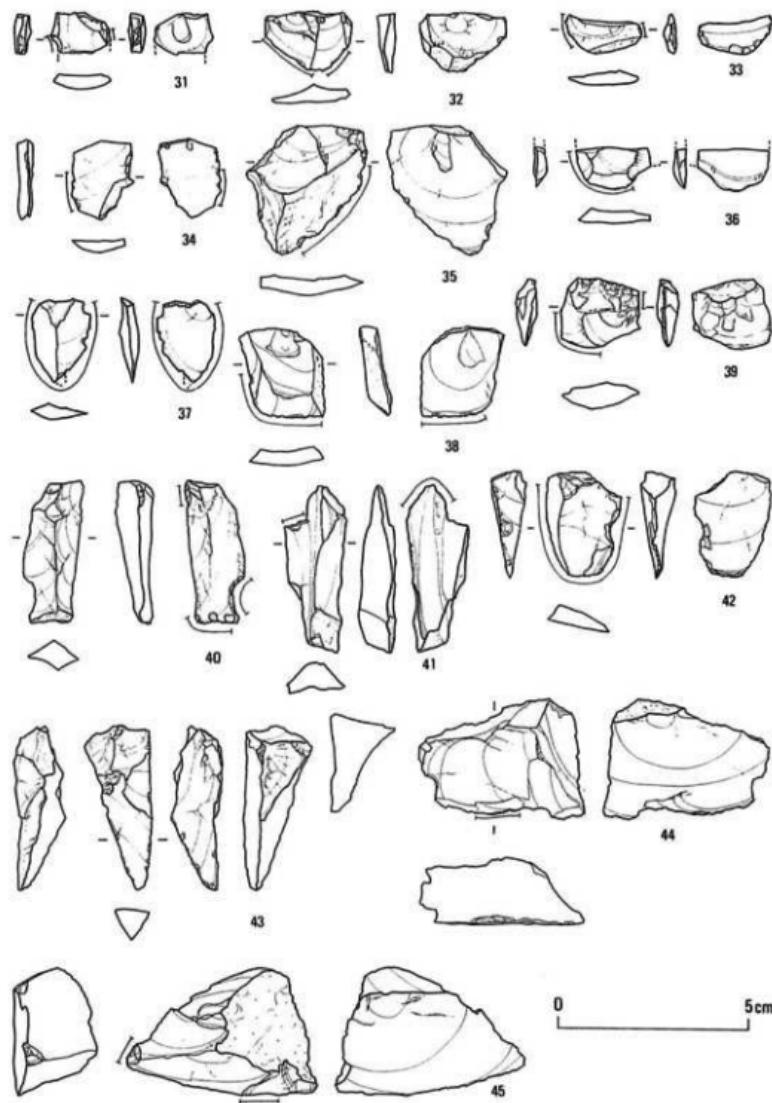
第27図 使用痕ある剥片 (U.F.)



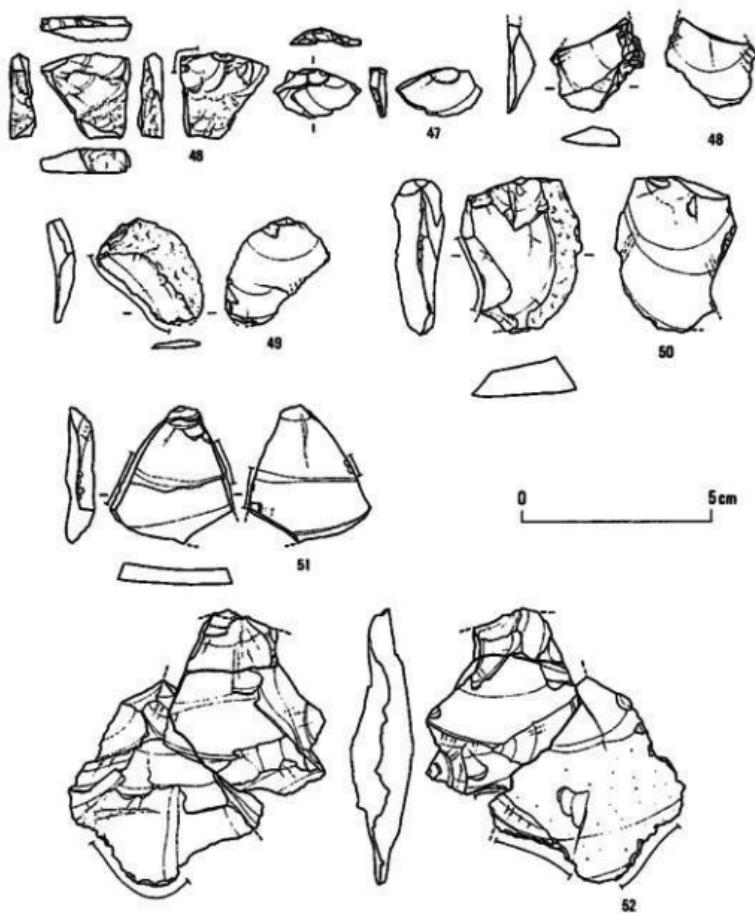
第28図 UR



第29図 UF



第30図 U.F

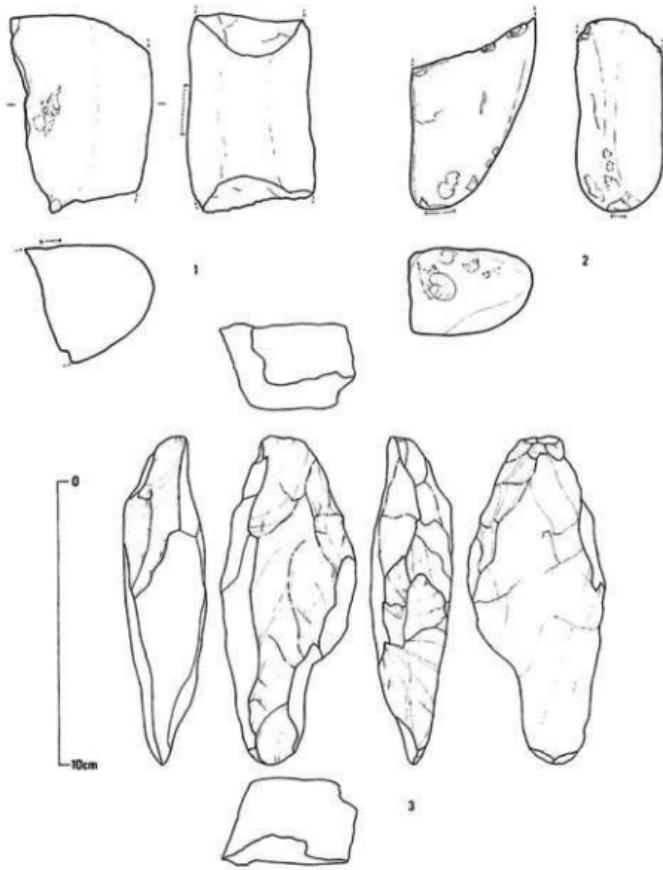


第31図 UF

度で、先端部付近にまとまりをもって観察される。対象物に対し、ほぼ垂直に当てられた最先端部の打撃痕が最も明瞭に観察される。硬質の頁岩を石材とし、重量は108gである。(黒坪)

7. 石 斧

石斧の出土は1点だけである(第32図3)。軟質の凝灰岩製で剥離痕の判別は極めて難しい。かなり大型の母岩からとった厚手の横長剥片を素材としている。調整の程度は低く、加工することによって素材の厚さを全体的に薄くしようとしている意図はあまり認められない。ただ先



第32図 1: 砕石 2: 核石 3: 石斧

端部、及び基部表面の加工によって刃部周辺でのみ厚さが減少する。実測図下部(刃部)だけでなく、上部も刃部としたと思われる。加工は右側縁上半と左側上部に顕著に施されるのみである。右側縁上部に施された加工は、表・裏に向かって同様に行なわれている。右側縁下半部の剥離は、母岩から素材を剥ぎ取る際の打面調整と考えられる。表面左側縁上部の加工は、裏面側から施されるが、素材の厚さと石理のため階段状を呈する。裏面は、左側上部に多少の加工がみられるのを除けば全くの未加工で、打面も残しているようである。

本資料は、形態的に石斧としての是否そのものが問われるものではある。ほとんど使用による損傷が認められずに、ほぼ完形で両端に機能部を持ち、平面形が菱形に近いという例はほと

んど見ない。しかし、これを石斧とするならば、その所属時期はどのように考えられるであろう。他の石器から、まず縄文時代後期頃と先土器時代のいずれかに限ることは許されようかと思う。そこで択一的に可能性を考えるとすれば、示唆的なのは唯一、長・幅・厚に関するデータのみのように思われる。中でも全体に厚味を持ち、平面形態に相異して重量感のある点が参考にならうかと考える。この厚味のある石斧という点に限って類例を求めるとき、縄文時代後期の可能性は薄くなる。一方、先土器時代についても、近接する板井寺ヶ谷遺跡(山口 1985)や七日市遺跡(藤田 1985)、やや遠方になるが早風A地点(平井 1979)出土のものは、平板で短冊状を呈する例が多く、本資料とは大いに異なる。しかし先土器時代の石斧について考えると、石材が異なることもあろうが、早風A地点と他の二遺跡でも形態差は大きい。些か遠方になるが、関東地方の石斧間の形態差も大きい。このような点から、先土器時代の石斧の方がより形態的バリエーションに富むと考えることが許されるとすれば、本例もその一端と考えてもよいであろう。

(竹内)

8. 剥片

剥片は合計587点発見されている。この中には、径1cm以上の未加工・未使用の石片全てを含んでいる。形態的には剥片剥離技術の特徴とよく符合しており、整ったものはほとんどない。圧倒的に多くが不定形剥片である上に、節理の発達した石材を利用して破損したものが多く、より一層技術的な未熟さを感じさせる。長さと幅のみを規準に、剥片を縦長>1.5:1>不定形>1:1.5>横長に分けてみると、縦長19点、不定形355点、横長14点になる。他は破損品のため判定できない。いかに從来言われる所の縦長・横長剥片が少ないかがわかる。量比からして、それらは偶発的な産物と考えて問題ないであろう。打面再生剥片も稀で、それと判断し得るものは数点である。接合資料でも剥片剥離作業面と打面が個定されないで頻繁に移動することが知られており、打面再生・調整の技術は基本的に持たなかったと考えられる。

(山下)

9. 石核

石核は合計で66点出土している。Ⅱ種接合が2組あるため石器数は64点となる。この内11点は、わずかな剥離痕が残るのみで原材もしくは母岩程度のもの、試し割りをしたようなものである。そのため以下の観察・分類の対象からは除外した。

まず、最初に石核の素材・打面の特徴から六つに分類した。

A類 円窓をそのまま素材とする。予備的な加工を行なうことなく、確表を打面として利用する。不定形剥片を剥離する(第33図1・2)。

B類 円窓をそのまま素材とする。意図的か否かにかかわらず、平坦な剥離面を打面として利用している。不定形剥片を取る(第33図3～第35図11)。

C類 厚手で大型の剥片を素材とする。打面には確表を利用する。不定形剥片を取るが、A・

B類に較べ小型である(第36図12・13)。

D類 厚手だがC類よりやや小型の剥片を素材とする。打面には剥離面を利用している。C類同様、小型不定形剥片を取る(第36図14~16)。

E類 盤状の中型剥片を素材とする。表裏から剥片を剥がしており、各々の剥片剥離が同時に打面調整の役目も果しているように見える。從来言われる所の櫛石島技法(間壁1962)に酷似する(第36図17・18)。

F類 E類に近い薄手の中型剥片を素材とする。主として素材腹面側から、巾1~3cmの小型横長剥片を取る。打面は疊表であることが多いが、稀に調整打面の場合もある(第37図19~22)。

A類には9点含まれる。本類に属する石核は大きさなどからまだ剥片剥離の余裕を残すと考えられる。1のような大きな円疊の場合、分割前あるいは分厚いC・D類に属する石核素材を提供した母岩の可能性もある。しかし、残された剥離痕からは、特別に大型剥片を剥がしたとは思えない。他方、2のように扁平な疊を利用し、その周囲で小型の剥片を取る例もある。

B類は15点で、最も多い類型である。したがってB類を本遺跡での典型と見ることも可能である。打面は剥離面を利用しているが、それは意図的な設定・調整というより、剥片剥離作業の進行によりできた面を使っていると考えた方がよい。体部調整等は行なわず、打角は90°前後を中心とする。一つの打面から剥離される剥片の数は1~3枚程度である。不定形剥片が多いが厚みのある縦長剥片を取るものもある(第35図10)。

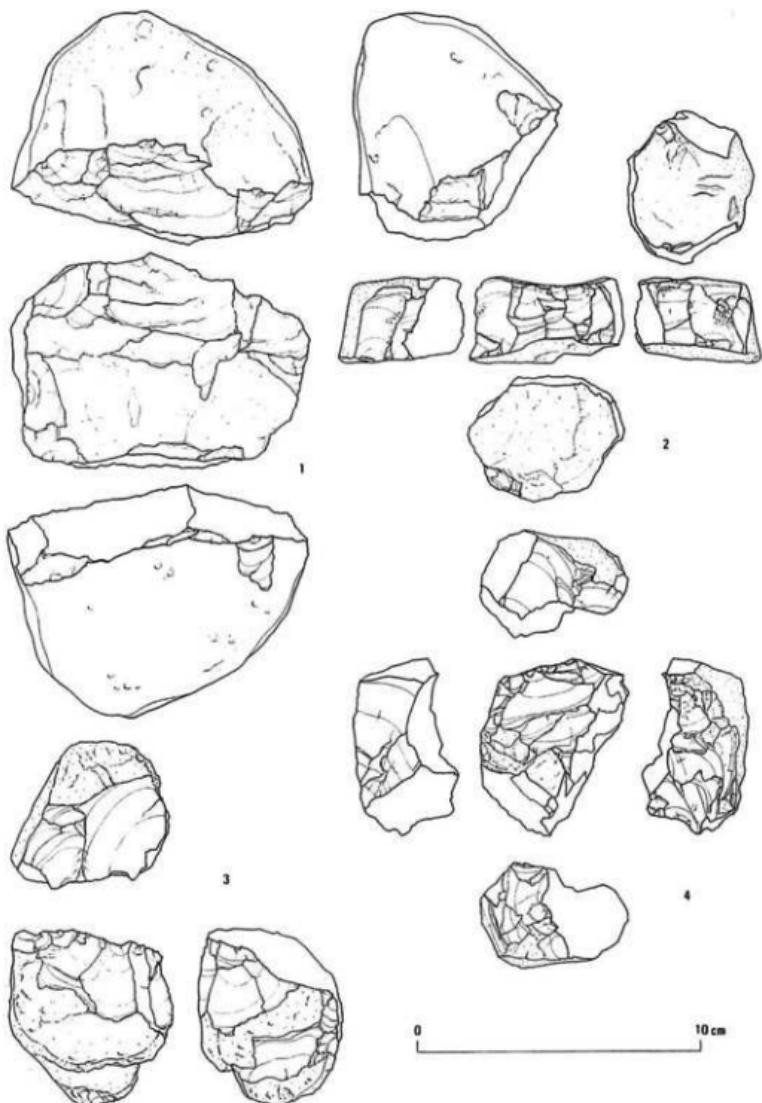
C類には7点含まれる。疊表を片面全体に残すものと、板状のものの二通りある。取られる剥片は少なく、1石核当たり2~3点止まりであろうか。無駄の多い技術のように思われる。

D類には12点含まれる。打面調整を行なわず、打面を転移してそれに代えている。やはり1石核当たりの剥片剥離点数は少ない。

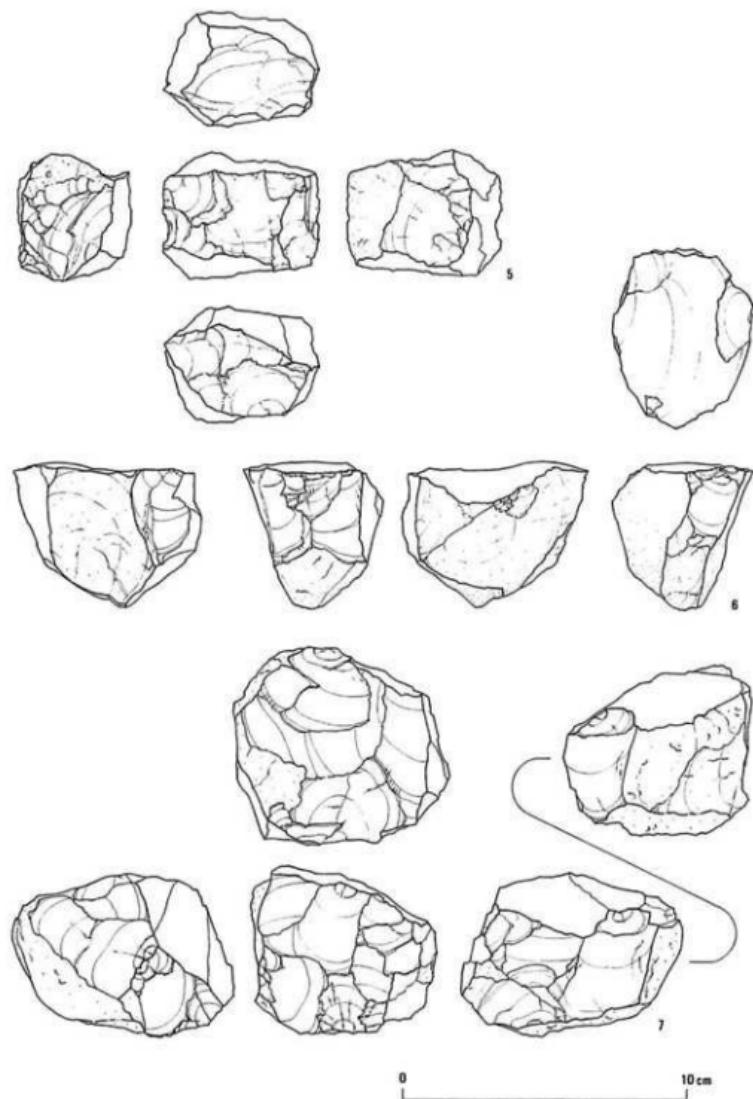
E類は2点あるが、いずれもサスカイト製である。十分に利用されており、残核には使用痕もある。幅2~4cm位の小型の横長剥片を剥がしている。他の在地産の石材に対して、サスカイトは彼らにとって非常に貴重なため、有効に使用されたと考えられる。

F類は4点ある。これらも一石核当たりの剥片剥離点数は少ない。これらの石核にはRFのA類との類似性が指摘できる。両者を識別する明確な規準はなく、まさに恣意的である。疊または分厚い剥片を素材として主に不定形剥片剥離が行なわれている。本遺跡に一般的な石核とは別の技術的流れかもしれない。

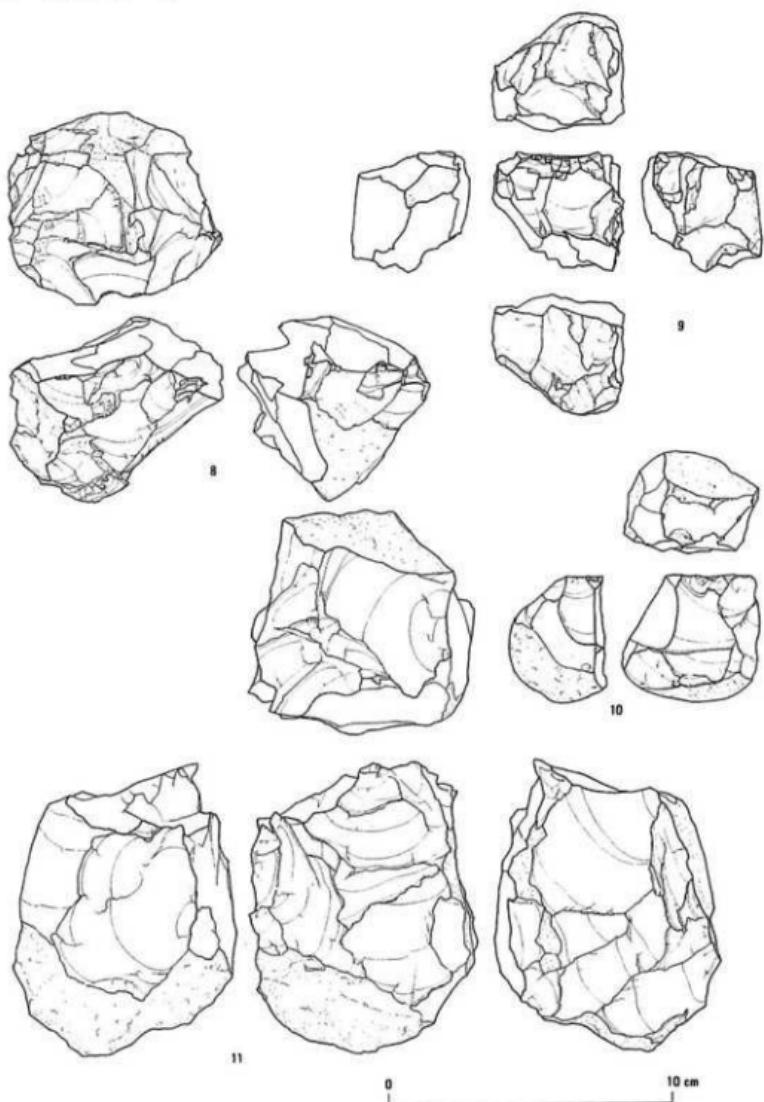
本遺跡の石核を六類に分けた。その結果A~D類はいずれも不定形剥片を剥離しているものである。また、打面調整を行なわず、打面の移動を頻繁に行なっている点も共通している。したがってこれらの類型間の差は技術的な違いの結果というより、むしろ作業段階、進行上での差違といえる。すなわち、A類は更に剥片剥離作業が続行されたならばB類に含まれることになり、あるいはA・B類から分厚い剥片を剥離した場合にはC・D類に含まれることになる。そして通常B類の段階で作業が終了し遺棄されることが多かったと考えることができる。



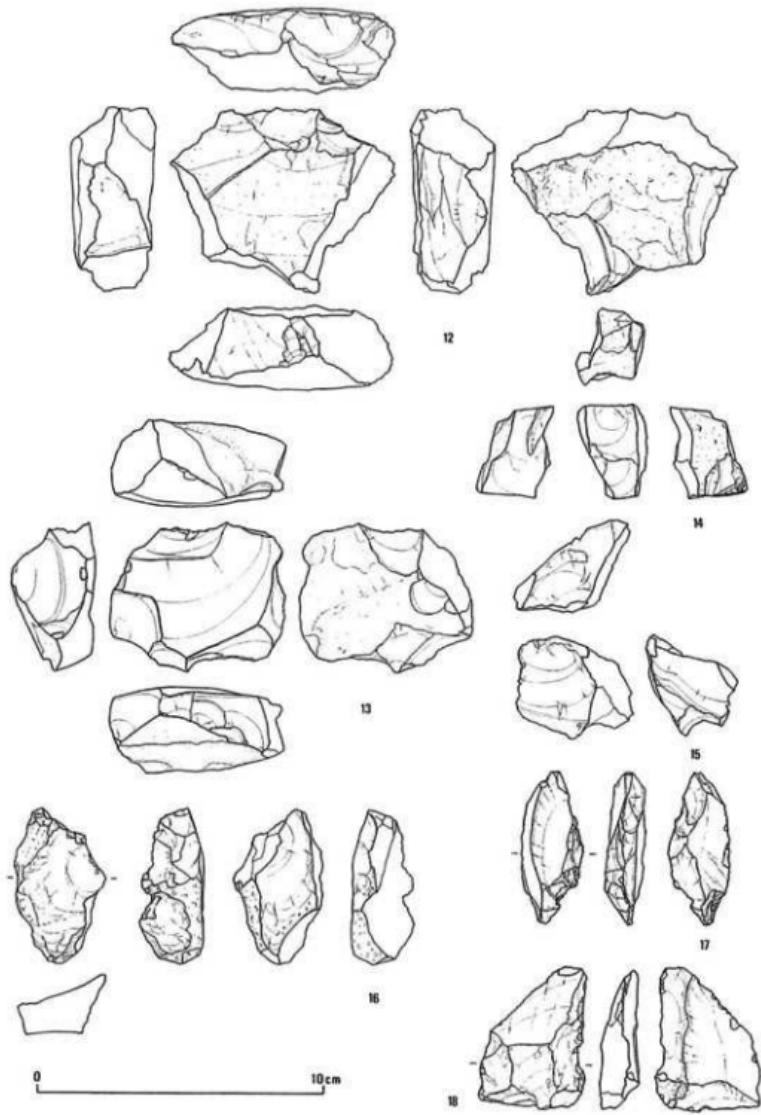
第33図 石核 (1・2 : A類, 3・4 : B類)



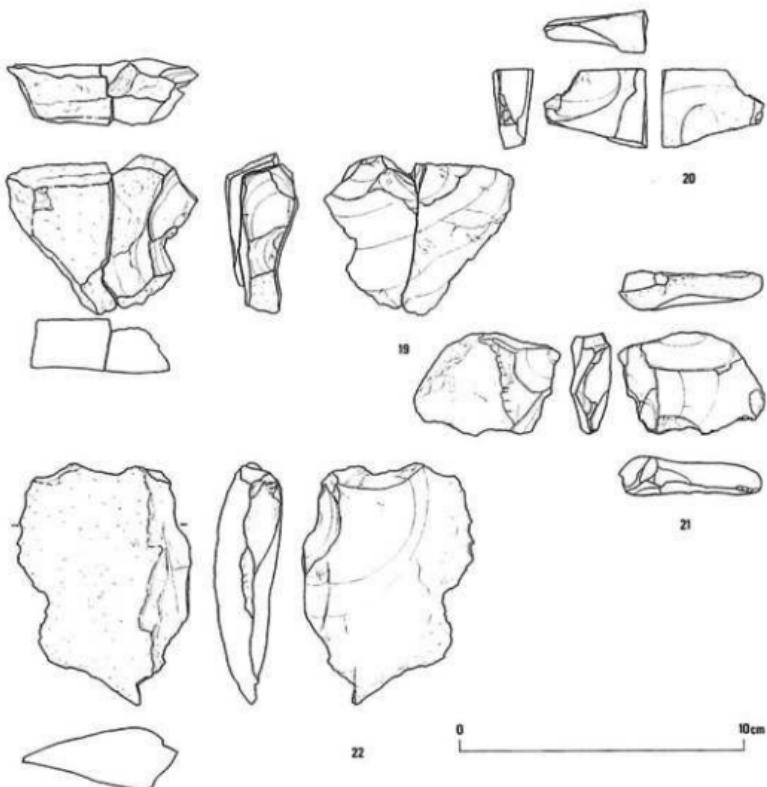
第34図 石核(B型)



第35図 石 核 (B 型)



第36図 石核 (12・13: C類, 14~16: D類, 17・18: E類)



第37図 石核(F類)

E類は前述の如く別の技術的流れである可能性が高い。他の組成とは大いに異なった様相を示し、本類のみが強く瀬戸内的な技術的特性を持っている。従来の“櫛石島技法”を持つ文化段階の指標と見做してよいものであろうか。近年の兵庫県板井寺ヶ谷遺跡での類品の層位的出土例もある(兵庫県教育委員会 1984b)だけに編年的メルクマールとしての扱いには再考を要しよう。

(田中)

10. 受熱石器

受熱石器は、合計32点発見されている。認定の規準は、熱破碎特有のアバタ状の凹みとその前段階と考えられる円形の細いヒビ割れが観察できるものとした。

石材別に見ると、鉄石英が17点と多く、次いで玉髓8、頁岩6、チャート1点となっている。

石材の石器への使用頻度から考えると、チャートの受熱率が低く、逆に鉄石英・頁岩は高い。石材の持つ物理・化学的な性質に関係するのであろうか。考古学的には評価は難しい。石器の器種別には特別な傾向は認められない。

個体別資料では、Te②3 Eに6点と多く認められるが、他ではTe③3 D, Cha③4 E, Te①4 Eに各々2点含まれる以外には複数含まれる例はない。これらについても、特別に礫表近くがよく受熱しているということではなく、いわゆる剥片剥離前の熱処理などは行なわれていないようである。
(山下)

11. 光沢ある石器

光沢ある石器は合計164点発見されている。光沢ある石器がよく発見されると言われる東日本を含めて最もまとまって出土した例の一つであろう。光沢の発現を考えるには嗜好の資料群ではあるが、時間的制約からここでは石器の器種別と石材別に光沢の出現率を検討するに留める(第3表)。

器種別に見ると、光沢の認められるのはナイフ形石器、スクレイバー、RF, UF, 剥片、石核である。本遺跡の主たる石材である鉄石英、チャート、玉髓、頁岩に限って光沢出現率をみると、全体では1,110点中164点14.8%に認めることができる。器種別ではナイフ形石器75.0%, スクレイバー37.5%, RF 24.0%, UF 27.2%, 剥片10.3%, 砕片0.6%, 石核29.7%という割合になる。定型的と言われるトゥール類に高率に現われ、副次生産物に少ないという事実がある。ここから一つには石器を使用する際に発生する光沢のあることが考えられる。また一方、副次生産物中でも石核のみには高率で光沢が認められており、剥片を剥離する時に石核

第3表 石材別・器種別光沢出現率

	Kn	Sc	RF	UF	B	C	D	計
鉄石英	3	0	13	124	334	83	33	590
光沢出現率	3	0	3	41	41	0	11	99
	100	0	23.1	33.1	12.3	0.0	33.3	16.8
玉	0	3	3	61	98	21	17	203
髓	0	2	1	18	10	1	6	38
	0	66.7	33.3	29.5	10.2	4.8	35.3	18.7
チャート	1	4	8	67	128	54	10	272
	0	1	2	10	7	0	2	22
	0.0	25.0	25.0	14.9	5.5	0.0	20.0	8.1
頁岩	0	1	1	13	21	5	4	45
	0	0	0	3	2	0	0	5
	0	0.0	0.0	23.1	9.5	0.0	0.0	11.1
計	4	8	25	265	581	163	64	1110
	3	3	6	72	60	1	19	164
	75.0	37.5	24.0	27.2	10.3	0.6	29.7	14.8

を固定する過程で光沢が発生する可能性が考えられる。石核の光沢は打面ばかりか作業面を含む脣部に残されることも多い。一方で打撃点そのものに認められる例はほとんどない。このことからも打撃作業よりむしろ石核の固定に関わる光沢であろうことが推察される。

先のトゥール類に認められる光沢には、明瞭に刃部に限定されるものから、全く意味不明のものまである。これらも石器の使用による光沢と石核の時に付されたものがないまぜになった結果と考えられる。

次に石材別に光沢の出現頻度を比較してみよう。先の4種の石材に限るが、石材利用率も鉄石英590点、チャート272点、玉髓203点、頁岩45点と大きく異なっている。光沢は順に16.8%, 8.1%, 18.7%, 11.1%の率で出現する。この結果から、石材を二つに区分して考えることができる。一方は鉄石英・玉髓グループで、他方がチャート・頁岩グループである。前者は17~19%前後の高い出現率を示しており、後者は8~11%と低い。石材はいずれもSiO₂を70%以上含むと考えられ、化学組成上は似た性質を持っている。にもかかわらず何故このように光沢出現率に差が生じるのであろうか。石材によって石器の扱われ方に差があったことも全く排する訳には行かないが、可能性は低かろう。むしろ同じ集團によって同じように取り扱われる中でこのような差が生じたと考えられる。そしてその主たる原因の一つには、石材の持つ粒度の粗さや透明感の差があるのではなかろうか。適度な硬度・滑感と粒度を持つ石材に最も光沢が生じ易い可能性がある。チャートは鉄石英や玉髓に較べ明らかに透明度が高いために、光沢をそれと識別し難い可能性が高い。また本遺跡の頁岩は東北地方に多い硬質頁岩とは異なり、粒度も粗くより軟質である。このために光沢が風化し易いとか、より生じ難い可能性も考えられよう。

本遺跡の多量の光沢ある石器は、このように一つには光沢の生じ易さという物理的な側面をクローズアップしたと同時に、文化的な側面にも一石を投じたと考えられる。すなわち、從来光沢ある石器は富山県を南限とする東北日本の文化伝統の中で注目されて来た(富樫1971、西井他1973、山下1982 他)ものであるが、それが一気に瀬戸内海近くまで南下して来たのである。石器の型式が技術的伝統を強く反映するのに対し、光沢の有無がより有機的な生産との関係を示しているとすれば(たとえば光沢をより高率で発生させるグループは、より皮革処理等との関わりが多かったと想定する等)、從来は背景となる環境も含めて両者がほぼ整合的に発見されていたと考えることができる。ところが本遺跡の技術的特徴は東北日本の様相とそれはほど近い関係を持つとは考えられない上に、編年的にもより古い段階に属すると考えられるのである。石器に光沢が発生するような背景が、ある程度の時間と文化を越えて存在したと想定する必要があろう。改めて光沢の何たるかが問われるようにも思われる。

(山下)

第4節 石材

溝口遺跡の先土器時代石器群の製作に用いられた石材の種類と数量は、次の通りである。石器総数1,121点のうち鉄石英590点、チャート272点、玉髓203点、頁岩45点、凝灰岩3点、石

第4表 先土器時代の石器石材表

石質	鉄石英 (Te)	玉髓 (Cha)	チャート (Ch)	頁岩 (Sh)	凝灰岩 (Tu)	石英 (Qu)	サスカイト (San)	安山岩 (An)	不明	黒曜石 (Obs)	計
点数	590	203	272	45	3	3	2	1	1	1	1121
比率	52.6	18.1	24.3	4.0	0.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	100.1

英3点、サスカイト2点、安山岩1点、黒曜石1点、不明1点である。主要な石材は鉄石英53%、チャート24%、玉髓18%である(第4表)。

周辺地域の先土器時代の各遺跡における石材は、二上山におけるサスカイト、丹波帯におけるチャートと、供給地との関わりや影響下において主要石材の選択活用が知られている。溝口遺跡において使用されているチャートも後背地の水上郡、多紀郡、川辺郡にかけて弓状に連なる丹波層群に豊富に含まれており、石材の入手条件は整っている。

ところで、溝口遺跡を特色づける一つとして鉄石英、玉髓を選択、多用していることがあげられる。鉄石英53%、玉髓18%であり、この2種類で石材占有率は71%になる。周辺地域の先土器時代におけるこのような石材利用例はない。そこで次に周辺の地質から見て、この二種類の石材を探集し得るかどうか探ってゆきたい。

まず溝口遺跡の基盤は丹波帯の古生層から成りこの上に火山活動で生じた有馬層群がある。有馬層群は凝灰岩・流紋岩を主体に構成されている。三田盆地の北部・北東部の山地はこの凝灰岩・流紋岩類で構成されている。有馬層群のさらに上には神戸層群が覆う。そして溝口遺跡をのせる段丘の疊層中からはわずかながら鉄石英、玉髓の原石を採集することができる。

次に鉄石英、玉髓はどのような産状を示すのか記してゆく。鉄石英、玉髓は共に結晶が隠微晶質の石英を母体にモロ酸化鉄等の作用により赤色、褐色、黄色を呈するが、隠微晶質の結晶がより均質なものは玉髓と区別されている(木下他 1967)。共に産状は岩石中の空洞に石英分と酸化鉄等の混った熱水が地下より上がって空洞を満して産するようである。流紋岩は花崗岩と共に石英の親と理解されており、有馬層群中に上記現象が生じた場合、鉄石英、玉髓の産出は理解できると考える。遺跡近くの段丘疊層中あるいは神戸層群中に含まれる鉄石英、玉髓の原石の採集もこれで理解できる。ちなみに採集できる鉄石英、玉髓の大きさは径5~6cmから15cmぐらいの円盤である。

ところで我々は鉄石英、玉髓と分類したが、チャートとして理解する考え方がある。通常のチャートは、丹波帯に産する放散虫等を含む有機質のチャートであるが、我々が鉄石英、玉髓と分類したものに相当するものとして無機質のチャートがあげられる。無機質チャートの成因はケイ酸を溶かしたやはり熱水が石灰岩を交代させると玉髓質で極微晶石英となるものである。

どちらに分類するか苦慮したが、決定する手段がなく、一般的に流紋岩地帯に鉄石英の産出する可能性が高いという判断をした。例えば、富山県立野ヶ原台地・小矢部川流域西側の医王山山地における流紋岩と鉄砲谷・ウワダイラ遺跡等で石材として利用している鉄石英との関係を考慮し、鉄石英、玉髓の分類をした。

(徳永)

第5節 剥片剥離技術

本遺跡発見の個体別資料には、10点以上が一つに接合するものも8例ある。しかし、それらは一見した所相似した技術的特色を示しているようである。ここではそれらを一括し、多量接合資料やトゥールを含むものなど適宜抜き出して説明する。説明に当っては、技術的特色を反映し易い、原石の形状、打面の作出・調整・転移、体部調整、取られた剥片の形状、トゥールへの利用状況などの観察に力点を置いた。

<Te ① 3 E >

資料数は8点でうち7点が接合する。U F 5点と石核1点を含む(第38図)。以下に作業順序を示すが、工程中、矢印と直交する破線(+)、実線(↓)、波線({})は、それぞれ打面の90°、180°、不規則な転移を示している。

イ→① 4 D 4 A 10(U F) →② 4 D 5 A 20(U F) →③ 3 E 11 A 4(U F) →④ 3 E 11 A 3(B) →
 ロ⑤ 3 E 22 A 4(B) →ニ→⑥ 3 E 11 A 15(U F) →⑦ 4 E 6 A 9(D)

イ)既に何枚かの中型不定形の剥片をとっており母岩の大きさはわからない。中型の不定形剥片①をとる。確表を打面にして連続して小型の不定形剥片②と縦長の小型剥片③をとる。①～③はいずれもU Fになっている。ロ④より前に小型の確表を持つ剥片を1枚とる。②・③同様に確表を打面として中型の不定形剥片④をとる。④の作業面に打面を移し小型厚手の不定形剥片⑤をとる。また、これと前後してハ)中型不定形剥片を1枚とる。ニ)で小型の縦長剥片をとる。⑥・ハ)～ニ)と同様に④の作業面を打面にして小型の不定形剥片⑦をとった後、石核⑧を放棄している。⑧はU Fになっている。

非接合の資料は1点しか残っておらず、イ)以前の剥離作業を推測することはできないが、少なくともイ)以後では、90°の打面転移を2度行ないながら、小型の剥片を多くとっている。

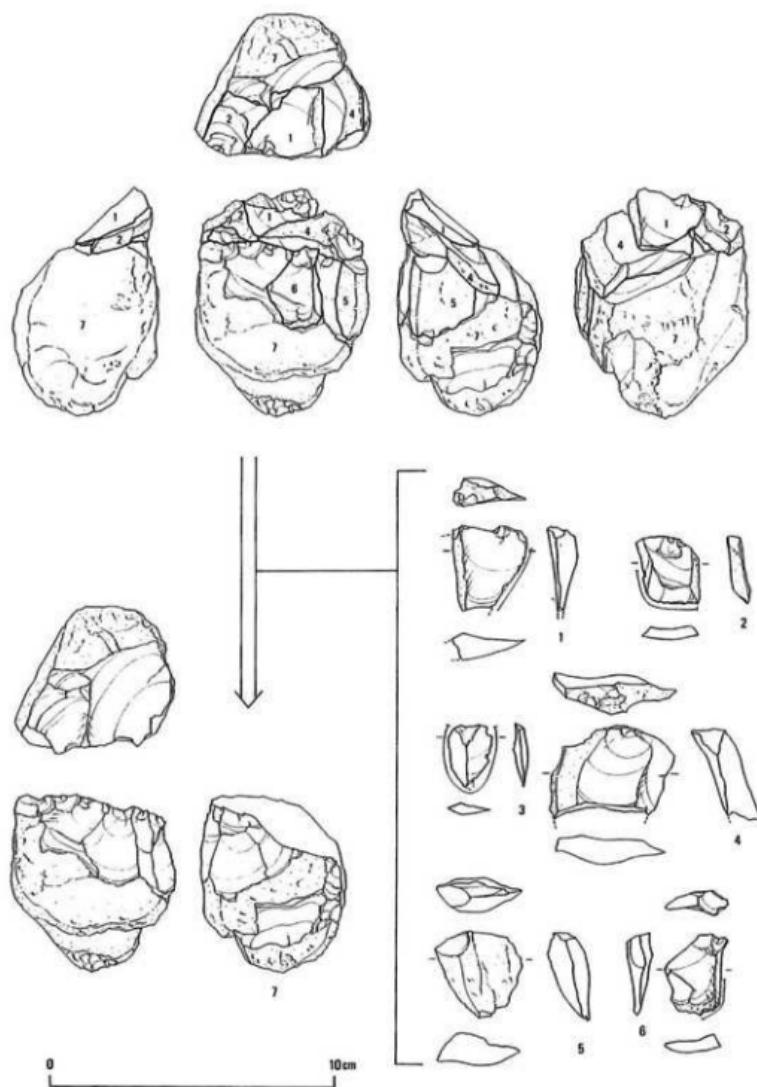
<Te ② 3 E >

21点で構成され、うち17点が接合する。II種接合を4組11点含むため資料数は14点となる。U F 9点と石核1点を含む。2組の接合資料があるが、大部分の15点が接合しているA群についてのみ示す(第39図)。

(A群)

イ→① 4 E 2 A 4(B) + ② MG A 13(B) + ③ 3 E 22 A 18(B) + ④ 3 E 17 A 7(U F)
 ロ→⑤ 3 E 17 A 1(U F) + ⑥ 4 E 2 A 1(B) →ハ→⑦ 3 E 23 A 11(U F) →
 →⑧ 4 E 1 A 14(B) + ニ→⑨ 4 E 6 A 3(B) + ⑩ 3 E 17 A 4(U F) →⑪ 4 E 7 A 7(B) +
 ⑫ 4 E 2 A 41(B) + ⑬ 4 E 6 A 16(U F) →⑭ 4 E 8 A 3(D) →ハ
 ハ→⑮ 4 E 2 A 21(B) →ホ

イ)個体別資料中に確表を残す資料が多いことから、かなり初期の段階からの資料を残しているようである。母岩を大きく2分割しているが、その前に受熱していた可能性が大きい。①～



第38図 個体別資料Te ① 3 E接合図

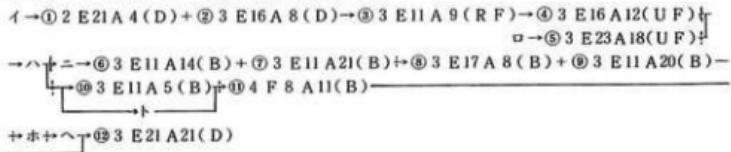
④の接合群は熱破碎のようである。④のみUFになっているが、器種認定上の問題もあり、実態としてUFであったか否かは疑問である。ロ)分割されたもう一方の石核の剥離が始まる。最初に整った中型の縦長剥片⑤+⑥をとる。⑤のみUFとなる。この打面は剥離痕であるが、母岩分割前のものか後のものは不明である。ハ)で同じ打面から続けて2枚の小型の不定形剥片がとられている。ハ)に統いて中型の半月状の剥片⑦と小型の不定形剥片⑧をとる。⑦はUFである。90°打面を移し、ニ)では⑦・⑧の作業面を打面にし正面から2~3枚以上のやや縦長の剥片をとっている。4E1A27は非接合だが、それらのうちの1点とも考えられる。⑨+⑩と⑪+⑫+⑬は同一の打面から連続して剥離されている。⑨+⑩や⑪+⑫+⑬という剥片は1枚の剥片として剥離されたのではなく、以前からはいっていたヒビに影響されて一度の打撃で2枚剥がれたといった感じである。⑩と⑬のみUFとなる。ニ)~⑬の工程との前後関係はわからないが、(ホ・ホ)といった小型の不定形剥片をとる工程がある。石核を分割し、⑭を残しへ)で残りの石核の搬出を行なっている。

本個体中にはどういう理由でかは不明であるが、光沢を有するものが多数含まれている。光沢を有する剥片は本個体だけに限らず、本遺跡では他の個体の中にもみられる。

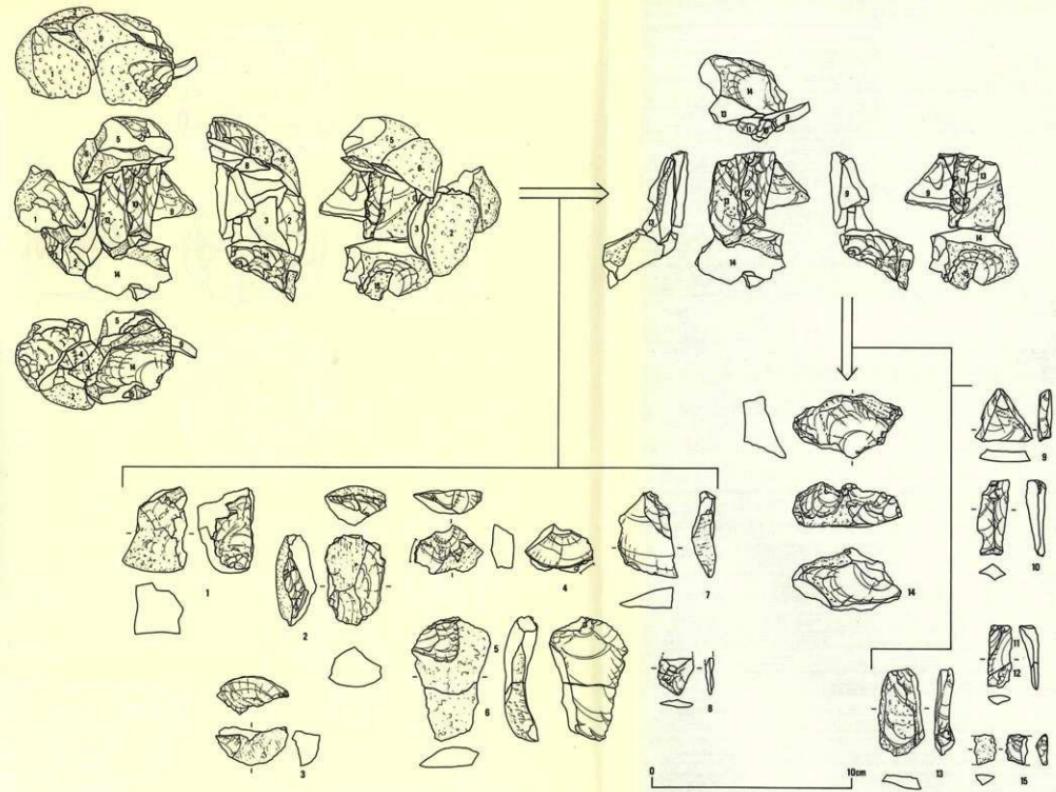
UFとして用いられている剥片の形態は様々で、一貫性はみられないが、9点あるUFのうち3点が縦長剥片である。本個体には縦長剥片がこの3点しかなく、縦長剥片が全てUFということから積極的に縦長剥片を使おうとした姿勢が窺える。さらに縦長剥片はニ)で2~3枚以上がとられ、持ち出されている。トゥールとして使用された可能性もある。本遺跡における数少ない縦長剥片指向を窺わせる個体である。

<Te ④ 3 E>

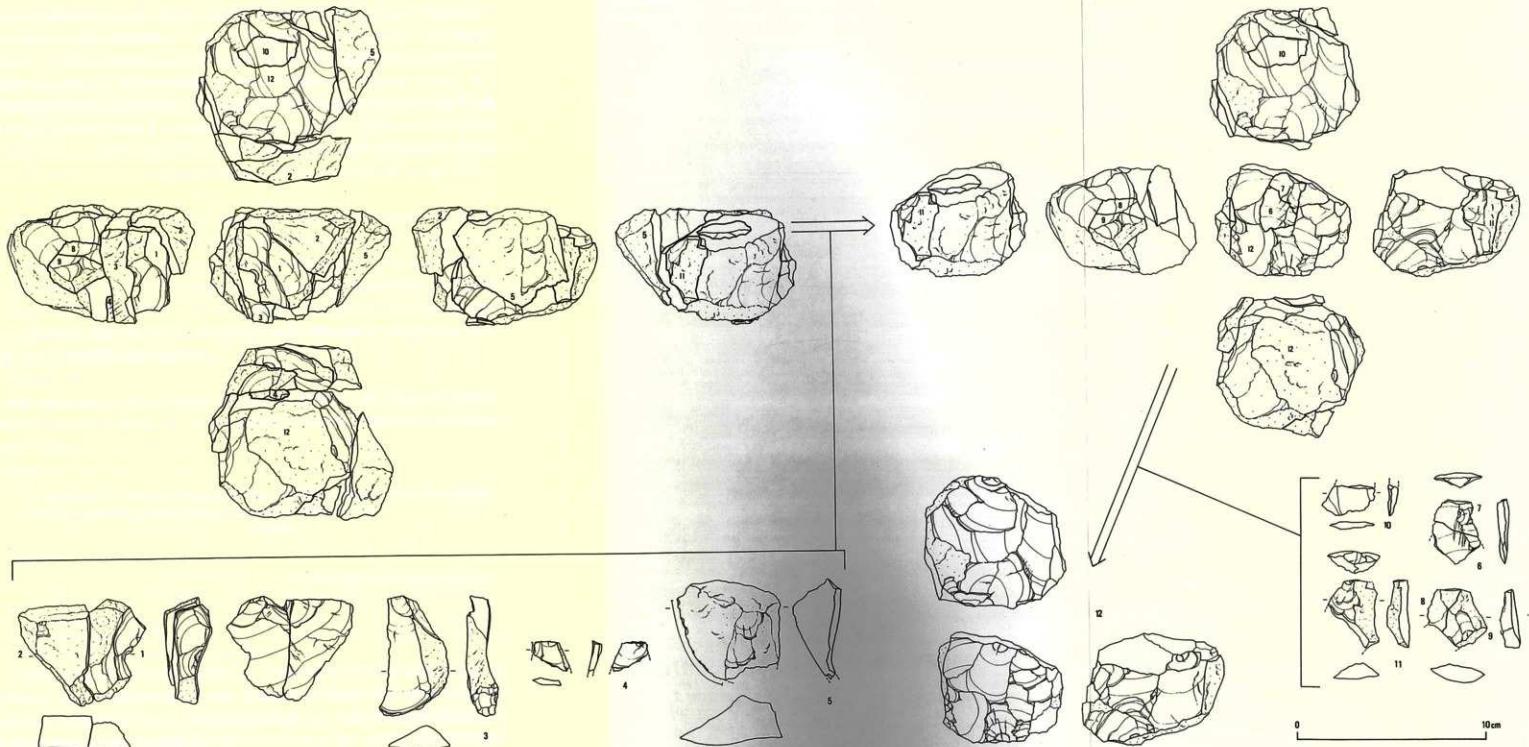
14点で構成され、うち12点が接合する(第40図)。II種接合を3組6点含むため資料数は11点になる。RF1点、UF3点、石核3点を含む。



イ)疊表を多く持つ剥片が含まれることから、かなり初期の段階からの資料が残っていると思われる。母岩には径8cm程の円疊を用いている。①~④と同様に疊表を打面として1枚以上の疊表を多く持つ剥片をとると考えられる。①+②は大型厚手の不定形剥片で、後に横長の小型剥片1枚と小型の不定形剥片1枚の少なくとも2枚以上の剥片がとられ、石核になっている。①と②が割れたのとこれらの剥離との前後関係は明らかでない。⑤は縦長の整った中型剥片でRFに加工されている。次いで小型の不定形剥片④をとる。④はUFになっている。イ)~④の工程との前後関係は明らかではないが、ロ)では大型の不定形剥片⑥の打面を作出するような剥離を1回以上行なっている。おそらく疊表を多く持つ剥片であろう。⑦はUFとなる。ハ)



第39図 個体別資料T_e ② 3 E接合図



第40図 個体別資料Te ③ E接合図

では⑥の作業面を打面として、少なくとも3枚以上の大型不定形剥片をとる。この打面は①～④の打面とは不規則な位置関係(90°・180°といった位置関係はない)にある。ハ)の作業面を打面として3枚以上的小剥片をとる作業ニ)の後、同じくハ)の作業面を打面にして小型の不定形剥片⑥+⑦をとる。打面を90°転移させ、小型の不定形剥片⑥+⑦をとる。その後、⑥+⑨の作業面を打面に1枚の小型剥片をとる作業ホ)、打面を90°移し、再びイ)～④と同じ縫表を打面に小型不定形剥片をとるへ)が続けて行なわれる。一方、このニ)～ヘ)という一連の作業と平行して、横長の小型剥片⑩と不定形の小型剥片⑪をそれぞれ打面を90°ずつ移しながらとる工程がある。ト)では⑩の隣で⑪同様縫表を打面にしてやや縦長の整った剥片をとる。⑫は石核でこぶし大の大きさのものである。

UFは本資料の中には3点みられるが、素材はそれぞれ異なり、一貫性は認められない。RFは一点含まれ、素材は縦長剥片である。本資料中縦長剥片は2点みられるが、1点はRFに、もう1点はUFになっている。このことから縦長剥片を積極的に利用しようとしたことが窺われるが、持ち出された剥片はいずれも不定形のようである。打面の転移は頻繁で、未発見資料も含めてわずか20点程の工程中に、少なくとも7回以上行なわれていることになる。推定復原した工程を多目に評価するとしても、同一打面当たりの剥片剥離点数は3～4点位であろうか。目まぐるしい打面転移の様子が窺われる。

<Te ⑧ 4 D>

20点で構成される。うち15点が接合する(第41図)。II種接合を3組7点含むため資料数は16点になる。UFを5点含む。A・B二つの接合群を持つが両群とも個体の中心となる石核は遺存していない。

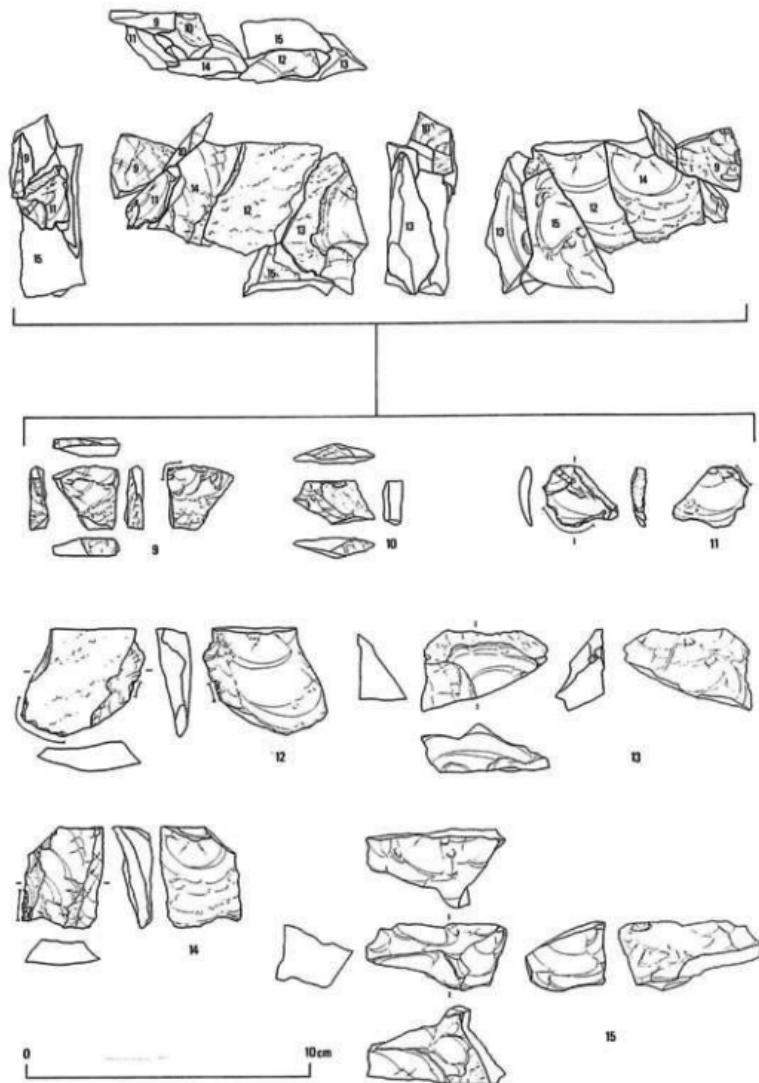
(A群)

イ→①3D20A4(B)+②3D19A1(B)+ロ→③4D4A38(B)+④4D5A24(B)
+⑤4D4A62(B)+ハ+⑥3D13A1(B)+⑦3D24A9(UF)
+⑧表A5

(B群)

ニ→⑨4D5A4(UF)+ホ+⑩4D4A5(B)→⑪表A16(UF)――――――――――――
→⑫3D14A2(B)
→⑬4D4A3(UF)

(A群) イ)既に荒い加工が行なわれており、この接合群もその一貫とも考えられる。あるいは①+②とそれ以降では分割された異なる石核に帰する可能性もある。縫表からの加筆で①+②といった厚手の剥片をとる。ロ)打面を不規則に移して、小型の不定形剥片を数枚とる。いずれも縫表からの裂け目に影響されて小さくいびつである。③～⑪は本来1枚のやや厚手の中型剥片であったと考えられるが、複数に割れてしまったようである。⑫はかなり厚手の不定形剥片である。この剥離は①+②とそれ以降のものとの分割面を打面に用いている。⑭と⑮は



第41図 個体別資料Te ② 4 D接合図

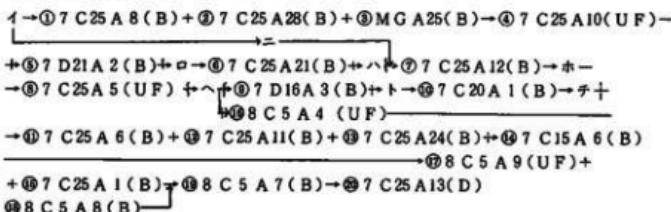
前後して剥離された小型の不定形剥片であるが、⑦では90°⑧では180°それぞれ打面の転移を行なっている。⑨はUFである。

(B群) A群とは全く剥離の技術を異にした一群で、A群との関係は定かではない。ニ)分割された大型の剥片(約10~11×6×3cm)を石核に転用して剥離が行なわれているようである。既にいくつか剥片がとられたあとがみられるが、その一連の剥離と石核の素材となっている大型剥片の分割との前後関係は不明である。小型の不定形剥片⑩をとった後、ホ)で打面を不規則に移動させながら何枚か小型剥片をとっているようだが、詳細は不明である。⑪はUFである。ホ)と同様に打面を不規則に移動させ、連続して小型不定形剥片⑫・⑬をとる。⑭はUFになる。⑮と前後して、⑯以降の打面を作出する作業へ)が行なわれ、⑯+⑰が剥離されるが、これらは1枚の剥片というよりも、⑯の衝撃で⑰が剥がれたといった感じの別剥片である。⑯は不定形だが、しっかりした中型剥片でUFになっている。統いて同じ打面から中型の不定形剥片⑯をとる。これもUFである。⑯と前後して厚手の中型剥片⑯が剥離される。

本個体中、目的剥片と認められるものは、⑯と⑯くらいである。これらは共にB群に含まれており、A群では目的剥片をとろうという意図さえ窺えない。A群で持出されている剥片は全て小型の不定形剥片であり、数も10枚には満たないと考えられる。B群の場合も持ち出された剥片は小型のものばかりだが、⑯の剥離の後、持出した石核から目的剥片をとった可能性は十分考えられる。また、両群共に礫表を持つ剥片が多いが、礫表の様相は全く異なる。A群は完全な礫表で、接合資料も礫表からの割れ目に影響されて割れており、剥離の前後関係が不鮮明である。一方B群は古い割れ面であり風化の進んでいない礫表を持っており、比較的整った剥片群の接合順序も判断しやすい。

<Te ⑯ C>

27点で構成され、うち20点が接合する(第42図)。II種接合を4組10点含むため資料数は21点になる。接合資料は1組で、母岩の形状をほぼ復原できる。



イ)13×10cm以上の亜円礫を利用している。礫表より、⑯+⑯+⑯の背面が全て礫表である不定形剥片をとる。同じ打面より縦長剥片⑯をとる。⑯はUFになっている。打面を不規則に転移させ、⑯~⑯とは異なる礫表より小型不定形剥片⑯をとる。⑯の作業面に打面を移動し、ロ)で小剥片を2枚とる。統いて背面、縁辺に礫表を留める⑯をとる。再び打面を礫表に転移させ、ハ)で大型不定形剥片を1枚以上とる。⑯~ハと平行して礫表を打面にニ)で不定形剥片を1

枚とる。統いて打点を後退させ⑦～⑩をとる。ハ)の工程からみると、これらは打面の移動を伴っている。⑦はニ)の作業面の他は背面に全て礫表を留める。ホ)では中・大型の剥片を3枚以上とっている。⑩は背面に大きく礫表を残す。UFである。ホ)の作業面に打面を移し、ヘ)で1枚以上大型剥片をとる。打面を不規則に転移させ、礫表より小型剥片⑪をとる。打面をヘ)の作業面へ90°移し、ト)大型剥片を1枚とる。統いて⑫をとり、チ)で小型剥片を1枚以上とる。ハ)の作業面に90°打面転移し、背面全体が礫表である⑬+⑭+⑮をとる。再びヘ)の作業面に打面を移し、⑯+⑰をとる。⑯～⑰は⑨～⑩との前後関係はわからない。⑯はヘ)の作業面を打面にしてとられ、⑯+⑰も同じ打面から打点を後退させてとっている。⑯と破損した一部である⑯はUFになっている。統いてヘ)の作業面を使い⑯をとるが、節理等のため直方体形に割れてしまう。⑯は本個体の残核である。この残核は10×8cm程あり、大きさとしてはまだ石核として十分使用できそうであるが、節理などが多いいため遺棄されたと考えられる。

本個体は20点接合するが、定型的石器ではなくUFも4点と異例の少なさである。その上、10枚以上の剥片が未発見であり、目的的剥片等はほとんど持ち出されたと考えられる。剥片は、中・大型のものが主体となる。持ち出された剥片も多くが大型である。しかし節理による割れが多く大型剥片としての大きさを保持しにくいくこと等から、中・小型の剥片を使用したと考えられる。また、打面転移が多く、石質の悪さをカバーしようとしていた意図が窺える。工程全體が節理に左右された、一種の特異な例である可能性もある。

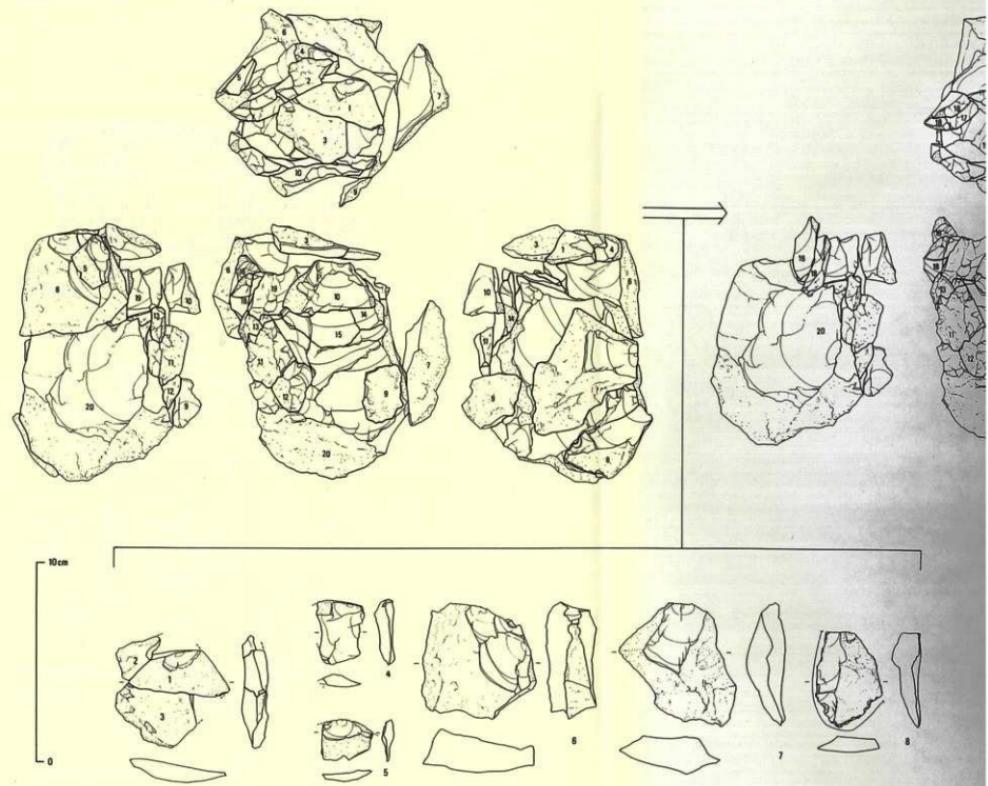
<Te ④ 7 C>

22点で構成され、うち19点が接合する(第43図)。II種接合を1組2点含むため資料数は21点となる。3組の接合群があるが最も多く13点が接合するA群のみ示す。

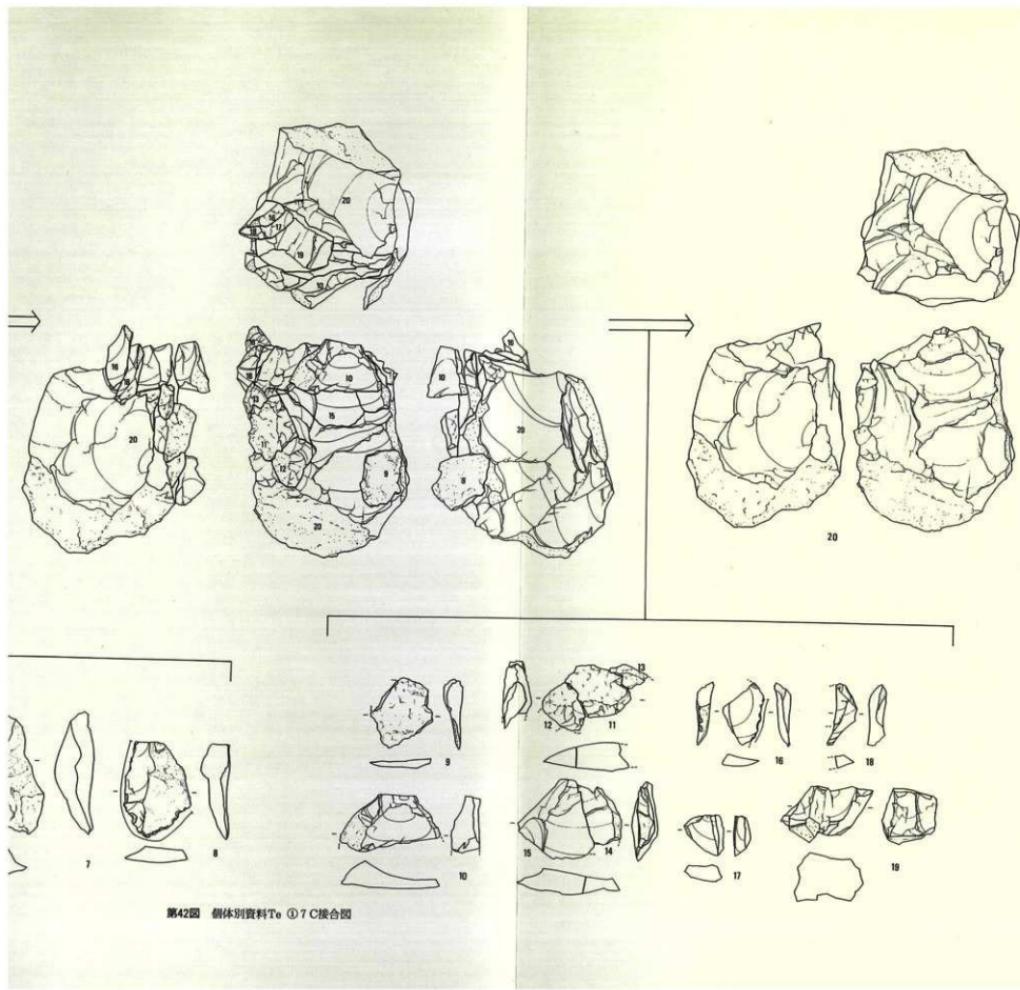
A群

イ) ① 8 C 10 A 18(B) + ② 7 C 15 A 1(B) → ④ 7 C 25 A 31(UF) + ロ + ハ → ⑤ 7 C 20 A 6(B) -
 ホ ⑦ C 20 A 3(B)
 → ⑧ B C 9 A 11(B) → ニ + ⑦ C 9 A 2(UF) → ⑧ 7 C 19 A 4(UF) + ホ + ヘ
 チ ⑨ 8 C 4 A 3(B) → ハ + ⑩ 7 C 25 A 3(B) → ⑪ 7 C 5 A 3(B) → ⑫ 7 C 20 A 9(D)
 ド ⑬ 8 C 5 A 2(UF)

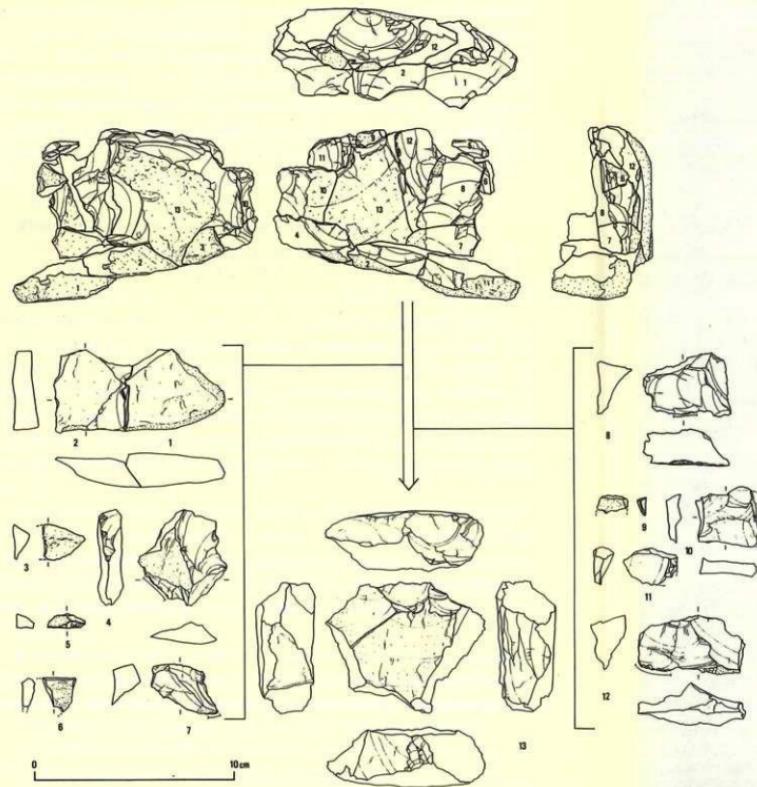
イ) 節理の多い、厚さ5cm程と思われる母岩を利用する。石核を製作するための初期調整はすでに終了しており、礫表を打面として①+②をとる。これと前後して③をとるが、打面は90°違って上面節理面にある。①+②よりは180°、③よりは90°の打面転移を行ない④をとる。これはUFになっている。不規則に打面を転移させ、上面よりロ)で個体を節理にそって盤状に半割し、他方を持ち出している。さらに不規則に打面を転移し、半割面より背面に向かいハ)で打面作成のような荒い調整を行なう。⑤・⑥・ニ)もこの調整の一部と考えられる。さらに打面を不規則に転移させ、背面(礫表)より⑦をとる。統いて同じ打面より⑧をとる。⑨・⑩はUFに利用される。90°打面転移し、右側面よりホ)で少なくとも3枚以上の剥片が背面でとられる。剥片は薄く、礫表をはがすようにとられているため、打面作成の調整の可能性がある。90°打面転移し、ホ)の作業面を打面としてヘ)で不定形剥片を1枚とる。90°打面転移し、



第42図 個体別資料Te (3)



第42図 個体別資料Te ① 7 C接合図



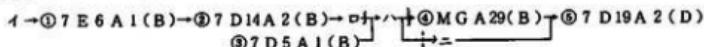
第43図 個体別資料Te ④ 7C接合図

下面より小型剥片⑩をとる。打点を後退させト)で小型横長剥片をとる。さらに90°打面転移し、⑪をとる。同じ打面より横長剥片⑫をとる。⑬～⑭までの剥離と平行して背面を打面に⑮をとる。これはUFになる。⑯は本個体の残核である。

本個体は母岩を半割し、その一方の円盤状石核から不定形・横長剥片をとる資料である。石質が悪く剥離が節理に影響されるためか、頻繁に打面転移を行なっている。部厚な不定形剥片を使用することが多い。剥離前には打面調整を行なっている。以上のことより、意図的に不定形剥片をとったと考えられる。本個体より持ち出された剥片は半割剥片もあわせて7枚以上あると思われる。これらも、決して特別に整った形状を備えていたものとは考えられない。

<Te ① 7 D>

資料数はわずかに5点であるが、全点が接合している(第44図)。

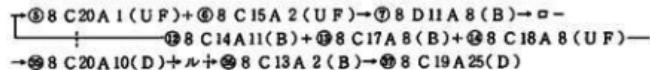
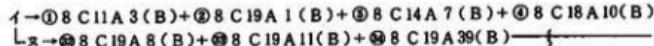


イ)すでに母岩の多くを費しているようで、残っているのは体積にして1/3～1/4位であろうか。作業面もすでに何回か移しているようである。①・②と連続して、石核背面寄りで剥片をとるが、両者は節理面で接しており厳密な意味での剥離の前後関係は定かでない。ロ)で①・②の打面を再生し、図の正面で数枚の小不定形剥片をとる。ハ)、ロ)の作業面に打面を移し、図右側面で2～3枚の小不定形剥片をとる。⑩はハ)と同じ作業面ではあるが、打面が隔たっている。ハ)の一連の作業より古い、いずれかの工程上に含まれると考えられる。ハ)の作業面に打面を移し、かつての打面である図上面から⑩の不定形剥片をとる。これと前後して、ニ)同じ打面を利用して図正面右下方で2枚の小型剥片をとる。いずれも2cm以下である。⑯は残核である。

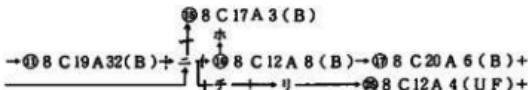
本個体に含まれる石核は、打面・作業面・側面と言った石核たる要件をよく整えているものの一つである。ところが実際に接合に従って工程を追ってみると、打面には打面調整らしい加工を、側面には側面調整らしい加工を施した結果このような形態が成立したのではなく、いずれにおいても似たような加工の施されていることがわかる。いずれもが作業面たり得る訳で、石核の各部分が異なる役割を持つものとして認識されていない可能性が考えられる。

<Te ③ 8 C>

構成資料数82点と、本遺跡の最多個体である。Ⅱ種接合を9組23点含むために、石器点数は67点になる。点数に較べて器種組成は乏しく、RF1、UF16。石核3点以外は剥片と碎片で占められる。37資料が接合する。最多接合例であるが、時間的制約のため実測図は割愛した。



→⑧8C19A49(UF)→⑧8B24A3(UF)→ハ→⑧8C8A1(B)→



⑧8C18A24(B)+⑧表A11(B)→⑧8B24A2(B)+⑧7C22A1(B)→

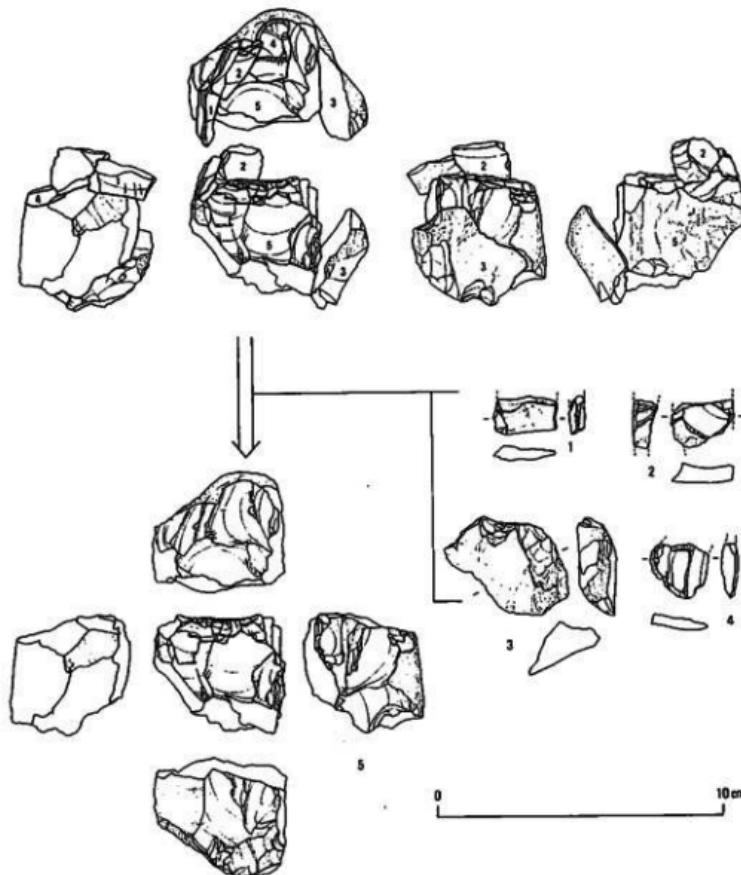
⑧8C19A13(B)→



→⑧8C14A15(D)

イ)径14~16cm程の円盤を材料とする。最初に、①~⑩とヌ~⑫の二つの工程群に分けるために母岩を大きく二分割する。①~⑩の工程から先に説明する。①+②+③+④と⑥+⑩、⑫+⑬+⑭はいずれも大型剥片で、礫表面を除くための調整段階と見ることもできる。その過程で生じた剥片も、適当であればUFとして利用されている(⑤・⑥・⑪)。⑨は腹面に1cm以上の剥離面を持っており、石核に転用された可能性もある。⑦・⑧は小型不定形、⑩は縦長の剥片であるが、この周囲の石質が比較的良いためか、本工程中最も整然とした手順を踏んでいるように見える。3点ともUFになっている。ロ)・ハ)はこれらの工程に入る小剥片である。打面を90°移し、筋理面から調整様の小剥片を剥がす(⑩・⑪)。ニ)では①~ハ)までと同じ分割面に打面をもどし、中型剥片を2枚程とる。このうちの1枚を石核として、⑩を剥がしたと考えられる。打面を移動し、⑩の大型厚手の剥片をとる。続いて打点を後退させて⑪+⑫+⑬の不定形剥片をとる。さらに⑭+⑮の剥片をとる。ヘ)では不定形剥片を2枚前後とっているようである。90°打面を移し、再び分割面から⑯とト)で小型不定形剥片を2点以上とる。これらは筋理が強く、満足な剥離は行なわれていないようである。ト)とほとんど同じ性格と思われる小型不定形剥片⑯・⑰をとる。チ)~⑱は⑩以後の工程との前後関係はわからないが、それらに相対する面で剥離が進行している。チ)では少なくとも1枚以上の中型不定形剥片をとる。チ)の作業面を打面に、リ)1枚以上の小型不定形剥片をとった後に⑭+⑮を剥がす。⑭+⑮は⑩+⑪+⑫と前後して、破損するように石核の一部が割れたと考えられる。通常の打痕は残していない。⑭+⑮は⑩~⑫の工程と一連のものであるが、筋理が多く順序を特定できない。以上の⑩までは、最初に二分割した一方の石核である⑩に収斂する。

ヌ)以降は、他の石核に向かう工程である。現存する資料では分割後工程がかなり進行して



第44図 個体別資料T-⑦ D接合図

いる。ヌ)では、半割母岩のさらなる荒割りも含め、種々の剥離が行なわれたと考えられる。こちらの工程で残されている石核はそれほど定型的なものではなく、むしろ半割母岩が再分割された一部のようでもある。⑩+⑪+⑫は中型剥片の分割されたものようである。3点とも分割面側に明瞭な打瘤を持つ。打面を移し、厚手の中型剥片⑬をとる。これは石核として再利用された可能性が高い。90°打面転移し、ル)やや整った中型剥片をとる。再び90°打面を移し、⑭の小型剥片をとる。⑮が⑯に対するもう一方の残核である。

本個体は、ほぼ原石の状態から残っているために、母岩の分割工程が最も端的に読みとれる。しかし一方では石質の悪さ故か、ほとんど整った剥片は得られていない。接合資料中にU.F.が

わずか8点しか含まれない事も、こうした現象の表われであろう。逆説的に言えば、有用な剥片がほとんど取られなかつたために遺棄されるものが多く、多盤接合が可能になつたとも考えられる。そうであるとすれば、本資料は技術的にはむしろ非典型的なものと考えなければならない。分割→剥片剥離 \leftrightarrow 打面転移といった工程そのものは他に準じると考えられるが、有用剥片の生産性においては大きな差があるものと考えられる。打面転移の頻度は、他に較べ若干低いようである。

<Cha① 3 D>

19点で構成され、うち14点が接合する。Ⅱ種接合を2組7点含むため資料数は14点になる。A・B2組の接合例があるが12点が接合するA群のみ示す(第45図)。

A群

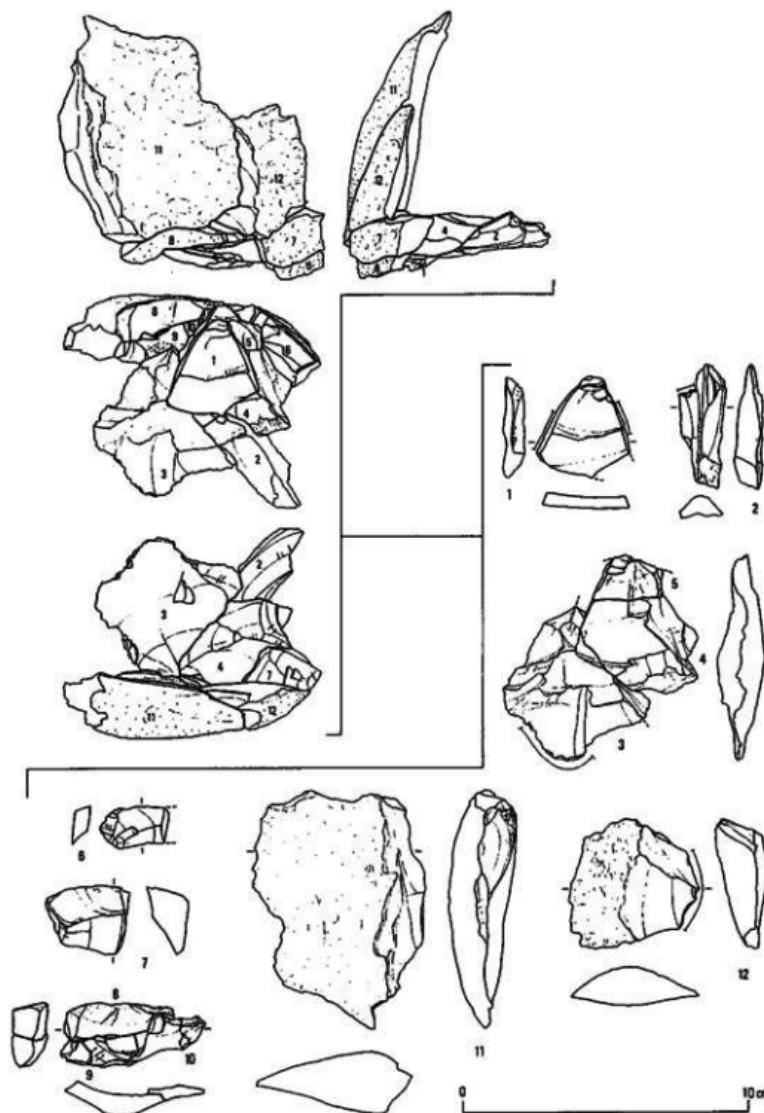
イ→① 4 E 2 A 8(U F)→② 3 E 16 A 7(U F)+③ 3 D 24 A 13(U F)+④ 3 D 25 A 9(U F)+
 ⑤ 4 E 1 A 35(B)→⑥ 4 E 1 A 40(B)→⑦ 3 E 21 A 7(B)→ロー^一
 →⑧ 4 E 1 A 30(U F)+⑨ 3 D 20 A 3(B)+⑩ 4 E 1 A 48(B)+⑪ 8 D 6 A 4(D)
 ↓
 →⑫ 3 D 24 A 2(U F)

イ) 径約18cm以上の母岩より礫表を打面に剥片をとる。一定方向より打点を後退させながら剥離していく。この段階ですでに、少なくとも2枚以上の剥片がこの方法でとられている。統いて①、②+③+④+⑤をとる。①はU Fである。②+③+④+⑤では②・③・④がU Fとなる。折断した可能性も考えられるが、割れ方が不規則であるのでⅡ種接合とした。おそらく剥片剥離に当つて破損した剥片を、そのままU Fに利用したと考えられる。打点をやや右に移動させ、小型の剥片⑥・⑦をとる。打点を左にもどし、ロ)で小型の不定形剥片を1枚とる。統いて横長剥片⑧+⑨+⑩をとる。ここでも⑩のみU Fになつてゐる。打面を90°転移し、打面作成のためか、作業面が移動したのか、背面が礫表の剥片⑪・⑫をとる。⑪は大型であるため石核として利用されており、礫表より腹面に向つてハ)で小型剥片を3枚以上とつてゐる。⑫はU Fになつてゐる。本個体の残核は持ち出されて残っていない。

本個体は礫表を打面とし、打点を後退させながら剥離するものである。剥片の大きさは不統一で大型から小型のものまである。U Fは大変多く総資料点数の半分を占めるが、定型的石器はない。U Fの素材には剥片の破損したものを利用している例も多い。このことから意図した形状の剥片をとるのではなく、とれた剥片の中より適当なものを抜き出して使用する一方で、適当なものがない場合には剥片を割つても合目的的なものを作ろうとする。一種の折断技術のようなものさえあった可能性も考えられる。⑪の資料からは、それほど厚手でなくとも一定の大きさを備えていれば容易に石核に転用されることがわかる。しかし、そこからとられた剥片は小型で、点数も3点とごくわずかである。

<Cha② 4 E>

40点で構成される。Ⅱ種接合を4組9点含むため資料数は33点になる。スクレイバー2点、R F 2点、石核2点を含む。4組接合するが、11点接合する一群(A、B群)のみ示す。



第45図 個体別資料Cha ① 3D接合図

イ→① 4 E 11 A 1(B) + ② 3 E 22 A 13(U F) + ③ 4 D 4 A 31(U F) -] A群
 [④ 3 E 21 A 3(U F) + ⑤ 3 E 16 A 6(U F) + ⑥ 県教委 A27(Sc) →ハ-
 +ニ+ホ-⑦ 4 D 4 A 25(D)
 →⑧ 3 E 21 A 4(U F) + ⑨ 4 E 1 A 24(B)] B群
 →⑩ 4 E 1 A 85(B) →⑪ 表 A21(B)

イ)で母岩よりA群の素材となる大型剥片をとる。A群：大型剥片よりロ)疊表を打面として剥片をとる。その時同時に節理で①もとれる。打面を移し部厚な剥片②をとる。さらに打面を90°転移させ③をとる。④・⑤はUFとして利用されている。そのまま打点を後退させ④+⑤+⑥をとる。④・⑤・⑥はそれぞれⅡ種接合であるが、全て石器として使用され、⑥はスクレイバーとなっている。⑥の刃部はごく一部であるため器種の認定上問題はあるが、使用されているというレベルでは問題ない。ハ)で1~2枚の剥片をとり打面を不規則に転移させ、ニ)で②の作業面を打面に不定形剥片をとる。打面を再び転移し、ニ)の作業面を打面にホ)で不定形剥片をとる。ニ)の作業はホ)を剥離するための打面を再生するためのものとも考えられ、ニ)以前にも1~2枚の打面再生剥片がとられた可能性がある。⑦は剥片素材の残核である。B群はイ)で残った個体を剥離したもので、⑧+⑨はイ)の作業面を打面にして疊表をはがすように縦長剥片をとっている。破損した一方の⑩はUFになる。⑪・⑫はA群の大型剥片と同じ打面より打点を後退させてとったものである。⑩+⑪と⑫・⑬の前後関係はわからない。

本個体の工程は、母岩より大型剥片をとり、それを石核として剥片を剥離するものである。接合資料より母岩の大きさを推定すると、少なくとも13cm以上ある。個体別資料中に石核及び大型剥片がとられる以前の剥片がないことから、他より本個体を持ち込み、一連の工程の後に持ち出したと考えられる。工程中製作された剥片で少なくとも4枚以上は持ち出されている。剥片の全体的な形状は不定形のものを主体としている。大きさも定まっていないが、素材縁辺を刃部としているものが多く、そのため薄い剥片をとろうとする意図が窺われる。本個体中には、スクレイバーが2点ある。1点は背面全体に自然面を留める。他の1点(⑥)はⅡ種接合をし、その接合資料(④+⑤)はUFである。刃部は2点とも素材縁辺の鋭利な部分を利用し、素材の大きさは不統一である。スクレイバーを製作する目的で素材を意図的に剥離しているとは考えられない。

<Ch ④ E>

51点で構成され、うち25点が接合する。Ⅱ種接合を5組12点含むため資料数は44点になる。ナイフ形石器1点、スクレイバー1点、RF4点、UF23点、石核2点を含む。

B組の接合群(A~H、前後関係は不明)中、5点が接合しているA群のみを示す。

(A群)

イ→① 6 D 13 A 1(U F) + ② 4 E 3 A 21(U F) - ③ 4 E 3 A 18(B) +
 +ロ
 ハ-

→④ 4 E 8 A 6(U F) + ニ+ホ-⑤ 4 E 13 A 3(U F)

イ)疊表を多く残しているところから、A群の剥離が始まった段階ではあまり剥離作業はす

すんでいなかったと思われる。非常に節理の多い石材を用いているため剥離の多くは節理の影響を受けている。①も節理の影響を受けた剥離で、厚手で中型の剥片である。ロ)で①を三つ位に分割している。①はそのうちの一つである。ハ)では剥片を数枚とる。ロ)・ハ)と平行して、打面を180°転移させ、中型の不定形剥片②と、小型の不定形剥片③を礫表を打面にして連続して剥離しているが、①同様節理の影響を受け、一度の加筆で2枚以上の剥片が剥離されている。②はUFである。次に打面を90°移して厚手の不定形剥片④をとる。UFである。①・②・③は全てこの④に直接接合している。再び打面を90°移しニ)で何枚か剥片をとった後、中型の不定形剥片⑤をとる。

接合数は25点と本遺跡の個体別資料の中でも3番目に多いが、8組という多くの群に分かれ、それらの前後関係もつかめず一番多く接合しているA群でも5点しかないといった状態である。一定した技術がここに存在していたのかどうかという点は判断にくい。また、先に述べたように、節理が多く質の悪い石材を用いているということから、意図したように剥離ができなかつたということも考えられよう。しかし一方で、本個体を構成する器種は比較的豊富であり、矛盾した傾向を示すようにも思われる。

母岩の大きさ 母岩の大きさを推定できるまでに接合したのは10個体余である。それらによるとほぼ全てに円錐を利用しており、河原あるいは段丘疊層から原石を採取したことが窺われる。大きさでは拳大から径20cm近い位のものまで選ばれている。例数が少ないためか、径8~10cm以下のものと径13cm以上のものに大きく二分できる可能性もある。しかしそれらの異なる大きさのグループが、それぞれ異なる技術体系と結びつくということはない。違いは、当然の帰結とも考えられるが、大きいグループのものに母岩を分割する例が多く認められる点ぐらいであろう。分割も、工程初期に等分するような本格的な例はTe(③)8Cに認められる程度で、他は工程途中に、より大型厚手の剥片をとりそれを石核に転用するようなものである。以上から、本来母岩としては径10cm位までのものを望みながら、それが十分に満たされるほど良質な石材が豊富ではなかったためより大型の母岩をも利用し、それに伴って分割技術の採用が生じたと推察される。

打面の作り出し 打面には剥離面も利用されるが、むしろ礫表をそのまま利用する場合の多さが目立っている。石刀技法や瀬戸内技法のように剥片剥離工程における各加筆の目的が明瞭に推定できる例と異なり、本遺跡では目的剥片の剥離と打面作出・調整、体部調整などがないまぜになっており、何のための剥離か、その目的を特定することは難しい。そのため、たとえ剥離面を打面としている場合でも、それが半恒常的な打面として意図的に設定されたものと考えられる例はほとんどない。このような判断を惹起している主たる理由は、打面と考えられる面と作業面と考えられる面のいずれでとられた剥片もほとんど形態的に差が認められないことがある。打面作出の稀な例においては、一回の大きな剥離による場合があり、それに意図性を認めるか否かとなると、判断は恣意的にならざるをえない。

大型厚手の剥片を素材とした石核においても、工程初期には礫表を打面とすることが多い。

しかしながら剥離の進行に従って打面・作業面が移動するためか、残核に至っては剥離面を打面とすることが多いようである。残核のみの観察からは一部には打面調整を施されるものもある。こうした例は、見方によっては2点発見されている“櫛石島技法”による石核との類縁性が考えられるかも知れない。

打面細部調整・頭部調整 基本的に、こうした発達した剥片剥離技術に認められられる工程は介在しない。その片鱗も看取し得ない。

打面の移動 打面の移動は頻繁に行なわれる。実資料に見るよう、一打面当たり連続してとられる剥片は多くて5点位であり、普通は3点前後のようなである。発達した石刃技法に比較すると、おそらく $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ の能率でしかないと思われる。この非能率の原因の一つには、石材の節理面の多さがあげられよう。この非能率と打面調整技術の欠陥を補なっているのが、頻繁な打面の移動と考えられる。作業面・打面の劣化を防ぎ、石核調整・打面の角度調整の役目をも負っているのであろう。打面を転移する角度も奔放である。 90° 、 180° から不規則な移動まである。石核の各部位が個別的な役割を負っていないだけに、より任意に打面を移すことができるのであろう。

剥片素材の石核の場合は、素材の形状からしてそれほど自由ではない。通常はやはり背・腹面といった平坦面を打面としてやや幅広の剥片を剥がしており、剥片側縁部に打面を設定し木口から縦長剥片をとろうとする例はほとんどない。

取られた剥片 すでに折に触れて述べて来たが、圧倒的多数が長幅比 $1.5 : 1 \sim 1 : 1.5$ の不定形剥片である。目的剥片もこの形態にあったと考えて大過ないであろう。しかしわざかではあるが縦長剥片も含まれており、Te@3 E個体のように縦長剥片の選択的利用が想定できるものもある。また、わずかではあるが“櫛石島技法”的存在と、剥片素材石核の一部にこれに類するものがあることを考えると、横長剥片も利用されていたと考える必要があろう。しかしこれは縦長剥片とともに付隨的な位置を占めているに過ぎず、それらを積極的に取り込もうとした姿勢は乏しいように思われる。

いずれの形態においても大きさには幅があり、最大径 $1 \sim 8\text{ cm}$ 位のものが認められる。前述したように各種の調整剥離と目的剥片剥離痕が識別できないために、とられた剥片そのものもまとめて取扱っており、目的とする大きさも特定できない。

残核 残核に見る技術的特徴は、まさに工程そのものを集約している。残核において依然として薄表を打面とする剥離痕を多く残す事から始まって、打面設定のあいまいさ、打面転移の任意性など容易に看取できる。

この他、遺跡全体の大きな特徴として、石核の浪費があげられよう。一方では剥片までも石核に利用して小型の剥片を得ようとしながら、そこで剥がすのはわずか $2 \sim 3$ 点であったり、拳大以上の大きさを持つ石核をそのまま遺棄していたりする。大型の残核は、我々の判断する限りでは決してそれほど粗悪な石材ばかりを利用している訳ではなく、十分に剥片剥離に耐え得るよう見える。また、他方では節理が発達しているチャートを剥離し尽しているような例

(Ch①3 E)もある。トゥールが少ないだけに、大型の剥片と小型の剥片をとる石核が異なる剥片剥離技術系列に入り、異なるトゥールに利用された可能性を完全に拭い去ることはできない。しかし遺跡外への持ち出しが推定できる剥片も、遺跡で発見されるものと大差ないと考えられ、大型の石核も小型の石核も相似形の剥片を供給している可能性が高い。ことさらそれらを異なるトゥールと結び付けて解釈する蓋然性は少ないと考えられよう。

(土江・井上・山下)

第6節 石器の分布

1. 石器の分布と遺跡の広がり

遺跡は、南東・北西・北東の三方を開拓谷で囲まれ、舌状地形を呈する段丘面上に位置している。南西側は調査区域の端からさらに700mほど平坦面が伸び、丘陵・山地へと続いている(第6・7図)。南東・北西両端は急な崖となって水田面に移行する。比高差は約20mに及ぶ。北東側は、現在、水田・人家などとして利用され、かつては溝口城址の主要部を成していたあたりから、ややゆるやかな傾斜で水田面へと移行する。

調査対象区域は、水田・人家の背後(西南方)の林地の部分で、幅約100m、長さ約200mの範囲である。台地は、ほぼ東北から南西方向の中軸線を有している。主要な調査域は、この中軸線に沿った台地肩部より内側の平坦面で、およそ180×60mほどの範囲にある(第1図)。

先土器時代遺物のうち、出土地点が正確に把握されているものは、台地上のはば全域、南北方向に第2～9列まで、東西にB～F列の範囲に分布している(別添第2図)。もう少し詳しく見ると台地の中軸線に沿って、2E～9B区までの間、約150×65m(9750m²)ほどの範囲がその分布域ということになる。兵庫県教委の試掘調査の際、第13トレンチ内にスクレイバーが1点出土しているので、この範囲まで加えると、北東方向にさらに20mほど分布域が拡大することになる。この間の比高差は、約10mである。

0F区に設定した北東端のトレンチからは、遺物は皆無であり、第1列では県試掘第13トレンチからスクレイバー1点のみ、第2列より北東部の分布は、県試掘第3トレンチ周辺以外では非常に稀薄である。第2列より北東の試掘トレンチ内の遺物の出土状況は、これより北東側にブロックを成すような集中的な分布域が存在することはまずありえないことを示している。南西限の第9列においても同様に稀薄であるので、南西方の未調査地へのつながりは不確かであるとしても、ここに示される遺物の分布範囲は、独立的で有意な単位性を示していると解することができる。したがって、少なくともこの遺物の分布状況から見る遺跡の占地形態は、台地の舌端部というより、台地先端からある程度奥まった位置にあると見なさなければならない(仮に、東北方の沖積面境を通る道路付近を舌端部とすると、200mほど台地内部に入り込んでいることになる)。言い換えれば、道路沿いから始まる段丘斜面が、人家・水田部分を越えて林地にさしかかるところ、ちょうど段丘が安定した平坦面を形成しかかるあたりより内側に立

地しているということになろう。

(鈴木)

2. ブロックの設定

石器の分布域に視野を限定しよう。ドットで示した石器分布図(別添第2図)から一目で誤解される点は、台地の中央に細長く広がった分布状態である。そして、この分布域内には分布密度に濃淡があって、遺物の比較的集中した部分と散漫な部分とから成っている。

第3・4列に存する集中域に注目すると、北東端のこの集中域と、これより南西側、第5～第9列までの間に広がる全体に散漫な分布域との二つの部分からなっているとまず捉えることができる。より南西側の散漫な分布域をもう少し詳しくみると、台地の中軸線上に数ヶ所の比較的分布の濃い部分があり、さらに中軸線上からやや東南方に外れた6F区あたりにも同様な個所を見出すことができる。こうした遺物密集部のあり方は、発掘作業中の所感とおおむね一致している。

さて、以上のような、大まかな分布密度の核地域を念頭に入れながら、遺物の等量線図を描き、ブロックの設定に移ろう。

まずはじめに、50cm四方の枠ごとに遺物の点数をかぞえ等量線図を描いてみる(図示せず)。これによると、北東端の第3・4列では直径20mほどの明瞭な集中域をなす。密度の最大ピークは4点、この周辺に3点のピークがひろがる。これに対し、これより南西側の散漫な分布域では、2～4点のピークを有し、直径4～5mの集中部を7C・8C区でそれぞれ2ヶ所ずつ見出しうるにすぎず、あとは集中域を形成しない。

この結果は、発掘中の遺物集中ヶ所に対する認識と相當に相違する。また一方で、7000m²近い精査域内の出土石器総数1100点強という、散漫な分布状況からみれば、当然の結果とみなしうる。

そこでつぎに、1m四方単位で出土数を集計し、等量線図を描いてみる(別添第3図)。ここでは発掘中の理解とはほぼ同様の遺物集中域を形成する。すなわち、第3・4列D・E区に50cm枠の等量線を描いた時と同様の大きな集中部、5D区に小型の集中部、6D・7C区にそれぞれ中型の集中部、8C区を中心に大型の集中部、6F区に小型の集中部、計六つの集中部を認めることができる。これらを順に第1～6ブロックと呼ぶ。

こうして、遺物の集中部をブロックとして括ってみると気付く点がいくつかある。まずはじめに、第1ブロックとそれ以外に石器の分布密度に大きな差があることである。第1ブロック内の1m²あたり1.4個という値は、他のブロックに対して3倍弱～7倍ほどの密度を有する。ついで指摘できることは、大きなブロックほど密度が高いという点で、小型のブロックでは0.2～0.5個ということになる。

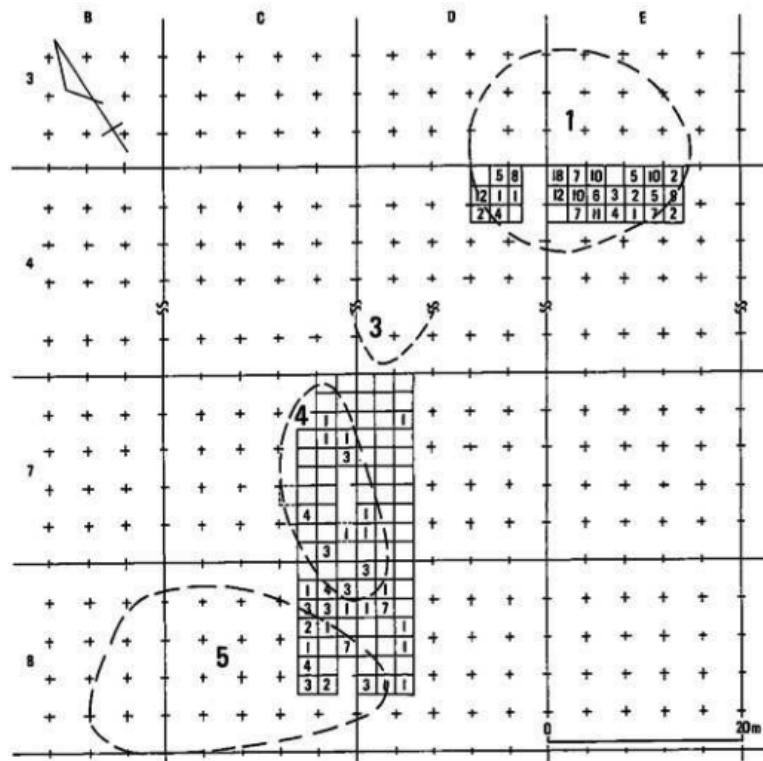
ブロックの区分に関して留意すべき点を3点補足しておく。第1点は、第1ブロック中央部にある旧トレンチの空白部である。諸般の事情から考えて、ここにも周辺と同様に稠密な分布状態を想定しるので、一つのブロックに統合しておいた。したがって、石器の分布密度の実

際はもう少し高かったとみるべきである。

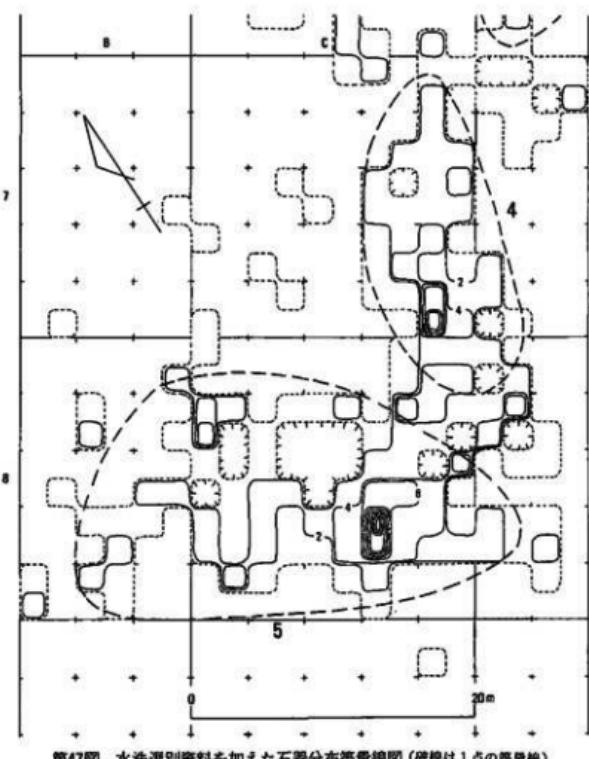
第2点は、水洗選別資料に関してである。水洗選別資料の採取は第1ブロック内と、第4・第5ブロックにまたがる区域の2ヶ所において実施した。資料の土砂の採取単位は2m単位としたので、2m四方ごとに検出された点数を示した(第46図)。ブロック区分に関して、第1ブロック内の水洗選別資料は特に問題にするにあたらない。

検討を要するのは、第4・5ブロックの境界に関する水洗選別資料の出土状況である。2m四方単位で1点から最大7点をカウントすることができる。ここで留意されるのは第4・5ブロックの境界の位置に、それまでの空白が埋められた区画が生じ、両ブロック間がより連続的になることである。

比較のために、発掘資料も2m四方単位ごとに集計して組み込んだ等量線図を描いてみると、この点はより一層はっきりする(第47図)。しかしながら、それでも相変らず空白の部分が存



第46図 水洗選別域と先土器時代の石器出土点数



第47図 水洗選別資料を加えた石器分布等量線図(破線は1点の等量線)

これが谷に相当していることになる。したがって、ブロック内全域に水洗選別区を設定したとすれば、ブロック内の石器分布密度もまた高くなるはずであり、この水洗選別資料は、第4・5ブロック境が、本来的に尾根に対する谷部に相当する境界ラインとして意味があることをむしろ示していると積極的に捉えておきたい。

第3項目にブロック外の資料の取り扱いについて述べておく。ブロック外資料は、集中分布域をなすブロック周辺部にまばらに分布する一群を指す。このような意味で、ブロック外資料はブロック内資料との間に一定の関係を有しつつ残されたものであると解せられる。したがって、ブロック区分に対応するかたちで、六つのブロック外領域を設けた(1P～6P)。ブロック外領域間の区分線は、この領域内の資料が少量で分布の密度が稀薄なために、石器の分布量を基準としては設定しにくい。ここでは、ブロック間の中間的な位置に相当し、ブロック外資料の実際の分布状況に照らしても分布の空白地帯とみなしうる領域をもって、これにあてた。しかし、いわば機械的な作業に基づくものである。

していること、そして第4・5ブロック内の分布密度より低いことには変りがない。さらに、1mメッシュによる等量線図で描かれたブロック内のピークは、第4ブロックで中心部より南西寄り、第5ブロックで東南寄りの位置にあるが、このピークの位置に何らの変更もない。

ブロックの区分線は、そこが空白の無遺物空間であるにせよ、分布の稀薄な空間であるにせよ、密集部を尾根とすれば、そ

以上のブロック区分をもとに、以下にブロックの特徴を略記していく。なお、ブロックラインの設定の際には、出土位置を厳密に図示できる資料に限って評価したが、本節の説明で用いる数値は、所属ブロックの推定しうる水洗選別資料等も加えたものを示す。

第1ブロック（別添第4図）

第3・4列D・E区にまたがる。本遺跡中最大のブロックで、23×21m、約400m²のはば円形の広がりを有する。石器点数は549点、1m²あたりの分布密度は1.4個以上である。概して均等な分布状況を示すが、南西側の4D・E区側に密度のピークがあると見てよい。ただし、4D・E区がⅢ層上面にまで達しているのに対し、3D・E区は、Ⅱ層上面までで掘り下げが止められているため、分布密度には不確定要素が伴う。石器の構成は、ナイフ形石器2点、スクレイバー3点、R.F11点、U.F152点、敲石1点、剥片266点、碎片88点、石核26点となる（第5表）。敲石とナイフ形石器とを有する唯一のブロックである。

第2ブロック（別添第5図）

5D区内に位置する。本遺跡中もっとも小さいブロックである。10×6m、約42m²の広がり

第5表 ブロック別石器組成表

		A						B	C	D	合計	
		Kn	Sc	RF	UF	PS(點)	HS(種)	AX(%)				
第1 ブロ ック	内	(1.2) 2 (0.4)	(1.8) 3 (0.5)	(6.5) 11 (2.0)	(89.9) 152 (27.7)	(0.6) 1 (0.2)	— — —	— 266 (48.6)	— 88 (16.0)	— 26 (4.7)	549	
	外	(14.3) 2 (5.8)	(6.7) 1 (2.9)	(28.6) 4 (11.8)	(50.0) 7 (20.6)	— — —	— 14 (41.2)	— 1 (2.9)	— 5 (14.7)	34		
	小計	(2.2) 4 (0.7)	(2.2) 4 (0.7)	(8.2) 15 (2.6)	(86.9) 159 (27.3)	(0.5) 1 (0.2)	— 280 (48.0)	— 89 (15.3)	— 31 (5.3)	583		
第2 ブロ ック	内	— —	— —	— 5 (38.5)	— — —	— — —	— 8 (61.5)	— —	— —	13		
	外	— —	(10.0) 1 (3.6)	(30.0) 3 (10.7)	(60.0) 6 (21.4)	— — —	— 15 (53.6)	— —	— 3 (10.7)	28		
	小計	— —	(6.7) 1 (2.4)	(20.0) 3 (7.3)	(73.3) 11 (26.8)	— — —	— 23 (56.1)	— —	— 3 (7.3)	41		
第3 ブロ ック	内	— —	— —	(90.9) 10 (34.5)	— — —	(9.1) 1 (3.4)	— 9 (31.0)	— 4 (13.8)	— 5 (17.2)	29		
	外	— —	— —	(100) 5 (25.0)	— — —	— — —	— 10 (60.0)	— 3 (15.0)	— 2 (10.0)	20		
	小計	— —	— —	(93.8) 15 (30.6)	— — —	(6.2) 1 (2.0)	— 19 (38.8)	— 7 (14.3)	— 7 (14.3)	49		
第4 ブロ ック	内	(5.0) 1 (1.0)	(5.0) 1 (1.0)	(90.0) 18 (18.2)	— — —	— — —	— 59 (59.6)	— 16 (16.2)	— 4 (4.0)	99		
	外	— —	(9.1) 1 (1.8)	(90.9) 10 (17.5)	— — —	— — —	— 30 (52.6)	— 11 (19.3)	— 5 (8.8)	57		
	小計	— —	(3.2) 1 (0.6)	(6.5) 2 (1.3)	(90.3) 28 (18.0)	— — —	— 89 (57.1)	— 27 (17.3)	— 9 (5.8)	156		

		A						B	C	D	合計
		Kn	Sc	RF	UF	PS	(%)	HS	(%)	AX(G)	
第5ブロック	内	—	(2.4)	(4.9)	(90.2)	—	(2.4)	—	—	—	197
	外	—	1	2	37	—	1	—	116 (58.9)	31 (15.7)	9 (4.6)
	小計	—	(0.5)	(1.0)	(18.8)	—	(0.5)	—	—	—	41
第6ブロック	内	—	(14.3)	(85.7)	—	—	—	—	29 (70.7)	3 (7.3)	2 (4.9)
	外	—	(2.4)	(14.6)	—	—	—	—	—	—	—
	小計	—	(2.1)	(6.3)	(89.6)	—	(2.1)	—	145 (60.9)	34 (14.3)	11 (4.6)
合計	内	—	—	—	(100)	—	—	—	—	—	13
	外	—	—	—	5 (38.5)	—	—	—	4 (30.8)	1 (7.7)	3 (23.1)
	小計	—	(66.7)	(33.3)	—	—	—	—	—	—	8
合計	内	—	—	—	2 (25.0)	1 (12.5)	—	—	—	—	—
	外	—	—	—	(25.0)	(75.0)	—	—	4 (50.0)	—	1 (12.5)
	小計	—	(9.5)	(28.6)	—	—	—	—	8 (38.1)	1 (4.8)	4 (19.0)
上段の()内の値は、トゥール内での割合、下段のは石器全体での割合を示す。											

を有する楕円形のブロックである。石器点数は13点で、1 m²あたりの分布密度は0.3個、散漫な分布状態である。石器の構成は、UF 5点、剥片 8点である(第5表)。

第3ブロック(別添第5図)

6 C・D区に位置する。17×10m、約120 m²の面積を有する中型の楕円形のブロックである。石器点数は29点で、分布密度は、0.24個である。全体に疎らに散漫な分布を示す。石器の内訳は、UF 10点、打製石斧1点、剥片 9点、碎片 4点、石核 5点である(第5表)。石斧を有する唯一のブロックである。

第4ブロック(別添第6図)

第7・8列C・D区に位置する。23×10m、約180 m²の面積を有する、中型の長楕円形のブロックである。石器点数は99点で、分布密度は0.5個である。分布密度は高いとは言えないが、ブロックの南半に密度のピークを有している。石器の内訳は、スクレイバー1点、RF 1点、UF 18点、剥片59点、碎片16点、石核4点となる(第5表)。ナイフ形石器・敲石等の遺跡全体でも1点ないし数点以内という稀少な器種を別にすると、一通りの種類を備えている。

第5ブロック(別添第6図)

8 B・C・D区に位置する。第1ブロックに並ぶ大型のブロックである。32×17m、約407 m²の面積を有する楕円形のブロックである。石器総数は197点で、分布密度は0.5個である。その内訳は、スクレイバー1点、RF 2点、UF 37点、櫛石1点、剥片116点、碎片31点、石

核9点となる(第5表)。第1・4ブロックとともに主要な構成器種を備えている。燧石を有する唯一のブロックでもある。分布密度は高くはないが、8C区中央やや東南寄りに密度のピークがある。これを取り巻くように8C区南西半にブロックの核部分があり、この核部分を取り囲むようにして横たわる若干の空隙を挟んで、8C区北半および8B区に弧状の散漫な分布域を認めることができる。

第6ブロック(別添第5図)

6E・F区に位置する。第2ブロックとともに小型橢円形のブロックである。 $13 \times 7\text{ m}$ 、約 58 m^2 の面積を有する。石器点数は13点で、 1 m^2 あたりの分布密度0.22個という値が示すように、少数で散漫なブロックである。石器の構成は、UF5点、剥片4点、碎片1点、石核3点となる(第5表)。

ブロック外

ブロック外に分布する資料は、合計188点ある。この内訳は、ナイフ形石器2点、スクレイバー2点、RF11点、UF35点、剥片102点、碎片18点、石核18点となる(第5表)。ブロック外所属資料は、敲石・燧石・石斧の1例出土資料を除けば全種類を含んでいる。トゥール(分類A)とB・C・Dの比率もブロック内資料の比率と大して変わることろがない。RFの比率がブロック内に対して約3.5倍という値を示すが、逆にUFはブロック内資料に占める比率より若干少ない。トゥールだけに限定して、ブロック外とブロック内所属資料の優先順位を比較してみても、両者に差はない。したがって、ブロック外資料がブロック内資料に対して、特殊な構成内容と分布状態を示しているとは認められない。

ブロック外資料の評価については、本来ブロック内資料との関連で示すべきであると考えるので、後節において詳述する。

(鈴木)

3. 石器の種類別分布

ここでは、分布上の位置を問題にするため、水洗選別資料等の厳密な出土位置を特定できないものは除いて述べる。ただし、出土点数の少ないトゥール類については、これらも含めて適宣言及・図示する。

1) ナイフ形石器(別添第7図)

ナイフ形石器は、第1ブロック内とブロック外に各2点ずつある(第6表)。他の区域では未検出である。第1ブロック内の出土資料は、ブロックの南西部4E区にある。ブロック内でも特に石器の集中度の高い区域の中にある。ブロック外出土の2点は、県試掘第3トレンチ内から出土している。第1ブロックの北東端から 8 m 以上の距離がある。第1ブロック外構成資料中、この2点のナイフ形石器等と県試掘第3トレンチの東側の平安博物館試掘調査時のトレンチ内から出土した数点とは、小さなブロックを形成していたのかもしれない。

なお、第1ブロック外のナイフ形石器1点を含む個体(No 4 : Te①3 D)は、第1ブロック内所属資料と接合する。

2) スクレイパー (別添第7図)

スクレイパーは合計7点ある(第6表)。

ブロック内出土資料5点のうち、出土位置を図示した3点は、ブロックの外縁部か、ブロック内の分布密度の小さい部分に位置している。この他に、第2ブロック外に1点分布する。第2・3・6ブロック、第3～6ブロック外はこれを欠く。

3) RF (別添第7図)

RFは、ブロック内14点、ブロック外11点の計25点ある(第6表)。第1ブロック内に多くが分布している。図示した資料のうち、ブロック内出土例としては、第1ブロックの

11点、第5ブロックの2点を数えることができる。これ以外の資料は、第1ブロック外に3点、第2ブロック外に2点、第4ブロック外に1点、第5ブロック外に1点、第6ブロック外に2点分布している。第2・3・6ブロック、第3ブロック外はこれを欠く。

4) UF (別添第8図)

UFは、ブロック内に227点、ブロック外に35点の合計262点ある(第6表)。全てのブロックと全てのブロック外に存在する。トゥールの中でもっとも量が多く、石器群全体の中でも剥片(B)につぐ量を有しているだけに、石器群全体の分布傾向に相似する要素が大きい。

ただし、詳しくみると分布上に片寄りを見出しうる部分もある。以下、問題となるブロックごとにみておこう。第1ブロックでは、おむねブロック内に万遍なく分布するともいえるが、ブロックの南西半部の、最大幅3mほどの三ヶ月状の区域にはUFはほとんど分布せず、剥片・碎片のみが優越して分布する区域がある。これに接するブロック外の地域にも同様の傾向がある。第2ブロックは特に問題となる傾向はない。

第3ブロックでは、UFの分布域はブロックの北東側などとの範囲に限定される。第4ブロックでは、ブロック内の西半部に弧状の分布域を形成する。第5ブロックでは、全体の分布傾向とほぼ重なる。第6ブロックは東南側の密度の濃いわば核地域と、この西北側の散漫な区域から成り、この間に弧状の空白地帯があると述べたが、UFの分布量は、むしろ空白部の西北側に、より顕著に見出されうると見なすことができる。分布域を見る限り、取り立てて述べるべき傾向を見出しづらいが、全体の分布量に対するUFの出現比という観点からみると、西北側の部分は、UFの出現傾向が優越しているといふことができる。

第6ブロックは、資料数の稀少性故か、第2ブロック同様特記すべき傾向はない。本例の場合、剥片とともに、ことさら水洗選別資料を考慮する必要はないであろう。

第6表 ブロック内・外別石器組成表

器種	ブロック内 個	ブロック外 個	計
	%	%	
ナイフ	2 (50)	2 (50)	4
削器	5 (71)	2 (29)	7
RF	14 (56)	11 (44)	25
UF	227 (86)	35 (14)	262
蔽石	1 (100)	—	1
燧石	1 (100)	—	1
石斧	1 (100)	—	1
剥片	462 (82)	102 (18)	564
碎片	47 (72)	18 (28)	65
石核	140 (89)	18 (11)	158
	900 (83)	188 (17)	1088

5) 敷石・植石・石斧（別添第7図）

上記3者は、それぞれ1点の出土数をかぞえ得るに過ぎない（第6表）。敷石は第1ブロックの西部に位置する。分布密度の比較的高い部分に当る。植石は、第5ブロックのほぼ中央に位置するが、分布密度のピークがある区域から西北方にずれている。石斧は第3ブロックの南西隅寄りから出土している。敷石・石斧が、ブロックの外縁部寄りに分布していると指摘しておくべきかもしれない。

6) 剥片（別添第9図）

剥片は、石器群中の約半数を占める最大構成資料である。ブロックの内外に万遍なく分布し、分布範囲・位置・密度のピークの位置は、石器群全体の分布傾向と一致している。むしろこの基調をなしていると言ってよいであろう。

したがって、UFの観察で得られたような傾向性すらも見出し難いというのが実情であろう。もっとも、細部には若干の留意すべき部分がある。その第1点は、第3ブロックの北東半に剥片が少ないと、第2点は、第5ブロック西北側でUFが顕著な出現傾向を見せた区域では、剥片の出現率が低いということである。ただし、こうした傾向もUFにおける分布上の片寄りほど目立ったものではない。

7) 破片（別添第9図）

破片は、全石器中の約6%を占めているに過ぎない。石器群中に占める位置は、通常我々が経験上承知している構成比よりもかなり低い割合に留まっていると言えよう。これは発掘地が林地であって、大量の木根の存在によって包含層をジョレンで薄くはぎとるような繊細な発掘を実施し得なかったことに起因しているとも考えられる。ジョレンによる精査によても見落されがちな資料である上に、上記のような事情が重なっていることは一応記しておく必要がある。

しかしながら、分布の実際を検討してみるとブロック内に多く、ブロック外に少ないというはっきりとした傾向を読みとることができると、石器群全体から見た分布密度のピークの位置が破片のピークのそれと重なっているので、本資料もまた剥片と同様の出土傾向を示し、剥片とともに全体の分布傾向の基調をなすものの一つであるとみなしえると思う。

8) 石核（別添第9図）

石核は、第2ブロックを除いて、全ブロック内から出土している。資料数は全資料中の約15%を占める。分布範囲、密度のピークの位置など、全体の分布傾向とよく類似している。石核は、したがって、剥片・破片と同様の傾向を示し、石器群全体の分布上の特徴を決する上で、これらと同様重要な役割を果していたと考えることができる。

9) ツール類とその他の資料（別添第7・10図）

以上、器種別に分布の範囲やブロックとの関係を観察してきた。この作業から得られた全体的な傾向を要約すると次のようになろう。剥片・破片・石核の分布状態は共通の性格を有し、この3者で全資料数の約7割を占めるという事実からも当然予想されるように、これらが分布

範囲、分布密度のピークの位置など分布傾向の基調を成している。

上記3者がいわば石器製作の目的から言えば付隨的で副産物的であるのに対し、石器製作の目的物たるトゥールにも見逃せない部分がある。トゥール中に最大量を占めるUFの分布傾向は、先に述べたように、石器製作の副産物たる剥片・碎片・石核の分布傾向と重複する部分はもちろん多いが、一種の排除関係とでも言うべきあり方を窺うことができるという点である。UF以外のトゥールは、少量であるがおむねUFの分布傾向に重なる。すなわち、トゥール全体の分布傾向はUFのそれと同一とみてよい。

10) 受熱石器（第48図）

受熱石器と認定されたものは27点ある。ブロック内24点、ブロック外に3点である。第1ブロック内で14点の出土がある。全資料の半数以上を占める。ブロックの南西半に片寄る傾向がある。第2ブロックでは、ブロックの外縁に位置する。第4ブロックでは、遺物密集部内から出土している。第5ブロックでは、ブロックの最東南端の1点がこれに相当する。第3・6ブロック内にはない。

ブロック外では、第2・4・6ブロック外に各1点が分布する。

ブロックと受熱石器の出土位置との関係は、あるものは集中部に重なり、あるものは、ここに受熱剥片を見出しえないということになる。遺跡全体を通じて窺われるきわだった共通の傾向を見出しえないというのが実情であるが、総数27点の少量の資料の分布から言及しうる事柄に限界があるということであろう。

11) 単独個体（第49図）

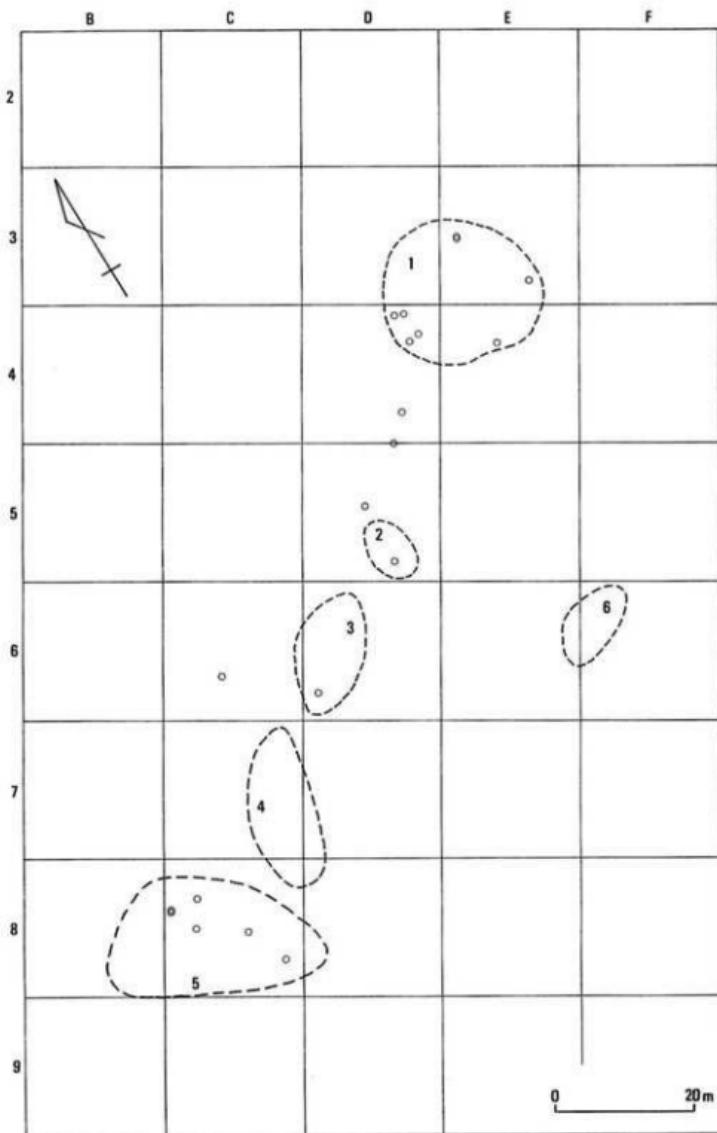
石材自体が明瞭な特徴を有し、他に同一の母岩に属する資料が発見されない、いわゆる単独個体別資料は20例ある。このうち敲石・槌石・石斧を除外した17例の内訳は、UF 8点、RF 2点、スクレイバー2点、剥片3点、石核2点となり70%をトゥールが占めている。

分布状態では、第6ブロックを除いて、すべてのブロック内かその周辺に出土していること、大型の第1・5ブロックにはこれが多いため注目される。剥片剥離作業の中で生みだされる資料が単独でしか発見されないことは、遺跡内の剥片剥離作業の欠如を意味している。この欠如は、単独個体別資料を他遺跡から持ち込んだ結果としても解釈されるし、当遺跡内の剥離作業が単発的であった結果とも解釈することができる。

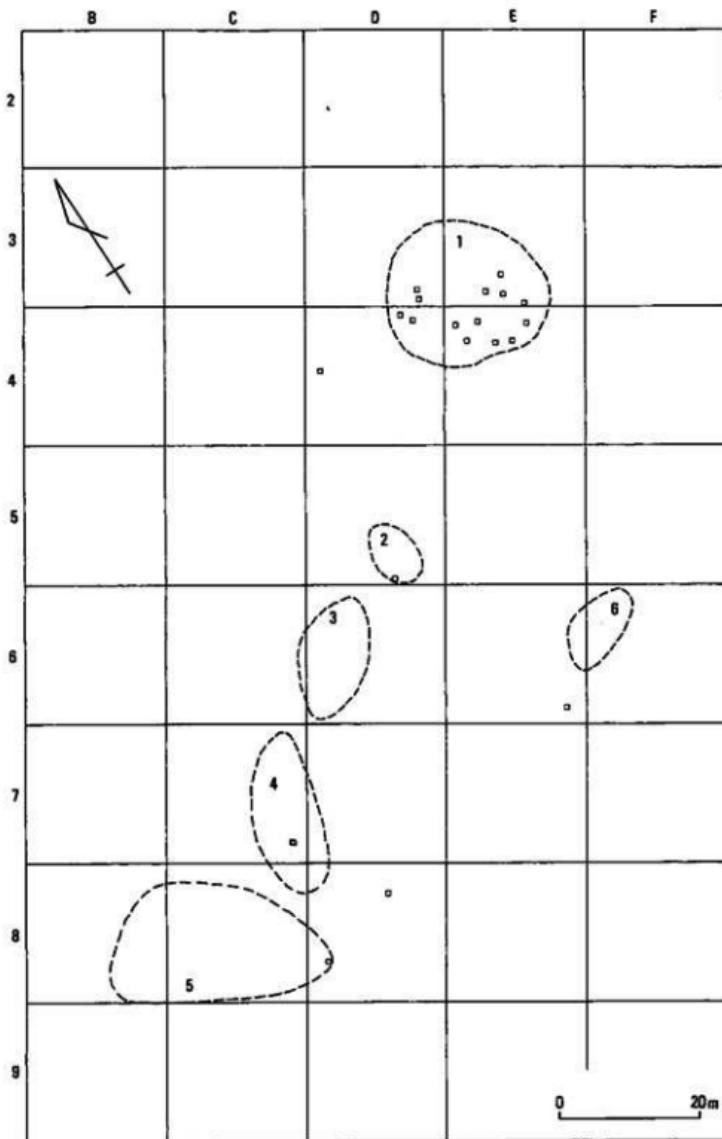
従来は、他遺跡からの持ち込みと解釈されることが多かったが、上記の二つの可能性の一方をどうして選択するかは中々デリケートなところがある。單なる素材か二次加工を伴う定形的なトゥールかによっても、どちらをとるかの判断の条件は相異しよう。全資料中28%程しか占めないトゥールが単独資料中では70%を占めるという数値は、前者の理解に傾かせる。いずれにしろ、集落の形成過程を知るうえで、重要な手掛りの一つであることには相違ない。

12) 石材別分布（別添第11図）

本遺跡で使用された石材は、1) 鉄石英(53%)、2) チャート(25%)、3) 玉髓(18%)、4) 黒岩(4%)、5) 安山岩、6) 凝灰岩、7) サヌカイト、8) 石英の8種である。



第48図 受熱石器分布図



第49図 獨体分布図

(第7表)。この内、1)~4)までが主体を占める。特定のブロックに特定の石材が分布するという傾向は窺えない。重要な石材は全てのブロック・ブロック外で使用されているとみてよい。具体的な数値は表に譲るとして、上記8種の石材のうち重要な3者、鉄石英・チャート・玉髓とブロックとの関係がどのようなものかを追跡全体での占有率と比較しながらながめておく(第50図)。数量の多い第1・4・5ブロックを検討してみると、第4・5ブロックでは、80%以上が鉄石英で占められ、その分だけ他の石材の利用率がおちておらず、反対に第1ブロックはチャートの出現率にウエイトがかかっていることが分る。このことがどれほどの意味を有しているのか定かに論じがたい。

(鈴木)

4. ブロック別の石器組成

石器総数1121点のうち、表掲等の出土地点不明資料を除く、1088点について、ブロック単位にその構成の状況をみておこう。

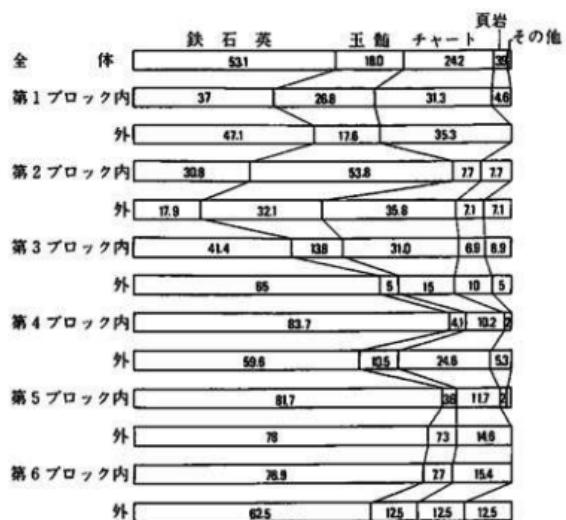
1) 全 種

ブロックごとの石器の種類別構成点数は、第5表に示したとおりである。数値の細部は表に

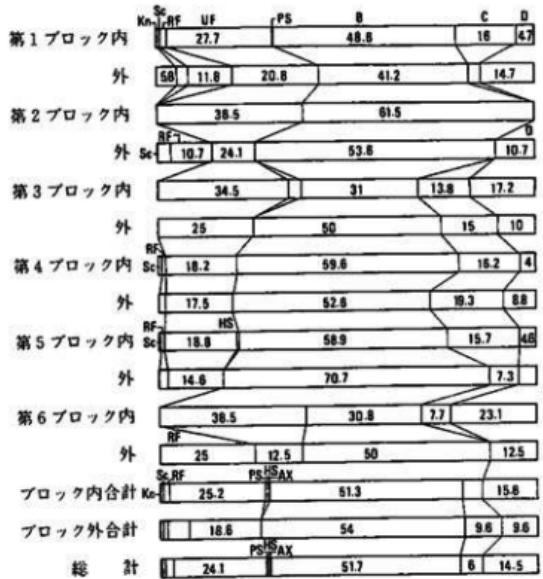
第7表 ブロック別石器・石材組成表

石質	鉄石英	玉 錫	チャート	頁岩	安山岩	凝灰岩	サヌカイト	石英	石質不明	計(点)
■ 総 点 数 No.	578 (53.1)	196 (18.0)	263 (24.2)	42 (3.9)	1	3	2	3	1	1088
1	203 (37.0)	147 (26.8)	172 (31.3)	25 (4.6)	1	1				549
1外	16 (47.1)	6 (17.6)	12 (35.3)							34
2	4 (30.8)	7 (53.8)	1 (7.7)	1 (7.7)						13
2外	5 (17.9)	9 (32.1)	10 (35.8)	2 (7.1)				2		28
3	12 (41.4)	4 (13.8)	9 (31.0)	2 (6.9)			1	1		29
3外	13 (65.0)	1 (5.0)	3 (15.0)	2 (10.0)			1			20
4	83 (84.7)	4 (4.1)	10 (10.2)	2 (2.0)						99
4外	34 (59.6)	6 (10.5)	14 (24.6)	3 (5.3)						57
5	161 (81.7)	7 (3.6)	23 (11.7)	4 (2.0)			1		1	197
5外	32 (78.0)	3 (7.3)	6 (14.6)							41
6	10 (76.9)	1 (7.7)	2 (15.4)							13
6外	5 (62.5)	1 (12.5)	1 (12.5)	1 (12.5)						8

() 内 : %



第50図 ブロック別石材構成図



第51図 ブロック別石器組成図

譲るとして、構成比を中心に、その一般的特徴と留意点にふれて行こう(第51図)。

第1番目に、石器全体の中で最大量を占める剥片が、ブロックの内・外、構成数量の多少を問わず、全区域で認められること、これに次いで多いUFも同様である点をまず指摘しておかなければならない。第2番目に、構成資料数の多い第1・5ブロックのような大ブロックは、多種類の構成要素からなっており、構成資料数の少ない中・小ブロックほど構成内容が限定的となる。すなわち、第2・3・4・6ブロック内・ブロック外では、スクレイバー・RFなどの少數資料を欠きがちである。以上の2点は、ありうべくしてそうあつた特徴と言つてよい。

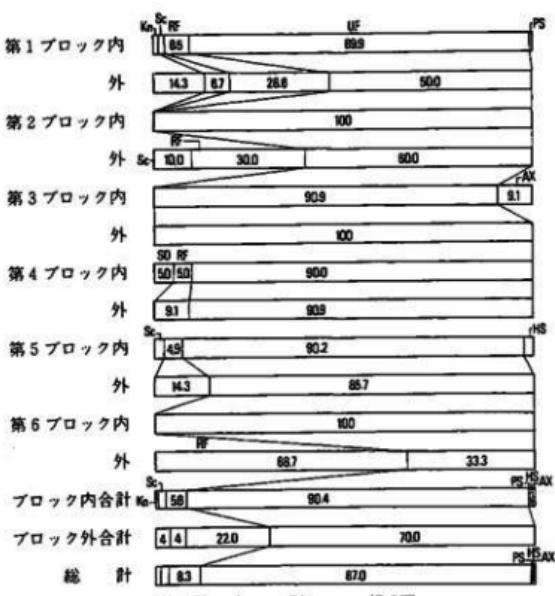
当遺跡のトゥール中の代表器種であるナイフ形石器はどうであろうか。トゥールの中で、狩猟具の可能性のある唯一の資料群であるが、

これは第1ブロックの内と外に各2例求められるだけであって、他の区域からは発見されない。総数1100点を越す石器群の中で、ナイフ形石器4点は、常識的にみて少ないとみる。第2ブロック以下の区域にナイフ形石器を見出しえるのは、資料数の少なさに最大の要因があるとみなすべきであろうが、第1ブロックに次いで構成資料数が多い、第5ブロックにこれを欠くことは気懸りではある。

2) トゥール

トゥールに限って、ブロックとの関係をみておこう(第52図、第5表)。ここでは、トゥールを欠く区画は存しないこと、資料数の一番多いUFが全区画をおおっている点をまず指摘できる。UF以外の器種では、もともと少ない資料が12の区画にわたって、どのように分布するかを問題にするわけであるから、総数12点以下のナイフ形石器・スクレイバー・敲石・槌石・石斧は、全区画で出土することはありえないことになる。このような意味で、ブロック内外の区画ごとに傾向性を見出しうるすれば、UF以外ではRFだけということになる。

このような事情があることは承知の上で全器種について、ブロック間相互にトゥールの出現頻度・組成に片寄りがないかどうかを一応検討しておく。このために、石器総量に占める各ブロック内・外の占有率を求め、これを「標準値」として、各種のトゥールが標準値より多いのか少ないのかを問題にしてみる(第8表)。



第52図 ブロック別トゥール組成図

第1ブロックは石器総数1088点中、549点を保有しているので、標準値50.4%ということになる。ナイフ形石器以下の諸器種の占有率はおむね50%を前後し、ブロックの保有石器数に比例した占有率を示している。トゥール総数の占有率も同様で、石器総量に応じた器種構成のあり方を典型的に示しているといえる。総じて他のブロックも第1ブロック同様のあり方を示しているとみてよい。

ただし、例外が2点

第8表 ブロック別間ににおける器種別(左)および全トゥール(右)占有比

ブロックNo	資料数 (1088)	標準値	Kn (4)	Sc (7)	RF (25)	UF (262)	敲石 (1)	槌石 (1)	石斧 (1)	トゥール (301)	占有比
1	549個	50.4%	50.0%	42.9%	44.0%	58.0%	100%	—	—	169個	55.8%
1外	34	3.2	50.0	14.3	16.0	2.7	—	—	—	14	5.0
2	13	1.2	—	—	—	1.9	—	—	—	5	1.7
2外	28	2.6	—	14.3	12.0	2.3	—	—	100%	10	3.3
3	29	2.7	—	—	—	3.8	—	—	—	11	3.7
3外	20	1.8	—	—	—	1.9	—	—	—	5	1.7
4	99	8.9	—	14.3	4.0	6.9	—	—	—	20	6.6
4外	57	5.2	—	—	4.0	3.8	—	—	—	11	3.7
5	197	18.1	—	14.3	8.0	14.1	—	100%	—	41	13.6
5外	41	3.8	—	—	4.0	2.3	—	—	—	7	2.3
6	13	1.2	—	—	—	1.9	—	—	—	5	1.7
6外	8	0.7	—	—	8.0	0.4	—	—	—	3	1.0

(最上段()内は個数、比率は縦方向にみる。)

ある。第1点は、敲石・槌石・石斧である。これは、遺跡全体で各1点ずつの出土例しかなく、占有率を問うにあたらない。第2点は第1ブロック外である。標準値を10%以上上下する数値の例を片寄った出現傾向とすると、これに相当するのは、第1ブロック外におけるスクレイバー14.3%，第5ブロックのRF 8%である。そしてこれ以外は、全て第1ブロック外にこれを見出ことになる。

すなわち、第1ブロック外の資料は、石器総量の内3.2%を占めるにすぎず、トゥールの合計でも5%という値に留まっているにもかかわらず、ナイフ形石器・スクレイバー・RFの3器種において、際立った突出傾向を示していることができる。もう少しつけ加えるならば、石器数の少ないナイフ形石器・スクレイバー・RFの3者について、石器保有の標準値をかなり上回った数量を保有しているということになる。

これに対し、第5ブロックでは、槌石を除くすべての器種において、標準値を下まわっており、RFにおいてこの傾向が著しい。

上記の検討結果をどう評価するかは、単純に判断しかねるところがある。はっきりしているのは、第1ブロックにおけるように、石器数量に応じた器種の多様さと数量を保有しているのが一般的な傾向であることである。さらに、第5ブロックは、石器保有総量に比して、器種別の占有率が低く、この分だけ、剥片・碎片・石核が多いということである(第51図)。第5ブロックのこうした性格は、石器点数197点という大ブロックでありながら、ナイフ形石器を欠いているという事実と関連するかもしれない。

問題は、第1ブロック外の資料である。保有石器数に対して、ナイフ形石器・スクレイバー・RFをことさら多く保有していることは、注意しなければならない。しかしながら、この3者が石器群中の少数資料だけに、こうした片寄りが偶然に起きた可能性も否定できない。こ

の点に関しては、第1ブロック外資料の器種別分布状況などを次項以下で再度検討した上で、最終的な結論を出すことにしたい。

3) ブロック内とブロック外

石器群全体の構成比が、ブロックの内と外とでどう相違するのか、詳細は第5表ならびに第51図を参照されたい。しいて記さねばならないことを挙げれば、前項で述べたこととの裏返しの関係で、第1ブロック外は、トゥールの占める割合が高く、第5ブロックはトゥール以外の資料の構成比が比較的高いことくらいであろう。資料点数の少ないブロック外資料の数値にこことさらの意味をもたせるわけにはいかないからである。概略的に言えば、ブロックの内と外とで、トゥールとこれ以外の構成比が特別に相異するとは言えないというのが実情であろう。

念のために、ブロック外区域において、石器分布の傾向に特別なものを読み取ることができるかどうかに触れておく。第1ブロック外は後述するとして、第2ブロックの北東部に剥片の集まる所が1ヶ所、第4ブロックの北西側に剥片を主とする小ブロックのようなまとまりが1ヶ所、第5ブロック西側にはほとんど剥片からなる一群が目にとまる。これに対してブロック外においてトゥールがことさら集中する区域は見出しがたい。剥片の集中個所には、1~2個体のそこを中心分布域とする個体別資料が関与しているので、いわばブロックの延長か小ブロック的なものと見てよい。これはブロックの区分ラインの引き方の問題でもある。反対に、ブロック外区域を非剥片剥離空間的性格=居住空間的性格と捉えた場合、ここにより親和的なトゥールが特定の集中傾向を示すかというと、このような例には巡り会わない。石器分布の希薄な部分であること以外に、ブロック外地域が有していた場の機能を積極的に示すようは証拠は存しないと言わざるを得ない。

次に、トゥールだけに限定して検討しておこう(第53図)。この際、ブロック外資料は、全資料中の17%を占めるにすぎないということを念頭においておこう。その上で挿図から読みとれる第1の目立った特徴は、敲石・梯石・石斧がすべてブロック内に位置していることである。次いで、ナイフ形石器・スクレイバー・RFの3者が、ブロック外により多く分布していることを指摘できる。ただし、これは、前項で述べた第1ブロック外の資料のあり方がそのまま反影したことであるべきであって、ここでも第1ブロック外の性格そのものが、問われることになる。

	ブロック内	ブロック外
ナイフ	50	50
削器	71	28
RF	58	44
UF	88	14
敲石	100	
梯石	100	
石斧	100	
剥片	82	16
鉢片	72	26
石核	89	11

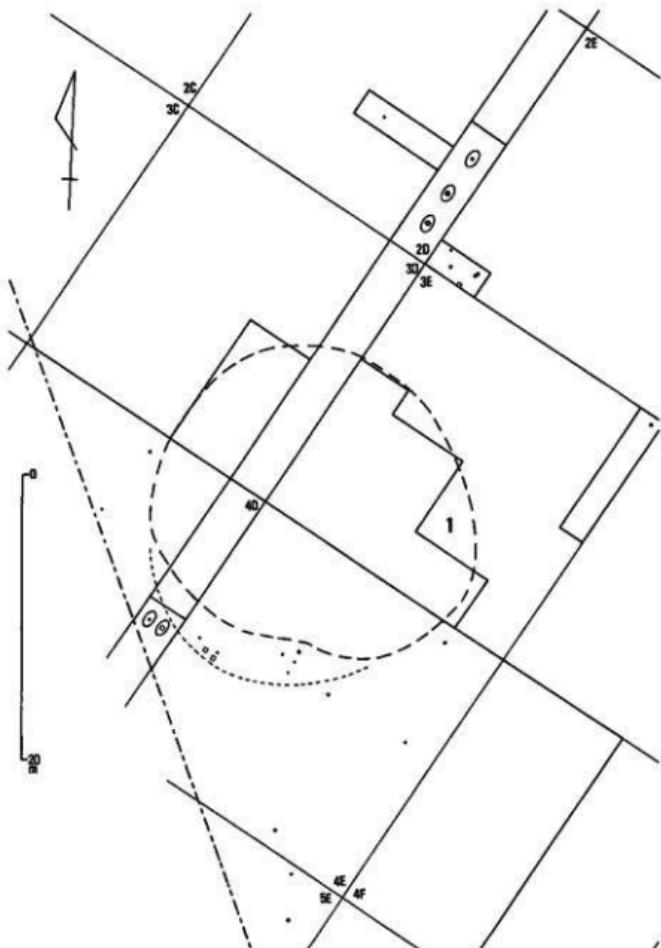
第53図 石器器種のブロック内外構成比

4) 第1ブロック外の性格

第1ブロック外の資料の分布状態を見ながら、石器組成との関連をながめてみる(第54図)。第1ブロックの北東側2E区のトレンチ内、これに接する県試掘第3トレンチを含む長さ5mほどの範囲に小さなブロックのようなまとまりがある。ここにはナイフ形石器・RF・UFを

含むトゥール6点と剥片2点、石核1点があり、小ブロックながらトゥールが卓越した石器群分布を認めることができる。

もう一つは、第1ブロックの南4・5E区の区域で、集中部はないがより南側にRF・UF主体分布域があり、4E区中央より北側に、剥片・碎片・石核の卓越する区域がある。仮に、より南側を区域A、より北側を区域Bとしてみると、区域Bは本来第1ブロックの領域内であつ



第54図 第1ブロック外石器分布図（凡例は第58図と同じ）

て、ここに分布する剥片・碎片・石核と連続する分布上の特性を示すものであったと解するともできる。この区域はブロック区分の際判断に迷ったところであった。視覚的にはブロック内に含まれる印象が強かったが、1mメッシュの等量線図作成の際、連続する1m四方の空白区画をブロック外に機械的に切りはなす原則を立てたため、結果的にブロック外に区分されたといういきさつがある。

このような見方が成立するならば、第1ブロック外は、トゥール類の卓越傾向がことさら顕著な区域であるということになる。しかしながら、第1ブロック外区域の北東半は、ほとんどが未発掘区域であるので、組成上のトゥール卓越傾向、そしてその分布上の固有の位置について、どれほどの評価を与えるのか定かにしえない。

(鈴木)

5. 石器の分布及び組成から見た特徴

石器群の分布の特徴やブロック区分に応じて石器組成を検討することの目的は、集落の景観とその構造を明らかにすることにある。したがって、ここでは本章の記載内容をまとめながら、ブロックの機能的性格に言及しておきたい。

ブロック内・外に区分された12の区画単位で石器群の分布の特徴を追ってみた結果からは、この間に截然とした区別をなすことはできなかった。いずれの区画においても各種のトゥール、剥片剥離作業に付随して生ずる剥片・碎片・石核が、大なり小なり見出されるというのが実情であったからである。すなわちブロック間相互にもブロック内資料とブロック外資料との比較においても、石器組成に表徴されるような場の機能的区分をなしえなかつたということである。

もっともこれは、多少乱暴な概括であって、いま少し視点の置き方を変えてみると見通しれない重要な性格として指摘しておかなければならないこともある。以下箇条書きにこの点を記す。この際、ブロック内外の12の区画を「工作空間」的色彩の強いものと「居住空間」的として捉えられる部分にあえて区分し記述してみる。そして、前者の中に、剥片・碎片・石核に表徴される「剥片剥離作業」的性格とスクレイパー・R.F.・U.F.などの工具・切削具から想定される「加工・工作作業」的性格との二つを意識しておきたい。ナイフ形石器や敲石に窓われる狩猟具・調理用具とそれのかかわった場の性格については、当面問題外としておく。

1. ブロック間相互には、石器組成上の際立った差異はない。ここには、共通して「工作空間」的性格を見出すことができる。ただし、第5ブロックでは、相対的にトゥールの出現率が低く、「加工・工作作業」の色彩が弱いといった微細な差を問題にしうる部分はある(第8表)。
2. 石器組成ではなく、ブロックの構成資料数を問題にすると、20点未満の小ブロック、100点未満の中ブロックおよび大ブロックに区分することができる。出土点数に応じて、ブロック面積も大きくなる。このことは、ブロック内作業量の差を示している。
3. このような観点からみると、当遺跡は第1・5という大核ブロックがあり、少くとも第2・6ブロックはブロックの独立性が問われかねないような量である。

3. ブロック内資料とブロック外資料との比較は、分布傾向にしろ石器組成にしろ、ブロック外資料の構成数が少なく、分布も散漫であるためにむづかしい。器種別の集計結果によるかぎり(第5・6・8表)、ブロック外資料にブロック内資料とは異なった性格付けをするわけにはいかない。

目立った特徴を示す例を挙げうるすれば第1ブロック外資料のあり方であろう。ここでは、トゥール類の出現頻度がきわめて高い。

4. ブロック外資料とブロック内資料の対比では、上記のように石器組成に着目することもあることながら、ブロック外区域はそこが石器の分布の稀薄な空間であるということの方がむしろ重要である。ブロック内が“剥片剥離”，“加工・工作”作業の集中した工作作業空間であるとすれば、ブロック外区域は第2・6ブロックのような工作作業の痕跡が稀薄な小ブロック以上に、工作作業空間的色彩が弱く、このような意味において、より「居住空間的」あるいは、居住空間により近い場を占めているとみてよい。

第1ブロック外において、とくにトゥール類の出現頻度が高いことは、「工作作業」の中でも剥片剥離作業への関与が弱く、“加工・工作作業”的みが分離して展開された可能性を示唆しているかもしれない。「居住空間」を念頭においた際、剥片剥離作業よりも、トゥールを用いた加工・工作作業の方が親和的であろう。

5. 器種別に分布を検討した際に確認された基本的性格を述べておこう。分布の全体傾向の基調を形成するのは剥片であって、碎片・石核もこれにならっている。すなわち、剥片剥離作業の結果が、分布の全体傾向とブロックの範囲を規定していることになる。

これに対し、各種のトゥール類は、12ヶ所のブロック内・外区分というスケールからは、剥片・碎片・石核の分布傾向と変わることろがない。しかし、ブロック内のトゥールの主要分布域は、剥片剥離作業に隣接して生じる剥片・碎片・石核とは、明らかなずれをもつている。

このことは、UFにおいて端的に示されるわけであるが、ブロック内におけるUF卓越区域は、第3ブロックの北東半、第4ブロックの西半、第5ブロックの西北半に認めることができる。ブロック内の工作作業空間は、ここを剥片剥離作業の空間と加工・工作的空間に分けると双方が一方に片寄りつつ共有空間を有しているということになる。

以上が、本節における分析結果の要点である。機能空間の集合とそれらの関係から、世帯ユニットの設定に及び、集落の景観復原に進むためには、次節以下における、個体別資料や遺構の評価とあわせて行なわなければならない。したがって、ここでは、上記の基本的事実の確認に留めておく。

(鈴木)

第7節 石器の分布と地表の傾斜

過去における人間の生活を明らかにするためには、その生活舞台となった当時の地表形態とそれを関連づけて考察する必要がある。そこで、ここでは溝口遺跡における地表の傾斜と石器

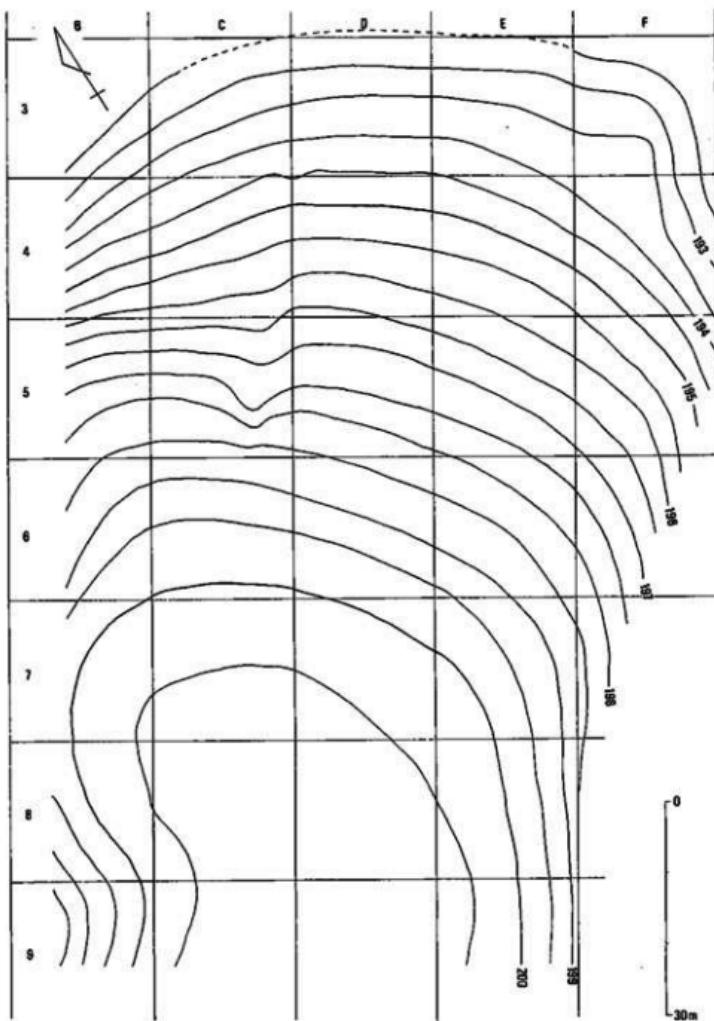
の分布との関係について考察し、当時の人の生活の一端を明らかにしてみたい。

II-1で述べたように、溝口遺跡は段丘1面に位置する。この段丘は、基盤となる神戸層群の上に堆積した段丘堆積物と最上位の風化土壌によって構成されている。溝口遺跡において石器は主にこの風化土壌の最上部から出土しており、これらが二次的に堆積したものでない限り、当時の人々が生活した旧地表面と現在の段丘面とは、ほぼ同じ傾斜であると考えられる(第55図)。そこで、発掘地域における現地表面の傾斜分布図を作成し、次にそれと石器の分布とを照し合わせてみることにした。傾斜分布図は、第55図の50cm等高線を基に作成した(第56図)。これは、石器の出土した深度に多少のばらつきがみられ、当時の地表面の傾斜が現在のそれと詳細な点まで一致するとは云えないため、この程度の等高線を使うことが適当と思われたからである。また、発掘地域に描かれた50cm等高線の間隔から、1メッシュの大きさは $10 \times 10\text{m}$ が妥当と考え、あらかじめ設定されていた地区割のメッシュを基準にして、発掘地域にそれをかけた。このようにして設定された各メッシュにおける傾斜は、約 11.3° を最大としてそれ以下の値となった。そこで、傾斜分布図(第56図)では 12° までを2°毎に分け、それらを異なるハッチで表わした。

発掘地域において 0° 以上 2° 未満の傾斜は、8列より西南のC区とD区にまとまって分布する。この傾斜で示される平坦面は、発掘地域の最も高いところにあり、比較的大きい面積を有している。 2° 以上 4° 未満の傾斜を示すメッシュは、 0° 以上 2° 未満のメッシュの周囲に分布する。これらは、7列より西南において認められ、特に7列に集中している。最も多くみられる 4° 以上 6° 未満のメッシュは、発掘地域の西南部と東北部とで分布の特徴を異にする。すなわち、7列より西南部では、発掘地域の縁辺部にあたる開析谷との境界付近に分布するのに対して、6列より東北部においては発掘地域の中心部に主に認められる。中でも、後者ではこの傾斜を示すメッシュが、2ヶ所でまとまって分布している。 6° 以上 8° 未満のメッシュと 8° 以上 10° 未満のそれとは、よく似た分布を示す。これらは、その多くが開析谷と隣接する場所に認められるが、5列より東北部では発掘地域の中心部にもみられるようになる。発掘地域で最も急な傾斜である 10° 以上 12° 未満のメッシュは最も少なく、7列より東北部の開析谷と接するところにのみ分布している。

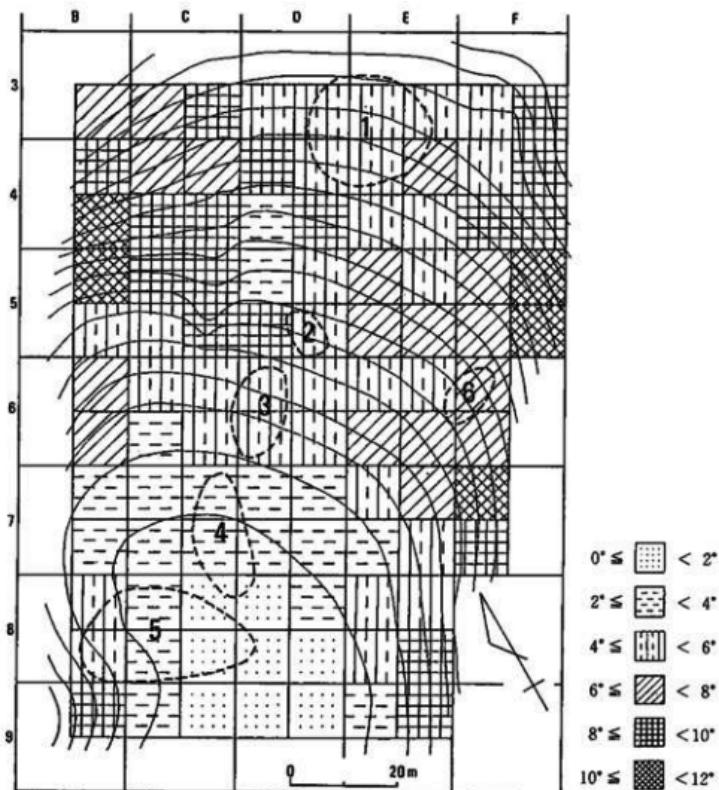
このようにして、各メッシュ内における傾斜は、発掘地域の7列より西南部と6列より東北部とで大きく異なる。すなわち、7列より西南部ではその中央に 4° 未満の傾斜を示すメッシュが集中し、特に 2° 未満の平坦面が発掘地域の最高所に広がっている。また、その縁辺にあたる西北側と東南側は、主として 6° 以上 10° 未満の傾斜を示す。これに対して、6列より東北部ではその縁辺が 8° 以上 12° 未満の斜面をなす。中央には 2° 以上 10° 未満の各傾斜を示すメッシュが混在しているものの、他の傾斜に較べて 4° 以上 6° 未満のメッシュが、2ヶ所において比較的多くまとまって分布しているのである。

次に、以上のような傾斜と石器の分布との関係をみると、傾斜分布図の各傾斜毎に石器の出土数を数えるとともに、それらから1メッシュ内における石器の平均出土数を算出してみた



第55図 調査区微地形図

(第57図)。これによると、各傾斜毎の石器出土数は、 4° 以上 6° 未満、 0° 以上 2° 未満、 2° 以上 4° 未満、 6° 以上 8° 未満、 8° 以上 10° 未満の傾斜の順で多く、 10° 以上 12° 未満のそれでは0となる。とりわけ、 4° 以上 6° 未満の傾斜を持つ斜面に石器が著しく集中して認められることと、逆に 8° 以上の斜面ではそれが激減することが注目される。しかしながら



第56図 発掘地域における傾斜分布図（数字はブロック番号）

ら、前者の場合 4° 以上 6° 未満の傾斜を示すメッシュ数が他に較べて多く、したがってここでの石器が非常に多くみられたと考えられる。このことは、各傾斜毎の 1 メッシュ内における石器の平均出土数(第57図)からも伺える。すなわち、石器の平均出土数は、 0° 以上 2° 未満のほぼ平坦な面で最も多く、ついで 4° 以上 6° 未満のそれとなる。そして、以下石器の出土数と同様に 2° 以上 4° 未満、 6° 以上 8° 未満の順となり、 8° 以上の傾斜では平均出土数も急に減少するのである。

つづいて、先述したように傾斜の分布が異なる 7 列より西南部と 6 列より東北部において、それぞれの石器出土数ならびに 1 メッシュ当りの石器平均出土数をみてみたい(第56図、第57図参照)。7 列より西南部では、石器は 0° 以上 2° 未満と 2° 以上 4° 未満の傾斜を示すメッシュに多く認められ、他に 4° 以上 6° 未満の斜面にも 30 数点分布している。これに対して、

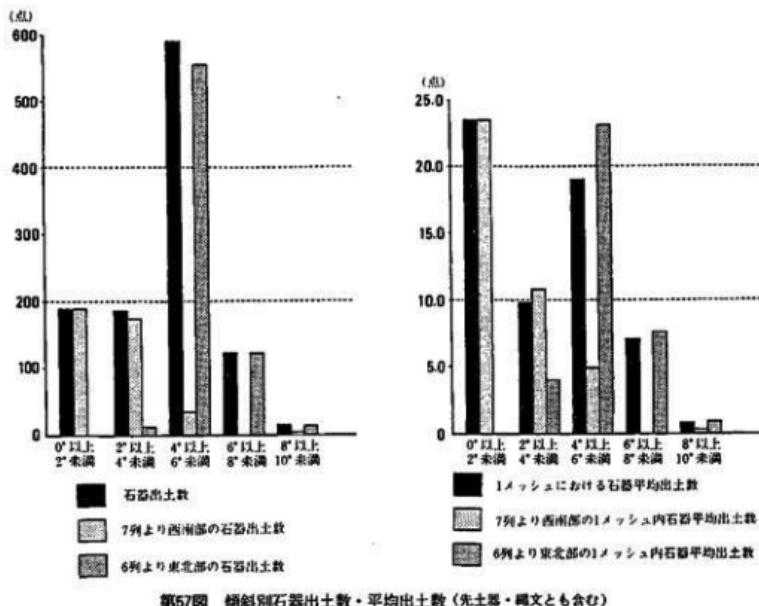


図57 種別別石器出土数・平均出土数（先土器・縄文とも含む）

6°以上の斜面では8°以上10°未満のそれに、石器が1点みられるのみである。ここでの石器平均出土数をみると、0°以上2°未満の平坦面に最も多くの石器が分布しており、傾斜が大きくなるにしたがってその数が減少することが知られる。また、石器出土数と同様に6°以上の斜面には、石器がほとんど認められない。

一方、6列より東北部において石器は、4°以上6°未満の斜面から多く出土しており、これについて6°以上8°未満の斜面に多くみられる。他の傾斜をもつ斜面では、2°以上4°未満と8°以上10°未満の斜面で若干の石器が認められるものの、10°以上12°未満のそれでは皆無である。石器の平均出土数も4°以上6°未満の斜面で非常に多く、6°以上8°未満、2°以上4°未満、8°以上10°未満の順にその数が減ずる。なお、東北部において0°以上2°未満の斜面に石器が全くみられないのは、この傾斜をもつ斜面がここにはないからである。

このように、石器は7列より西南部において0°以上4°未満の斜面に、6列より東北部では4°以上6°未満のそれに主に認められる。これに対して、西南部で6°以上、東北部において8°以上の斜面にはそれがほとんど分布しないのである。

こうした、石器の分布する0°以上2°未満、2°以上4°未満ならびに4°以上6°未満の斜面は、発掘地域の中央付近にそれぞれ比較的大きな面積をもって、西南から東北へおよそ連続して認められる。なかでも、4°以上6°未満の斜面は、6列より東北部において2ヶ

所で広範囲にわたっている。これら四つの斜面には、石器が集中するところが各1ヶ所ずつおよそ含まれ、そこは人々が主な生活を送った痕跡と考えられる。生活を営んだ時期は、先土器時代には 0° 以上 2° 未満から 4° 以上 6° 未満の全ての斜面に及んでいる。しかしその中でもわずかに傾斜の増す $4\sim 5^{\circ}$ 、D・E列の境界付近では遺物の分布量が減少しており、当時の人々が微妙な起伏量の差を感じ取っていたらしいことがわかる。この事から判断すると、傾斜度 $6^{\circ}\sim 7^{\circ}$ がここで生活していた人々の平坦面と斜面を分ける生活感覚上のボーダーラインであったと考えることができよう。また同じ傾斜が100m以上にわたって広がっている所を主な生活の場として利用したようである。

以上までに述べてきた事柄を要約すると次のようになる。溝口遺跡では7列より西南部と6列より東北部で斜面の傾斜が異なった。そのため先土器時代人は、西南部においては 0° 以上 4° 未満、東北部で 4° 以上 6° 未満の斜面というように、それぞれの場所で最も緩い傾斜面で主に生活した。これらの斜面はそれれ数100mの広さを有しており、当時の人々は比較的広範囲にわたって起伏の小さい斜面で主要な生活を営んだと考えられるのである。（青木）

第8節 個体別資料の検討と ブロック間関係

1. 個体別資料の抽出

1968年に初めて実施された、同一母岩に由来する資料群を利用して遺跡の技術的・空間的分析を行なおうとする個体識別法（戸沢1968）は、今や先土器時代の遺跡研究法の中で最も重要な位置を占めるまでになっている。遺跡からの出土資料が石製のものに限定され、しかもそこから人の活動までも読み取ろうとする時、時の経過を伴なった資料の動きを明示し得る個体別資料の価値は限りなく大きなものとなる。近年では、こうした個体別資料の示す諸相に対して、増え多様な視点からの解釈が試みられようとしている（栗島1986）。

本遺跡でも基本的な方法として個体識別を行なった。識別は、石材が単独の種類に偏ることがなかったため比較的容易であった。ただ鉄石英と玉髓の区分はあいまいである。両者とも質的には極めて近いものようであり、区分も一線を引けるようなものではない。そこで便宜的に、石材を見た時に赤味の優っているものを鉄石英とし、他を玉髓とした。その結果、先土器時代の石器群について89個体が抽出された（第10表）。資料点数では734点に上り、総資料点数1121点の65.4%に達した。内訳は接合によるもの379点、肉眼による判別355点である。接合率は33.7%である。抽出の困難な碎片を除くと、個体識別率は72.4%、接合率は39.4%になる。非常に高い値を示しているが、これは個体識別の容易な石材が利用されていたためと考えられる。

石材別では、鉄石英51個体403点、玉髓22個体138点、チャート12個体170点、頁岩4個体23点である。遺跡で利用されている石材の比率にはほぼ比例しており、どの石材でも識別の容易

さは同様であったと考えられる。

識別された個

体別資料は平均で1個体当たり8

資料を含むことになるが、実体

第9表 構成資料点数別個体別資料数

構成資料 点 数	2~5	~10	~15	~20	~25	~30	31~83	計
個体別 資料数	67	6	4	3	4	1	4	89

は5資料以下のものが圧倒的である(第9表)。89個体中5資料以下のものが67個体を占める。一方で31資料以上含むものも4個体あり、最大規模はCh①3 Eの83資料とTe③8 Cの82資料である。

個体番号には、石材、構成資料が主として分布する大グリッド、大グリッドにおける石材ごとの通し番号の三つの情報が示されている。最初のTe, Cha, Ch, Shは石材を示しており、それぞれ鉄石英、玉髓、チャート、頁岩を意味する。丸のついた数字①②……は通し番号である。最後の3 E, 7 D, 8 Cなどが大グリッド名である。

この他に、単独個体が20点発見されている。この中には時期を異にすると思われる尖頭器様石器や、単独であることが当然の敲石・槌石・石斧も含まれており、真の単独個体は16点である。

このようにして識別された個体別資料を操作した結果を解釈するに当っては、調査区域によって発掘条件に差のある点を念頭におく必要がある。最も重要な条件の違いは、グリッド第3列と第4列を境として発掘深度が異なる点である。第3列より北東部は試掘調査時の成果で、Ⅰ層を掘り上げたに留まる。これに対し第4列より南西部は本調査時のもので、Ⅲ層上面まで掘り下げている。本調査の発掘深度でようやく文化層が掘り上げられたことを考えると、第3列より北東部については、本来あるはずの資料のはば半数しか回収できていないことになる。したがって、第1ブロック特にその北東部に主たる分布を持つ個体については、他と同列に扱って解釈を下すことは慎しまねばならない。

(山下)

2. 個体別資料と剥片剥離作業

個体別資料に認められる剥片剥離作業の工程を分析することで、背景となる遺跡群におけるある遺跡の位置を検討しようとする研究がある。1977年に矢島國雄がこうした研究方法のまとめを行なっている(矢島1977)が、この段階までは概念的には複数遺跡を繋ぐ個体別資料の存在が指摘されてはいたが、依然として一遺跡を中心とした素材の搬出・入の研究に留まっていた。これを一気に具体的な遺跡間の問題にまで止揚したのは稻田孝司である。稻田は1978年の論文で砂川遺跡の個体別資料の再吟味を行ない、その遺存状況を最大限に評価することによって、当時の人々の移動生活の一端を描いて見せたのである(稻田1978)。しかしこの方向性は個体別資料の評価の難しさもあってか、必ずしも順調に歩を進めてはいない。依然として遺跡単位の個別研究が中心になっている。しかしながら稻田の研究を通して視野がより押し広げら

第10表 個體別資料構成表

110 第8節 個体別資料の検討とブロック間関係

No.	個体 No.	出現回数	資源合計	資源種別合計	資源工程	資源工種	組成	$\frac{\text{個体}}{\text{資源}} \times 100$	1 外	2 外	3 外	4 %	5 %	5 外	6 %	6 外	
									A	B	C	D	E	F	G	H	I
20	Te ⑩ 3 E	2	—	2	C	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—
21	Cha ① 3 E	5	3	2	B+C	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	Cha ② 3 E	4	1	3	B	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑨	Ch ① 3 E	83	45	38	B+C	26	42	13	2	212	—	—	—	—	—	—	—
24	Te ⑪ 4 D	5	5	—	—	—	—	—	3	2	—	—	—	—	—	—	—
25	Te ② 4 D	20	5	15	(A)·B	6	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	Te ③ 4 D	4	2	2	(B)·C	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
27	Te ④ 4 D	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑩	Te ⑤ 4 D	3	3	—	B+C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
29	Cha ① 4 D	3	3	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—
⑪	Cha ② 4 D	24	17	7	B	10	10	3	1	93	—	—	—	—	—	—	—
31	Cha ③ 4 D	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
32	Cha ④ 4 D	2	2	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
33	Cha ⑤ 4 D	2	2	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
⑫	Cha ⑥ 4 D	4	4	—	B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
35	Te ① 4 E	22	14	8	B	2	18	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
36	Te ② 4 E	10	6	4	B	5	4	1	—	44	—	—	—	—	—	—	—
37	Te ③ 4 E	3	1	2	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—
38	Te ④ 4 E	2	2	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
39	Te ⑤ 4 E	3	3	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—

40	Te ④ E	3	3	-	3	3	3	3
41	Te ⑦ 4 E	17	8	9	B	4	10	2
42	Te ⑧ 4 E	2	2	C	1	1	9	2
43	Cha ① 4 E	2	2	-	2	2	2	2
44	Cha ② 4 E	40	22	18	B	16	20	2
45	Cha ③ 4 E	2	2	-	1	1	21	19
46	Cha ④ 4 E	2	2	-	2	2	2	2
47	Ch ① 4 E	3	3	-	3	2	2	1
48	Ch ② 4 E	3	1	2	-	3	2	1
49	Ch ③ 4 E	6	3	3	B	3	2	1
50	Ch ④ 4 E	51	26	25	B	29	19	1
51	Te ① 5 D	2	2	-	2	2	1	2
52	Te ② 5 D	2	2	-	1	1	1	1
53	Cha ① 5 D	2	2	-	1	1	1	1
54	Cha ② 5 D	3	3	-	3	1	1	1
55	Cha ③ 5 D	3	1	2	-	3	2	1
56	Te ① 6 C	5	5	(B)	1	4	1	1
57	Te ② 6 C	2	2	-	1	1	1	1
58	Te ③ 6 C	2	2	-	1	1	1	1
59	Cha ① 6 C	5	2	3	B+C	1	3	1
60	Te ① 6 D	4	1	3	(B)	3	1	2
61	Te ② 6 D	4	4	-	1	2	1	1

82	Te②8C	2	2	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
⑩	Te③8C	82	44	37	(A)・B・C	17	57	5	3	1	1	1	1	1	1
84	Te④8C	2	2	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
85	Te⑤8C	3	1	2	B	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
86	Te⑥8C	13	5	8	B	3	10	1	1	1	1	1	1	1	1
87	Te⑦8C	5	2	3	B	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
88	Ch①8C	3	1	2	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
89	Ch①8D	2	2	—	2	—	2	—	2	—	2	—	2	—	2

通し番号に凡を付したもののは、底跡が市町村別資料

れたのは確かで、個体別資料と剥片剥離作業の関係の検討が一層重要になって来ている。

本遺跡では、残念ながら剥片剥離作業が石刃技法や瀬戸内技法のように確固たる手順を踏んだものではない。発達した剥片剥離技術においては明瞭な機能的な差、すなわち資料群の違いとして認識し得る打面の作出・体部調整・目的剥片剥離・打面の更新といった工程が混然一体となって進行しており、相互に工程としての役割り分担がないかに見える。たとえば、従来の石器群の分析に当っては疊表を多く残す剥片は通常工程初期のものと考えることができた。ところがここでは工程中期からさらには終末期に至るまでこうした剥片が剥がされている。また、打面と作業面が頻繁に移動し、どこで取られる剥片も形態的に区別できない状態である。さらに、気まぐれからか数点の剥片剥離で作業を終了している例もある。このような技術的特性と実資料の持つバリエーションのため、従来行なってきた剥片剥離作業を初期(A)・中期(B)・末期(C)工程に分ける方法も、必ずしも截然とした基準を持って適用されている訳ではない。一応一つの目安としてどの工程段階のものが残されているのかを判断しているに過ぎない。したがってこの結果を用いた分析を通しての解釈は、個体の搬出・入を含めて消極的にならざるを得なかった。

改めて、以下に一応の剥片剥離作業類型区分に当つての判断基準を示す。

A類 初期工程である。本技術工程では最初に打面を作り出すという工程が欠落するため、厳密には規定できない。疊表に被れた剥片の存在も必ずしも本工程を示してはいない。ここでは、接合資料から判断して最初期の工程に属する数枚の剥片の存在が認められる場合のみ限った。

B類 中期工程を示すが、初期・末期工程と認識できる資料が稀なだけに、多くが本類に含まれることになる。なお剥片を素材とする石核が個体

中に含まれる場合は、その石核レベルでは末期工程を含むことになるが、個体レベルでは中核となる石核が未発見である以上、末期工程を含むことにはならない。したがって石器組成中に石核を含むにもかかわらずB類と判定されている場合は、その石核が剥片素材であるあるいは破片のため判断できないことを示している。

C類 末期工程である。母岩の中核に当ると考えられる石核の存在のみが本工程の示標となる。石核から剥片剥離の進行状態を推定し、数十点の剥片をすでに剥がし、十分に工程が進行していると判断される場合には、4~5点の剥片と石核で構成される個体でも本類に入るものがあった。

以上の3工程を基本とし、その組み合わせとしてA+B, A+B+C, B+Cという分類を設けた。A+Cという分類も可能性としては存在するが、本遺跡におけるように技術工程の機能区分が不明瞭な場合には判定が困難である。また、各工程の判断があいまいな場合にはアルファベットに()を付し、(A)+B+Cのように表記した(第10表)。このように類型化した各工程が、「素材の搬入、目的剥片剥離」など実体としての素材の動きとどのような対応関係を持つかはすでに数多く述べられる所(戸沢他1971, 山口1980他)と大同小異であり、ここでは再論しない。ただ本遺跡例の場合に注意を要するのは、他に較べて類型化そのものが至って便利的なものでしかないという点である。各類型間、特にAとBの間には確固たる基準がないために相互の識別はあいまいになっている。したがって、この分類結果を利用して厳密な議論を展開するとか過大な評価をすることはできない。

さて、識別された89個体中、剥離作業の類型化ができたのは40個体に留まる。先に個体別資料の構成資料数を検討した時に5点以下のものが圧倒的に多かったように、剥離工程を判断するための材料があまりに少ないものである。

40個体の類型別個体数は第11表の通りである。当初の予想通りB類が24個体と最も多く、A類のみで構成される個体は皆無であった。A類を含む工程を持つものは6個体認められたが、うち3個体は()付きである。本遺跡における母岩の新規の利用開始は少ないようにも考えられるが、母岩の荒削りなど初期工程は原石の採取地で行なっている可能性もある。A類の認定が難しいだけに、いずれとも判断できない。C類もあまり多くはないが、石核という確固たる基準があるためにB+C類も加えて安定して存在する。単純に解釈すれば、A類で示される石材の新規供給に対しC類として消費し尽された個体が非常に多いようにも考えられるが、A類の問題に加えて分類のできなかった49個体もこうした解釈に影響を及ぼすように考えられる。

この分類結果でむしろ注目されるのは、A+B+C, B+Cなどの作業量の多い個体がわずかに14個体しか含まれていない点である。

第11表 剥片剥離工程類型別個体別資料数

類型	A	B	C	A+B	A+B+C	B+C	合計	不明
個体数	0	24	2	2	4	8	40	49
%	0	60	5	5	10	20	100	

中308点、27.5%

の石器が15.7%の個体から生産されていることになる。ちなみに、我々がかつて発掘した寺谷（鈴木編1980）、野沢（鈴木編1982）、広野北（山下編1985）の各遺跡における作業量の多い個体の数を調べてみると、おおむね25~28%を占めていることがわかる。各遺跡における個体識別率は、碎片を除くと寺谷41%，野沢79%，広野北48%，溝口72%とバリエーションに富む。このことから、個体識別率の違いにもかかわらず寺谷・野沢・広野北には作業量の多い個体が高率で現われ、溝口ではその比率の低いことがわかる。逆に類型化のできなかったのは49個体、55.1%と高い値を示している。少数資料で構成される個体は、遺跡内の搬入資料と少数の剥片剥離を行なった可能性が考えられようが、いずれとも判断できない場合が多い。しかしこの少數個体の多さからして、少なくとも当時の人々がかなりの数の個体を携帯して移動生活を行なっていたことが考えられよう。

このような作業量の多い個体の少なさと少数資料で構成される個体の多さの意味する所は、一つには居住期間の長短と関わりを持つのではなかろうか。居住時間が延びるに従って搬入石器を消費し、必然的にそれに応じた供給体制をとるようになる。このため搬入石器の量に変化がなくとも、居住期間の延長に伴って相対的に供給された石器の量が増えると考えられる。こうした推論に立脚すれば、量的な評価は困難としても、少なくとも本遺跡の営まれた期間は寺谷や野沢遺跡に較べると短い可能性がある。石器組成に現われた定型的なトゥール類の少なさも、これと軌を一にした現象とも考えられる。

(山下)

3. 個体別資料の分布

個体別資料の分布の実態がよりよく理解できるように、以下数例について具体的に図示しながら説明を加えたい。個体の抽出に当っては、ブロック間の関係をより的確に物語ることと接合あるいは個体構成資料数が多いことに留意した。その結果13個体別資料が抽出された。これらをブロック・ユニットとの絡みも考えて、広域分布個体と狭域分布個体に分けて説明する。

広域分布個体識別の規準は、原則的には隣接するブロック以遠の分布域を持つものとした。具体的に述べると、第4ブロックを基準として第4ブロック外まで分布が収束する場合は狭域、第5ブロックや第3ブロックまで分布が及ぶ場合は広域となる。問題は第5ブロック外や第3ブロック外で分布が収束する場合である。この場合の判断は至って定性的で、第3や第5ブロックを越えた先のブロック外であれば広域、ブロックより近い所であれば狭域と判断した。また、ブロックの横とか必ずしもこの範疇に入らないものについては、分布距離等を参考に適宜振り分けた。

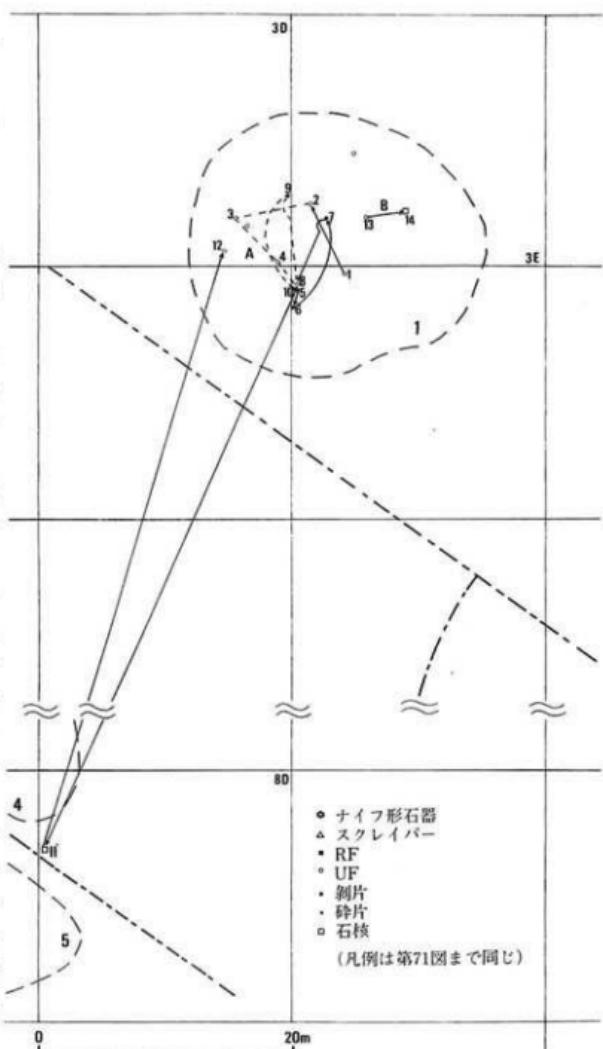
1) 広域分布個体

<Cha① 3 D>

総資料数は19点で、うち14点が接合する(第45図)。U F 9点・剥片 7点・碎片 1点・石核2点を含む。疊表を持つ剥片が多く、石核も搬出されている。中期の早い段階の剥片剥離作業が本遺跡内で行なわれたものと考えられる。

1点を除き全ての資料が第1ブロック内にあり、中でも中央からやや西よりの4E1区に集中部がみられる(第58図)。

石器製作作業に伴う碎片がここで発見されていることからみても、この集中部を石器製作作業の場と考えてよいであろう。4E1区の北から東にかけて遺物が分布しているが、これらは中心部から4~5mほど離れており、UFが多く、製作地から持ち出されて使用されたものと考えられる。第1ブロックの東側に分布する⑩と⑪の北側の1点は、中心部から10m以上も離れている。⑩の石核は厚みのあるしっかりしたもので、集中部から搬出された石核の分割された一部と思われる。⑪の北側の



第58図 個体別資料Chn ① 3 D分布図

○で囲った資料は、出土地点を特定できないものを示している。ただし、グリッド単位で地点を推定でき、個体別資料分布域の中心に近いものは、任意に、遠くはなれたグリッドで発見されたものは、その近くにおとすようにつとめている。しかしこれは接合資料のみであり、非接合の位置不明はおとしていない。

UFは接合こそしていないが、石の状態からみてこの石核から剥離されたものの1つであろう。唯一第1ブロック以外に遺存する⑩は、集中部から南西方向へ90m近く離れた第4ブロック外に位置している。大型で背面全体が礫表の剥片を転用した石核である。⑩からは小型剥片を3枚以上とっているが、いずれも発見されていない。⑩の作業地域を特定する材料はないが、90m以上の単独持ち出しであることから、⑩の発見された8D6区周辺で⑩を石核に用いた剥片剥離作業を行なわれたものと考えられる。

<Te ② 3 E>

総資料数は21点である。接合資料は2組で17点が接合する(第39図)。UFを9点含む。それほど良質の石材とは思えないが、本遺跡における数少ない縦長剥片への指向性が考えられる資料である。ほとんど最初期からの剥片剥離工程を残している。

分布の中心は第1ブロック南半部にあり、UF6点、剥片6点、石核1点の計11点が含まれる(第59図)。接合は第1ブロック内で収束し、距離をおいた接合はない。分布は第2・5ブロック、第4ブロック外に及んでおり、最も遠い第5ブロックのUFとは90m以上離れている。第5ブロックの資料は、やや厚手ながら比較的整った縦長のUFである。第2ブロック、第4ブロック外の資料はいずれもあまり整っていない。特に第2ブロックの1点は他と風化の程度にも違いを感じられ、石器あるいは個体の認定の段階で問題があるのかもしれない。しかし、いずれにしても第1ブロックで剥片剥離作業が行なわれ、一部が第5ブロックにまで持ち込まれていることには相違あるまい。

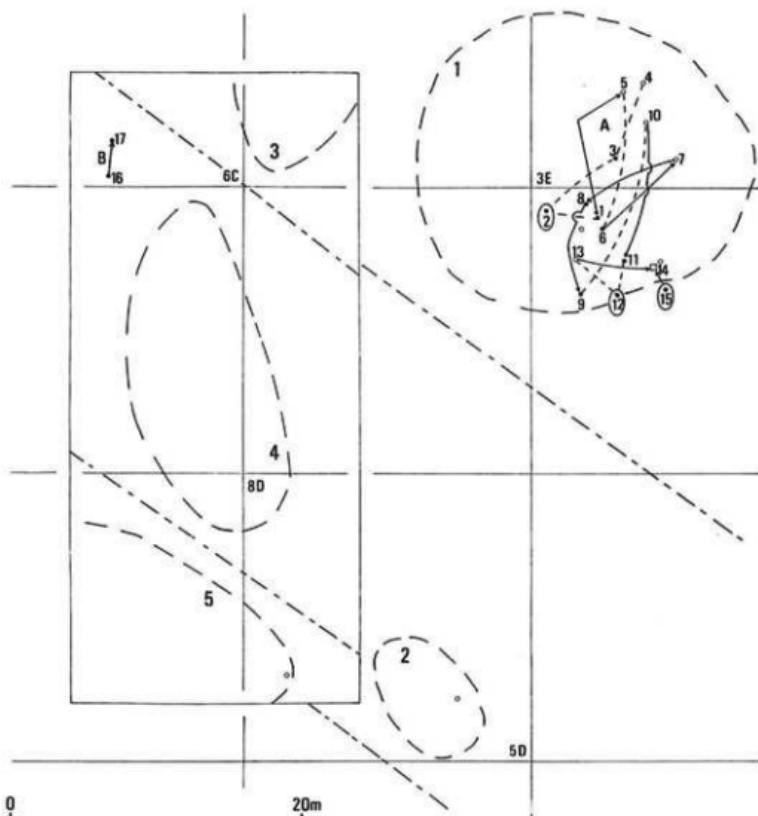
ところで、本個体には受熱石器が多く含まれるという特徴がある。そのほとんどが中心分布域に含まれるが、同じ所に分布する他の石器にはほとんど受熱が認められないため、この周辺を火廻と考えて良いかどうか問題があろう。第5ブロックの1点も受熱が認められるが、これも同ブロック唯一のものであり、評価が難しい。

<Ch ① 3 E>

総資料数は83点で、うち38点が接合する。石器組成にはスクレイバー2点、RF2点、UF22点、石核2点を含む。RFの2点は、やや大きな加工があるために認定されてはいるが、大きさはⅡ種接合しても2cmに満たず、形態ともども不十分なものである。2点ある石核も個体の中核となるものではなく、石核の破片である。剥片剥離工程の復原ができないほどに節理の強い石材であるために、資料群全体が不整形なもの集まりのように見える。

分布はほとんどが第1ブロック内で収束する(第60図)。県教委のトレントがあることを考慮すると、分布の中心部は3D24区から4E1区にかけての径15m位かと思われる。中心部としての面積は広いが、この中でも特に4E1区への集中度は高い。同じ第1ブロック内でも、5m程北東部の3E11区に弱い集中部がある。ここにはUFが若干多いように見えるが、中心分布域にも多くのUFがあり、3E11区周辺の特徴とは言い難い。

この他、第1ブロック外に2点、第3ブロックに1点、第4ブロック外に1点の剥片が分布する。いずれも不整形な資料で、意図的に持ち出したとは考えられない。第4ブロック外の資



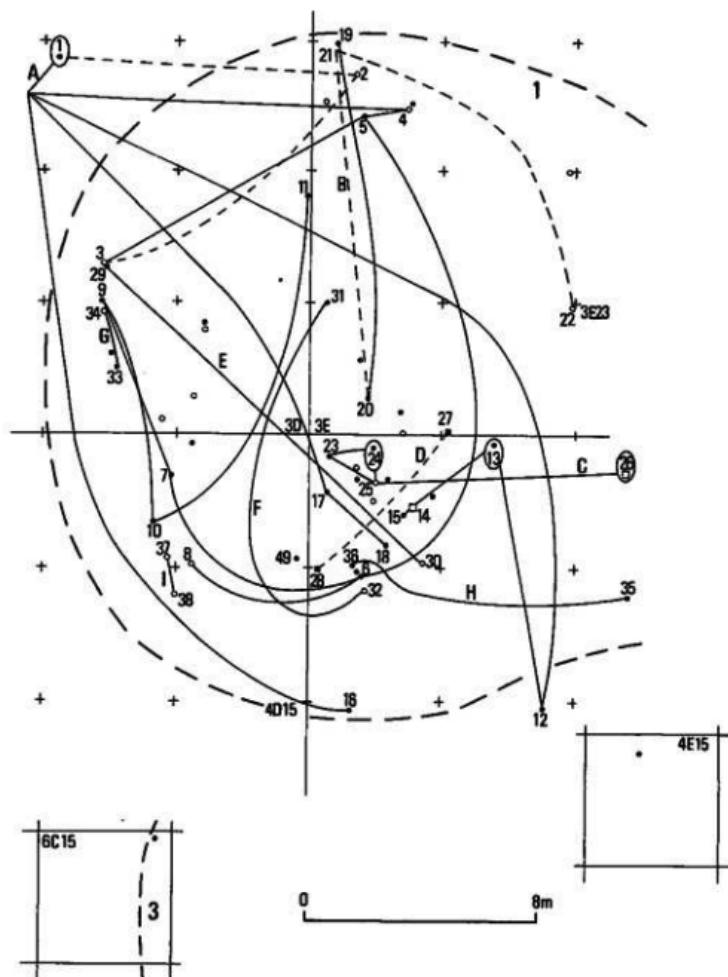
第59図 個体別資料Te ② 3 E分布図

料に至っては90m近く離れており、第3ブロックの剥片ともども何等かの要因を考えなければならないが、現在その推測は難しい。

<Ch ④ 4 E>

総資料数は51点で、うち25点が10群にわかれ接合する。ナイフ形石器1点・スクレイバー1点・RF4点・UF23点・剥片19点・碎片1点・石核2点という石器組成である。II種接合を8組18点含み、石器点数は41点になる。節理が強い石材であるために、剥離工程の復原はできなかった。

分布の中心は3E23・4E3区で第1ブロックの南半にはとんどが含まれている(第61図)。第1ブロック内にはナイフ形石器・スクレイバー・RF・UFなどと共に剥片、石核がみられ



第60図 個体別資料Ch ① 3 E分布図

る。第1プロックは石器製作の場であると共に石器使用の場でもあったと考えることができよう。しかしここに残された石核は最終的なものではなく、個体の中心となる石核は搬出されている可能性がある。6D13区つまり第3プロック内に1点UFがみられるが、この資料は第1プロック内の資料と接合関係があることから、第1プロック内で製作された後持ち出され、UFとして使用されたものと考えられる。接合距離は40mを越える。このUFは縦長の中型剥片

を素材としているが、整ったものではなく、周囲が節理で割れた厚手の棒状の剥片である。一方、第2ブロック外でⅡ種接合するRF@があるが、これはナイフ形石器とも考えられる整ったものである。本資料は25点という多量の接合資料を持つが、10群に分かれ、一番多く接合する群でも5点しかない。このことは、多くの資料が小片で接合が困難であったためとも考えられるが、本調査では第4列より北東側、つまり第1ブロック北半部が緑地帯にかかるために掘れなかったことから、資料の多くがこの地域にあるとも考えられ、接合群の間の未発見の資料が全て持ち出しによるものとは考えにくい。トゥールの非常に少ない本遺跡だが、その中でナイフ形石器・スクレイバー各1点、RF4点、UF23点とトゥールを多く含む本個体から持ち出されたと思われるいくつかの資料は、トゥールであったと考えることもできよう。

<Sh ① 6 D>

本個体は接合資料3点より構成される。片面に大きく自然面を留める部厚で大型の剥片③を石核とし、それを剥離している。

イ→①8 C 6 A 3 (UF)→ロ→②6 D 7 A 3 (UF)→③6 D 17 A 2 (D)

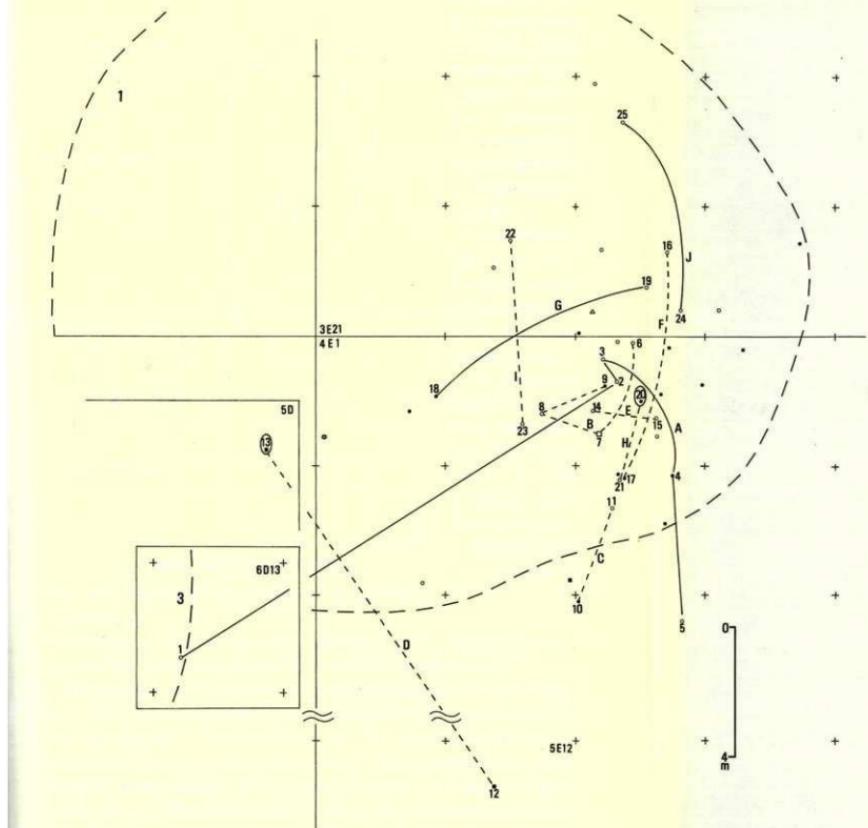
工程としては、イ)3枚以上的小型剥片をとった後に①をとる。その後に、ロ)中型剥片を1枚とり、③をとる。②と並行してニ)小型剥片を1枚とる。剥片は2点ともUFで、断面が三角形状をなすものである。③は横長剥片であり、①も横長に近い形状の剥片である。持ち出された剥片は5枚以上あり、中・小型の不定形のものがほとんどである。全体的に剥片は裏表を打面とした幅広なものが多く、石核の形状に大きく影響されている。これは、石核を作出する段階で、中・小型の幅広なものを目的剥片とするという意図があったためと考えられる。

分布は、第3と第5ブロックにまたがり、第3ブロックに石核とUF・第5ブロックにUFがある(第62図)。第3ブロックの石核と第5ブロックのUFとは38m近く離れている。上記のような剥離方法をとっているため、剥片剥離に際して碎片はほとんど生じないと考えられる。また、工程が非常に短かいため生産された剥片もそれほど多くないと考えられる。このようなことを勘案すると、わずか3点の個体別資料ではあるが、本個体の主たる剥離作業は第3ブロックで行なわれ、一部が第5ブロックに搬入されたと考えたい。

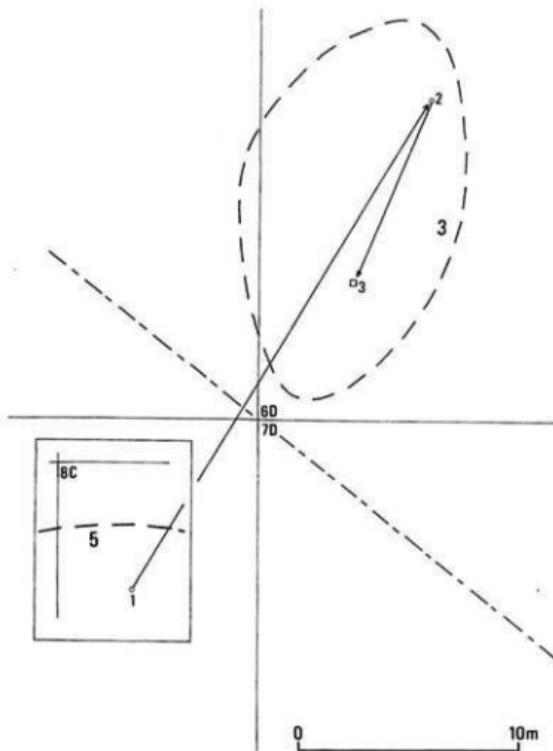
<Te ① 7 D>

総資料数は5点で全点が接合している(第44図)。石器組成は剥片4点、石核1点である。剥離工程中期から最後まで残している。

分布は、中心分布域を持たず、5点ともどのブロックにも属さない散漫な分布を示している(第63図)。第3ブロックの南に3点・第4ブロックの東に1点・第6ブロックの西に1点があり、全て石核の東側に分布する。接合距離は40m近くもあり、かなり広範囲に及ぶ接合関係ということができる。残された資料はかなり消費のすんだ中期から最終段階のものであり、本遺跡では初期の段階の資料が発見されていないことから、他からの持ち込みの資料と考えることができよう。石核との接合関係が存在し、剥片もおよそ他から携帯してくるほど形態的に



第61図 個体別資料Ch ④ E分布図



第62図 個体別資料Sh. ① 6 D分布図

整ったものとは考えにくことから、本遺跡内で剥片剥離作業が行なわれたことは確かであろう。碎片が存在せず、また遺物の集中がみられない現状況下ではその場所を特定することは難しい。

この剥片剥離作業が開始されてから少なくとも10枚以上の小型不定形剥片が剥離されているが、それらの大部分は発見されていない。これは、作業後の資料の移動によるものと考えられ、遺物の散漫な分布もそれによるものであろう。また、未発見の資料は持ち出されたものと考えられる。

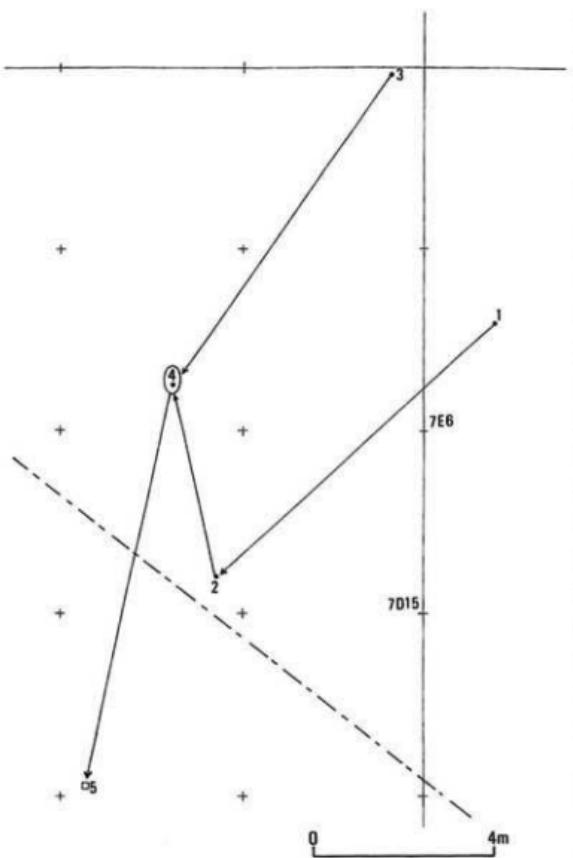
本個体は接合関係がブロック外で完結して

おり、ブロック外の重要性・意味を再認識させてくれるようである。

<Te⑧ C>

82点で構成される。II種接合を9組23点含み、石器点数は67点になる。石器組成はR F 1点・U F 16点・石核3点以外は剥片と碎片である。37点が接合する最多接合例である。

分布の中心は第5ブロック内にあり、ほとんどの資料が南東部に集中する。特に8C 19区に多く、第5ブロックの中心部を構成している。この中心部に石核・剥片・碎片が存在することから、剥片剥離作業がここで行なわれたことはまちがいない。全体の90%以上が第5ブロック内に存在するが、第5ブロックは大きなブロックであり、その中でも南東部を中心とした製作作業域と⑨・⑩周辺の北東部の2グループに分けることができる。また、第5ブロック外ではあるが、第4ブロック方向へのびる一群があり、少なくとも3グループに分けることができよう。後者二つは明らかに前者から持ち出されたものであると考えられる。持ち出されたと思わ



第63図 個体別資料Te ① 7 D分布図

れるこれらの資料をみてみると、⑩・⑪のグループは4点のうち2点が本個体中でも数少ない整った縦長剥片である。また第4ブロック方向の一群では、第4ブロック内の1点は下半部が欠損してはいるが整った剥片であり、8C10区と8D6区のUFも小型の整った剥片である。以上から、持ち出しは“整った剥片”という意識の下で行なわれているようである。また、1点だけ第1ブロックに存在するのは、碎片であるため意図的な持ち出しあとは考え難い。同一母岩に含まれるのかどうかの判定そのものが問われるのかもしれない。

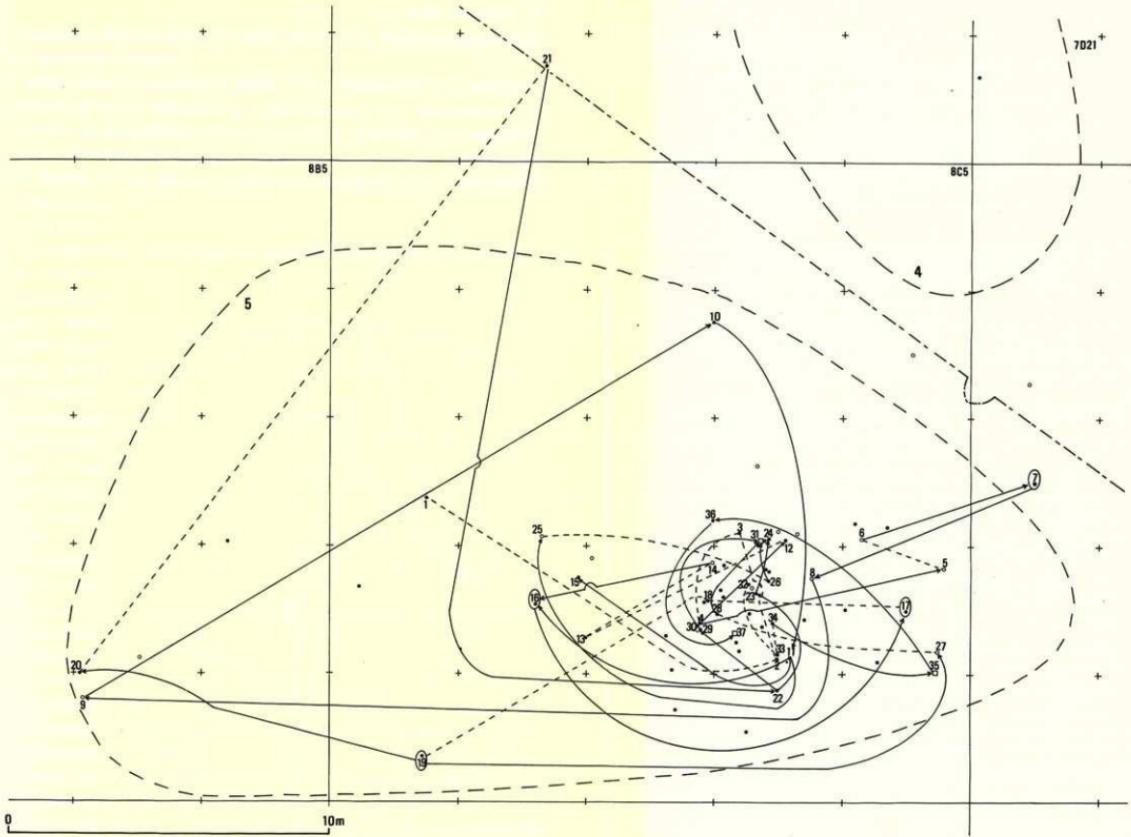
本個体は礫表を持つ大型剥片から最終的な石核までをみることが

でき、初期の作業から石核の遺棄までが第5ブロックを中心として行なわれたと考えられる。資料数に較べてトゥールの数は貧弱である。残された資料をみても、整った資料はほとんどみあたらない。トゥールの少なさは石材の持つ節理の多さに起因するものと考えられよう。

2) 狹域分布個体

<Te ① 3 E>

総資料数は8点である。このうち7点が接合する。無駄の多い剥離作業を示しており、まだ剥片剥離ができそうな石核を放棄している。剥片にはあまり整ったものはないが、7点中5点がUFになっている(第38図)。初期の剥離工程を欠く点を考慮すると、中期以降が本遺跡



第64図 個体別資料 T_e ⑧ 8°C 分布図

で行なわれたと思われる。剥片はあまり隙間なく接合しており、本個体からの遺跡外への持ち出し資料は少ないようである。

資料は全て第1ブロックに遺存する(第65図)。ブロックの面積が大きいことと関わるのか、剥離工程に較べて資料の移動距離は大きく、最大では20m近い。また、資料の分布は大きく見るとブロック北東部と南西部に二分されるようにも見える。石核が移動しながら剥離が進行したのか、剥片のみが北東部へ持ち込まれたのかはわからない。少なくとも一ヶ所で剥片剥離された資料群が、そのまま遺棄されたとは考えられない分布面積の広さである。石核は南西部側に残されている。

<Te ④ 3 E>

14点で構成される。うち12点が接合する。剥片剥離作業の全工程を残している(第40図)。

R F 1点, UF

3点, 石核3点

を含む。未発見

資料が5点以上

あるが、第3列

より北東側では

II層以深を発掘

していない事も

あり、全てが遺

跡外へ持ち出さ

れたとは考えら

れない。

分布の中心は

第1ブロック北

東部の3E11・

16区周辺である

(第66図)。碎

片をこそ含まな

いが、分布密度

からこの周辺で

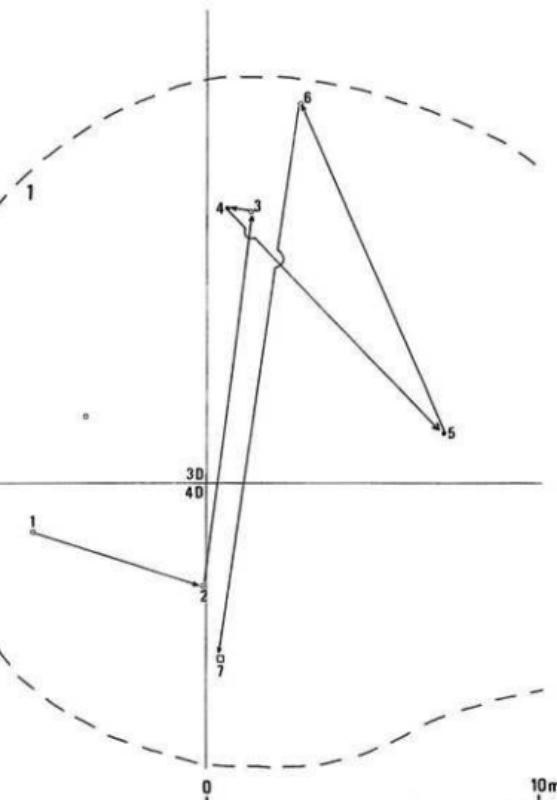
剥片剥離作業が

行なわれたと考

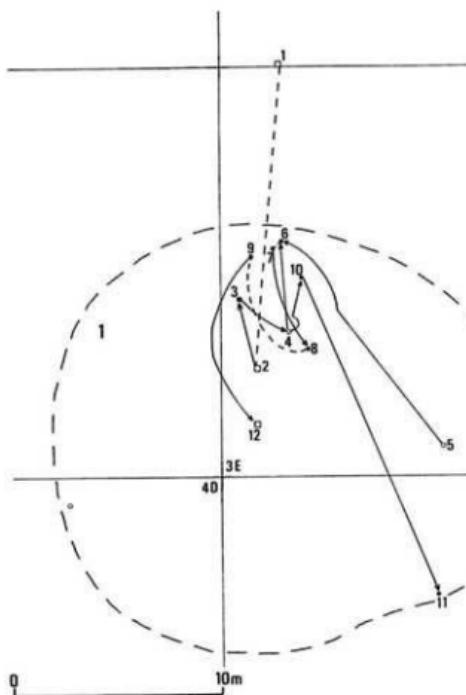
えて大過ないで

あろう。この周

辺にはRFと1



第65図 個体別資料Te ④ 3 E分布図



第66図 個体別資料Te ④ 3 E分布図

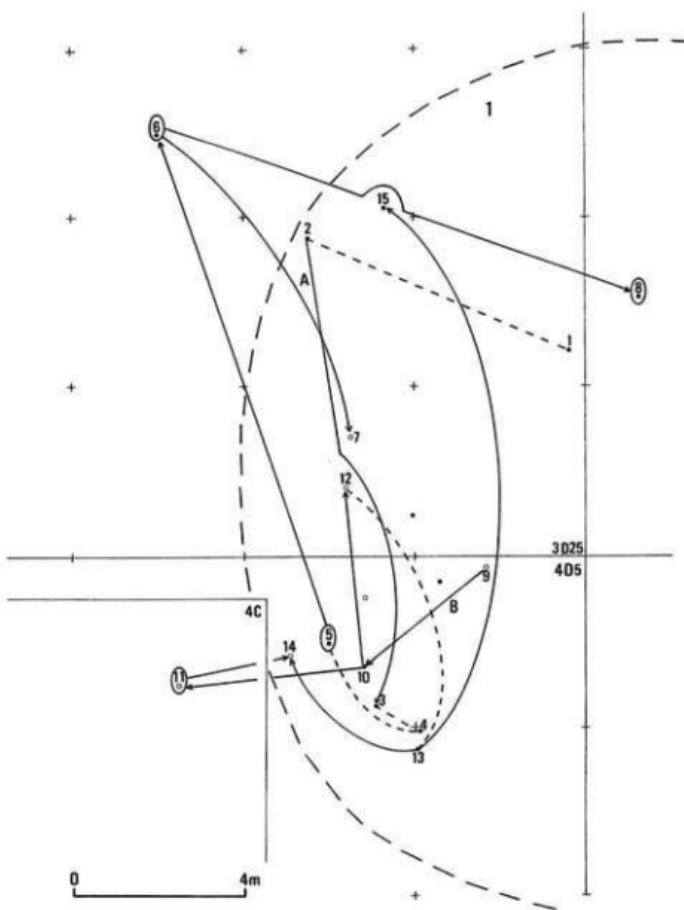
は剥片剥離の痕があり、第1ブロック内のものにはないことから、破損の後一方が持ち出されたと考えられよう。

<Te ④ 4 D>

20点で構成され、そのうち15点が接合する。初期～中期工程を示すが、あまり整った剥片はとっていない。接合は2群に分かれるが、前半のA群は礫表を剥がす工程、後半のB群は大型剥片を素材とする石核から剥片をとる工程を示す(第41図)。組成中にはU Fを6点含む。

分布の中心は第1ブロック西隅にあるが、集中度はあまり高くない(第67図)。剥離順序①～⑧などはおよそ目的的な剥片を取っているとは考えられない工程であるが、遠いものでは10m以上も離れて接合している。⑨～⑯の方では⑯・⑯など比較的整った剥片も取られているが、むしろ分布域は狭い。遠く分布する⑯は厚手不定形の剥片であるが、形態的には決して整ってはいない。⑯も4C区から発見されているが、表採資料だけに評価は難しい。石器個々の形態的評価を無視すれば、個体としては中心分布域から同じ第1ブロックの北東方向への動きが看取されよう。

点のU Fも分布する。同じブロック内ではあるが10m以上分布の中心から離れた所に、2点のU Fと剥片1点が持ち出されている。3点とも本個体中では形態的に整っているものである(第40図)。特に⑥は背面のほとんどが礫表に被れているが、鋭い刃部を備えている。第1ブロック外の2E21区にも石核が1点分布する。これは工程初期の大型剥片を石核に転用したもので、第1ブロック中の資料とII種接合する。石核からの剥片剥離がわずかであるために、破損(II種接合して復原される)と石核への転用の前後関係がわからなかったが、接合状態からすると破損した後その一方が石核になったようである。2E21区出土の石核に

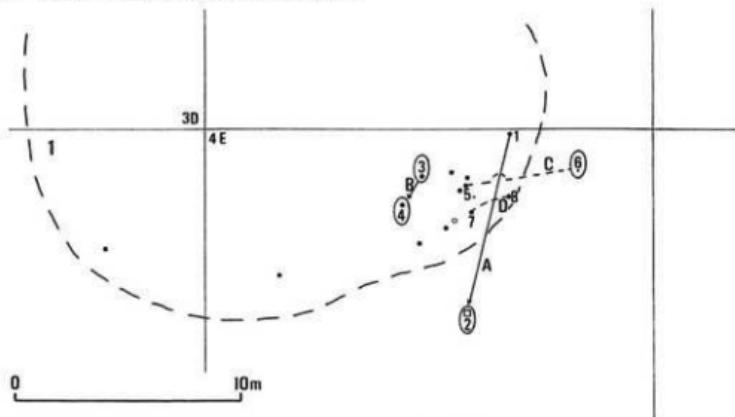


第67図 個体別資料Te ② 4 D分布図

<Te ② 4 E>

22点で構成され8点が接合するが、2点ずつの接合群がA～D4組認められるのみである。技術的にはとるに足らない資料である。U F 2点を含む。1点の石核は破片と思われる資料で、全体形はわからない。資料全体が長さ2～3cmの小型の不定形剥片を中心に成っており、整ったものは全くない。

分布の中心は第1ブロック内の4E3区周辺にある(第68図)。不整形な剥片を不要なものと解してよいのか、中心分布域も約3×6mと比較的まとまっており、剥片剥離の後にあまり



第68図 個体別資料Te ④ E分布図

大きく動かされることはなかったようである。やや大きく動いている2点の剥片も第1ブロックから出ることはない。いずれも不整形な剥片で、持ち運ばれたとすればその目的性が疑われるものである。

本資料は、このような接合率の低さや残された資料の歪さから考えて、遺跡外への多量の整った資料の持ち出しも考えられる。しかし一方では、残された資料の歪さの一因として節理面の多さが考えられ、そうであるとすれば整った剥片の得られる可能性も低くなるであろう。互いに矛盾した事実が同居しているようであり、個体の認定そのものにも問題が波及する可能性もある。

<Cha(2) 4 E>

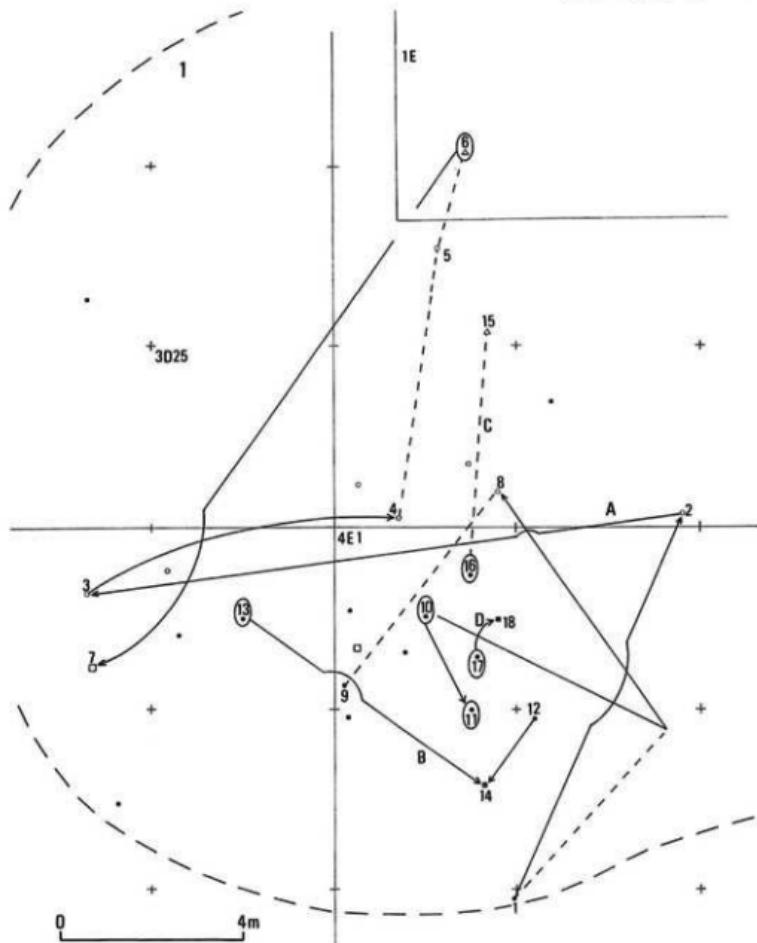
40点と数多くの資料で構成される。18点が接合するがA～Dの4群に分かれる。スクレイバー2点、RF2点、UF12点、石核2点他を含む。最も多量に接合するA群について、剥離順序を以下に示す。

(A群)

```

    ① ④ E 11 A 1 (B) → ② 3 E 22 A 13 (U F) + ③ 4 D 4 A 31 (U F) -
    + ⑥ 3 E 21 A 4 (U F) + ④ 4 E 1 A 24 (B)
    - ⑧ 4 E 1 A 85 (B) → ⑪ 表 A 21 (B)
    → ④ 3 E 21 A 3 (U F) + ⑥ 3 E 16 A 6 (U F) + ⑥ MG A 27 (Sc) → ロ → ⑦ 4 D 4 A 25 (D)
  
```

イ)すでに工程はある程度進んでいる。①～⑦は、大型剥片を石核とする剥離工程である。①は大型剥片の主剥離面を打面に小型剥片をとろうとした時、同時に剥がれたものである。打面を移し、大型剥片の背面を打て厚手の剥片②をとる。これはUFになっている。②の作業面に打面を90°移し、③と④+⑥+⑥の剥片をとる。いずれも鋭い刃部のある整った剥片である。④+⑥+⑥は分割された可能性もある。③～⑤の3点とも刃こぼれが明瞭なUFである。⑥はスクレイバーになっている。ロ)では数枚の剥片をとるようであるが、形・数ともに推定



第69図 個体別資料Chu ④ E分布図

が難しい。⑦で残された石核は、大型剥片から剥片剥離が進行したものである。

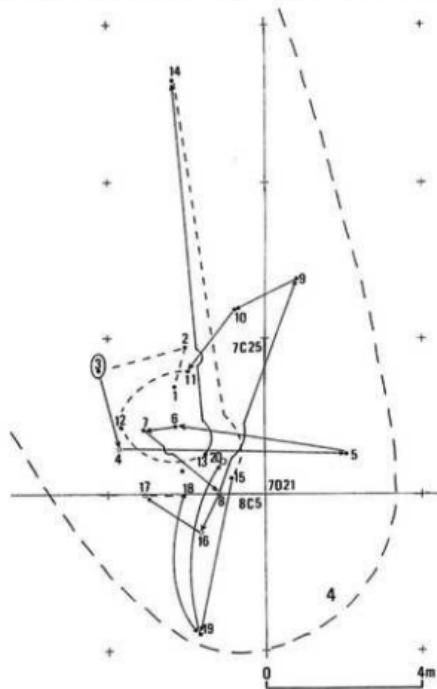
⑧～⑪は、⑦に収斂する大型剥片をとったと同じ個体の中心となる石核から剥がされたものである。⑫+⑬は①以下の大型剥片をとった剥離面を打面にして剥がされている。打面を除き自然面に被われるが、⑬はUFになっている。⑭・⑮は①以下の大型剥片と同じ打面からとられている。

この個体は他の非接合資料も勘案すると、剥片剥離工程のかなり早い段階から残されている

と考えられる。また、石材も良く整った剥片がまとめて得られた可能性が高く、接合率の低さから考えても数多くの資料が遺跡外に持ち出されたと判断される。なお、本個体に含まれるもう1点の石核も⑦と同じく剥片素材のものである。個体の中心となる石核は持ち出されている。

さて、このような個体の分布を見ると、資料数が多いにもかかわらず、1点を除き全てが第1ブロックに含まれている(第69図)。ブロック外の1点は⑥スクレイバーで、県教委の試掘調査時に1E区から出土している。本個体の中心分布域である第1ブロックのはば中央3E21区のUFと、40m以上の距離で接合している。先に指摘した、剥片の意図的分割を考えられる所であろう。

中心分布域は3E21、4E1区であるが、4D5区にも延びる可能性が強い。中心部には石核を1点含むが剥片が多く、UFはやや北東部に外れる。2点あるRFは南西側と南側の周辺部に分布する。⑩のスクレイバーは中心部から北東へ4m離れて分布する。この他、中心部の外に分布するものにUF・剥片・石核があるが、中心部のものに比較すると大型で整ったもの



第70図 個体別資料Te ① 7 C分布図

が多いようである。本個体の場合、4E1区が水洗選別域と重なるため、分布図上に示せない資料も10点以上あり、中心分布域で剥片剥離作業のあったことはまちがいあるまい。中心部から北東～北西方向への石器の移動がやや目立っている。

<Te ① 7 C>

27点で構成され、うち20点が接合する。剥片剥離の全工程を残す(第42図)。UFを4点含むが他は剥片のみである。工程から推定すると10点以上の剥片が持ち出されているようである。石器への利用率が低いように思われるが、これは石材が粗質であることに起因するのかもしれない。拳大以上の石核が放棄されたのも同じ理由による可能性が高い。

分布の中心は第4ブロック南半にある。ほとんどが6m四方位にまとまって分布しており、石器製作の場であったことを明瞭に物語っている

(第70図)。4点のUFは中心部の南西部に、石核は南寄りに分布する。隔たって分布するのは⑥の剥片のみで、これは第3ブロック外に含まれており、20m以上の距離を持っている。③は光沢こそあるが不整形な剥片の破片であり、意図的に運ばれたかどうか疑わしい。⑩の剥片も中心部から8m程隔たっているが、不整形な剥片の破片である。共に何等かの偶発性を考えておきたい。

<Te ④ 7 C>

22点で構成され、うち19点が接合する。A～C群の接合群からなる。剥離工程のかなり早い段階から残すようであるが、途中で母岩が大きく二分され、その一方は発見されていない(第43図)。また、6～7枚以上の剥片が持ち出されているが、本個体の剥片剥離作業からは、いずれも不定形と考えられる。残された資料中には6点のUFを含むが、定型的な石器はない。石材はあまり良質のものではない。

分布の中心は第4ブロック南半にあり、Te ④ 7 Cとほとんど重なる(第71図)。北方に飛び出す資料が数点あるが、中心分布域同様UFと剥片が混じっており、決して特別に整った資料という訳ではない。また、①と⑥は出土地点を特定できないが、それぞれ8C10区と8C9区の水洗選別資料中の出土であり、西方へも若干分布の延びる可能性がある。全体の分布範囲はやや広いように見えるが、外側にある資料も意図的に持ち運ばれたものとは考えられない。ここでは、一応石器製作域を中心とした自然分布を示していると考えておこう。

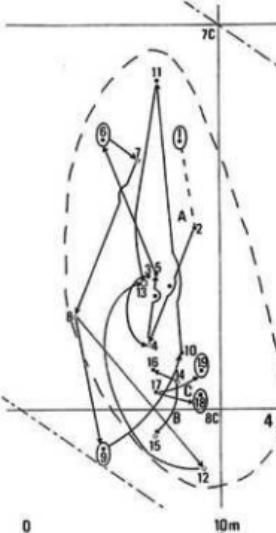
(井上、土江、山下)

3) 個体別資料分布の概観

89例の個体別資料について、分布傾向の大略を述べておこう(別添第12図)。おおむね、全資料のドットマップに相似なあり方を示している部分と、ドットマップの空白地帯をまたぐよう広域に分布するものがある。

前者の特徴を個体別資料単位にみた場合には、次のように言い換えるだろう。すなわち、六つのブロックの遺物分布域には多数の個体別資料が重複分布しており、遺物の集中分布域としてのブロックが、多くの個体別資料の集中的な存在によって成立しているということである。

一方、広域分布を示す資料は15例ある(別添第12図)。個体別資料通しNo.7(100m), 13(114m), 23(63m), 28(84m), 30(50m), 34(80m), 50(98m), 56(70m), 59(34m), 62(47m), 63(53m), 70(72m), 75(43m), 79(32m), 83(35m)がこれに相当する。No.後の()内には、分布範囲の最大幅を示した。広域分布個体別資料は、複数のブロック間にまたがるものと抽出したわけである。



第71図 個体別資料Te ④ 7 C分布図

が、第5ブロック内には、わずかにこの範囲を飛び出し、他ブロックへかかるといったものも含まれている。しかし、それでも32m以上の距離を有し、最大長114mの資料までを含んでいる。

もう少し詳しくみると、50m以内6例、100m以内8例、100m以上1例で、平均65mという値ができる。構成点数2点以上の89個体別資料中の15例であるので、決して少ない割合ではない。ただし、図中に現われないが、No83の資料中の碎片1点が第1ブロックに所属しているので、No83が最大の分布域を示すことになる。この他にも出土地点不明資料を含むため、図中にうまく現われない個体別資料が一部に含まれているので、あわせて第10表を参照されたい。

広域分布資料のブロック間共有関係はどうであろうか。第1ブロック付近に分布の中心域を有するNo7・13・23・28・30・50のうち、No30・50は第3ブロックにまでしか伸びないが、他の例は第2・3ブロックを越えて第4ブロック周辺まで強く伸び出す傾向がある。こうした分布傾向に対応するように、第4ブロック付近に中心分布域を有するNo34・56・70、そして第5ブロックに分布の中心があるNo83は、ともに第1ブロック内まで広がっている。15例の広域分布資料中、上記の9例が第1ブロック・第4・第5ブロックとの間に強い相互関係を有している。この点を強調すれば、六つのブロックから成り南北に長く伸びたブロック群は、第1ブロックと第4ブロック付近の2ヶ所に核部分を有していると見なすこともできる。

その他の諸例は、長軸に対して直交するような中心軸の方向を示すNo63の例、第6ブロック外から第4ブロック間を結ぶNo75、第5・3ブロック間にまたがるNo62の例、広域分布とはいえ、第5ブロック内ではほとんど収束し、ほんの少し近接ブロックへ伸び出すにすぎないNo79の例がある。

個体別資料の分布のし方に、ブロック内で収束する例とブロック間にまたがる広域分布の例があることが分ったが、両者にはどのような差があるのかを考えてみる必要がある。そこで、剥片剥離作業の遺存類型との関係を検討してみよう。ここでは、作業工程を多く含む資料ほど分布範囲が広いとか、作業工程中どの段階のものが突び出し、結果的に広域分布個体別資料をなしているのかといった、ある種の傾向を見出しうるかもしれないからである。

剥片剥離作業遺存類型を推定し得た個体別資料40例について検討してみる。ここには、広域分布資料14例が含まれている(第10表)。A・B・Cの全工程を含む資料は、No13・15・66・83の4例で、No13・83は広域分布を示す。一方、工程BあるいはCだけの短い作業内容を示す資料26例をとってみると、この中に広域分布資料No7・30・34・50・56・63・70・79の8例が含まれている。この結果は、広域分布資料の出現要因が、遺存工程の長さとは無関係であると考えざるをえないことを示している。

広域分布資料には、剥片剥離作業中に含まれる、特定の段階の作業群がブロックを変えながら(ブロック間を移動しながら)遺存しているような現象が認められるであろうか。これについては、個体別資料の中心分布図(別添第13図)、個体別資料のブロック間分布関係と中心ブロックとの関係図(第72図)を参照すればよい。

中心分布というのは、個体別資料の最大分布範囲内で、ことさら飛び離れて位置する1~2

個体通し番号	資料数	1	1P	2	2P	3	3P	4	4P	5	5P	6	6P	位置不明
1	2													
2	2													
3	2													
4	3	●												
5	2													
6	3	○												
(7)	19	●												
(13)	21	●		■										
15	14	●												
17	5	●												
(23)	83	●			■									4
25	20	●												2
26	4	○		■										
(28)	3													
(30)	24	●			■									
31	3			■										
(34)	4						■							1
35	23	●												
36	10	●												
37	3	○												
38	2													
39	3	○												
41	17	●												
44	40	●												1
47	3	○												
48	3	○												
49	6	●												
(50)	51	●	—		■									
52	2													
54	3													1
55	3		○											
(56)	5						■	○						1
57	2						■	■						
(59)	5						○	○						1
(62)	3			○										
(63)	8				■						●			
66	27				■	●								1
67	3				○									
69	22				●									
(70)	10				●									
73	2													
74	4				○									
(75)	5			●										
(79)	12													
81	9							●						
(83)	82							●						1
85	3													
86	13							●						

第72図 個体別資料のブロック間分有关係図

黒丸：集中度の強い中心ブロック、白丸：集中度の弱い中心ブロック、通し番号の丸印は広域分布資料。

点の資料を除去して描いた分布範囲図である。本図からは、先に示した個体別資料分布範囲図と相異していることに一目で気付く。すなわち、ブロック間にまたがって分布する例がまったく失われていることである。このことは、広域分布資料の実態が、多数の構成資料中に、たまたま1~2点の格別に遠く飛び離れた出土位置を有する資料を含むことに由来するものであつて、いわば見せかけのものであったことを示している。

広域分布資料中の突出資料が、剥片剥離作業中のどの段階に位置し、それはどのような器種なのかといった観点にも興味がもたれる。しかし、この点に関わる分析は、接合資料から作業順序が復原でき、なおかつこの中に分布上の突出資料を含む例が、No.7・50・62・83の4例しかなく果せない。念のために記しておくと、剥片剥離作業段階では、初期・中期・末期の例があり、器種はUF2点、剥片2点となる。これに代りうるものとしては、個体別資料の構成資料が中心ブロックとそれ以外で、どのような違いを見せるかという視点で、石器組成を問題にすることができるよう。

広域分布資料15例について、中心ブロックごとに集計し全体の傾向をみてみよう(第12表)。第3ブロック外に中心ブロックを有する例、第6ブロックに中心ブロックがある例は、ともに資料数が各1例しかないので組成上の特徴より評価は難かしい。これ以外の資料では中心ブロックとそれ以外で石器組成が異なると考えなければならない要素に乏しい。中心ブロックの内にあっても外にあっても、トゥール類と剥片・碎片・石核との組成比は変わらない。すなわち、広域分布資料中に含まれる、分布上の突出資料に器種上の特別な区別はないと言なければならない。

個体別資料の分布の概況として確認しておくべきことは、ブロック内で収束するような方が全体の基調をなしているのであって、決して広域分布資料が見かけ上みせるブロック間の相互交流に特徴があるのではないということである。広域分布資料といえども、例外的な1~

第12表 広域分布個体の中心ブロック内・外別石器組成

中心ブロック	資料数 (個体別資料No.)	中心ブロック内			中心ブロック外			2点がブロック 外に遠く離れて 置かれているだけであって、特 定のブロックに 大部分の資料が 集中するのが実 態である。
		トゥール	剥片・碎片 石核	トゥール	剥片・碎片 石核	トゥール	剥片・碎片 石核	
1	13 (No.7・13・23・30他)	111点 (38%)	182 (62)	9 (39)	14 (61)			
3外	1 (No.75)	0 —	3 (100)	0 —	2 (100)			
4	3 (No.66・69・70)	11 (22)	40 (78)	0 —	7 (100)			
5	4 (No.79・81・83・86)	21 (21)	79 (79)	5 (36)	9 (64)			
6	1 (No.63)	4 (100)	0 —	1 (33)	2 (67)			
合計	22	147 (33)	304 (67)	15 (31)	34 (69)			

料が含まれているということ自体の意味は十分吟味しなければならない。この点について分布を通観する過程では適当な解釈を見出しえなかつたが、後節においてユニットの設定後、ユニット間の関係や、集落景観の復原にともなう機能空間の再構成作業において再度考えてみることにしよう。

(鈴木)

4) ブロックと剥片剥離個体別資料の分布

各ブロックの特徴あるいは類似性をさらに検討するために、ここでは本遺跡における剥片剥離作業の実施をより明確に示す19個体について、その剥片剥離作業域を特定するとともに、分布を見てみた(別添第14図)。

この図から、まずブロックによって個体数に大きな差があることがわかる。ブロックごとに見ると、第1ブロックが12個体(63%)であるのに対し、第4・5ブロックは各3個体(16%), 第6ブロックはわずかに1個体(5%)でしかない。これは石器総数で示される各ブロックの規模の違いとほぼ同じであると言える。第6ブロックを除くと石器総数では、第1・4・5ブロックがそれぞれ549点、99点、197点となり、第1ブロックが第4・5ブロックの3~6倍の規模である。すなわち、ブロックの規模の違いは、まさに剥片剥離個体数の違いであると考えることができるのではないか。

第二に、各ブロック内に二ヶ所の剥片剥離作業域のあることに気付く。第1ブロックでは個体別資料が多いだけにこの傾向がより顕著で、3D・E、4D・E区の交点付近と4E2・3区の二ヶ所に中心を求めることができる。第4・5ブロックでも傾向として捉えられるほど顕著ではないが、それぞれブロックの南西・北東部、南西・北西部に作業域を認めることができよう。第1ブロックは、その意味では第4・5ブロックの相似形、累積した様相を示していると言える。

このような第1ブロックの大きさ、すなわち剥片剥離作業量の多さは何に由来するものであろうか。鍵の一つは、累積の単位として考え得る第4・5ブロックの性格であろう。さらに累積の契機の捉え方であろうが、いずれも総合的な判断を要する。他の情報が蓄積された段階で再考したい。

(山下)

4. 接合個体別資料の分布

個体別資料中の接合資料に限定して、分布の概要を検討してみよう。個体別資料は非接合資料と接合資料とからなるが、非接合資料の場合は、これが必ず接合資料群と同一の個体に属するかどうかの決め手に欠くと言わざるをえない。それは極端な場合、単に石材の特徴が似ているにすぎない、いわば他人の空似であることもあるし、認定の精度は遺跡それぞれの石材の性質にも左右される。

黒曜石やサスカイトなどから成る石器群の場合は、チャートや頁岩などよりも一般に認定が困難であるし、認定が相対的に容易なチャートや頁岩の場合でも、その石材のもつ特徴によって難易度に差があることは経験上誰しも知っている。

非接合資料は、その条件によって、接合資料とほとんど同じくらいの認定の精度を有するものから、どれほど判定作業に意を注いでも、他人の空虚を含まざるをえない場合がある。幸いにして当遺跡の場合、構成石材の主体がチャートと鉄石英であって、個体別資料の判定は容易な部類に属するが、それでも上記の不確定要素を完全にぬぐい去ったとは理屈上言い切れない。

したがって、個体識別という作業方法が、集落分析にとって有効な手段であればあるほど、非接合と接合資料との区別は厳密になされることが望ましい。このような理由によって、ここでも両者を区別して観察する。本来ならば、確実な接合資料による資料提示とその分析作業を優先させ、これに非接合資料を含む個体別資料全体の分析結果を照合させるという手順が原則的に用いられるべきである。しかしながら、接合資料に限定した場合、分析対象の数量がかなり限定されるという現実もある。またデータ作成の過程やこの記述の過程で両者を厳密に区分けして実施するのは繁瑣でもある。

ここでは、個体別資料全体での観察所見を接合資料群の検討結果と照合し、食い違いの生じた場合には、接合資料によって得られた確実な事実を重視するという手順を踏むことにしたい。資料提示に際しても、両者を常に同時に提示するのではなく、必要に応じて非接合・接合資料の区別を明らかにしていくことにする。

結論から先に述べると、個体別資料全体から実施した分布上の観察所見と、接合資料だけから検討した場合とで相違する点はない。特に複数ブロック間に分布する広域分布資料は、接合資料によっても明らかに存在していることが注目される(別添第15図)こうして、遺跡内に直線的に連なる複数ブロック間を結ぶ長大な接合関係と、一方で中心分布図から窓われる個体別資料分布のブロック内収束の原則との、いわば一見矛盾するような関係をどう理解するかが、当面の課題となろう。

(鈴木)

5. ブロック間関係

個体別資料の分布を概観するなかで、そこには、分布範囲の上で対称的な二群の存在することが知られた。一つは、ブロック内およびその周辺で収束する狭域分布の一群であり、他の一つは、ブロック間にまたがる広域分布群であった。後者は、個体別資料中の15例の広域分布個体別資料として認められ、接合資料中の4例の中にも同様に確認されたところであった。ところが中心分布図からは、きれいに広域分布資料群が消えているという、見逃せない重要な事実も一方にはあった。

また、ブロック内・ブロック外の12の区分単位ごとに石器組成を比較し、そして、ブロック内とブロック外の2区分の比較においても、石器数にこそ差はあれ、石器の構成内容には基本的に差がないというのが大勢であった。このように、石器構成上に差を見出しえないという意味でそれぞれが等価であり、単位的・独立的であると見なしうるブロック間の関係は、個体別資料の共有・接合関係と中心分布図の示すあり方とどのような関わりを有しているのであろ

うか。

このために、個体別資料群と接合資料群ごとに、ブロック間の関係を数値化してみておく必要が生ずる。これによって、広域分布接合資料中の突出分布資料と中心分布域中の石器との関係を検討する。この後に当遺跡における世帯ユニットの抽出とユニット間の関係の理解へと進んでいきたい。

1) 個体別資料から見たブロック間の関係

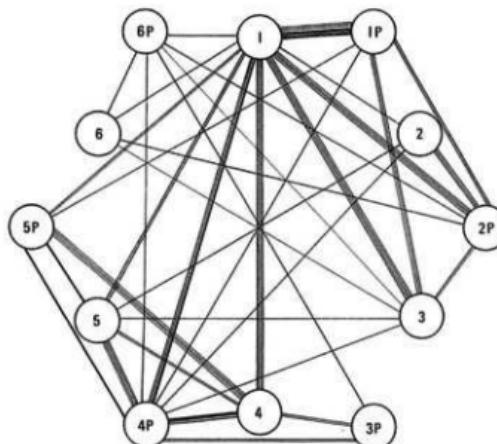
A) ブロック間共有関係

はじめに、89例の個体別資料について、それぞれがブロック間にどのように共有されているか、また各ブロック内で分布を収束させる例はどれほどかを検討する。特定の二つのブロック間に存する共有関係を、資料数の多寡とは無関係に、共有関係1として集計し、1本の線として作図する。その具体的方法については参考文献に譲る(山下1982)。

図表から諒解されるように、一つのブロックの内と外、ブロック間相互に、個体別資料の共有関係が多数認められる(第13表、第73図)。これらを整理してみると、まず目につくのは、第1ブロックとその周辺、第4・5ブロックとその周辺との間に交された多数の共有関係である。つぎに目につくのが、遠距離のブロック間関係である。第1・4ブロック外間の7本、第1・3ブロック間、第1・4ブロック間の4本がそれである。第3番目は、第6・6ブロック外が他のブロックに対し、少數ながらも均等に関係を結んでいることである。隣接ブロック間関係に対して、遠く隔たったブロック相互に、意外に強い連絡があるという印象を受ける。

同一のブロック内とブロック外の関係は、もっとも近接した区域同志の位置関係にあるので、共有関係の強いのも当然である。このことは、一つの個体別資料の分布範囲の一角がブロックラインをしばしば飛び越すことがあることの現われでもある。したがって、遺物の集中部と遺

第13表 個体別資料のブロック間共有関係表



第73図 個体別資料のブロック間共有関係図（細別ブロック）
太線：0.1、中太線：0.05、細線：0.01（以下74図まで同様）

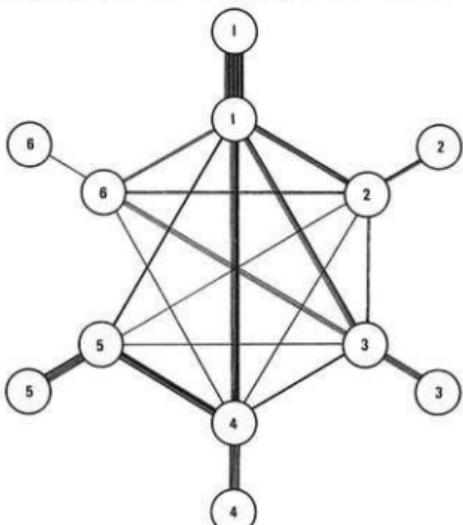
の単位として図化すると、隣接ブロック間の関係の方が、遠距離のブロック間関係よりも、総じて強いことがはっきりしてくる。それでも、第1・4ブロック間、第1・5ブロック間という遠距離ブロック間には、相変わらずかなり強いつながりが見出される。第6ブロックが、他ブロックとの間に均等な関係を有していることにも変化がない。

B) ブロック間相対強度と相互強度

視覚的にもかなり明瞭に捉えられた関係は、その評価において大きな問題がある。つまり、個体別資料の共有関係数の多少は、ブロック自体の資料点数の多寡に左右されること、また、共有関係を有するブロック間で石器の構成点数に大きな差があった場合、それぞれのブロックにおける共有数のもつウエイトには、石器

物のまばらな外縁部を一つの単位として見、この単位間の共有関係を検討するという観点からは、むしろ、ブロックの内と外を一つの単位とする大別ブロック区分によって方が、遺物の空白部を挟んだ遺物集中分布域間を比較するという意味での、ブロック間関係を追求するには好都合である。このような理由によって作られたのが、第74図である。

第73図と比較して単純化され、すっきりしたものとなっている。ブロックとその周辺のブロック外域を括って一つ



第74図 個体別資料のブロック間共有関係図（大別ブロック）

第14表 個体別資料からみたブロック(大区分)間相対強度

石器点数 ブロック	424 1	15 2	15 3	88 4	132 5	8 6	保有数に逆比例する関係が生じることになる。 このような問題点は別
1	0.710	0.052	0.122	0.100	0.013	0.001	稿に詳しく述べられて いるし、この解決策と して相対強度ならびに 相互強度の算出による 方法が考案されている (山下1982)。
	0.843	0.228	0.349	0.316	0.114	0.032	
2	0.233	0.645	0.045	0.022	0.022	0.033	以下、相対強度と相 互強度によって、共有 関係図の真の意味を問 い直しておこう。まず
	0.483	0.803	0.212	0.148	0.148	0.182	
3	0.133	0.033	0.500	0.233	0.033	0.067	相対強度による 相互強度の算出による 方法が考案されている (山下1982)。
	0.365	0.182	0.707	0.483	0.182	0.259	
4	0.108	0.006	0.170	0.551	0.159	0.006	相対強度による 相互強度の算出による 方法が考案されている (山下1982)。
	0.329	0.077	0.412	0.742	0.399	0.077	
5	0.205	0.003	0.008	0.254	0.531	0	相対強度による 相互強度の算出による 方法が考案されている (山下1982)。
	0.453	0.055	0.089	0.504	0.729	0	
6	0.156	0.156	0.219	0.063	0	0.406	相対強度による 相互強度の算出による 方法が考案されている (山下1982)。
	0.395	0.395	0.468	0.251	0	0.637	

横列に見る。ゴックはブロック内分布率。下段は幾何平均。

相対強度を検討しよう(第14表)。問題は、ブロック間共有関係図に示されたブロック間のつながりの強さが、石器構成数に大きな差のあるブロック個々にとってどれほどのウェイトがあるかという点と、個体別資料の分布における自己のブロック内完結率にある。詳細は表に譲るとして、石器構成数最大の第1ブロックと最小で隣接する第2・6ブロック間の関係をながめてみよう。

第1ブロックにとって第2ブロックとの個体別資料の共有関係の強度(幾何平均)は0.228であるのに対して、第2ブロックにとっての第1ブロックとの共有関係の強度は0.483で、2倍以上のウェイトを占めている。同様に、第1ブロックにとって第6ブロックとの共有関係のウェイトは0.032にすぎないが、この逆の関係は0.395であって、12倍程の重みがある。第1ブロックにとって、第2・6ブロックとの関係は小さなものであっても、逆の関係は重大であるということになる。

これと同時に、第1・2・6ブロックそれぞれで、他ブロックとの関係でどのブロックが重要かをながめてみる。第1ブロックに対しては第3ブロックが、第2ブロックに対しては第1ブロックが、第6ブロックに対しては第3ブロックが一番重要な共有関係をもつ相手ということになる。

次に、ブロック内の分布率に目を移してみよう。これは、接合資料における場合(第17表)より相対的に低く41~71%の値を示している。ただここで重要なのは、隣接ブロックまで含めて集計してみると、いずれもほぼ75~90%の分布の完結度を示しており、遠距離の分布の共有関係のウェイトは低いことが分る。この点については、接合資料においても同様である。

接合資料よりも個体別資料のブロック内分布率が低いのは通例のことである。接合資料に限定した場合よりも、非接合を含めた個体別資料全体の方が構成点数が増すので、その結果、必然的に分布範囲が広くなり、他ブロックへの分布率も増加するというわけである。しかし、こ

ここで重要なのは、非接合資料故にたまたま偶然によく似た資料をも含み込んでしまっている可能性を否定しきれないことであり、この点が個体別資料の評価の難しいところである。

原則論から言えば、同一個体であることの確かな接合資料からブロック間関係を言及するか、または接合資料と個体別資料の双方の検討でともに確認されたブロック間関係だけを確かなものとして扱うのが堅実な方法であるということになる。それ故に、接合資料だけに限定した分析と非接合資料も含めた全個体別資料の二つの次元でブロック間関係が追求されなければならないわけである。

いささか横道にそれたが、自ブロック内での収束率と他ブロックとの共有関係について、もう1点触れておこう。それは、他ブロックとの距離関係に比例して、個体別資料の分布(共有)関係が増減しているかどうかという点である。概して近いブロックとの間に強い共有分布関係を有する。この限りでは、先に述べたように、自己のブロックと隣接ブロックを合せると75~90%ほどの分布の完結度を示すことと同様の脈絡の中にあるが、細かくみるとそれほど単純ではない。

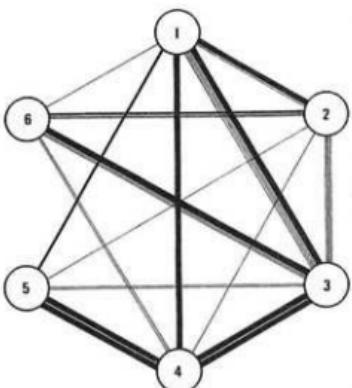
第1ブロックでは、第2ブロックよりも第3・第4ブロックの方が高い値を示す。第3ブロックも、第2ブロックより第1ブロックの方が高い。第4ブロックでは、第2ブロックよりも第1ブロックとの間に高い値を示す。第5ブロックも第3・2ブロックより第1ブロックの値が高い。このような現象は、接合資料における第1ブロックにも同様の例を指摘できるが、その様子は異なっている。ここにおいても、接合資料と個体別資料の取り扱いに関する問題が関わっている。

さて、相互強度に移ろう(第15表・第75図)。ここでは、13の値のうち、1番目と2番目の強い関係は、第5と第4ブロック間、第4と第3ブロック間の近接ブロック同士だが、3番目に第1と第3ブロック間、4番目に第3と第6ブロック間、5番目に第1と第2ブロック間、6番目に第1と第4ブロック間、7番目に第2と第6ブロック間、8番目に第1と第5ブロック間の関係が位置する。第3・4・5の近接ブロック間の関係が一番強固だが、第1ブロックと第3・4・5ブロックとの間の遠距離ブロック間の関係および第6と第2・3ブロック間関係が中位の順位にあることは注意されよう。

この点を接合資料と比較してみると(第18表)、1番目に第6・2ブロック間が登場し、さらにこの第6ブロックは、第3・4ブロックとの間に4・5番目の順位を占めていることは見

第15表 個体別資料からみたブロック間相互強度(幾何平均)

ブロック	1	2	3	4	5	6	の近接ブロック間関係
1	—	—	—	—	—	—	は、個体別資料における
2	0.110	—	—	—	—	—	ると同様に緊密な関係
3	0.127	0.039	—	—	—	—	だが、個体別資料では
4	0.104	0.011	0.199	—	—	—	中位にランクされた遠
5	0.052	0.008	0.016	0.201	—	—	距離の第1・4ブロック
6	0.012	0.072	0.121	0.019	0	—	



第76図 個体別資料から見たブロック間相互強度
(幾何平均)

ク間関係が、接合資料では最下位に落ちていることに注目せざるをえない。第6と第2ブロックとの関係は、特異なものであって、第6ブロック中の剥片が総計2点しかなく、第2ブロック中にも8点しかないという最少量資料間の関係であることに原因する可能性も捨て切れない。近接ブロック間の関係以外は、接合資料との間に大きなギャップを認めないわけはない。

以上、個体別資料について様々な観点から検討してきた。この中で、適宜接合資料のみから検討した場合との相違点も記した。これらの相違点は、次項の接合資料の説明でもありのままの姿として語られることになるが、ユニットの設定に向けて問題点を整理していく中でどちらをとるべきかの判断を加えていくこととする。

2) 接合資料から見たブロック間の関係

A) ブロック間接合関係

接合資料のブロック間共有関係の検討にあたっては、個体別資料中に存する複数の接合群を独立した単位とみなして集計をする。したがって、接合個体別資料数は61だが、接合群数は97ある。集計にあたって、接合例のうち所属ブロック不明資料は除外する。また、2点の接合例の場合1点が所属ブロック不明であれば、2点とも集計に加えない。もう一つ問題になるのはⅡ種接合の扱いである。たとえば、4片から1点の剥片となる場合だと、4片がすべて同一ブロック内に分布する場合は4片で1点の剥片と集計し、複数ブロックにわたる場合は、各ブロックに1点ずつ剥片が存在するとする。

細かな数字は第16表にゆずり、共有関係図に目を移そう。ブロックを12に区分した細別ブロックでは、まず第1ブロックの内と外との間の14本が目につく(第76図)。ついで、第4ブロックの内と外の5本、第5ブロックの内と外4本の順となる。各ブロック内の本数は表示しているので、これも同時に参照すると、ブロック内および同一ブロックの内と外という接合関係が圧倒的であることが分る。そして、ブロック間の接合関係がわざながら加わっている。

大別区分によるブロック間の共有関係図(第77図)に目を移すと、この事実は更に明瞭となり、ほとんどの共有関係はブロック内において収束し、第4・5ブロック、第3・4ブロックの隣接ブロック間に、すなわち短距離の接合共有関係が主体を占める。これに対し、遠距離のブロック間関係は、第1・3ブロック間、第1・4ブロック間、第3・5ブロック間、第4・6ブロック間ということになる。

接合資料数は個体別資料数よりも相当減り、したがって図示されるブロック間の共有関係数

第16表 接合資料のブロック間共有関係表

石器点数	205	15	1	7	10	5	43	14	58	7	1	1
ブロック内 収束接合群数	53	0	1	2	2	0	1	3	6	0	0	0
ブロック	1	1外	2	2外	3	3外	4	4外	5	5外	6	6外
1		14	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—
1外		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
2		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2外		—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
3		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
3外		—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	1
4		—	—	—	—	5	—	1	—	—	—	—
4外		—	—	—	—	—	—	1	2	—	1	—
5		—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—
5外		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6外		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

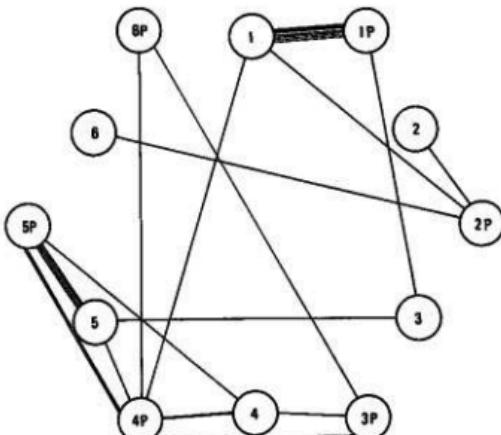
も減少することは当然のことである。それにしても、接合資料による接合共有関係は、個体別資料の分布範囲図(別添第12図)にみられた広域分布資料のあり方から一見して受ける、遠跡内で多数の資料が交錯的な動きをしているという印象よりも、かなり限定的でむしろ中心分布図(別添第13図)のあり方に近い姿を示していると言ってよい。

さて、接合関係図はブロック間の石器構成数の格差などにより、その間の関係の強度を正確に現わしにくいことは、個体別資料の項でも述べたのと同じである。したがって、ここでも相対強度による検討に移ろう。

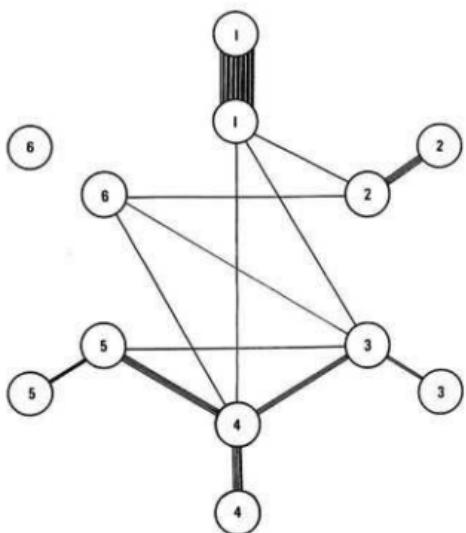
B) ブロック間相対強度と

相互強度

それでは相対強度と相互強度の説明に移ろう。ここでの意図は、接合個体別資料中にある広域分布資料が全体に占めるウエイトの意味と、接合関係から見た場合、構成資料数の異なるブロック間のどのブロックとどのブロック間の関係が真に強固なものであるかを評価することにある。そこでまず、相対強度表(第17表)の接合率を検討しよう。



第76図 接合資料のブロック間共有関係図(細別ブロック)



第77図 接合資料のブロック間共有関係図(大別ブロック)
価は難しいところがある。

それ以外の第4・5ブロックでは、3~4割程度がブロック外に出ていることになる。こうした数値の評価に関して、もう一度表に目をやると、重要な事実に気付く。すなわち、いずれのブロックでも、隣接したブロック内に分有されている接合資料を加えてみると、ほとんどが隣接ブロック域までの範囲で分布を完了していることである。この傾向と若干異なるのは第3ブロックの例で、第1・

5ブロックなどの違い
ブロック内にもある程度の分有資料をもって
いることであろう。
ここでもう一つ注意
されるのは、第2から
第6までのブロックで
は、中心のブロックか
ら遠くなるほど分有資
料が減少するとい
うことである。これは近接
ブロックまでの範囲内

自己のブロック内で接合の完結する例を持たない第6ブロックは別にして、他のブロックでは54~97%までの値を示している。第2ブロックの75%を別にすると、構成点数の多いブロックほどブロック内での接合関係の収束率が高いことになる。100%という値を示せば、石器の製作から遺棄までの過程が同一ブロック内で完結したこと示す。これ以下の場合は、多かれ少なかれ他ブロックへ移動した資料があるということになる。しかしながら、ブロックの構成個体別資料数がもともと少ない第2・3・6ブロックなどは、接合資料数もさらに少なくなるわけで、評

第17表 接合資料からみたブロック(大区分)間相対強度

石器点数 ブロック	173 1	8 2	13 3	38 4	43 5	2 6
1	0.965 0.982	0.005 0.070	0.012 0.110	0.017 0.130	0 0	0 0
2	0.125 0.354	0.750 0.866	0 0	0 0	0 0	0.125 0.354
3	0.077 0.277	0 0	0.538 0.733	0.230 0.480	0.077 0.277	0.077 0.277
4	0.026 0.161	0 0	0.224 0.473	0.566 0.752	0.171 0.444	0.013 0.114
5	0 0	0 0	0.023 0.152	0.290 0.539	0.686 0.828	0 0
6	0 0	0.500 0.707	0.250 0.500	0.250 0.500	0 0	0 0

横列に見る。ゴチックはブロック内接合率。下段は幾何平均。

ではとんど接合関係を

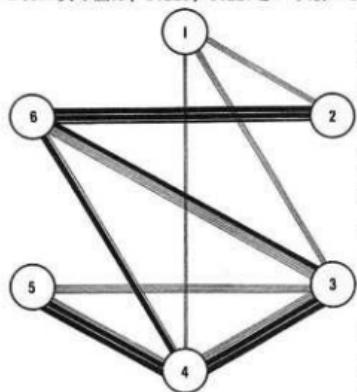
第18表 接合資料からみたブロック間相互強度(幾何平均)

完結させるということ	ブロック	1	2	3	4	5	6
と同じ意味合いの現象	1	—	—	—	—	—	—
と解せられるが、第1	2	0.025	—	—	—	—	—
ブロックではこうした	3	0.030	0	—	—	—	—
関係と逆の傾向を示し	4	0.021	0	0.227	—	—	—
ている。	5	0	0	0.042	0.239	—	—
	6	0	0.250	0.139	0.114	0	—

第1ブロックでは圧倒的な接合資料が自ブロック内で分布を完了させるが、残余の部分は遠くに行くほど分有関係を強めるということである。これは、個体別資料No.7・50などの遠距離接合例を有するためと考えられるが、他のブロックとは際立った対照をみせていることも事実である。しかしながら、この比率も1%以下の数値の問題であって、それほど強調する必要もないかもしれない。

いずれにしても、上記の結果は個体別資料にしろ接合資料にせよ、遺跡全体に広く分布する個体が存する一方で、自ブロック内で完結する比率がかなり高く、そういう意味では、当遺跡の個体別資料のブロック間の分布関係の本来の姿が、中心分布図にあらわされた姿ともっとも近いということもできる。すなわち、第1ブロックから遠く第3・4ブロックに伸び出す接合資料、また位置不明資料を含むため図にはあらわれないが、No.83に典型的なように第5ブロックから、対極の第1ブロックまで飛び出すような例が個体別資料にあるにせよ、これらは極めて稀なケースであって、当遺跡の本来のあり方とは遠くかけ離れたものと理解すべきであろう。

ブロック間の相互強度に移ろう(第18表、第78図)。ここで最強の関連にあるのは、第2・6ブロック間の0.25である。しかし、両者は資料数が極端に少ないので問題なしとは言えない。これに次ぐ値は、0.223、0.227という順になる。この関係は、隣接ブロック間の関係であって

第78図 接合資料から見たブロック間相互強度
(幾何平均)

上記の説明と整合的である。その他で注目されるのは、第6ブロックと他のブロックとの関係が意外に強いことである。個体別資料の分有関係でも同様のことが言えることから、同ブロックは一直線に並んだブロックの配置関係から1ヶ所だけ外れながらも、他のブロックとの間にそれなりに強い関連を有していると見るべきであろう。第3・4ブロックとの間に長距離接合関係を有する第1ブロックは、これらのブロックとの相互強度において最低の関係しか有していない。相対強度での説明と同様にこの長距離接合(広域分布)資料に、視覚的印象ほど大きなウェイトを置くべきではなく、これらがむしろ特殊な例であるとして対処す

べきことを示唆している。

(鈴木)

第9節 小 結

1. 石器群の特性

1) 石 器

本遺跡から出土した先土器時代の石器1121点の内別けは、ナイフ形石器4点、スクレイバー8点、尖頭器様石器1点、石斧1点、敲石1点、櫛石1点、R F 25点、U F 264点、剥片587点、碎片163点、石核66点である。このうち尖頭器様石器は、形態から判断して他と同じ石器群に属すると考え難いため、個別に扱った。

4点あるナイフ形石器のうち、技術形態的に問題のないのはおそらく第21図3の1点のみであろう。他の3点はいずれもプランディングのあり方に問題があり、非典型的なものである。しかしその中でも4点に共通の要素を求めるれば、縦長の素材を利用する点と片側縁から先端にかけてプランディングを施し、打面は素材のまま残す点であろう。

スクレイバーはそれほど安定した器種とは考えられない。8点と点数的にはまとまって見えるが内容はそれほど充実してはいない。刃部の作りが不十分なものが多い。そのような中で、わずか2点ながら第21図5と第22図11には安定した凹状の刃部が作出されており注意を引く。素材はいずれも不定形から横長剥片である。

石斧(第32図3)は問題のある資料である。横長厚手の剥片を素材とし、一部に調整を加えただけで石斧に仕上げている。縄文時代のものとしても先土器時代のものとしても特異な形にを呈する。出土位置も両時代のものが重複分布する6 D21区に当っている。より企画性の乏しいと考えられる先土器時代の中で説明したが、明確な判断の規準はない。さらに言えば、石斧としての形態そのものも問われる資料であろう。

敲石・櫛石(第32図1・2)は各1点出土したに留まる。使用の痕跡は微弱である。

R Fは、一種の分類の吹き溜りである。何れとも決し難いが、明らかに意図的と考えられる加工のあるものは全てここに含まれる。特に問題になると思われるA・B・C類について触れる。

A類は4点である(第24図1~4)。ここには大型剥片の一部に幅1~3cm程の大きな剥離痕を留めるものがまとめられている。この大きな剥離痕の内側には、さらに小型の剥離痕が連続するというようなことはなく、凹刃のスクレイバーである可能性は少ない。むしろ剥離痕の大きさやそこにさらに加工が施されない点を考えると、後述する石核F類に酷似する。これが石核であるとすれば、石核F類ともども問題となるのは、ここから剥がされた剥片を使ったトゥールが皆無な点である。U Fになった可能性までは否定できないが、こうした石核の多さを考えればもう少しパラレルな対応関係を持つトゥールがあつていいようにも思われるのである。

B類はプランティング様の加工痕を持ちながら、加工そのものに難があるためにナイフ形石器とはしなかったものである(第24図5～第25図9)。特に、加工の角度と連続性に問題がある。素材には縦長・横長剥片とも含まれるが、剥離方向を無視すれば長いものを使用している。一部に刃部となるべき部分も残しており、ナイフ形石器のバリエーションとして考えることも可能であろうか。加工部位は、長いものを縦位置に置いた時の基部に当るものもある。

C類もB類に近い性質を持つと考えられるが、本類に属する2点(第25図10・12)間には、加工技術上著しい共通点がある。両者共片側縁のはば全縁にわたって表裏から加工が施され、他の一側縁に未加工の刃部を残すのである。加工の角度は緩く剥離が大きいために、加工された側縁は表面から見ると鋸歯状になり、側面から見るとジグザグである。機能的にはナイフ形石器の一部と似るように思われるが、技術的には異なる性質のものであろう。

UFは264点あるが、分析が不十分であるために個別の問題は浮上していない。

剥片・碎片・石核は、むしろ剥片剥離技術との関係で主として問題となる。剥片では、ほぼ完全に長幅比1.5:1～1:1.5の間にに入る不定形剥片を取っているにもかかわらず、数少ないナイフ形石器を見るとその中から縦長のものを選んで利用している点を指摘するに留めておく。

石核では、本遺跡の中心的位置からは外れると考えられるE類について述べておく。石核E類は2点発見されている(第36図17・18)。共にサスカイト製であるが、従来の知見からすると“櫛石島技法”によるものと判断される。厚さ1～1.5cm位の剥片を素材とし、その周囲の表裏から幅2～3cm、長さ1～1.5cm程の横長の剥片を取っている。ここから取られた剥片を利用したトゥールは未発見である。

以上、本遺跡では安定して発見されるトゥール類は少ないが、一応の基本的な道具組成はナイフ形石器、スクレイバーを中心に、わずかな石斧・敲石・槌石と数多くのRF・UFが加わったものと考えておきたい。また、機能的な分析が不十分であるために問題はあろうが、光沢ある石器を多量に含んでいることも忘れてはならない。重要な文化的な表徴である可能性もあるう。

2) 石材

本遺跡における石材選択は、特異な様相を示している。石質別石器点数から諒解されるように、鉄石英590点、52.6%、玉髓203点、18.1%と、両者で70%を占めている。他の主だったものは、チャート272点、24.3%、頁岩45点、4.0%である。遺跡の位置から考えて、サスカイトが相当量含まれているはずとの予測からすると、大変な見込み違いである。揖津・播磨地方は言うに及ばず、至近に当る板井寺ヶ谷遺跡においても40～60%はサスカイトで占められている(山口1985)。

それでは三田盆地北縁部に特別に鉄石英・玉髓が豊富かと言うと、決してそうではない。発掘調査中、その後を通じて、何度か原石を求めて歩いたが、決して潤沢に産する訳ではなく、むしろ段丘疊層や神戸層群中に稀に産するのみである。周囲の基盤岩に当る有馬層群中に豊富

にある訳でもなく、母岩の形状から転石を利用していることは確實である。段丘疊層中などにはむしろチャート類が豊富で、自然疊のおそらく50~60%以上を占めると考えられる。それらは格別に質が悪いものではなく、何%かは十分に石器に利用できるものであるし実際に遺跡でもチャートが24%を占めている。このような環境の中にあって何故ことさら鉄石英・玉髓を多用しなければならなかったのであろうか。

理由の第一には、やはり文化的な伝統を考慮する必要があろう。しかし実際には遺跡周辺にこのような石材利用を示す例は皆無である。鉄石英を多用する先土器時代遺跡は、おそらく最も近い例でも富山県の立野ヶ原台地に至るまで求めることはできない。また、立野ヶ原に認められるこうした石器群が、型式的に本遺跡のものに通じるかと言うとそうでもない。石材の選択と言う側面を除くと両者にあまり類縁性を求めるることはできず、文化的には別のものと考えた方がよさそうである。そうであるとすれば、現状では溝口遺跡を地域的現象と考えるしかない。確かにチャートの利用率の方が鉄石英より少ないと言う不可解な側面はあるが、石器群の持つ特異性とともに在地産の石材を多用する地域性が現われていると考えたい。

3) 剥片剥離技術

先に述べて来た石材・剥片・碎片・接合資料等の特徴をまとめて、剥片剥離技術全体の説明をしておきたい。原石の形状から残核に至るまで、順を追って説明する。

原石には円疊を用いている。直径は5~20cm近いものまであるが、大型のものについては原石を分割したり、そこから取られた大型剥片をさらに石核に転用する例がある。

剥片剥離作業の開始に当って、意図的に打面を作出しようとする傾向は全く窺えない。最初の打撃を疊表に加えると、その剥離面に次の打点を移すではなく、そのまま打点を後退させて疊表から連続して剥片を取ることが多い。このような傾向は、剥片剥離作業の最終段階まで認められ、隣接して剥離面があり、打面としても有効と思われる場合でも疊表を利用している場合がある。このように、打面と剥片剥離作業面との機能的な識別が不鮮明であるためか、打面の転移も任意性に富む。打面をそれまでの作業面に90°ずつ移して行くとか、上・下に180°移すと言った法則性は全く認められない。剥離面・自然面を問わず、自由に打面を移動している。意図的な打面調整・再生、頭部調整、体部調整などは全くない。

取られた剥片は圧倒的に不定形剥片が多く、わずかに縦長・横長剥片が含まれる。量的に見て縦長・横長剥片が目的なものとは考えられない。しかし一方では、わずかに4点のナイフ形石器ではあるが、それらには縦長のものが使用されており、選択性も窺われる。偶然に取れる縦長剥片を選んで利用することはあっても、そのためには技術基盤そのものが改変されるまでには至っていないようである。また、各種の調整技術が未発達であったことと相俟て、必然的に碎片の生産量も少なかったと考えられる。

残核の形状はバリエーションに富んでいる。A~Fの6類に分けたが、うちA~Dの4類は一連の工程の諸相を示すと考えられた。数枚の剥片を取ったのみのものから、剥片を取り尽したもの、個体の中心となる石核から剥片素材のものまである。この他、わずか2点ではあるが

"櫛石島技法"による石核が認められる(E類)。さらにこの石核との関係が問われかねない、小型の横長～不定形剥片を取る石核F類が4点ある。これらはRFのA類とも酷似する。

以上、全体としては石刃技法が完全に欠落し、不定形剥片を取るための技術基盤を主体とする。これに、わずかの横長剥片剥離技術が混じると言うのが実態であろう。

4) 編年的位置

本遺跡はトゥール類の組成に乏しく、かつ剥片剥離技術も独自性が強いために、総体として他の遺跡と比較することは難しい。以下、特にナイフ形石器の形態・スクレイパー・剥片剥離技術に目的を絞って検討し、およその時間的位置を推定してみたい。

まず、直接的に年代を指示しうる可能性を持つ火山灰の分析を見てみよう。結果は、石器群がI・II層に含まれるのに対し、アカホヤ火山灰はI・II層に、姶良Tn火山灰(AT)はI～IV層に含まれていた。ピークは前者がI層、後者がI層とII層にあった。その結果I層かII層にアカホヤの降灰があり、V層はATより古かろうと結論されている。I・II層とATとの関係は不明となっており、この結果からは石器群が縄文時代か先土器時代かも知ることができなかった。

次に、瀬戸内と中国山地に分けて先土器時代石器群の特徴を見てみよう。溝口遺跡は地理的には瀬戸内寄りとも見えるが、山間部の遺跡という意味から立地としては中国山地的である。

瀬戸内地方面について、まずATより新しい石器群を見ると、それらは瀬戸内技法あるいはその系譜を引く横長剥片を取る伝統が強く認められる。また、それらのサヌカイトの使用頻度も極めて高い。一方ATを確実に遡る遺跡は未発見で、様相は不明である。瀬戸内地方面に数多い遺跡が全て2.1万年より新しいとは考えられず、一部にさらに古いものが含まれている可能性は否定できないが、現状ではこうした遺跡を積極的に抜き出すことも難しかろう。しかし瀬戸内からは外れる可能性もある板井寺ヶ谷遺跡下層から出土した横長剥片石核が2.4～2.5万年前と測定されている(兵庫県教育委員会1984b、山口1985)ことを考えると、瀬戸内地ではすでにその頃には横長剥片を取る伝統が成立していた可能性は高い。その成立の時期はわからないが、瀬戸内地ではこうした技術が2.5万年前以後主流を成したとも考えられよう。

中国山地では、ATより新しい石器群はあまり発見されていない。野原遺跡群早風A地点上層(平井1979)、冠遺跡B地点(梅本1983)、恩原遺跡(稻田1986a,b)、板井寺ヶ谷遺跡上層(山口1985)などが掲げられようが、それぞれに独特な様相を見せており一貫性には乏しい。ナイフ形石器から見れば、それぞれウワダイラ型や宮田山型、井島I型との類縁性が検討されており、編年的に縦に序列される可能性が強い。いずれにしても本遺跡出土の石器群に通じるものではない。

AT以前のものとしては、板井寺ヶ谷遺跡下層、春日七日市遺跡(藤田1985)、戸谷遺跡第5地点(鎌木他1984, 1986)、早風A地点下層、地宗寺遺跡(三枝1982)、下本谷遺跡(中田1980)、桑原1981)、樺井1983)、西ガガラ遺跡第2地点(藤野1986)、恩原遺跡などがある。これらは石器組成・剥片剥離技術等を参考に、大きく二分することができる。A)寺ヶ谷、七日

市、戸谷、早風Aグループと、B)地宗寺、西ガガラ、下本谷グループである。いずれも理科学生年代としては2.3~2.5万年前位と考えられ、在地産の石材を多用するという共通性を持つ。

A)グループは、長幅比1.5:1前後の縦長剥片を素材にした一側縁あるいは部分加工のナイフ形石器を主体に、一部に二側縁加工の切出形に近いものも含む。打面は大きく残すことが多い。スクレイバーと局部磨製石斧を安定して伴なう。整然とこそしていないが、やや縦長の剥片を生産する技術が基盤となっており、打面と作業面の機能的な分化も明瞭である。恩原遺跡では茂呂型に近いナイフ形石器の存在が知られており本グループに含まれる可能性もあるが、詳細は未発表である。

B)グループは、不定形剥片の生産を技術基盤とする。縦長・横長剥片も得られるが、それらが主流となることはない。地宗寺遺跡には径5cm位の盤状剥片を利用し、その表裏から小型の横長剥片を取った例もあるが、同時に未発見ながら盤状剥片を剥がした石核もあるはずである。トゥールへの利用度からは、後者の石核から剥がされた剥片がスクレイバーになることが多いようである。明らかに小型の横長剥片を素材としたトゥールは未発見である。石器組成は三遺跡ともに違いがある。地宗寺ではナイフ形石器・各種スクレイバー・楔形石器、西ガガラではナイフ形石器・スクレイバー・石斧、下本谷では楔形石器が発見されている。資料数が少ないとか部分発掘であるために、組成の全容が現われていない可能性が強いが、帰属年代を考えるとナイフ形石器・スクレイバー・石斧が基本的な組成と考えられよう。A)グループとの根本的な違いは剥片剥離技術にあると言えよう。

A)・B)のこのような区分に遺跡の空間的位置を考えると、あたかも中国山地が東半のA)・西半のB)によって分有されているかに見える。しかしB)グループの資料的不十分さに加えて、双方の空間的広がりも不明瞭である。ここでは、中国山地の2.3~2.5万年前にA)・B)二つの、剥片剥離技術基盤を異にするグループがあった可能性を確認するに留めておきたい。

さて、中国山地・瀬戸内地方の以上の状況の中で溝口遺跡を考えようすると、最も参考になるのは中国山地B)グループであろう。溝口遺跡の、不定形剥片の生産を技術基盤とし、わずかのナイフ形石器と各種のスクレイバー・不整形ながら石斧を持つという特徴は、まさにB)グループと符合する。不定形剥片の生産以外に、小型横長剥片を取る技術をあわせ持つ点も似ている。最も資料の豊富な地宗寺との技術基盤における異和感は、地宗寺が安山岩の亜角礫を原材とし溝口が鉄石英・チャート・玉髓などの円礫を利用しているため、見かけ上の違いとも考えられる。しかし一方では、ナイフ形石器の形態上の差とか、この比較で重きを占める剥片剥離技術分析の基盤資料たる接合資料や石核がB)グループに少ない点が問題となることは否めない。このような問題を残しつつも、B)グループとの類似という意味では溝口遺跡の年代的上限を推定しうるかと考える。縦長剥片剥離が主流となっていた中国山地において、不定形剥片剥離技術を背景とした文化が残存できた最も新しい段階として、AT直前の2.3~2.5万年前を推定しておきたい。

それでは下限はどのように考えることができるであろうか。瀬戸内・中国・近畿地方では、先に問題とした A T直前の石器群よりさらに遡る段階の様相はほとんどわかっていない。資料としては戸谷遺跡(鎌木他1984)の疊層出土のものが考えられるが、A T直前の一群との技術的懸隔がはなはだしく、相互間の検討はあまり意味をなさない。

そこで話をもっと一般化すると、約3万年前を境に、初級的なナイフ形石器の出現とともに、縦長剥片を組織的に生産するようになると言わわれている。そしてこの原資料となる立川ローム層下部第X層にも、縦長剥片剥離技術と不定形の剥片を取る技術が並存している。もし技術的な発展を不定形剥片剥離から縦長あるいは横長剥片剥離へと一系的に考えることが許されるならば、不定形剥片剥離技術は3万年よりさらに遡る可能性もでてくる。しかもしもそうであったとしても、溝口遺跡におけるナイフ形石器の伴出は、3万年を大きく遡る可能性を否定しているのではあるまいか。また溝口遺跡の石器組成から大型の礫器類が欠落する点も、本遺跡が3万年を前後する古さを持つ可能性にはマイナスとなろう。このように、剥片剥離技術基盤と石器組成から判断して、溝口遺跡の下限は最も古くとも3万年を遡ることはないと考えられる。

(山下)

2. 集落の景観と構造

先土器時代遺跡の集落の景観と構造について素描をし、本章を終える。このために、以下1)～5)までの項で、本章で既に述べた分析結果の要点を記し、問題点の指摘をなし、構造と遺物の両側面からの検討を加え、世帯ユニットの抽出を行なう。この後に集落の景観と構造へ言及するという手順を踏みながら進むこととする。

1) 石器の分布とブロック

石器の分布については、器種ごとの分布の傾向、ブロックにおける機能的な空間について述べる。

総じて特別な傾向はない。ただし、UFはブロック全域に万遍なく分布するのではなく、一定の範囲に限定される傾向がある。第1ブロックでは、南西端幅3mほどの三ヶ月状の区域にはほとんど分布せず、その分だけ剥片・碎片・石核が卓越する。そして、この区域はさらに南のブロック外の、剥片や石核の多い区域へとつながっているようにみえる。

第3ブロックではUFは北東側などの区域に限定され、第4ブロックでは西半部に孤状の分布域を形成する。第5ブロックでは、ブロックの東南側の石器分布の中心部よりも、こここと帶状の分布稀薄域を挟んで北西側に位置する散漫分布域により顕著に出土する。

ブロックを形成する石器分布傾向の基調をなすのは、剥片を主体にし碎片・石核を加えた、剥片剥離のいわば非目的物であった。UF以外のトゥール類も、UFの分布傾向におおむね沿っている。したがって、剥片剥離作業の目的物たるトゥールと副産物たる剥片・石核等とは、分布域をブロック内で重複させながらも、中心となる区域が少しずつ離れて、たがいに譲りあう傾向を見て取ることができる。ここに、剥片剥離作業空間と石器を用いた工作・加工等の非剥

片剥離作業空間とが、相接し半ば交錯して存している姿を想起しておこう。

ブロック内とブロック外とに器種による分布傾向の差を読みとることも難しい。むしろ、ブロック外には遺物分布がきわめて稀薄で、それ故にブロック内とは場の性格を異なるだろうという、あたりまえの事実を確認しておく方が大切であろう。

ただし、第1ブロックと第1ブロック外の対比については、若干留意を要する。当初のブロック区分にこだわらず詳しく見てみると、第1ブロックの南側のブロック外に剥片・石核を中心とする一かたまりの分布域があって、ここに接するブロック内の器種分布のあり方と同じ傾向をしめして、両区域が本来一つづきのものであった可能性が大きくなってくる(第54図破線内)。そして、この区域をブロック外からブロック内に組み込んだとして考えてみると、ブロック外区域にトゥールが多いという元来の傾向がより一層明瞭なものとなってくる。

念のためブロック外の石器組成に触ると、ブロック外資料34例中、R F 1, 剥片4, 砕片1, 石核2点が第1ブロック内に入り、ブロック外の石器組成は、ナイフ形石器2(8%), スクレイバー1(4%), R F 3(12%), U F 7(27%), 剥片10(38%), 石核3(12%)となって、トゥールが全体の50%となる。遺跡全体のブロック内およびブロック外におけるトゥール組成比からみるとほぼ2倍のトゥールを有していることになる(第5表)。こうして、第1ブロック外区域に非剥片剥離作業空間という意味で、より居住空間の要素を窺うことができる。

受熱石器は火の使用や炉の推定とかかわる興味深い資料だが、あまりにも情報に乏しい。

単独個体別資料の分布の裏にも重要な事実がひそんでいるかもしれない。これを搬入品と考えると、当初集落の設営者が、第4・6ブロックを除く各ブロックに、石器を持ち込んでいたことを示している。集落設営の最初の時点でブロックの単位で装備していた道具組成と、ブロックの独立性をも窺わせることになる。石器保有数の多い第1・5ブロックには、当然のことながらトゥールを主体に各種の単独個体別資料が均等に存在していることが注目される。しかし、一方で第4ブロックに単独資料を欠く事実をどう解釈するか、単独資料を搬入品と想定してかかるとの妥当性はどうかなど問題点も多い。

(鈴木)

2) ブロックの石器組成

ここでは、細別12, 大別6ブロックについて石器組成を対比し、ブロックの性格に言及する。ブロックの細別12区分に従うと、ブロック内とブロック外という対比が可能であり、大別区分の場合には、ブロック外を含めて一つの単位をなす六つのブロック個々の性格とブロック間相互の比較を行なう。

細別12ブロック区分によった場合、すべてのブロックにおける石器組成はほぼ均等なものであって、特別な片寄りを見出すことはできなかった(第5表)。ただし、第1ブロック外だけは例外的であると言ってよいかもしれない。ブロック内で保有する石器量に対するトゥールの出現率を「標準値」によって比較すると、第1ブロック外区域は、ナイフ形石器、スクレイバー、R F の三者が標準値を大きく越えている。前項における第1ブロックの内と外との区分

境界を変更した案に従えば、この傾向はさらに強まる。

大別6ブロック区分によると、すべてのブロックがほぼ均等の組成を示す。ただし、構成点数の少ない第2・3・6ブロックでは、構成要素の多様性は失なわれがちである。しかしながら、この点は、トゥール類の比率が全石器量の28%で、UFを除いた他の器種の合計は4%を占めるにすぎないことから、むしろ当然とも言える。最低21点から最大583点まで、28倍ほどの格差のあるブロック相互を、石器組成の均質さ故に対等に扱いうるかという点の方が重大な問題であろう。

(鈴木)

3) 個体別資料から見たブロック間関係

非接合資料を含めた個体別資料全体と接合資料だけから成る接合個体別資料とに対象を区分し記述を進める。前者を単に個体別資料、後者を接合資料を呼んで記述する。それぞれについて、分布共有関係、接合共有関係、相対強度、相互強度から検討した結果のうち、ありうべき様相はどのようなものかを考えておく。

個体別資料の分布範囲を検討すると二つの大きな特徴があった。第一点は、遺跡の北端と南端に長距離を隔てて位置する広域分布資料が、89個体別資料中15例も存したことである(別添第12図)。第二点は、これと一見相反するような傾向だが、六つのブロックとその周辺には、その区域内で分布範囲の完結する多数の個体別資料群が折り重なるように分布し、石器の集中分布域たるブロック成立の背景をなしている点である(別添第12図)。

この二点は、接合資料について検討してみても基本的に同じである(別添第15図)。また、個体別資料の中心分布図を作成すると、ここからは広域分布資料が姿を消し、すべての個体別資料の分布域がブロックの範囲に完全に重複し、六つのブロックに対応する6ヶ所の中心分布域群を形成する(別添第13図)。

このことは、決して少量とは言えない広域分布個体別資料の存在の意味とその形成の要因を考えさせる。すなわち、広域分布資料はその構成資料が遺跡内の各所に均等にばらまかれたよう分布した結果ではなく、広域分布個体別資料中の1~2点の石器が、ことさら突出的な分布状態を示したことによっている。この事実は、第10表からはっきり読み取ることができる。

ただし、どうしてこのような突出的分布を示す資料が生れることになったのかについては、何ら手掛りを得られなかった。突出資料の器種や剥離作業工程などの位置に由来するものなのかの双方から検討を加えたが、検討対象資料に十分な量的保証が得られなかつたとは言え、ここには一定の解釈を下すべき何等の特徴をも窺い得なかつたからである。偶然的な行為の所産としか言いようのないような契機によって、それらが特異な分布位置を占めるに至ったとしか説明の仕方がないと言わざるをえないものである。

個体別資料の分布状態から知られる広域分布資料のあり方は、上記のように不可解なものであることは確かだが、一方で遺跡内に広く分布の場を有し、結果的に遠距離のブロック間に分有・共有関係を作り出すことになるこの分布状態は、当遺跡にとってどれほどの重要性を持つものなのであろうか。言葉を換えて言えば、遺跡内を広域に交流する石器分布のあり方は、こ

の遺跡の集落景観や構造を抽出する際に、本来的で基本的なあり方として位置付けるべきかどうかの吟味を要求されるということである。

世帯ユニットの抽出にあたって、単位的なブロックの設定の際にも、ユニット間の関係の規定の折にも、これは避けて通れない検討課題である。要するに、当遺跡の個体別資料の分布の本然の姿は、ブロック域内で収束するものなのか、この逆なのかが問題となる訳である。

このために、個体別資料・接合資料の二つの次元から、分布ブロックや接合の共有関係を分析し、相対強度・相互強度によって、より正確にブロック間関係を把握しようと努めた。この結果は単純にはまとめられないが、石器の分布状態の本然の姿は何かを第一義的にさぐることを念頭に置き、特別に断らない限りは大別6区分によって記述を進める。

1) ブロック間の関係を個体別資料の共有関係でみると、ブロック内で分布を完結させる例が圧倒的に高く、次いで隣接ブロック間の関係が強い。3番目に、第1ブロックと第3・4・5ブロック間の関係のように、遠距離ブロック間のつながりも決して低いと言えない程度に存する。第6ブロックは、共有数は一番低いが、他ブロックとの間に広いつながりを有している(第74図)。

接合資料から加えた検討の結果も上記とはほぼ同様である。細部をみると、近接ブロック間の関係は、特に第3・4・5ブロックの間で強まっている。遠距離ブロック間の関係も確かに存在するが弱まっている。第6ブロックと他ブロックとの関係はあまり変化がない(第77図)。

2) 相対強度から個体別資料における自ブロック内の分布の完結度と接合資料における接合の収束率を見てみよう。前者は41~71%、後者は54~97%という値を示す。数値にかなり幅がある。ここからは、すべてのブロックが自ブロック内で分布と接合を収束させると見に足る値を必ずしも示しておらず、かなりの量が他ブロックに分有されているとしなければならない。

しかし、これを隣接したブロックの範囲内まで枠を広げ、近距離で分布と接合を終結させるものはどれくらいかという見方に変えてみると、個体別資料でも接合資料でも、隣接ブロックの範囲内で大部分が分布と接合関係を完結させる、特に第1・4・5の大ブロックほどその傾向が著しい。念のために、このブロックにおける上記の意味での完結率を挙げると、97・96・96%となる。

ただし、注意を要するのは第6ブロックで、個体別資料・接合資料とも自ブロック内での完結度が低く、他ブロックとの関係を幅広く有していると言える。

結局のところ、相対強度から見ると、基本的に自ブロック内の分布・接合の完結度が高く、共有関係はあっても隣接ブロックどまりで、近い距離にあるほどブロック間関係が強いということになる。たしかに、第1・4ブロック間のような長距離の関係も存するが、わずかである。第6ブロックだけが、こうした傾向とは相違する面が強い。しかし、その例数の少なさ故に、傾向の現われ方の偶然性ということを抜きにして、にわかに本ブロックの本來

の性格のとして受け止めるわけにもいかない。

3) ブロック間の相互強度についてまとめておこう。個体別資料では、第4ブロックを真中に挟んだ第3・5との近接ブロック間関係が一番強い。第1・2ブロック間は5番目で決して弱くないが、3番目に第1・3ブロック間、6・8番目に第1ブロックと第4・5ブロック間の遠距離関係が中程度に順位づけられている。第6ブロックは多方向に関係を有し、しかも第2・3ブロックとの関係はかなり強い点が注目される。

接合資料では、個体別資料におけると大いに相違する点がある。最強の関係に第6・2ブロック間関係が位置し、第6ブロックは、第3・4ブロックに対しても、4・5番目の中程度の強度を保っている。第1・4ブロック間の遠距離間関係が最下位に転落している。まず、この2点が相違点として挙げられねばならない。第4ブロックを挟んで第3・第5ブロックまでの近隣ブロック間は相変らず強度が高い。

第6ブロックと他ブロックとの間柄がことのほかに強いのは、ブロック内資料数が2点と極端に少ないうえに、他ブロックとの関係が多いという事情が幅奏した結果であって、過大評価はしにくい。

結局のところ、すべての要素を加味して判断すると第1に強い関係は、近接ブロック間関係、とくに第4と第5・3ブロック間で、次は第1と第2ブロック間関係である。第1と第3・4・5の遠距離間は弱い。第6ブロックは、いささか特異でどのブロックとも広いつながりを有しているということになろう。以上のようなブロック間関係は、自ブロック内で分布と接合関係を完結させるという、根底的な性格の上に成り立っていることを忘れてはならない。

結局のところ、多種類の図・表のうち、本遺跡のブロックの単位性とブロック間関係をもつとも端的に示しているのは、個体別資料中心分布図(別添第13図)ということになろう。個体別資料や接合資料の分布図中に確認される、多数のブロックを覆い長距離の相互関係を想起させる分布範囲線の交錯状況は、單に視覚的なものであって、本遺跡の基調となるものではない。

この点を補足する意味で、富山県野沢遺跡の例を引いて、その述べんとするところを対比的に理解していただきたいと思う(鈴木編1982)。野沢遺跡は、集落構造を「交叉型集落」と呼んだように、ブロック間に多数の個体別資料・接合資料の共有・交叉関係があった。その交叉状況の実体は次のようなものであった。

たとえば、個体別資料の中心分布図を作成しようとした場合、これを描きえないほど資料の分散分布度が高い。したがって、野沢遺跡ではこの図を呈示していない。無理に作図すると、一つの個体別資料中に複数の中心分布域を作るか、遺物の集中分布域たるブロック区分とは無関係な範囲を描かざるをえない。あるいは、遺跡間の端と端を結ぶような長距離接合が多いために、遺跡全体を覆うような中心分布域を作製しなければならないという状況である。

この間の詳しい事情は、同報告書の第35表・第195図あたりを参照のうえ比較されたい。念のためにこの対比関係を鮮明にする若干の数値を記しておく。野沢遺跡では、30例の個体別資料中、单一ブロック内収束例が4(13%)、複数ブロック分布例が26となる。26例中分散度の

高さ故に分布の中心域を決定しえない例が12例含まれている。溝口では、大区分(6ブロック)によると89個体別資料中单一ブロック内収束例が69(78%)、複数ブロック分布例が20(広域分布の意味とは相違、これは15例)となる。しかも、集中度のコントラストが弱いにせよ全資料中中心ブロックの決定に窮するものはない。

こうした傾向をもっとも特徴的に現わしている例を別の角度から引いてみる。このためには、個体別資料単位で中心ブロック内に分布する資料数とこれと同一個体で中心ブロック外に分布する資料数の対比、すなわち、中心ブロックへの資料集中度を集計するのが分りやすい。野沢では、先に述べたように中心ブロックを決定しうる資料が少ないうえに、中心ブロック決定可能資料14例で集計してみても、その集中度は50%で、半数を他のブロックにゆだねている。溝口では、集中度80%の値を示す。

上記の野沢遺跡との対比の中で、溝口遺跡における広域分布資料のウエイトと分布の実態が諒解せられたことと思う。

(鈴木)

4) 道構とブロック

先土器時代の道構で最も一般的に発見されるのは疊群と配石である。ところが、本遺跡では自然堆積中にも多くの大型自然疊を含むという悪条件のために、少なくとも配石は全く識別することができなかった。受熱したことを最大の特徴とする疊群も検出できなかった。唯一道構として問題にし得るのは、1ヶ所の疊ブロックのみである。

疊ブロックは、8C19区で発見されている(第17図、別添第2図)。第5ブロックの南東部に含まれるが、石器分布からはブロックの中核に位置することになる。疊ブロック周辺には大量の剥片・碎片が分布するが、それらは疊ブロックの検出レベルより5~10cm浮いた状態で発見されている。

疊ブロックの構成疊9点は、全て赤色のチャートである。完形のものと一部破損したものからなるが、いずれも受熱した痕跡は乏しい。疊群とはしなかった所以である。

疊ブロックは、これまでにも野沢遺跡や広野北遺跡で検出されているが、それぞれに特徴的である。本遺跡のものは、完形疊が多く石器ブロックの中核に位置するという点で、より広野北遺跡の例に似る。いずれにしても性格的には不明な点が多く、機能的な解明は全く進んでいない。石器ブロックとの関係も不明である。大量の剥片・碎片と重複分布する点を考慮すると石器製作との関わりが想起されそうであるが、本遺跡の構成疊の場合、節理の多さから判断して燧石としても石器原料としても利用できそうにない。むしろここでは、意図的に赤色のチャートが選び出されているらしい点こそが注目されよう。

この他、人為が認められる疊として、受熱した疊・打撃痕のある疊が各1点、接合する疊が2組ある。道構とは性格を異にするかも知れないが、一応ここで触れておく。打撃痕を持つものは、チャートの大型疊の一辺に潰れたような痕跡を残すが、敲石類の潰れとは異なっている。受熱した疊は、単独出土のために単にその場所に撒入された可能性もあり、全く性格不明である。

2組の接合資料のうち、6 D21区内で収束する接合例は、1m未満の接合距離である。すぐそばに先の単独の受熱蹕がある。受熱蹕とともに第3ブロック南端外側に位置し、何等かの機能空間の存在を示唆するものかも知れない。他の1組は4 E23区と7 D17区の接合で、60m近い距離を持つ。第1ブロック外と第4ブロック外の接合であり、両者の関係を窺わせる。蹕は接合しても完形にはならず、さらに半分の未発見部分がある。打撲痕のある蹕ともども「置石」(保坂1982)の可能性が考えられるが定かではない。

(山下)

5) 世帯ユニット

世帯ユニットを設定することは、遺物の分布状態から区分したブロックそれぞれに独立した単位性を認めるか、あるいはブロック区分を統廃合して、その段階で独立性を認めるかという作業を実施することである。そのために以下の諸点を検討する必要がある。1)世帯を支える道具の装備内容、2)遺構(蹕群や炉)、3)接合(個体別資料共有)関係、4)ブロック相互間の位置関係、5)ブロックの大きさ・石器保有量、6)剥片剥離作業の有無。

以上6点のうちどこまでを満足させればよいかはむずかしい。集落における居住期間、世帯の人員構成、剥片剥離作業の場の共有関係等、様々な条件が関与するからである。しかしながら、世帯を集落構成の基本的単位で、集落生活における機能的な単位と考えれば、1)がもっとも重要で、以下順に重要度は低下するとも考えうる。このような観点で、諸項目を順に検討してみる。

1) 石器組成の内容は、大別6ブロックすべてが等しいと言ってよい。ナイフ形石器・スクレイバー・RF・巖石・錫石・石斧は極めて少量であるので、これらの保有の有無は問題にしにくい。UF・剥片・碎片・石核はすべてのブロックが等しく保有しているので、それぞれが等質的であると言わねばならない。

2) 遺構には、蹕ブロックがある。第5ブロック石器密集部に位置する。この蹕ブロックは構成数9点で蹕数は少ない。受熱の痕跡も定かでなく、したがって性格もはっきりしない。

受熱石器から火廻の問題を見てみよう。受熱石器は、第1ブロック内に集中する一方、第3ブロックを除いてすべてのブロック内かその付近から出土している。したがってすべてのブロック付近で火廻が存した可能性は高い。その上、石器の分布しない区域は受熱石器も検出しえない訳であるから、より居住空間的に石器の集中分布域から外れた部分には、さらに火廻の存在の可能性が高まると言わざるをえない。以上のように、遺構の側から世帯ユニットの設定に積極的な材料を引き出すことはむずかしい。

3) 接合・個体別資料の共有関係は既に詳しく述べた。広域分布資料の存在は確かだがブロックの範囲ごとに個体別資料の集中があり、さらに第1・4・5ブロックでは剥片剥離作業の存在も明らかである。第1・4・5ブロックを核として個体別資料が分布するような、人間の営為にかかる単位的な事情があるとみるとべきであろう。

ただし、第6ブロックは、他ブロックとの間に広範に接合・分布共有関係を有しているので、いわば他ブロックに対して副次的、従属的あるいは共用的性格があるのかもしれない。

4)・5) ブロック間には最低数m以上の遺物分布の空白空間が介在している。ブロックの規模は、最小の第2ブロックでも長辺が6m以上ある。面積では42~407m²までのひらきがある。第1・5ブロックのような大型のブロックは、一般的なブロックの大きさからみれば、大きなものであって、これらを標準的なものと見なさなければならないとは言えない。小型のブロックでも十分な面積を有している。

石器の保有量でも面積同様格差が大きく、最多の第1ブロックは最少の第6ブロックの28倍の量を保有する。石器量の格差はブロック面積以上のものがある。面積に対する分布密度を計算すると、第1ブロックの1mあたり1.4個を最大に、第4・5ブロックの0.5個、第2・3・6ブロックの0.2~0.3個の3群に分けられ、石器保有量の多い方が密度も高いという結果になる。

6) 剥片剥離作業は、個体別資料ごとに検討した結果、第2・3・6ブロックではこれを認め難いか、きわめて弱い。第1・4・5ブロックにおいてのみ、安定した剥片剥離作業が行なわれたと認めておく。

以上の検討の結果、すべてのブロックに世帯の単位としての独立性を決定的に否定しなければならない要素を欠くと同時に、すべてをその有資格者として扱う条件にも乏しい。世帯の単位を考古学的資料から、どのように、どのような構成要素によって認定できるのか。これこそが、集落研究の当面する課題である。資料の種類も量も少ない当遺跡では、こういう困難な問題が集約的に現われており、決定的な判断材料を持ちあわせていないのが現実ではある。

もう一度、上記の6項目について振り返ってみよう。この内1)の石器組成は、UF以外に数量の多いトゥールを欠く上に、小型のブロックの石器保有量は極端に少なく、全ブロックを平等に評価するのはむずかしい。2)・4)・5)も同様である。したがって、ここでは、6)と3)の項目すなわち、剥片剥離作業の明確な存在とそのブロックにおける個体別資料の分布と接合関係の収束状況とが、世帯ユニット抽出のための最大の根拠となろう。

この点をさらに掘り下げてみよう。ブロックによる剥片剥離作業の有無をより簡潔に捉るために、個体別資料のうち本遺跡における剥片剥離作業がより明瞭な、分布位置の明らかな資料を6点以上含むものを全点プロットしたのが別添第16図である。逆に5点以下しか含まない、剥片剥離作業の実施がより不明瞭な個体を全点プロットしたのが別添第17図である。両者を比較すると、5点以下の個体は各ブロックに分散する上に、あまりブロックラインに規制されず、ブロック外にも分布を広げていることがわかる。これに対し6点以上の個体は第1・4・5ブロックに著しく集中し、周囲に飛び出すことはあまりない。極端な言い方をすれば、第1・4・5といった大型ブロックの存立基盤が、まさにこうした剥片剥離作業の明瞭な個体の分布にあると考えられるのである。逆に、第2・3の小型ブロックは、剥片剥離作業痕跡のより乏しい個体から成っていると言えるであろう。第6ブロックのみは中庸を行っているように見える。

このように、世帯ユニットの認定が石器組成主体では困難で、剥片剥離作業の有無・規模を

この判断基準に加えるとすれば、第1・4・5ブロックこそが世帯の支持者たり得ると考えられる。また、第6ブロックについては、剥片剥離作業を示す個体を1つ持つてはいるが、第1・4・5ブロックと比較するとあまりに小規模であり、ここでは別のものと考えたい。ここに、第1・4・5ブロックをそれぞれ第1・2・3世帯ユニットとして捉えておきたい。

(鈴木・山下)

6) 集落の景観と構造

これまでの検討によって、少なくとも3つの世帯の存在を予想した。問題は、これらが同時に存在かどうか、各世帯の居住期間・居住人員・作業・生活内容の点で等質かどうか、石器集中部たるブロックとその周辺部の石器分布の稀薄な空間から成る世帯ユニットが、どこにどのような機能空間を配しているか、そして世帯間の関係つまるところ集落の構造はどう捉えられるであろうかに尽きるであろう。これまでの分析に沿って、可能な限りの復原を試みてみたい。

居住の同時性については、数多くのユニット間にまたがる広域分布個体・接合資料の存在によって、考古学的には証明されていると考えられる。しかしこの同時性は、集落の設営から放棄に至るまでの3世帯の完全な同時居住を保証するものではない。個々の世帯が単独で移動する可能性も、集落構成員が単独に近い形で自由な動きをする可能性も残されており、ここでは少なくとも全世帯が互いの存在を知り得る程度の関係で、同時に生活を営んだ時期があろうという位の認識を示しているにすぎない。

居住期間・回帰的居住の可能性についてはどうであろう。居住期間の長短について具体的な数字をあげるだけの材料はもないが、石器組成が単純で剥片剥離作業域の交錯が少ない第2・3世帯ユニットを、単位的な一時居住の痕跡であると考えれば、問題となるのは第1世帯ユニットのみであろう。第2・3世帯ユニットについては、こういう前提に立つ限り回帰的居住は考えられないことになる。

第1世帯ユニットについては、石器組成の豊富さ・石器総量・剥片剥離作業の多さのいずれについても突出した傾向が指摘されている。この原因については、居住期間の長さや世帯構成員の多さ、第1ブロック形成に関わる世帯そのものの多さ、回帰的居住など数多くの可能性が考えられる。ここに初めて回帰的居住という発想が生まれてくる訳であるが、これもよほど恵まれた条件がない限り積極的に論じることは難しい。

ちなみに、かつて回帰的居住を考えた広野北遺跡についてみてみると、剥片剥離・工作作業と、これとは全く性格を異にする土坑が位置的に完全に重複して発見された。このため、両者が同時に機能していたとは考えられず、他方でブロックの分布からも等質なものと重複が考えられたため、これらを回帰的居住の表徴と捉えた。しかし当遺跡ではこのような恵まれた検出状況ではなく、第1ブロックの各要素の複合した状態についても、前述の如く複数の可能性を指摘することはできても、一つを特定することはできなかった。

居住人員・作業・生活内容は、少なくとも第2・3ユニットでは等質であったと考えられる。両者の石器総数の違いとか組成上の差は、基本的に等質なものの示すバリエーションの中で解

釈しうるようと思われる。両者は共にスクレイバー・RF・UFといった基本的な装備を持ち、剥片剥離作業も自己ユニット内で行なっている。石器総数の差は、まさに剥片剥離作業個体の数に起因すると考えられ、わずかにその差は1~2個体でしかないと判断される。ここでも問題は第1ユニットである。第1ユニットは、第2・3ユニットに較べ、面積を除くほぼ全ての要素で2~4倍の規模を持っていた。しかし先の回帰的居住の所で可能性を特定できなかったように、この規模の違いの原因を示唆しうる要素が挙出できなかったために、第2・3ユニットとの違いを具体的に示すことはできない。わずかに、第1ユニットは第2・3ユニットの各要素が累積的に増えていると言えるのみである。第1ユニットは他に含まれないナイフ形石器を持ってはいるが、敲石・槌石・石斧と同様にあまりに点数が少ないので、大きな評価は下せまい。

さて、以上の3つの世帯は、各ユニット内にどのように機能空間を配置しているのであろうか。まず第1ユニットでは、第1ブロック内の北西部・南部の二ヶ所で主たる剥片剥離作業を行なっている。トゥール類も多くはブロック内に残されており、そこが工作作業場としても利用されていたことがわかる。他方で、その一部は第1ブロック外北東部に持ち出されており、E21区を中心にトゥールのまとまる場所がある。これが本ユニットにおける住居空間、あるいはそれに隣接した部分と考えることができよう。火廻はわからない。第1ブロックの南から南西部に受熱石器が多く分布しており、この周辺に火廻のあった可能性もあるが、住居からは離れて機能していたと考えられる。未発掘区が多いためか住居推定域周辺には火廻の痕跡は残さない。この他、第1ブロックについてはその規模からさらに世帯ユニットの複合する可能性も考えられる。より平坦な地形面の広がりと未発掘区である点から、ブロック北西側に複合する住居域の可能性が求められよう。

第2ユニットでは、剥片剥離作業は第4ブロックと重なって行なわれるが、特に南西半で顕著である。UFはブロック西~北半に多く、そこが工作作業空間としても機能していたことを示唆している。受熱石器はブロック南西半に1点のみ分布する。評価は保留する。住居空間は、一見すると受熱石器の分布と矛盾するようにも思えるが、工作作業空間の位置から、ブロック北西部を推定しておきたい。

第3ユニットは第5ブロックと重複する。主たる剥片剥離作業空間はブロック南東半であるが、北西部にもわずかにその痕跡を留める。UF等のトゥールはブロック北西部により多く分布しており、副産物たる碎片・剥片類と好対照をなす。ブロック北西部周辺に工作作業空間を考えておきたい。本ユニットは、唯一確ブロックの遺構を伴なっている。ブロックの南東半にあって剥片剥離作業と強い関係を示している。この構成にも一部受熱の可能性が指摘されているが、本ブロック唯一の受熱石器もこのそばに分布する。したがって火廻の一つは、ブロック南東部にあったと考えて大過なかろう。住居は、工作作業空間との関係からブロック北西部に考えられるが、周辺で火廻と思われる場は推定できない。本ユニットの住居空間は、地形的に平坦面と斜面の肩の部分に当っている。ブロック南東から西方にかけては平坦面が広がるに

もかかわらず、そちらに占地した痕跡が乏しいことは興味深い。

これらの世帯ユニットの他、世帯として括ることが躊躇される第2・3・6ブロックとそのブロック外がある。これらの各ブロックは、いずれも石器組成においては世帯ユニットと変わりないが、確実に本遺跡において剥片剥離作業を行なった個体の中心分布からは外れるという特徴を持つ。このことは、本集落に移って来た人々が生活する過程で当然必要としたであろう新たな道具を、これらのブロックでは確実には製作しなかったことを示している。これをそれらの「世帯」の居住期間の短かさあるいは構成員の片寄りの証左として捉えることもできなくはないが、ここではむしろ、こうした要素を欠くにもかかわらず、これらのブロックでは顕著に他の世帯ユニットとの石器の交流が認められる点を重視したい。しかしこれらを結ぶ個体の意味を検討してみても、いずれも構成点数が少ないと確実なトゥールを欠くとかで、持ち込み・持ち出しを含めた石器の動きの意義付けは難しい。また、これらのブロックの位置が、3つの世帯ユニットの間に当る点も重要である。これら全体を勘案し、不鮮明ながら、第2・3・6ブロックを中心とする空間は、第1・2・3世帯ユニット共有の公的な性格を持つものと考えたい。60m近く隔たった第1世帯ユニットと第2・3世帯ユニットの交流の場と考えられよう。

各世帯ユニットは、個体別資料・接合資料の検討からわかったように、石器の需給関係においては自立性が高い。わずかに認められる他ユニットからの石器の「持ち込み」も、多くの場合持ち込まれた石器そのものの性格が不明瞭なため、ユニット間の関係も推定が難しい。このような「持ち込まれた」石器も、偶発的なものが多いように考えられる。そうした中で、第2・3世帯ユニット間には、遠方の第1世帯ユニットと較べるとより頻繁な石器の往き来が認められ、より近縁な相互関係が考えられる。しかしこの場合もけして相互補完的とまでは言えず、やはり独立性を基調としている。

このように、集落全体としては各世帯は独立的ではあるが、より近縁な第2・3世帯は近くに、より疎縁な第1世帯は離れて住居を定め、相互の交流の場を約 $60 \times 60 = 3600\text{ m}^2$ の第2・3・6ブロックを中心とする地域に求めたと考えることができよう。この中で、第1世帯のみが大きな不確定要素を含んでおり、回帰性あるいは複数世帯の存在も考えられる。（山下・鈴木）

第IV章 繩文・弥生時代

この章では、確実に繩文・弥生時代に属する石器と先土器時代に含めた石核2点(第36図17・18)を除くサヌカイト製資料全点及び黒色チャート製個体別資料Ch①6Dに属する資料について、資料の意味と形態的な説明を行ない、その後に分布の検討を行なう。そして、それらを通じて繩文・弥生時代の溝口遺跡の特性について考えて行きたい。

第1節 資料の抽出

ここで取り扱う資料の抽出については、第IV章第1節においても一部述べたが、本節ではさらに詳しくその内容について検討してみたい。

まず、確実に繩文・弥生時代に属する石器として石鐵がある。これは、未製品4点を含む80点が出土しており、次節で述べるように弥生時代に属するものが3点含まれている。次に、楔形石器がある。これには、サヌカイト製3点、乳白色頁岩製1点と黒色チャート個体別資料中にその形態や剥離面の性状から、これに含まれると思われる2点の合計6点がある。

その他の資料の内、6D区周辺のサヌカイト製資料については、第III章第1節で述べた通りである。黒色チャートの個体別資料についても同様である。

3E23・4E3区を中心とする資料群については、石鐵の製作に関連すると考えられる微細な碎片群を主体とし、楔形石器の碎片も含むことから、このグリッド周辺のサヌカイト製資料全体を、一括して繩文時代の資料群と考えた。

なお、サヌカイト製石器全点を含むと述べたが、J2集中部と分離でき、7・8列以南に分布するサヌカイト製資料については、次に述べる理由から各種別の資料数を挙げるに留

第19表 繩文時代石器組成表(1) (弥生時代石器を含む)

	A					B	C	D	計	弥生 石鐵
	石鐵	楔形石器	剝器	R F	U F					
点 数	77	6	1	10	16	141	146	4	401	3
率(%)	19.2	1.5	0.2	2.5	4.0	35.2	36.4	1.0	99.9	出土した。その内訳は、U F 2点、剥片

めておきたい。この範囲からは、26点のサヌカイト製資料が

第20表 繩文時代石器組成表(2)

	I					小計	J2	JX	県・表採	総計
	石鐵	楔形石器	R F	U F	B					
点 数	77	6	2	6	64	121	2	278	89	401
率(%)	27.7	2.2	0.7	2.2	23.0	43.5	0.7	69.3	22.2	99.0

I …確実に繩文時代の石器と捉えられるもの

(J1集中部、J2集中部中の石鉄チップ・楔形石器碎片および個体番号Ch①6D石器群)

II ……J2 : J2集中部に含まれるもので分布上繩文時代の石器として分析するもの

JX : J1～J3集中部から明らかに分離できるもの

15点、碎片9点で、剥片のうち3点、碎片のうち4点は、水洗選別により検出された。また、この他に石鐵24点がこの範囲に分布している。剥片・碎片には、石鐵の製作に関連すると考えられる形状のもの6点が含まれるが、これらの分布は散漫であり、石鐵との関係は全く不明と言わざるを得ない。石鐵については、他に分布する石鐵と共に遺跡全体の中でその意味を考えることがより適切であろう。資料の分布をみると、先土器・縄文のいずれの一般的な分布状態からみても理解し難い極めて散漫な分布状態を示しており、これらの所属時代については保留し、第3節で分布について若干触れる以外は、分析の対象として取り扱わないこととしたい（第19・20表）。

(大下)

第2節 遺物

ここでは、各種別の形態的特徴をみた後に、接合資料の検討を行ない、最後に剥片剥離技術について述べることとしたい。

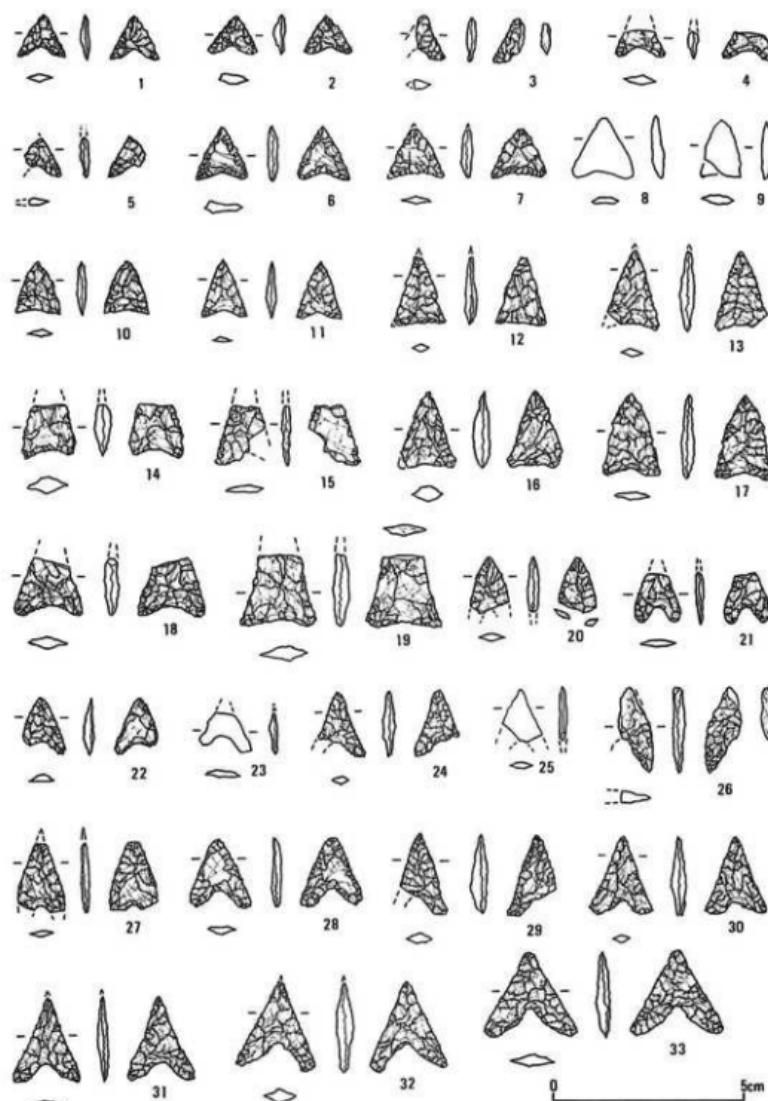
全体の石材についてはサヌカイトが9割以上を占め、他の石材を利用するのは石鐵にチャート製のものが5点、楔形石器に頁岩製のもの1点とチャート製のもの2点、チャートの個体別資料に含まれるUF4点と剥片12点の合計24点だけである。

1. 石 鐵

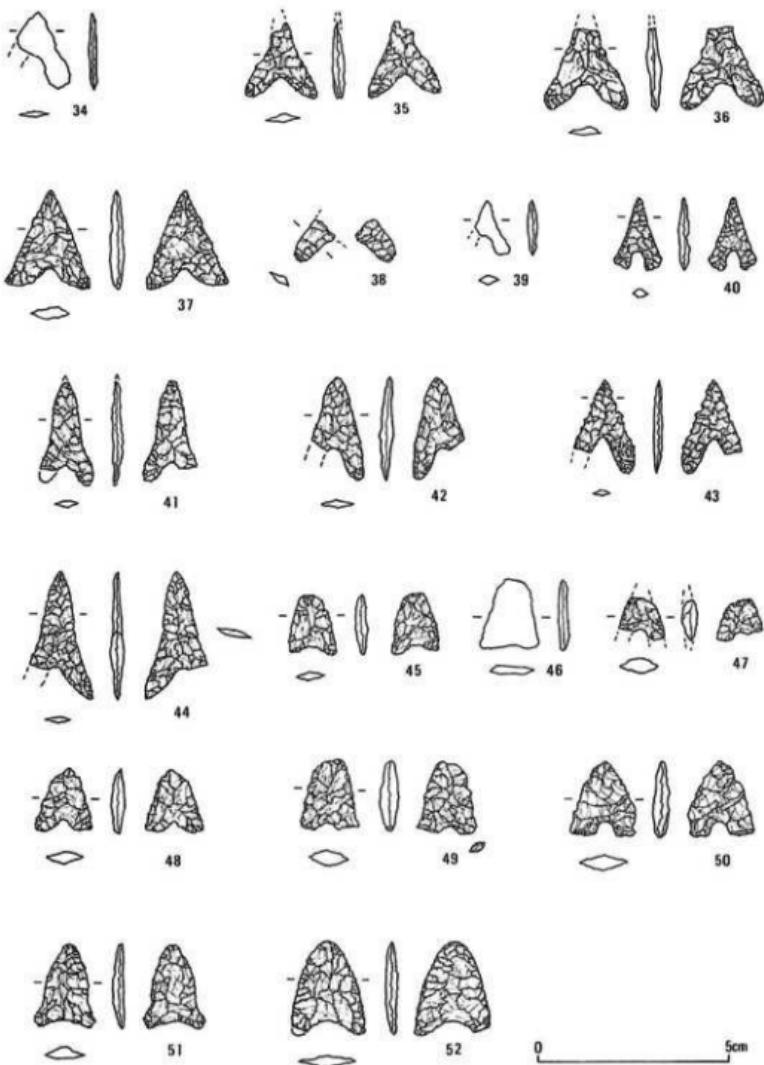
破損品・未製品を含めて80点出土している（第79～82図、第21表、図版16・17）。このうち2点1組が接合し、79例となった。80点の内訳は、完形品28点、破損品48点（うち2点接合）、未製品4点である。破損品には、先端部及び脚部の末端を欠失するものが多い。

石材は、サヌカイトが75点（94%）と大半を占め、他の石材では、チャートが5点（6%）用いられるに過ぎない。なお、本遺跡出土のサヌカイトには、緻密で良質のものと、粗質で全体が淡い緑色を帯びるものがある。これについては、佐藤良二が、三田市内の弥生時代中期から後期の集落址である奈カリ与遺跡の報文中でその特徴をまとめている（佐藤1983）。それによると、前者は「新しい断口が漆黒色、緻密で、通常大阪・奈良府県境の二上山北麓遺跡群や香川県国分台遺跡群などにおいて石器に利用されているもの」、後者は「断口はほぼ同様な黒色を呈するが、石質が均質でないらしくザラザラしている。流理構造が発達しており、剥離面（痕）は往々にして石理面に沿って、末端が階段状剥離を呈している。きわめて広い剥離面は完全に石理走向と一致し、平坦な場合がある。」と述べている。同遺跡での利用の割合は約1：2で、後者の粗質なものの方が多く検出されている。佐藤は前者を「サヌカイト」、後者を「安山岩」と便宜的に呼び分けて区別している。本編では、仮に前者を「サヌカイトA」、後者を「サヌカイトB」としておきたい。本遺跡での比率は後に述べる。

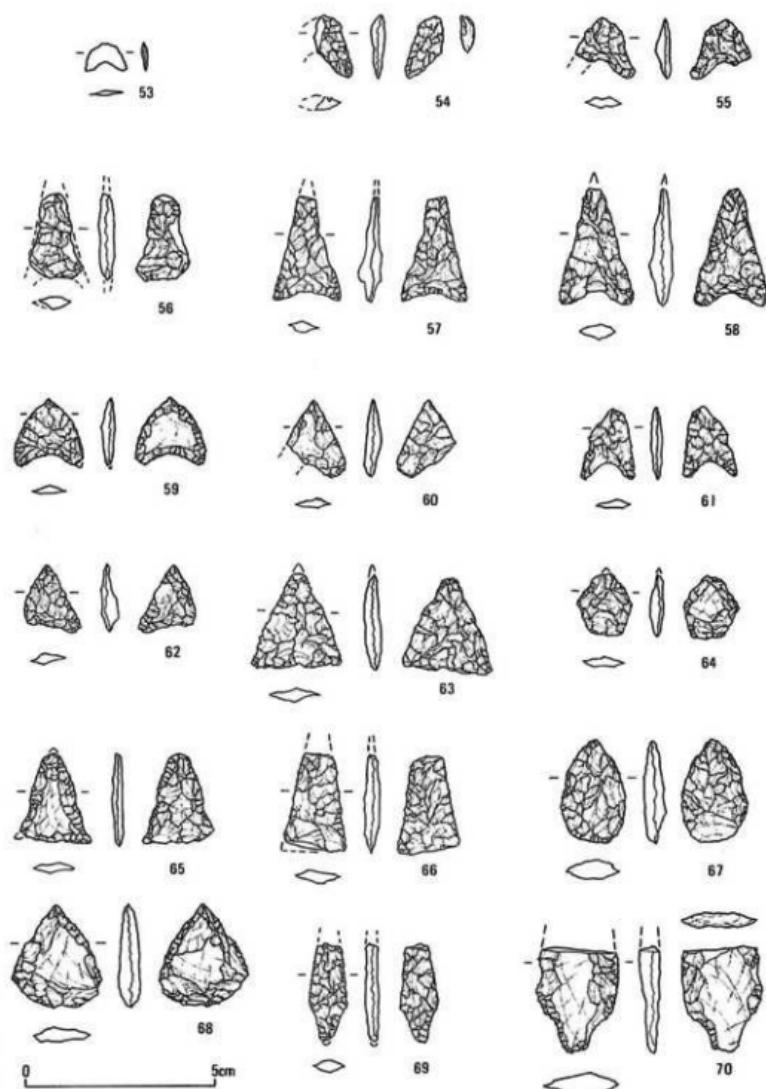
また、本遺跡ではサヌカイト以外の石材としてわずかにチャートが利用されるのみであり、先土器時代に多用されていた赤褐色の鉄石英を使用したものが全くみられないことは、時代による石材利用の相違という点から大いに注意される。



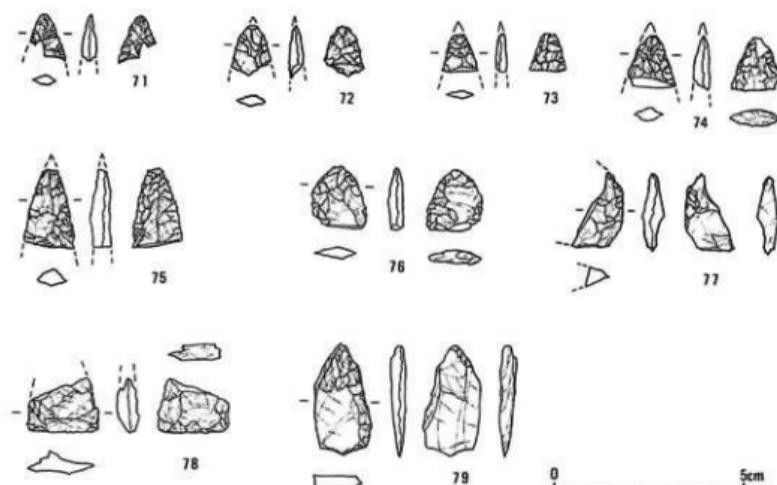
第79図 石 箭 (I-a類: 1~8, I-b類: 9~19, I-c類: 20~33)



第80図 石器 (I - c類 : 34~38, I - d類 : 39~44, I - e類 : 45~52)



第81図 石 鐵 (I-IV類: 53~55, II類: 56~58, III類: 59~63
II類: 64~66, III類: 67~68, IV類: 69~70)



第82図 石器 (破損品: 71~75, 未製品: 76~79)

個々の記載にあたっては、次に示すような分類を行なった。基部の形態の違いを分類基準とし、I類一凹基式、II類一平基式、III類一円基式、IV類一凸(尖)基式の4つに大別した。さらに、最も多い62点を含み形態の個体差が多様なI類については、a～hまで8つの細分を設定した。以下、順にその特徴を述べてみたい。

I-a類 (第79図1～8)

8例ある。平面形はほぼ正三角形を呈し、最大長・幅が1.5cm以下の小型品の一群である。抉りは、浅く三角形状のもの(1～5)とゆるやかな弧状を為すもの(6～8)がある。3・4はサスカイトBを用いており、風化が著しい。6は良質の黒灰色チャートを使用する。調整加工は連続する丁寧なものが周縁のみに施される。8は風化度が強く、剥離面の観察は不能であった。

I-b類 (第79図9～19)

11例ある。ほぼ二等辺三角形を呈し、基部に浅い弧状の抉りを施すものである。脚部の両端が尖るものが多いが、18はやや丸く作出される。8・13・14・19はサスカイトBを用いる。18は黒灰色の良質なチャートを使用する。15は薄い剥片を素材とし、裏面に大きく素材の剥離面を残す。

I-c類 (第79図20～第80図38)

各類型のうち、最も多い18例が含まれる。ほぼ二等辺三角形を呈し、基部にやや深い抉りを持つもの。側縁は直線となり、脚部端はまるく作出されたものが多い。長さは、約1.5cmから3cm近いものまで個体差が大きい。

第21表 石器一覧表 (単位はcm及び kg 。()付したものは現存値を示す。SIはサヌカイト)

遺物番号	出土層位	石材	形態分類	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
3E18・A 3	I	S.A	—	下半欠	(1.3)	(1.0)	0.2	(0.4)	82-72
3E22・A 1	I	S.A	I-h	脚部一方欠	2.1	(1.5)	0.3	(0.8)	81-60
・A 8	I	S.B	I-f	完形	0.7	1.1	0.1	0.1	81-53
・A12	I	S.A	I-h	完形	1.7	1.7	0.3	0.9	81-59
3E23・A 9	I	S.A	未製品	完形	2.0	1.2	0.6	1.0	82-77
4D 4・A 58	—	S.B	I-e	脚部一方欠	2.0	(1.2)	0.2	(0.4)	80-34
4D 9・A 12	—	S.A	I-d	脚部一方欠	2.5	(1.6)	0.2	(0.5)	80-43
4D11・A 3	I	S.A	I-e	完形	2.0	1.5	0.3	0.6	79-31
4D12・A 2	I	S.B	I-d	脚部一方欠	(1.5)	(0.7)	0.2	(0.2)	80-39
・A 3	I	S.B	II	先端一部欠	(1.7)	1.4	0.3	(0.8)	81-64
4D19・A 1	I	S.A	I-c	完形	1.8	1.6	0.2	0.5	79-28
4E 1・A 7	I	S.A	I-c	脚部一方のみ残	(1.2)	(0.7)	0.2	(0.2)	80-38
4E 2・A 29	—	S.A	未製品	完形	2.9	(1.5)	0.3	1.8	82-79
・A56	—	S.A	I-c	完形	2.0	1.6	0.4	0.6	79-30
4E 3・A 19	II	S.B	I-b	脚部一方欠	1.5	(0.9)	0.4	(0.3)	79- 9
・A37	I	S.A	I-b	完形	1.5	1.2	0.2	0.3	79-11
4E 4・A 17	—	S.A	I-c	脚部一方欠	1.5	(1.0)	0.2	(0.3)	79-22
4E 6・A 7	I	S.A	I-c	完形	2.6	2.0	0.3	1.3	80-37
・A18	II	S.B	I-c	先端部欠	(2.1)	2.0	0.3	(1.0)	80-36
4E 7・A 3	I	S.A	I-b	先端部欠	(1.8)	1.3	0.3	(0.4)	79-12
4E 8・A 26	—	S.A	I-a	完形	0.9	1.0	0.2	0.1	79- 1
・A31	—	S.B	I-c	先端部欠	(1.3)	1.1	0.2	(0.2)	79-21
4E 9・A 2	II	S.A	I-a	完形	1.0	1.2	0.3	0.1	79- 2
・A 6	—	S.B	I-a	上半欠	(0.7)	1.3	0.1	(0.2)	79- 4
4E25・A 1	I	S.A	I-c	完形	2.2	2.4	0.4	0.9	79-33
5D 5・A 1	I	S.B	III	完形	2.7	2.4	0.5	3.1	81-68
5D 9・A 1	I	Ch	—	下半欠	(1.3)	(1.0)	0.4	(0.2)	82-71
5E12・A 2	I	S.B	I-b	脚部一方欠	2.0	(1.4)	0.4	(0.9)	79-16
5E23・A 1	I	S.B	I-e	完形	1.8	1.6	0.2	0.8	80-46
6D 7・A 12	土 壤	S.A	IV	先端部欠	(2.5)	0.8	0.4	(1.0)	81-69
6D 9・A 1	I	S.A	I-h	完形	1.9	1.2	0.3	0.5	81-61
6D11・A 7	I	S.A	I-a	脚部一方欠	1.0	(1.0)	0.2	(0.1)	79- 5
6D14・A 1	I	S.A	I-b	完形	1.2	0.9	0.2	0.3	79-10
6E21・A 4	I	S.B	I-e	完形	2.2	1.5	0.3	0.7	80-51
6F 1・A 2	I	S.A	I-c	両脚部欠	(1.5)	(1.0)	0.3	(0.4)	79-20
7C10・A 1	I	S.A	I-f	脚部一方欠	1.5	(1.6)	0.3	(0.5)	81-55
7C25・A 27	I	S.A	I-g	先端部欠	2.2	1.4	0.4	(1.2)	81-56
・A32	—	S.A	I-c	両脚部欠	(1.8)	(1.2)	0.2	(0.5)	79-27
7D 2・A 6	—	S.A	I-b	完形	2.0	1.3	0.3	0.7	79-17
7D 4・A 1	I	S.A	I-b	脚部一方欠	2.0	(1.3)	0.3	(0.7)	79-13
7D 5・A 2	I	Ch	I-c	脚部一方欠	1.9	(1.3)	0.4	(0.7)	79-29
7D12・A 1	I	S.B	I-g	先端部欠	(2.7)	1.6	0.5	(1.4)	81-57
・A 2	I	S.B	I-b	先端部欠	(1.3)	1.4	0.3	(0.6)	79-14
7D16・A 4	II	S.A	—	下半欠	(2.0)	(1.3)	0.2	(1.1)	82-75

遺物番号	出土層位	石材	形態分類	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
7D21・A 4	I	S.B	I-h	完形	1.6	1.5	0.2	0.7	81-62
7E 1・A 2	I	S.A	I-g	完形	2.8	2.0	0.5	2.1	81-58
8B12・A 1	I	S.A	I-c	先端部欠	(1.9)	1.9	0.3	(0.7)	80-35
8B17・A 1	I	S.B	II	完形	2.4	1.9	0.3	1.1	81-65
8B23・A 2	I	Ch	I-b	先端部欠	(1.0)	1.7	0.4	(0.8)	79-18
8C 5・A 6	I	S.B	I-b	先端部欠	(1.9)	2.0	0.4	(1.2)	79-19
8C 5・A 18	-	S.B	-	先端・下半欠	(1.0)	(1.0)	0.2	(0.2)	82-73
8C 9・A 2	I	S.B	I-d	完形	1.9	1.2	0.3	0.4	80-40
· A12	-	S.B	-	下半欠	(1.4)	(1.2)	0.2	(0.7)	82-74
· A17	-	S.A	II	先端部 基底一部欠	(2.5)	(1.7)	0.4	(1.5)	81-66
· A18	-	S.A	I-d	上半部 脚部一方欠	(1.6)	(1.7)	0.3	(0.6)	80-44
· A19	-	S.B	I-c	先端部欠	(0.9)	1.3	0.2	(0.2)	79-23
· A20	-	S.A	I-d	下半欠	(1.7)	(0.9)	0.2	(0.3)	80-44
8C11・A 1	I	S.A	I-f	弓欠	(1.8)	(1.0)	0.4	(0.4)	81-54
8C14・A 4	I	Ch	I-e	完形	2.0	2.1	0.4	1.0	80-50
8C15・A12	-	S.A	I-c	脚部一方欠	1.7	(1.0)	0.3	(0.3)	79-24
8C19・A55	II	S.A	I-b	先端部一方欠	1.8	(0.8)	0.2	(0.3)	79-15
· A62	-	S.B	未製品	完形	1.9	2.0	0.6	1.4	82-78
8C24・A 2	I	S.A	I-e	脚部一方欠	(1.9)	1.5	0.5	(1.2)	80-49
8D 2・A 1	I	S.B	I-c	両脚部欠	(1.4)	(1.0)	0.1	(0.3)	79-25
· A 2	I	Ch	I-a	完形	1.4	1.3	0.2	0.3	79-7
· A 3	-	S.B	I-a	弓欠	(1.2)	(0.7)	0.1	(0.1)	79-2
8D 6・A 9	-	S.A	I-e	完形	1.6	1.2	0.3	0.5	80-45
8D 7・A 1	I	S.B	IV	先端部欠	(2.8)	(2.2)	0.5	(2.8)	81-70
8D11・A 9	-	S.A	I-c	完形	2.3	2.0	0.4	1.0	79-32
8D16・A 6	I	S.A	I-e	先端部 両脚部欠	(0.9)	1.2	0.4	(0.4)	80-47
8D18・A 5	I	S.A	I-c	弓欠	(2.2)	(0.8)	0.3	(0.4)	79-26
9C 2・A 1	I	S.A	未製品	完形	1.6	1.4	0.4	1.0	82-76
9C14・A 1	I	S.A	I-e	完形	1.6	1.5	0.3	0.6	80-48
県・A 1	II	S.B	III	完形	2.5	1.7	0.5	2.3	81-67
· A16	-	S.A	I-d	脚部一方欠	2.4	(1.4)	0.3	(0.6)	80-41
· A21	II	S.B	I-d	脚部一方欠	2.7	(1.4)	0.3	(0.8)	80-42
· A22	-	S.B	I-a	完形	1.6	1.6	0.2	0.5	79-8
· A23	II	S.A	I-e	完形	2.4	1.9	0.3	1.3	80-52
· A26	-	S.A	I-a	先端部欠	(1.3)	1.4	0.2	(0.3)	79-7
· A30	-	S.A	I-h	完形	2.3	2.2	0.2	2.1	81-63

20から25までは、長さ2cm前後の一組である。20は側縁がやや内彎する。23・25は風化が強く、剥離面を観察し得なかった。26は脚部の欠損品である。本類中で、唯一脚部端が著しく尖るものである。破損面は断面となっている。28から37は、本類の典型的な形態を示す一群である。両面に入念な調整加工が施されたd類とともに、本遺跡出土の石器中で最も整った形態を呈している。31は著しい風化のため剥離面の観察は不能であった。38は本類の脚部片と考えられる。

I - d 類 (第80図39~44)

6例含まれる。平面形はc類とはほぼ同様だが、抉りはより深いU字状のものが施され、脚部は外側に向かって開き気味である。39から41は、先端から直線をなしてゆるやかに広がってきた側縁が、その中央で内彎しつつ外側にひろがるものである。これらは、近畿地方では一般に早・前期を中心としてみられるもので、やや古い様相を示すと考えられる。43は両側縁が著しい鋸歯状を呈する。このような特徴を有する石器は後期に類例が多い。44は本類中最も大型で整った形態を呈する。上半部と下半部の2点が接合したもので、2点共に8C9区dより水洗選別によって検出されている。一方の脚部片は検出されなかった。

I - e 類 (第80図45~52)

8例が含まれる。先端があまり尖らず、側縁が内彎する“釣鐘状”的平面形を呈する。基部の抉りは、全体が浅い弧状になるもの(45・46・51・52)と、中央がやや深いU字状となるもの(47~50)の二者が認められる。50は少し透明感のある黒褐色のチャートを用いる。51はサヌカイトBを用いる。脚部端が外側に向かって突出する平面形を呈する。52は大型薄手で、両面とも丁寧な調整加工によって整形される。

I - f 類 (第81図53~55)

3例ある。e類に似て先端はまるいが、長さに対して幅広の一群である。53は、幅1cm、長さは1cmにも満たない小型品である。a類の小型品に近い。風化が著しく剥離面は観察し得なかった。54・55はほぼ同様の形態を呈する。いずれもやや厚手である。55は両側縁が脚部に向かって外彎する。

I - g 類 (第81図56~58)

3例ある。長さが3cmを越える大型品を一括した。下半部はb類と同様だが、長さが幅の2倍以上で、いずれもb類に比して厚手であることから別の分類とした。57はサヌカイトBを用いる。3例とも両面に入念な調整加工が施される。

I - h 類 (第81図59~63)

1点のみ認められる形態を一括した。個々に説明を加えて行きたい。

59は幅広で両側縁が内彎し、基部は浅い弧状を為す。正面は全体に細かい調整加工が施されるが、裏面は周縁のみに限られ、中央には主剥離面が大きく残る。先端はよく尖る。60は、c類に似るが平面形がほぼ正三角形を呈し、脚部がまるく大きく作出される点で異なる。61は上部に折断状の調整加工がみられ、左右非対称となっている。基部の形状からみるとc類に含まれよう。62は、サヌカイトBを用いており風化が著しい。脚部の一部を欠失しているように見えるが、現状で完結した形態となっている。このような左右非対称でやや厚手の石器は、近畿地方では早期押型文期に類例がみられる。63は大型では正三角形を呈する。一見すると平基とも見えるが、基部中央にわずかながら凹みが認められることからI類に含めた。

以上、I類についてみてきた。全て無茎である。またサヌカイトBを用いるものは20点で、本類全体の32%とその占める割合は少ない。

II 類 (第81図64~66)

3例が認められた。基部に抉りをもたない平基式である。各個体の平面形は大きく異なる。64は、小型で側縁中央付近に最大幅をもった、五角形の特異な形態を呈する。類例はほとんどみられず、わずかに一例が福井県鳥浜貝塚出土の前期石鏡中に認められた。ただ、その例は基部が凹基となっている。65は両側縁が内彎し、基部両端が突出したI-e類50に似た平面形である。66は、両側縁が直線を為す大型細身の石鏡である。全体に薄く、両面とも平行した入念な調整加工が施される。三田市内の奈カリ与遺跡出土の弥生時代石鏡の中に類例が一例みられる。

III 類 (第81図67・68)

2例ある。2例とも大型で風化の進行度も弱い。67はサヌカイトBを素材としている。調整加工は両面の全体に施されるが、やや粗い印象を受ける。68もサヌカイトBを用いている。長さは67とほぼ同様だが、かなり幅広である。調整加工は、両面の周辺に幅広で浅い不規則な剥離を施すのみで、中央には素材剥片の一次剥離面、主剥離面が大きく残る。2例ともその形態的特徴、調整加工、風化の進行度などから、弥生時代に属すると考えられる。

IV 類 (第81図69・70)

2例ある。凸(尖)基式で、2例とも有茎である。69は小型で、両面ともに丁寧な調整加工を行なう。平面形はいわゆる棒状の石錐に似るが、断面が凸レンズ状であるため石鏡に含めた。類例は、神戸市篠原A遺跡の縄文時代中期末から後期初頭に属する石鏡中に1点のみ認められる。弥生時代にも似た形態のものがみられるが、本例よりも大型のものがほとんどであり、また身部と茎部の境界もよりはっきりと作出されている。70は復原長が5cmを越える大型品である。上半約3分の1が欠失している。サヌカイトBを用いており、調整加工は67同様に周縁のみに留まる。68は縄文時代、69は弥生時代にそれぞれ属すると考えられよう。

破損品 (第82図71~75)

5例ある。基部の形状を知り得ない先端部及び中間部の破片である。74・75はいずれも断面が部厚く、特に後者は一見すると尖頭器を思わせる。これら厚手のものは、I-c類中の大型品もしくはI-g類の上半部であろう。

未製品 (第82図76~79)

4例が含まれる。剥片の一部に、石鏡の調整加工と思われる剥離を施したものである。76は両面ともに周縁からの細かい調整加工様の剥離が観察され、一見、基部を破損した石鏡かと思われる。しかし下縁には截断面の剥離面が残り、正面の右側縁には細かいつぶれ状の小剥離がみられることから、あるいは楔形石器に関係するものかもしれない。77は、やはり両面の一部に細かい調整加工がみられる。但し、一方の側縁には顕著な截断面が残されることから、76とともに楔形石器との関連で捉えるべき資料とも考えられる。78は、サヌカイトBを用いており風化が著しい。やや厚手で完成した石鏡の基部片とも考えられるが、両面ともやや粗い剥離によって構成されることから、未整品もしくは加工途中での失敗品と考えておきたい。79は、

サスカイトBを用いた薄手横長の剥片の一方の側縁に、片側の面から連続した調整加工を加えている。他方の側縁は折断面となっている。一応石鎌の未製品に含めたが、あるいは小型の削器として考えることができよう。

小 結

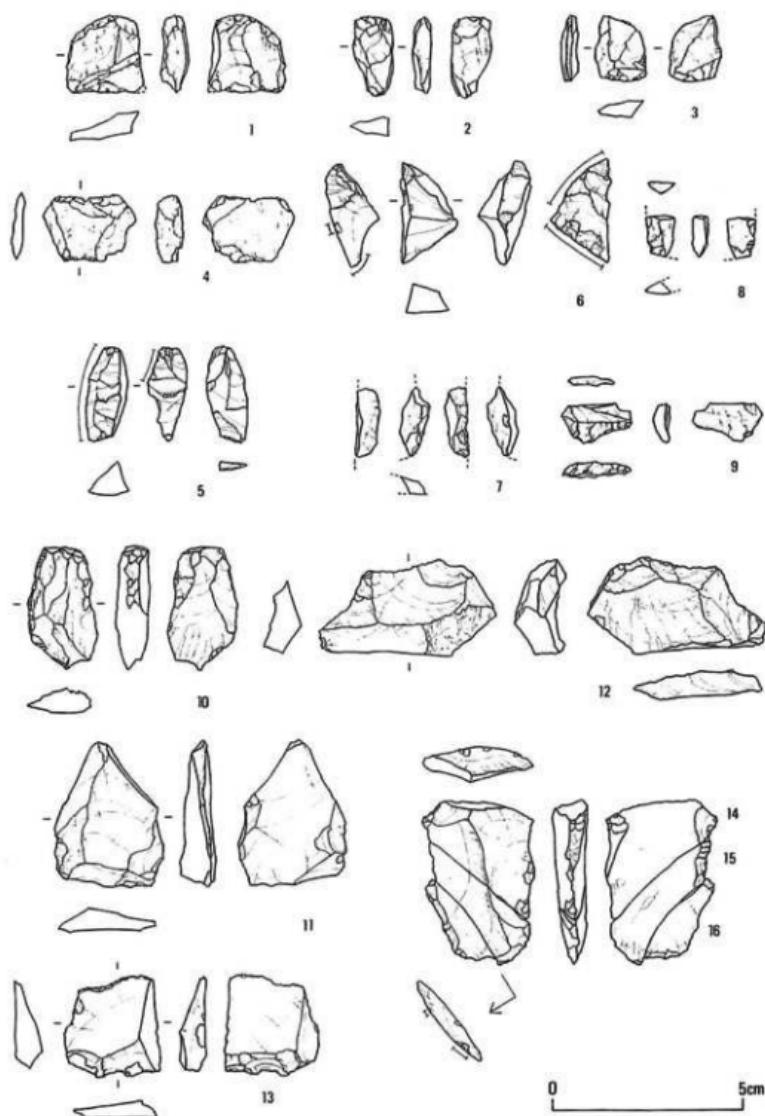
石鎌について4類に分けてその特徴を述べた。これによると、Ⅲ類の2点及びⅣ類のうち大型のものの計3点は、ほぼ確実に弥生時代の所産であると考えられる。ただ、三田市内の弥生時代中期中葉から後葉を中心とする天神遺跡では、凹・平基無茎式のものが主体となり(佐藤1983)、最近同市教委によって調査されたほぼ同時期の福島長町遺跡においても、約8割を同形態が占めるという²⁾。このことから、本遺跡出土石鎌の中にも、上記の3点以外に弥生時代の石鎌が含まれている可能性も残される。

繩文時代に属すると考えられる石鎌の所属時期について次に考えたい。これについては、各種別ごとにその類例が認められる時期を述べたが、それをみると中期を除いて、早期から晩期まで全ての時期に類するものがみられた。全体を概観した印象でも、比較的短期間に残されたとは考え難く、ある程度の長期間にわたって少しづつ蓄積されたと推定しておきたい。

分布については、時代、石材、形態別による偏在は全く認められず、遺跡全体にまさに万遍なく分布しているといえる。このことは、これらが短期間に残された可能性を否定する一つの傍証と考えることもできよう。また、この分布のあり方と二つの集中区との関連性は明確に見出しづく、この遺跡のもつ特性を考える上に重要な意味をもつものと考えられる。これについては、第4節で詳しく述べたい。

2. 楔形石器

6点出土した(第83図1~6、図版17)。いずれも平面形が2cm四方前後で、楔形石器としては小型である。1は、良質の頁岩製の剥片を素材としている。一方の側縁に顯著な截断面が認められる。下縁には、細かい階段状剥離が全体にみられる。また、表面の一部が淡く赤化しており、アバタ状に剥離した、いわゆる“サーマルフラクチャー”様の部分も存在する。このことから、本資料は受熱していると考えられる。2・3はいずれもサスカイトを用いている。2は、一方の側縁に上縁方向からの二つの截断面がみられる。階段状剥離は上・下縁とも認められる。3には、下縁に連続する小剥離痕と微細な階段状剥離が認められる。上縁に同様の階段状剥離がみられないのは、使用の際の加熱によって本来の上縁部が破碎された結果と考えられ、裏面左側に上縁から入る剥離がその際のものと考えられる。5・6はいずれも良質の黒色チャートを用いる。5は、上・下端にわずかにつぶれ状の階段状剥離が認められ、断面三角形の棒状を呈する。周縁の一部には微細剥離痕がみられる。これらの形状から、楔形石器の使用過程の最終段階のもの、あるいは碎片の一種と考えられよう。6は明瞭な階段状剥離が認められないが、一方の側縁は截断面、他方が折断面となっているためにここに含めた。周縁には、同様に使用痕と考えられる微細剥離痕が認められる。共にCh①6 D個体に属する。



第83図 横形石器(1～6), 削器(7), R.F.(8～16)

3. 削 器

1点のみ出土した(第83図7, 図版17)。刃部の小破片である。細かな調整加工の連続により、安定した角度をもった刃部を作出している。調整加工は、一見ナイフ形石器のプランディングを想起させるが、一般的なそれと較べて本例はやや細か過ぎるといえよう。

4. R F

10点ある(図版17)。全てサヌカイト製である。うち9点を図示した(第83図8~16)。

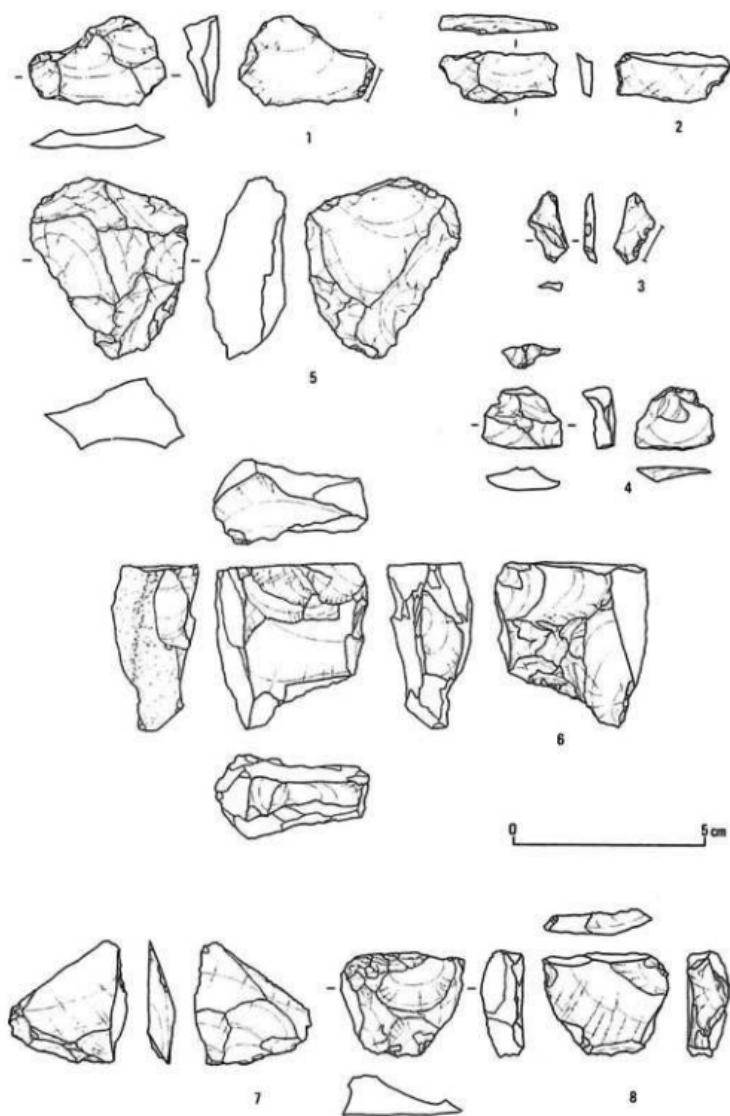
8・9はいずれも15mm前後の小型品である。8は、一方の側縁の両面から細かい調整加工が連続して施されている。他方の側縁が截断面状、上端が折断面となっており、他の石器の刃部片と考えられる。各剥離面の性状から、横形石器の碎片であるとも考えられる。9は小型・薄手の横長剥片の下縁に、やや角度のある調整加工を施している。4E3区より出土しており、石器製作関連の資料に含まれるものであろう。10は厚手の縦長剥片を素材とし、正面右側縁の上半に不規則な小剥離を加えている。11は幅広の縦長剥片を素材とし、両面の両側縁下半を中心として、やや大きな剥離を数回ずつ散漫に施している。12は一部に自然面を残す横長の剥片を素材とする。裏面の上部にやや小さな剥離の集中する部分がみられる。ほとんどの面がネガティブな剥離面によって構成されており、石核の可能性もある。13は、折断によって二分された扁平な横長剥片を用いる。後述するように、本資料は分割前には石核であったことが接合によって判明しており、二次加工は石核の剥離作業を行なっていた側縁の打面調整部側に分割後に施されている。14・15・16は、本来一つの縦長剥片が折断により三分割されたものである。14・15の正面右側縁に散漫にみられる剥離及び裏面右側縁に残される連続した調整加工は、共にこの2点が分割される以前に施された一連のものと考えることができる。また、裏面の調整加工は、16が分割された後に施されたものである。16は、もとの縦長剥片の下端部にあたる。一方の側縁全体に腹面から細かい調整加工を施し、末端部には背面側からの数回の剥離が残る。二次加工と折断面との先後関係は、末端部のものは分割後であることがわかるが、側縁のものは判然としない。なお、各々の折断面には、いずれも使用痕と考えられる微細剥離痕が残されている。

以上、図示した9点について述べたが、後の7点が比較的大型の剥片を素材とし調整加工も明瞭であるのに対して、前の2点は非常に小型で、一般的なRFとはやや異なる点が注意される。これについては、次節で分布との関係から検討したい。

5. UF

16点出土している(第84図1~3, 図版17)。12点がサヌカイト製、4点がCh① 6D個体に含まれる黒色チャート製である。うち3点を図示した。

1は、サヌカイト製の幅広不定形な剥片を用いている。下縁の一部に連続した使用痕が観察



第84図 UF(1~3), 刮片(4), 石核(5~8)

される。2は、サスカイト製の扁平な横長剥片を素材としたもので、打面部は折断によって失われている。周縁の全体に連続して微細な剥離痕がみられる。3はサスカイト製の小型の縦長剥片で、一方の側縁にわずかに小剥離が認められる。図示しなかったものの中に、後述する「石鎌チップ」分類II-a類に含まれる碎片の一側縁に、使用痕と考えられる微細剥離痕が観察されるものが1点ある。他の例は、いずれも素材の選択、使用痕の部位など、全く意図的な傾向はみられない。

6. 石核

4例ある(第84図5~8、図版17)。5は、サスカイトBを用いており、平面形は不整形の楕円形を呈する円盤状の石核である。正面・裏面とも剥片の生産を行なっており、特に、裏面からは長さ、幅とも50mm近い大型の剥片が剥取されている。正面に残された剥離面は、裏面よりやや小さい。正・裏面の前後関係は裏面が後であり、正面の剥離が裏面の剥離作業の際に打面調整の役割を果たしていると考えられる。6は良質のサスカイトAを用いる。断面が長方形を呈する扁平な四角柱状の形態である。両側面と下面にもネガティブな剥離面が認められるが、主な剥離作業は正・裏面で行なわれたと思われる。剥離作業のあり方は5ほど安定しておらず、より小型のいわゆる貝殻状の剥片が生産されたと考えられる。また、上面に示した面を打面とすると、作業面である正・裏面との為す角度はほぼ90°となり、かなり不自然な状態で剥離作業が行なわれている。7は第83図13のRFと接合するもので、扁平な横長剥片を素材とする。素材の腹面側に打面調整を行ない、薄手で幅広すびまりの剥片を剥取している。折断前の大きさは長さ51mm、幅32mmにもなり、本遺跡出土のサスカイト製資料中、最も大きなものとなる。この石核の素材となった剥片は剥取したような大型の石核は遺跡内に全く認められないことから、7は素材剥片もしくは剥離作業が進行中の状態で遺跡中に持ち込まれたと考えられる。8は、厚手すびまりの横長剥片を素材とする。正面上縁には著しい階段状剥離の集中が認められるが、それ以前に上縁及び下縁左右からは、小型ながら幅広すびまりの安定した剥片が1点ずつ得られたと考えられる。

本遺跡出土の石核は4例と少なく、個々に全く異なる形態を呈しており、一定の傾向は見出しづらい。あえて幾つかの特徴を述べるならば、5は繩文時代の石核として一般的なものといえよう。7は安定した形態をもった横長剥片を素材とし、繩文時代の剥片剥離技術ではほとんど認められない打面調整を行なっていることなど、先土器時代に属する石核と考えることもできる。ただ、厚さがかなり薄い点が問題といえよう。

7. 碎片

一般に碎片についての分析を行なった報告例はごく稀である。しかし本遺跡出土の碎片や小型の剥片をみると、その中に石鎌の製作に関連すると考えられる一群と楔形石器の碎片の一群という特徴的なものが認められ、それらが碎片の主体をなしていることから、ここではその二

者についての詳細な分析を試みたい。

1) 石鐵製作に関連する資料

ここでは、4E3区を中心に検出された微細な碎片についての検討を行ないたい。この資料を、石鐵製作の最終段階である素材剥片の調整加工時に生じたと考えられる剥片・碎片として捉え、「石鐵チップ」と呼ぶこととする。なお、「石鐵チップ」という呼称について、田中英司は「正面に異方向の剥離痕の交錯する細石刃状の碎片」(田中1977)との定義を提示している。しかし、本稿では田中が示した内容をもつものに限定せず、いわゆる「ポイントチップ」状のものなども含めて、石鐵の調整加工時に生じる剥片・碎片全体を「石鐵チップ」と呼ぶこととし、以下に行なう分析の後に明確な内容を提示することとした。

石鐵チップとして認定される資料は合計123点出土し(第87図1・2), うち47点が水洗選別によって検出されている。全てサヌカイト製であり、サヌカイトBが9割以上を占める。

資料の大きさについては、第85図にその長幅分布を示した。これによると、長さ・幅ともに19mm以下のもので、その主体となるのは長さと幅が3~5×2~5mmと1~1.5×5~12mmの二群がある。

次に、背面がどのような剥離面で構成されているかによって、以下のような分類を行なった(第86図)。

I a 背面が、主剥離面とはほぼ同様の方向からの複数の小剥離面によって構成されるもの。

b 複数の小剥離面によって構成されるが、それらに主剥離面と異方向の剥離面を含むもの。

c 複数の小剥離面とともに、自然面が残されるもの。

d I b類と同様で、一部に自然面を残すもの。

II a 背面が一面のみで構成されるもの。

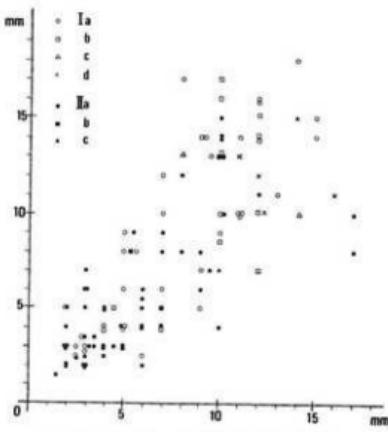
b 背面全体が、自然面のみで構成されるもの。

c 一面の剥離面と自然面によって構成されるもの。



第86図 「石鐵チップ」背面構成分類模式図

この分類と大きさとの対応関係も第85図に記号を分けて示した。これによると、I a類と II a類、とりわけ後者が主体を占めることが顕著に表われている。さらに、長さ・幅共に5mm以下のものは、その大半がこのII a類に含まれている。また、I c, I d, II b, II c類という自然面を



第85図 「石鐵チップ」分類別長幅分布グラフ

残すものにはやや大きめの例が多い点も注意される。

以上の観察から、背面構成の違いによってその対応する資料の大きさが異なることが明確に理解される。

2) 楔形石器碎片

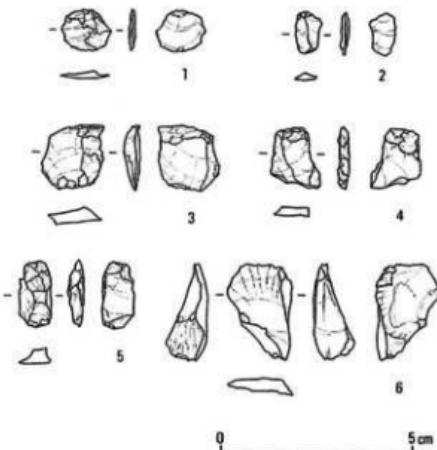
楔形石器は、先述したようにサヌカイト製3点、チャート製2点、頁岩製1点の合計6点が出土している。これに関連する碎片は13点出土しており、うち2点が水洗選別により検出されている。

楔形石器の製作・使用に関連する碎片は13点全てがサヌカイト製であり、頁岩製は全くみられない。これらの形態的特徴としては、大きさは長さ・幅共に15mm前後のものが中心であり、楔形石器自体とほぼ同様の大きさをもつ。いずれかの側縁に楔形石器特有のつぶれ状の細かい階段状剥離、あるいは截断面・折断面が残るものである。13点は剥離面の特徴によっていくつかに分けることが可能であり、あえて分類記号を付けることはしないが、以下に代表例を図示しながら説明を加えて行きたい(第87図3~6)。

3・4は正面上面縁のみに微細な階段状剥離が認められ、裏面は楔形石器本体から加撃によって剥離した際の剥離面であり、平坦な一面であることが多い。3は一方の側縁に截断面が認められる。類例が他に4点ある。5は上・下縁に階段状剥離が存在し、正面右側縁が截断面となっている。長さに対して幅が狭く、一般にスボール(削片)と呼ばれているものに含まれよう。6は13点中最も大型の例である。側縁に階段状剥離がみられない一方で、顕著な截断面が残るものである。同様にやや大型のもの1例と小型のもの2例の計4例がある。

これらの碎片が、どのような状態で生じたものであるのかを考える手がかりとして、他遺跡における分析との比較を行なってみたい。楔形石器から生じる剥片・碎片についての論考は現在のところほとんどみられない。ここでは充実した資料数と分析内容をもつものとして、阿部朝衛による峠下聖山遺跡の分析例(阿部1979)をもとに本遺跡の資料についての検討を進めて行きたい。

阿部は岡村道雄の楔形石器に関する一連の業績を基礎とし(岡村1974・76)、楔形石器とその碎片について独自の分類を提示している。碎片は1,091例も出土しており、それを4類に大別しさらに16に細分している。



第87図 「石器チップ」(1・2), 楔形石器碎片(3~6)

また、碎片の認定の第一の基準として「2個一対の刃部(本稿でいう「階段状剥離」)を有さないもの」を挙げている。

本遺跡出土例を聖山遺跡での分類に照らしてみると、第87図3・4とそれに類するものは「刃部を1ヶ有し、反対側が点状で三角形を呈するもの」としたSⅢ類に大部分が含まれ、4は、或いは「刃部を1ヶ有し、片方の刃部がつぶれてしまったもの」というSⅣ類に含み得るとも考えられる。5は、2個一対の刃部を有するという点では楔形石器本体として考えられるものである。さらに、6のような形状のものは分類中には含まれていない。ただ6のような形状のものも、本遺跡においてはやはり楔形石器との関連の中で考えるほうが自然であるといえよう。さらに阿部は、楔形石器の製作過程や接合資料を検討した結果、楔形石器に残される両極剥離痕の生因は、同石器の製作・使用の双方によるとした岡村の見解に対して使用法によるものであるとの結論を提示している。また、両氏ともに楔形石器を石核とした両極打法による剥片の生産の可能性については否定的見解を示している。本遺跡出土の楔形石器・同碎片は、いずれも20mm四方前後という小型品であり、石器の素材となる剥片を剥取することを目的として利用されたとは考え難い。本遺跡における楔形石器のもつ役割については、上記の分析を踏まえて分布の検討の後に再論したい。

8. 接合資料の検討

サヌカイト製のものが5個体とチャート製のCh①6D個体の中に2組の接合資料が認められる。

サヌカイト製は、San①6D個体のみが3点の接合であり、他は2点ずつが接合しているものである。主な個体について、次にみてみたい。

San①5D個体は第83図13のR.Fと第84図7の石核が接合するもので、扁平な縦長剥片を素材とする石核を折断によって二分割している。サヌカイトAを素材とする。接合時の大きさは長さ51mm幅32mmを測り、素材となった剥片は当然さらに大きかったと考えられる。しかし、遺跡内においてはこのような大型の剥片を生産することが可能な石核は見られないことから、前述したように素材剥片自体もしくは剥離作業進行中の石核の状態で遺跡内に搬入されたものと考えておきたい。

San①6D個体はR.F3点で構成される(第83図14~16)。本来は1点の縦長剥片であったものが折断によって三分割されたもので、接合して打面部を欠いた元の縦長剥片に復原される。周縁の加工の性状から、もとは1点のR.Fであったと考えられる。先端部である第83図16は折断後にさらに加工が加えられているが、他の二点には認められない。折断面にはいずれも一部に微細な剥離痕がわずかながら認められることから、折断後に使用されていることは明らかだが、折断を行なった積極的な意味は見出せない。

以下、3例は図示していないが簡単にふれておく。

San①4E個体は、断面が6×10mmの角柱状の剥片を折断によって二分割したものである。

接合後の長さは30mmを測る。接合後の両端も著しい階段状を為す折断面となっている。San② 5 D・同② 6 D個体は、それぞれ厚手大型の横長剥片同志あるいは剥片と石核が接合しているものである。Ch④ 6 D個体のうち1組は2点の剥片の接合、他方は自然破碎による7点が接合している。

6例について簡単にその内容を述べたが、3個体で折断が多くみられる以外には特に技術的特徴は見出しえない。

9. 剥片剥離技術の検討

ここでは、接合資料及び石核・剥片から本遺跡における縄文時代の剥片剥離技術について考えてみたい。まず接合資料からは、折断が比較的多用されていること以外には特徴を見出すことはできなかった。縄文時代の石器製作における折断については、田中英司がその有効性について指摘しているが(田中1977)、本遺跡においてはそういう意図は全く認められない。石核については、第84図5が縄文時代のものとして最も一般的であるといえよう。6・7の2点については、素材剥片の生産は充分に行ない得たと考えられるものの、5ほど効率の良い剥片剥離を行なってはいない。7は一般に打面調整を行なわない(山田1983)、縄文時代の石核の中では特異な存在である。厚さが薄く、生産された剥片が必ずしも安定した横長ではないという疑問点が残るもの、先土器時代の所属とした第36図17・18の2点と同じ内容を持った石核である可能性も大きく残るといえる。

(大下)

第3節 石器の分布

1. 石器の分布と遺跡の広がり

本章で対象とした資料401点(第19・20表、8例以南のものも含む)は、先に検討した先土器時代の石器と同様に調査区のほぼ全体に分布している。ただ先土器時代の資料に較べると、調査区の中央部及び東西両縁部では、より傾斜度(第Ⅲ章第7節参照)の高い区域にも及んでいる(別添第18図)。

分布は調査区全体に認められるが、2ヶ所の比較的大きなまとまりと1ヶ所の小さなまとまりが存在する。前二者のうち、3E23区と4E3区を中心とするものをJ1集中部、6D区西半を中心とするものをJ2集中部とし、5E4区周辺の小さなまとまりをJ3集中部と呼ぶこととする。なお石器のうちJ1集中部の範囲内に含まれる未製品2点についてはこの集中部の他の石器との関係で捉え得るものと考えたが、残りのものについては、集中部との関連性を明確に捉えることができず、さらに他の部分に分布する石器との性格の相違も見出しえないことから、J1集中部と分離して石器のみの分布の中で考えることとした。J2集中部及びその周辺に分布する石器についても同様の判断によった。次に各集中部の概要を示す。

J1集中部

3E23区の南端東半部及び4E3区の北側東半部を中心として分布し、広さは南北14m×東西17m位である。先土器時代第1ブロックの南縁に重なって分布する。出土した石器は、石鎧未製品2点を含めて総計180点である。その内訳は、石鎧未製品2点、楔形石器4点、R F 2点、U F 2点、石核2点、「石鎧チップ」120点、楔形石器碎片11点、剥片20点、碎片17点である(第22表)。うち73点が水洗選別によって検出されている。石材は頁岩製の楔形石器1点を除いて全てサヌカイトである。これらのはとんどが、3E23区と4E3区境界付近の1.5×1.5m位の広さに密集して出土している。この点については、後にその性格について詳述する。

J2集中部

6D区のはば中央の西寄りに分布し、その広がりは、25×14mの南北に長い楕円形となる。石器は、総数108点が含まれる。その内訳は、削器1点、R F 8点、U F 11点、「石鎧チップ」3点、楔形石器碎片2点、石核2点、剥片66点、碎片15点である(第22表)。うちU F 3点、剥片11点が個体別資料Ch①6 Dに含まれる(第88図)。

J3集中部

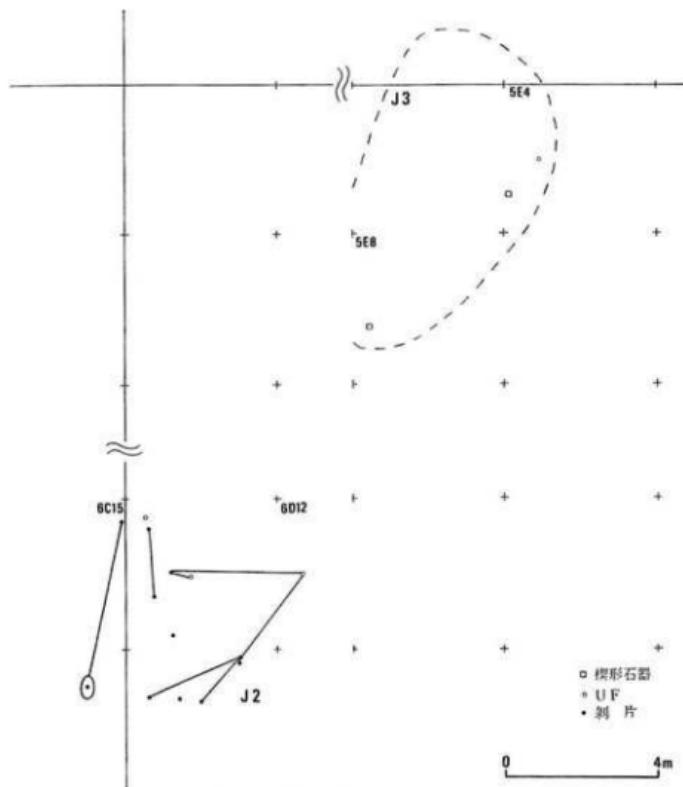
5E3区を中心に4点のみが散漫に分布する。内訳は、Ch①6 D個体に含まれる楔形石器2点とU F 1点とサヌカイト製の剥片1点である(第22表)。同一個体の資料を含むことから、J2集中部と関連するものと捉えられよう。

以上の3つの集中部をとりまくように、石鎧とその他の石器が分布している。石鎧以外の石器は、その大半がJ2集中部をとり囲むような形で、53×29m位の南西一北東に細長い分布域を形成している。これらにはJ2集中部とのサヌカイト製個体の接合例2例を含むことと、その分布のあり方からJ2集中部と一群のものと考えて大過ないであろう。石鎧については、前述したように石鎧のみを分離してその分布を後に検討するが、集中部との関係を少しみておくなれば、J1集中部の周辺にはかなり多くの石鎧が分布するのに対して、J2集中部及びその

第22表 集中部別石器組成表

		A 石鎧 楔形石器 削器 R F U F				B	C	AHch	Wch	D	計
J1	点数	2	4	2	2	20	17	120	11	2	180
	率	1.1	2.2	1.1	1.1	11.1	9.4	66.7	6.1	1.1	99.9
J2	点数		1	8	11	66	15	3	2	2	108
	率		0.9	7.4	10.2	61.1	13.9	2.8	1.9	1.9	100.1
J3	点数	2		1	1						4
	率	50.0		25.0	25.0						100
JX	点数		2	16	9						27
	率		7.4	59.3	33.3						100
県・表採				6	1						7
	(77)	6	1	10	16	109	42	123	13	4	326

AHchは石鎧チップ、Wchは楔形石器碎片と判定されたもの。
JXはJ1～3集中部に含まれないもの。



第88図 個体別資料Ch ① 6 D分布図

周辺には石器の分布がかなり少ない。この原因については、集中部との直接的な関係によるものか傾斜度など他の要因によるものか、いずれとも判断し得ない。

2. 石器の時間的関係

ここでは、各集中部及びその他に分布する石器について、それぞれの残された時間的関係について考えたい。

J1集中部は、碎片が狭い範囲に集中して残されていることから、比較的短期間に残されたものと考えられる。J1集中部とJ2集中部との関係は、接合関係なども全くみられず不明といわざるを得ない。J1集中部とJ3集中部についても同様である。J2集中部とJ3集中部は、共にCh①6D個体を含むことから当然関係を有するものであり、J3集中部の内容から、

J2集中部でCh①6D個体から生産された楔形石器2点とU F 1点が、J3集中部に持ち出され使用されたと考えられる(第88図)。J2集中部周辺に分布するものについては、前述したようにJ2集中部と一連のものと考えておきたい。

石鐵については、前述したようにJ1集中部に含まれる未製品2点を除いて、それぞれの集中部との関係を明確に窺い得るものはないことから、一応別個の性格をもって分布しているものと考えておきたい。

3. 石器の種類別と接合資料の分布

ここでは、石器の種類ごとと接合資料の分布の傾向を検討する。なお、「石鐵チップ」・楔形石器碎片については、同様の内容を示すと思われるものがJ2集中部の周辺にも若干認められるが、ここでは分析の対象から除いておきたい。

1) 石 鐵 (別添第18図)

石鐵は、未製品4点を含む80点が認められている。うち32点が水洗選別によって検出された。前述したように弥生時代に属するもの3点を含んでいる。その分布をみると、まさに調査区全体に点々と分布しており、時代・石材・類別による分布の偏り・集中は全く認められない。また、第1節で述べた三つの集中部及びその周辺と石鐵との分布のあり方をみると、前述したようにJ1集中部に分布する未製品2点を除いては、その関係を窺えるものは明確には認められず、異なる分布傾向をもつものとして分離して検討した。

2) 楔形石器 (別添第18図)

サヌカイト製3点のうち、2点は4E3区、もう1点は4E7区からいずれも水洗選別により出土している。頁岩製の資料はサヌカイト製のものの分布からやや離れた3E21区に単独で分布する。チャート製の2点はJ3集中部に所属し、5E4・8区から出土している。

3) 削 器 (別添第18図)

6D16区より1点のみ出土している。資料数が1点のため分布傾向は窺い得ない。

4) R F (別添第18図)

サヌカイト製のもの11点がある。うち小型のもの2点がJ1集中部、比較的大型のもの9点がJ2集中部及びその周辺に分布している。後者のものが大型な点で際立った相違をみせる。

5) U F (別添第18図)

14点出土している。サヌカイト製10点のうち2点は、J1集中部の4D5区及び4E3区から出土している。他の8点のうち6点がJ2集中部に含まれる6D区に分布する。チャート製の4点のうち、3点はJ2集中部内の6D11・12区にまとまって出土しているが、残り1点は同一個体の楔形石器と共にJ3集中部の5E4区から出土している。

6) 石 核 (別添第18図)

4点ある。全てサヌカイト製である。うち2点(第84図5・6)がJ1集中部内の4E3・4区に、残り2点はJ2集中部内の6D7・11区に分布している。

7) 「石チップ」(別添第18図)

「石鐵チップ」123点は、3E23区と4E3区に主に分布し、その中心は4E3区の北東部にあり、全体の82%を占める98点が、同区に集中して出土している。他にJ2集中部にもわずかに3点、同様の内容をもった碎片がみられるが、分析の対象からは分離しておく。資料の大きさ及び背面構成の分類による分布の差は特に認められないが、4E3区の中心部では5mm以下のものが集中してみられることが調査中から注意された。さらにその中心に近い3E23区、4E2区でそれぞれ石鐵の未製品が出土していること(第82図77・79)にも当然注目しなければならない。また、これら石鐵関連資料に重なるように、楔形石器とその碎片が分布していることもこの資料群の内容を考える上で重要な意味を持つといえよう。

8) 楔形石器碎片(別添第18図)

楔形石器の碎片は、3E23区から4点、4E3区から6点、4E4区から1点が出土している。他にJ2集中部に3点同様の性状をもつサスカイト製の碎片がみられる。3E23区の4点が、いずれも第83図2・3と同様の石質である点は注意される。

9) 接合資料

San① 5D個体は、石核が5D9区、RFが7D1区から出土しており、約40m離っている。San② 6D個体は、第83図の14が5D23区、15が6D12区、16が6D2区から出土している。San③ 5D個体は、剥片2点が5D3区と6D7区から出土した。San④ 6D個体は、2点とも6D11区から出土している。Ch① 6D個体は、先述したように3点がJ3集中部、14点がJ2集中部とその周辺の6C15・20区、そして1点が8D1区から出土している(第88図)。

4. J1集中部の検討

ここまでではJ1集中部出土の石器について、その内容によって三つに分けて説明して来た。ここではそれらを一群の石鐵製作に関わる資料として捉え、他遺跡の分析例との比較を行なうことによってその性格についてまとめてみたい。

J1集中部内には石核2点と剥片20点が含まれる。剥片については、すでに述べたようにこの集中部内で製作されたと考えられる石鐵及び楔形石器の素材となり得るような剥片は、わずかに1点しか見出せない。石核との関係でも、石材や性状からみて2点の石核のいずれから剥取されたとも考えられないものを含んでおり、集中部外あるいは遺跡外からの搬入品を含んでいると考えられる。石核については共に多くの素材剥片が生産されたと考えられるが、石鐵・楔形石器とその碎片類の石質を観察すると、ほとんどが第84図5の石核から生産されたと考えてほぼまちがいないと思われる。素材剥片が残されていない理由については、前述したように使用し尽くした場合と遺跡外に持ち出した場合が考えられるが、J1集中部の内容からみて後者の可能性が高いといえよう。

本資料群の中心となる微細剥片・碎片については、大きさ及び背面がいかなる剥離面によって構成されているかの分析を行ない、この資料群が素材剥片を調整して石鐵を製作する際に生

じる「石鐵チップ」として捉え得るものであることを述べた。次に他遺跡の分析例との比較検討を行ない、本資料群の内容についてより明確な位置付けを行ないたい。

石鐵製作に関連する資料群の分析としては、田中英司による埼玉県風早遺跡例の分析(田中1977)、阿部祥人による東京都多摩ニュータウンNo852遺跡例(阿部1984)の二者を挙げることができる。田中は、石鐵製作に関連する資料を、製作工程中の流れを追ながら、石核、素材、未製品、碎片の五つに分類した。さらに、碎片に「いわゆるポイント・フレイク状を呈するもの」と「細石刃状の碎片」の二者を見出し、特に後者を「石鐵チップ」と呼び、「碎片から逆に石鐵製作の存在を伺い知る傍証としたい」と述べている。また、素材とした剥片中に両極打法によって剥離されたものを含んでいることも注意される。阿部は、No852遺跡で検出した石鐵製作関連遺物集中部について詳細な分析を加えた。微細な碎片については「両面加工石器の細部加工の際に生じるような特徴をそなえたチップ類」とし、資料1,370点の最大長による分布を検討している。さらにこのチップ類を以下に示す四つに細分している。

a類 主剥離面の末端がヒンジフラクチャーによって厚くえぐるように剥離した状態を示し、背面全体に細かな剥離痕が多数残され、碎片の末端が両面から加工を受けた石器の縁辺の一部にあたる特徴をもつ。

b類 背面に剥離痕が一枚のみで、非常に薄い、いわば「うろこ状チップ」。

c類 全体の大きさの割には、背面に細かな剥離痕が多数残されているもの。b類同様に薄い。四類中最も多い。

d類 厚みのあるものが多く、また背面剥離痕類が少なく、礫表部分を残すものも多い。

以上のような分類を行ない、石鐵製作工程との対応から、a・b・c類は「完成間近か加工の際に生じたもの」とし、d類は「素材加工の初期に生じたもの」としている。さらに田中と同様に製作工程に沿って資料群を分析し、より詳細な工程の復原を試みている。

以上の二遺跡の分析例と本遺跡例と、「石鐵チップ」の内容と資料群全体の構成の二点を中心として検討を進めてみたい。

「石鐵チップ」の分類について、本遺跡例と田中・阿部両氏の分析例を比較してみると、田中が示した二者は、共に本遺跡のI類に含まれると考えられる。阿部の分類では、c類が本遺跡のI a類、b類がII a類、d類がI c、II b・c類にそれぞれ対応するとして大過ないといえよう。ただ、本遺跡例では田中が特に「石鐵チップ」と呼んだ「細石刃状」のものは数点しかなく、阿部がa類とした主剥離面の末端がヒンジフラクチャーを形成するものは全く認められないという相違点を挙げることができる。多摩ニュータウンNo852遺跡例の分類との対応関係から本遺跡例は、石鐵の製作工程の中でも最終段階の素材剥片の調整加工時に生じた資料群として考えられよう。

資料群の構成という点では、本資料群は石鐵・楔形石器の素材となる剥片をほとんど含んでいないという際立った特徴を有している。この点は、他の二遺跡が製作工程の全体を網羅する内容を有している点と比較すると、本資料群の持つ性格を考える上で重要な意味をもつものと

いえよう。まず素材剥片が残らない原因について考えてみると、第一に生産された剥片が全て製品として加工されてしまったという場合、第二に一部は加工され、残りは遺跡外に持ち出されたと考える場合の二者がある。同時に残された「石鐵チップ」の点数から考えるならば、後者の場合である可能性が高いといえよう。また、素材剥片が他の二遺跡では残され、本遺跡には残されないという差が生じる原因としては、前二者の集中部が一般的な集落を構成する要素の一つとして残されているのに対して、本遺跡内では土器や遺構が全く検出されず、一般的な集落ではないと考えられる点が大きく影響しているものと思われる。

5. J2集中部の検討

この集中部は、微細な碎片を中心に構成されていたJ1集中部とは対照的に、最大長が3cm前後の大型の剥片を中心として構成されている。「石鐵チップ」とび楔形石器碎片と同様の内容をもつものも3点と2点検出されているが、その分布はまばらであり、J1集中部のような製作址の様相は認められない。また、同様な形状を示すものの、必ずしもこれらの石器に関して生じた碎片であるとは確定し難い。

剥片はJ1集中部出土例に較べて大型例が多く、RFやUFもJ1集中部に較べて大型のものが多く検出されている。また、この集中部内からは、先土器時代に含めたサヌカイト製の石核2点(第36図17・18)を検出していることから、繩文時代の所属としたサヌカイト製資料の一部あるいは全体が、先土器時代のものであるという可能性も残されている(第Ⅲ章第1節参照)。

6. 小結

J1集中部に所属する資料群が、石鐵及び楔形石器の製作・使用に関連する資料群であると考えられることは、以上の分析からほぼ誤りないといえよう。次にその要点をまとめておきたい。

1) 「石鐵チップ」は、多摩ニューカウンNo.852遺跡例との比較から、本資料群では石鐵の完成間近かの仕上げ段階と推定されるものが中心を占めることがわかった。

2) 素材剥片が残存しない点については、その資料群が残された集落のあり方と関連する可能性を指摘した。

3) 楔形石器については、サヌカイト製のものは、石鐵と同時に製作されその周辺で使用されたと考えた。また、これらはその大きさから、石器の素材剥片を生産したものではないとした。さらに、単独で完成品として遺跡内に持ち込まれたとみられる頁岩製の楔形石器が集中部から離れて1点出土していることから、もともとこの場で楔形石器の使用を意図する何等かの行為が行なわれたと考えられる。

この3点をもとに概観するならば、石鐵の加工、特に仕上げ段階が中心に行なわれた場であり、それに付随して生産された楔形石器が、石鐵と密接な関係を持って使用されたといえよう。

そしてその資料の残存状況から、一般集落に残された同様の製作址とは大きな相違点を持つ点が見出された。

最後に、このJ1集中部が残された時間は、出土した資料数が多摩ニュータウン遺跡例などと比較して格段に少ないことから、ごく短い期間(例えば、石器数点を製作するといった)を想定しておきたい。

石器製作址及びその資料群の分析は、本遺跡例が3例目である。今後同様の碎片群に注意が向けられることによって類例が増加し、本稿では充分な検討を加えることのできなかった残存する素材剥片の多寡のもつ意味や楔形石器の役割についても何等かの糸口が見出せるであろう。

(大 下)

第4節 遺跡の特性

最後に、縄文期におけるこの遺跡の特性について触れておく。なお、南側散漫分布域については対象としていない。

今回の調査では土器が出土しなかったことを含め、この遺跡を特色づけるいくつかを挙げることができる。今までの調査結果をふまえて整理してみる。

- 1) 遺跡の立地する丘陵のうち、集落址の位置する可能性が高い範囲をほぼ全面調査し、一部水洗選別作業を行なったにもかかわらず土器は細片すら回収できなかった。
- 2) 同様な条件にもかかわらず、遺構もまったく検出できなかった。
- 3) また、確実な縄文期の石器については、第2節で記したように、石器が77点出土してもかかわらず、他の石器についてはわずかに楔形石器を6点、削器1点を認めるだけである。
- 4) 石器の分布については、調査範囲全体に散らばっており、一定の傾向は認めにくい。
- 5) しかし、RF・UF・剥片・碎片・石核も出土しているし、石器製作址、楔形石器製作址を含むJ1集中部や、J2集中部においては遺物分布の集中がみられる。

まず1)については、調査技術の問題がある。しかしこれについては、すでに記したように一部ではあるが水洗選別作業を行なっていることや、他時期の細片がある程度回収されていることから問題はないであろう。

後世の搅乱や流出、包含層の化学的性質などによる風化・消滅の可能性については、次のように考える。まず、調査結果からは後世の大規模な搅乱は考えられないし、たとえ一部の搅乱があったとしても土器のみがなくなることは考えにくい。また、流出についても同様であり、これはさらに先土器時代の遺物分布状況からも考えられない。最後の包含層の化学的性質による作用については、現在まったくその知識を持ちあわせておらず、今回は考慮の外にしたい。

- 2)についても同様である。
- 3) 4)については、石器・楔形石器・削器以外の器種を認めない。これは後で記すように、周辺の遺跡の中でも特異な石器組成である。また、石器の分布は他の石器の分布と一緒に考え

にいく点が多い。

しかし5)のように、J1・J2・J3集中部が確認でき、それらに含まれる石器群の検討からこれらの集中部が、ある意図をもった人間の行動の結果であることを窺わせる。

以上の特色を挙げることができる。ここでJ1・J2・J3集中部の特徴をもう一度整理してみよう。

J1集中部は調査地北東側平坦面に位置し、その主体は石鏃・楔形石器製作にともなう石鏃・楔形石器碎片である。トゥール類は石鏃未製品が2点、楔形石器3点が出土している。石鏃などの素材となるような剥片がないこと、単独個体の頁岩製の楔形石器が含まれること、短期間に残された石器群であることなどが大きな特徴といえる。

J2集中部もJ1と同様尾根上にありながらもかなり平坦な所に立地しており、トゥール類が削器1点のみで他の器種が認められないこと、剥片類が多量に含まれていることが特徴である。また、接合資料も6例認められている。このうちチャートの例は、同一個体の楔形石器・剥片がJ3集中部を構成しており、J2で製作された楔形石器が、使用の目的で運び出されたことが窺えることから、J2・J3集中部が関連のあるものとして捉えることができる。

以上の点から各集中部がいずれも特殊な性格をもち、さらにそれぞれがかなり性格の異なったものであると指摘できる。

また石鏃の分布との関係をみると、調査地全域に散見できる石鏃がJ1中にも数点含まれるのに対して、J2の中心部には1点しか認められない。J2の周辺部にもわずかにみられるだけである。一見散漫に分布しているようにみられる石鏃も、一部はJ1・J2集中部と何等かの関係を持っているものと見ることもできる。この視点に立てばJ1・J2・J3の性格の違いを考える上で一つの材料となろう。

以上、今回の調査結果を整理してみた。これらを基礎として、この遺跡をどのように考えればよいのであろうか。二つの視点から考えてみたい。

まず第一に、時期は限定できないがこの遺跡を集落址と考えることである。しかし土器が出土しないこと、集中部がみられるものの石器の器種が限られることなどかなり特殊な例であること、もっとも平坦な地域に集中部をもたないことなどから、当時の人々の生活の拠点集落とは考えにくい。では調査地外に集落の中心があって、今回の調査地が集落の外縁部に当たる可能性はあるのだろうか。これについては二つの可能性がある。一つは、調査地の北側、つまり同丘陵の先端部であり、もっとも立地的には可能性が高い部分である。しかし、ちょうどその部分に位置している溝口城の調査や、試掘調査における丘陵部先端に設けたトレンチの結果などからは、そのような微候はみられなかった。また1986年に行なわれた三田市教委による丘陵先端部周辺のは場整備にともなう調査によってもまったく遺物は出土しなかったという³⁾。一方、調査地南西側についてはどうであろうか。この丘陵は調査地南西端からさらに南西側にかけて、比較的平坦な部分が約700mにわたって続いており、ここに集落の中心がある可能性もある。しかし分布調査ではあるが、県教育委員会の調査では繩文期の遺物はまったく出土してい

第23表 三田市域の縄文時代遺跡一覧表(ただし、石器などは出土資料は除いている。)

道路(地点)名	出土道物・時期	出土状態・遺構	位置	立地	参考資料
青野ダムAO-3・4 青野ダムAS-102 青野ダムAW-62 青野ダムAN-91 加茂六地蔵 内神下井沢 対中(庄地区) 十倉	後期土器・石器 押型文土器・石鏡・刻片・碎片 後期土器・有舌尖頭器・石鏡・石錐・剥片他 後期土器・異形磨製石器・石鏡・楔形石器・剥片他 後期土器 後期土器(元住吉山1)・石刀柄頭 後期土器(凸带文)・石鏡 後期土器 後期土器・石皿・剥片 後期土器 有舌尖頭器	2次堆積 土壙 埋甕(後期)・土壙 土壙 学生前削溝 包含層? 表探	黒川左岸冲積低地～下位河岸段丘 青野山山麓低地内の独立丘陵 青野川東岸に広がる舌状の洪積台地 青野川・黒川合流付近、黒川右岸洪積台地 旧河道沿いの標高地 内神川沿いの標高地 武庫川沿いの標高地 羽束川左岸 羽束川右岸 羽束川右岸	標本地1979 同上 同上 兵庫県調査1984a 註5) 石野1979 註6) 註5) 同上 高島1982 高島1981	

ない⁴⁾。とすればやはり、この丘陵上に拠点集落が位置していたとは考えにくい。

第二としては、土器の出土しないことや石器の散発的な分布から、狩場と捉える見方である。狩場遺跡の可能性については多摩ニュータウン内遺跡などで指摘されている(小堀他1984)。しかし、今回の調査ではわずかではあるが楔形石器が存在するし、石器・楔形石器の製作場が認められることや、トゥールは少ないもののRF・UF・剥片・石核を含む集中部分が確認できることなどから、石器の占める割合と分布状況のみをもって狩場遺跡と捉えることはできない。

すなわち、J1・J2・J3の集中部のもの特殊性がこの遺跡の本来の姿であり、これらをどのように解釈するかが問題となる。この点になると様々な可能性が存在するであろうが、あえて一つの仮説を示しておく。

土器が存在しないことは、この遺跡内での縄文人の生活時間の短かさを示すものであり、大半の石器の散漫分布は、遺跡の時期幅の広さを示す。しかし、集中部の存在はある一定の時間の滞在を示すものと思われ、とくにJ2集中部は生活を一にする集団がある程度の時間ここに存在していた証拠とみる。しかし、土器やトゥール類を残さず持出しており、それらのことからキャンプサイト的な性格をもった集落であり、そして、石器および楔形石器の製作と楔形石器を用いる何等かの活動を行なっていたと考えができるのである。これは、もっとも集落を置くのに適している南側の平坦面に集中部がみられないことからもいえる。

さらに各集中部ごとに一部の石器の分布の関係の分析が重要となろうが、他遺跡の石器

の分布と集落の関係の検証も含め、今後の課題としたい。

最後に周辺の縄文時代の遺跡を挙げ、溝口遺跡と比較してみる(第23表)。

三田市域の縄文時代の遺跡は11ヶ所を数える。なお、この他に石鏃の単独出土地や他時期の遺跡から出土している資料の中に、縄文時代の可能性のある石器を含んでいる例などがあるが、今回は除外している。

現在までのところ、もっとも遺跡の分布が明瞭なところは、青野川流域と羽束川流域である。青野川流域の遺跡群については、青野ダム建設に伴なう調査が広く行なわれたためでもあるが4地点確認されている。時期的には比較的古い様相を示す資料が多く、後期の土器も出土している。とくにAN-91地点では、土壙、埋甕(後期)の遺構や石鏃が100点以上、異形局部磨製石器、スクレイバーなどのほか剥片類が多量に出土しており注目できる。

羽束川流域の遺跡群は4ヶ所を数える。木器在園内遺跡からは有舌尖頭器が出土しているが、主体となっているのは後期の資料のようである。残りの3ヶ所のうち2ヶ所は、内神川沿の微高地に立地するものと思われる内神下井沢遺跡と青野川が武庫川に合流する上流の微高地にある加茂六地蔵遺跡であり、どちらも後期である。とくに後者では土壙が検出されており興味を引く⁵⁾。同じように武庫川沿の微高地に立地するものと思われる対中遺跡からは、晩期の凸帶文土器が弥生時代前期の溝から出土している⁶⁾。

全体を通してみると、今のところ前～中期の遺跡は未発見で、早期と後期に分かれる。また晩期も1例のみである。立地をみると、三田周辺の地形の特徴をなす比高の大きい段丘面や丘陵の平坦面に立地する遺跡(青野川流域及び溝口遺跡)と比較的の低地に位置する遺跡(内神下井沢・加茂六地蔵遺跡など)があるが、時期的な立地の変遷などについてはまだ不明であり、今後の遺跡の増加に期待する。いずれにしても周辺の遺跡の中で、溝口遺跡と同様の例を見つけることはできない⁷⁾。立地を含め比較的の様相が似るのは、青野ダムAN-91地点であり、成果の発表が待たれる。

以上、今回の調査によって判明したいくつかの点を整理しつつ、溝口遺跡の縄文時代の特性について考えてみた。しかしこれらを組み合わせどのように解釈するかについては、可能性の一つを示したのみで、楔形石器を用いる作業内容など、より具体的な集落復原には至らなかつた。今後、三田周辺だけでなく、より広い範囲で類例を調査するとともに、地域内の遺跡の動態の中での検討をすすめていかなければならぬ。

(南)

第V章 古墳時代

須恵器の破片が少量出土した(第89図)。4E・5D・5E・6E区I層から出土する。そして5E22・6E1・6E2区に集中する傾向をみせる。接合の結果、杯蓋1個体、杯身2個体をほぼ完形に近く復原できた。形態や製作技術からみて6世紀後半～末の年代が考えられる。以下、その特徴について記述する。

杯 蓋 (第90図1)

天井部はやや丸味を帯びる。口縁部と天井部の境には稜をもたない。口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部の $\frac{1}{2}$ 程度にヘラ削りが行なわれ、天井部内面に回転ナデの後、不定方向にナデを施す。ロクロの回転は時計回りである。胎土は精緻、焼成は良好。色調は灰褐色を呈する。口径14.0cm、器高3.9cmを測る。

杯 身 (第90図2・3)

2はたちあがりが内傾し、端部を丸くおさめている。受部は丸くやや上方にのびる。底部は丸味がある。器壁は厚い。調整は回転ヘラ削りが外底面 $\frac{1}{2}$ 強におよぶ。内底面に回転ナデの後、不定方向にナデを施す。ロクロの回転は時計回りである。胎土は精緻、焼成は良好。色調は全体に灰色を呈する。口径12.1cm、器高4.5cmを測る。

3はたちあがりが短く、内傾する。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのびる。底部は丸味を帯びる。調整は回転ヘラ削りが外底面 $\frac{1}{2}$ 程度に行なわれ、内底面に回転ナデの後、不定方向にナデを施す。ロクロの回転は時計回りである。胎土は精緻、焼成は良好。色調は灰色を呈している。口径12.8cm、器高3.9cmを測る。

(藤平)

第VI章 平 安 時 代

第1節 遺 物

須恵器の破片が約500点、1層から出土している(第89図)。大半の破片が平坦面9C・9D区に集中し、少し離れた8B区にも分布する。接合の結果、杯蓋11個体、杯身2個体が図示できる程度まで復原できた。復原できたものに限らず、器種を判別できる破片はほとんどが杯蓋、杯身といった供膳形態を示している。以下、その特徴について記述する。

杯 蓋(第90図4~14)

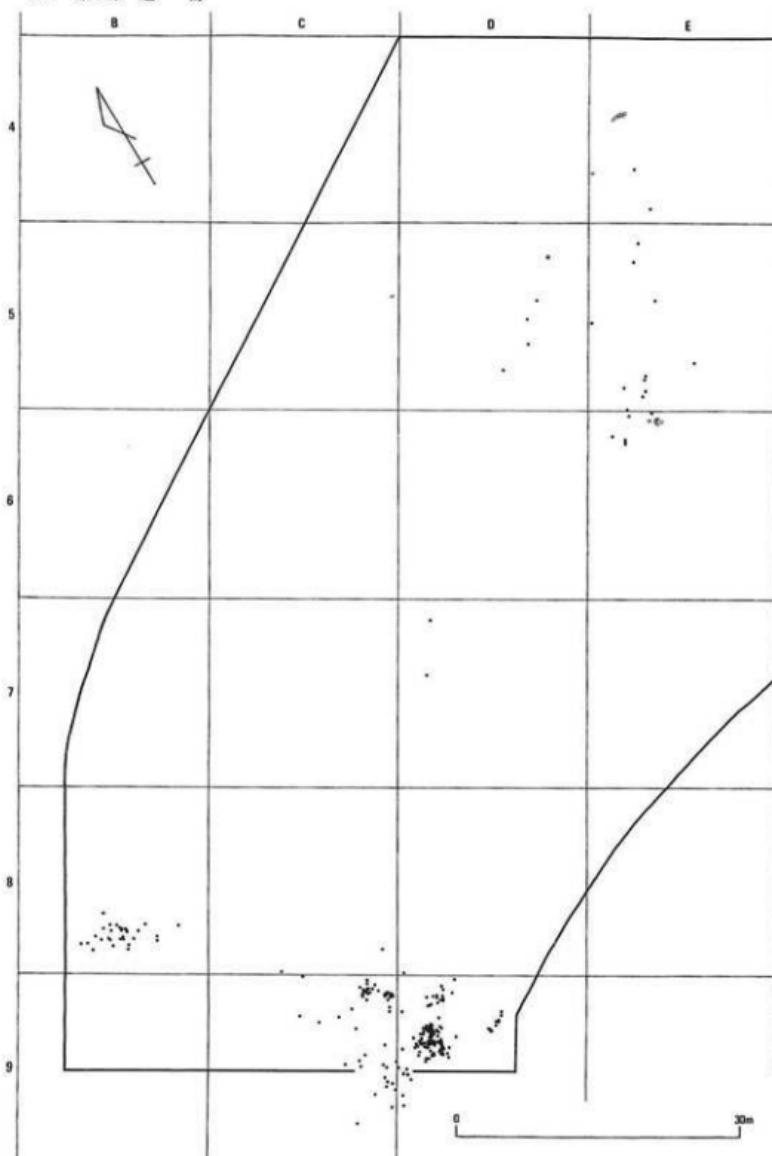
つまみが付いていたと思われる痕跡をもつ6以外はいずれもつまみを伴わない。口縁部の形状により、段をなし端部が下方に短く屈曲するA類(4~7)と緩やかにのびるB類(8~14)に分けることができる。A類、B類とも天井部1/3程が回転ヘラ切り不調整で、残る部分は回転ナデを施している。

A類

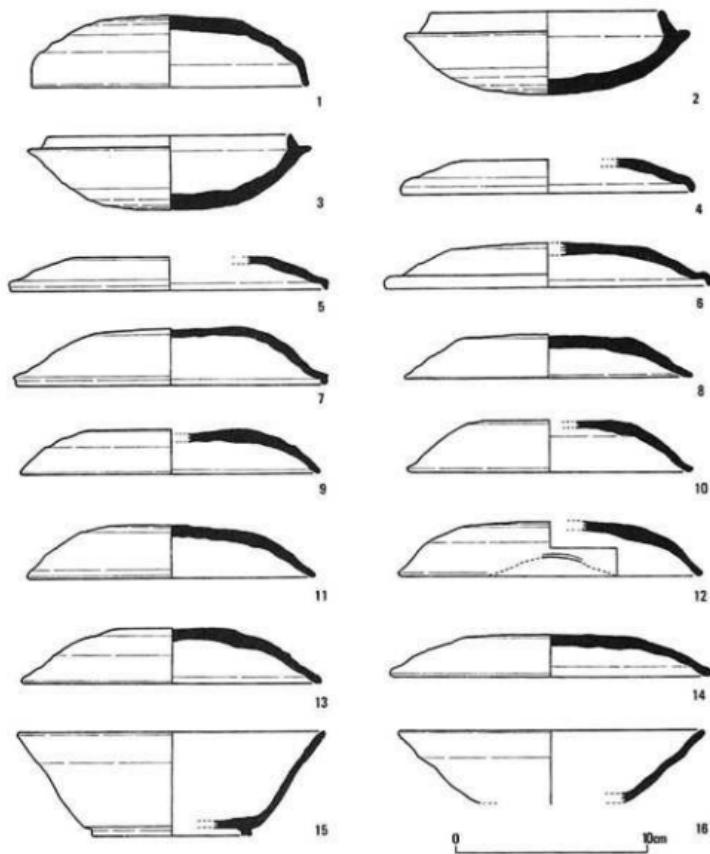
4・5とも天井部中央が欠損するが、残存部分から平坦であると判断される。器高は低い。口縁部の段は弱く、口縁端部は尖り気味である。5に較べ4は器壁が厚い。4・5とも胎土はやや粗く、1~2mmの砂粒を含む。焼成はやや軟質である。色調は灰白色を呈する。6はつまみがついていた痕跡がある。口径17.0cmを測り、杯蓋11個体中最大である。天井部は平坦である。口縁端部は尖る。胎土はやや粗く、1~2mmの砂粒を含む。焼成は堅緻である。色調は淡灰色を呈する。7は口縁端部外面で稜をなして屈曲する点で、形態的に4・5・6とやや異なる。全体的に丸味をもつ。器壁が比較的薄いことも特徴である。胎土は精緻である。焼成は堅緻。色調は灰色を呈する。

B類

8は天井部が平坦で、B類の中では器高が低い。口縁部は外側へ開き、口縁端部は尖っている。天井部は器壁が比較的厚い。胎土は精緻である。焼成は堅緻。色調は灰褐色を呈する。9は天井部中央がやや凹む。口縁端部は丸くおさめる。胎土はやや粗い。焼成は堅緻。色調は外面が淡灰色、内面が灰色を呈する。10は口径14.4cmを測り、杯蓋11個体中最小である。天井部は平坦である。口縁部は外側へ開き、口縁端部外面に稜をもつ。体部の器壁は厚い。胎土は精緻である。焼成は堅緻。色調は灰褐色を呈する。11・12・13は天井部が丸味を帯びている。いずれも口縁端部を丸くおさめる。12・13に較べて11は器厚が一定している。12・13は口縁部が肥厚気味である。12は口縁部が部分的に重んでいる。11・12とも胎土は精緻である。焼成は堅緻。色調は灰褐色を呈する。13は胎土が精緻である。焼成は堅緻。口縁部内面に茶褐色の自然釉がかかり、外面は灰褐色を呈する。14は天井部が平坦である。口縁部は外側へ開き、口縁端部は肥厚する。胎土は精緻。焼成はやや軟質である。色調は淡灰色を呈する。



第89図 須恵器時期別分布図（白丸：吉墳時代、黒丸：平安時代。小片で時期区別ができないものについては図示していない）



第90図 須恵器 (1~3:吉墳時代, 4~16:平安時代)

杯 身 (第90図15・16)

15は口縁部が外側へ直線的に開く。口縁端部は丸くおさめる。高台は短く、底部端に付く。底部は回転ヘラ切り不調整で、残る部分は回転ナデを施している。高台は貼付けによる。胎土はやや粗く、1mm程の砂粒を含む。焼成は堅緻。色調は内面が淡灰色、外面が灰褐色を呈する。15に較べて16は口縁部の開きが大きい。口縁端部は丸くおさめる。底部欠損のため、高台の有無は不明である。胎土は精緻である。焼成は堅緻。色調は淡灰色を呈する。

溝口遺跡において出土した須恵器杯蓋はつまみを伴わないのを特徴としている。この類例は兵庫県加古川市札馬窯址・相生市相生窯址で出土している。

札馬窯址は奈良時代から平安時代が操業期間である。窯址出土資料の型式編年(中村他1980)によると、札馬窯は3型式に区分することができる。札馬Ⅰ型式は陶邑編年のIV型式2段階から4段階に対応するものである。杯蓋はつまみを有しており、器高が高い。口縁端部は下方へ屈曲している。札馬Ⅱ型式は札馬窯独特のもので陶邑窯では全く確認されていない型式である。この型式において、溝口遺跡出土資料の類例が出現する。杯蓋はつまみを伴わないのが特徴で、口縁端部が下方へ屈曲するものが大半である。札馬Ⅲ型式は9世紀前半から10世紀前半の年代が与えられている。次型式の札馬Ⅳ型式では杯蓋はみられなくなることから、つまみを伴わない杯蓋は札馬Ⅱ型式の中におさまるものと考えられる。

相生窯址では古墳時代から平安時代までの窯址が発見されており、兵庫県下最大規模の窯址といえる。相生窯址出土資料の編年(森内1986)によると、第一段階前半、西後明三号窯の資料ではまだ杯蓋はつまみを有しているが、第一段階後半、西後明一二号窯の資料において、つまみを伴わない杯蓋が出現する。また第一段階後半では、口縁端部は下方へ屈曲しなくなる傾向をみせる。年代は9世紀後半に比定されている。第二段階、西後明七号窯の資料においても、つまみを伴わない杯蓋はみられ、年代は9世紀末から10世紀初めとされている。したがってつまみを伴わない杯蓋は相生窯址では第一段階後半から第二段階の間におさまるものと考えられる。

次に消費地である平安京出土須恵器資料の編年(宇野1984)によると、10世紀になると杯・杯蓋がなくなり、杯蓋が存在するのは9世紀代までである。9世紀の資料をみると、杯蓋は天井部が丸く、口縁端部は下方へ屈曲するものが多い。つまみについては「9世紀初めには宝珠状・円盤状のものが多く、環状のつまみも少數ある。9世紀中頃にはつまみのないものが現われはじめ、9世紀末にはほとんどの蓋がつまみを消失する。」とされる。

以上、札馬窯址・相生窯址・平安京出土資料の編年を参考とすると、溝口遺跡出土の須恵器杯蓋は9世紀後半の年代が想定される。

(藤平)

第VII章 中世

第1節 遺構

中世に属する遺構として土壙7基、焼土遺構1基を検出した。第1土壙の出土遺物からは中世の年代が考えられる。第1土壙以外の土壙と焼土遺構は年代を推定できる遺物が皆無のため不明であるが、ここでは第1土壙との関係を考えて本節で説明する。

また当初、第7土壙としたものからは炭化物が検出されていたが、プランが不明確で窪みに炭化物混じりの土が流入したような状況であったため土壙と断定できなかった。

分布状況(第91図)をみると、第2・4・5・6・8土壙は調査区域のはば中央6D・6E区に比較的集まっている。また第3土壙はその集中部分からやや離れているが、第2土壙・第4土壙との位置関係をみると、3基の土壙がほぼ等間隔にある。ここでは、第2・3・4・5・6・8土壙を一つのグループと考え記載したい。第1土壙と焼土遺構は集中部分の範囲に含まれるのか、調査区域外に別のグループを形成するのかは不明である。

以下各土壙・焼土遺構について詳述する。

第1土壙(第92図、図版4)

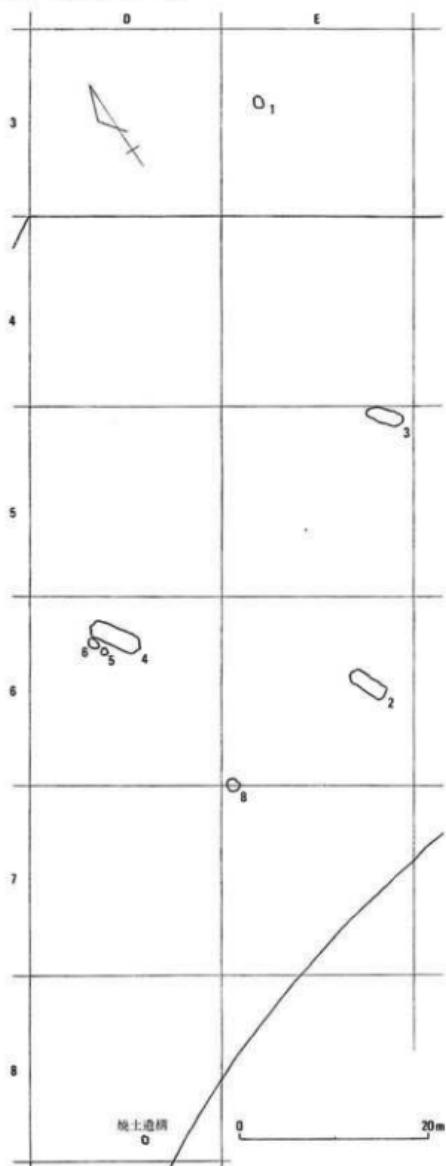
調査区域の北東端、3E11・12・16・17区にまたがる位置で検出された。長軸約125cm、短軸約90cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土に炭化物を含み、下層ほどその量は多くなる。上層で土師器皿が数点出土している。長軸上に径25~30cmの疊2点、短軸上に径15~20cmの疊2点、計4点を検出した。疊の材質はいずれもチャートで、大きさや位置からみて土壙内に意識的に配置したものと考えられる。土壙底面中央には焼土が薄く広がっており、4点の疊にも受熱による赤化がわずかに認められる。出土土師器皿から16世紀の年代が考えられる。

第2土壙(第93図、図版5)

6E14区で検出された。長軸約430cm、短軸約150cmの隅丸長方形で、主軸を南北に向ける。深さは約25cmを測る。北端に径約30cmの半円状の突出部があり、その底面は本体底面より一段高くなっている。底面の傾斜はほとんどない。埋土は下層部に多くの炭化物を含むのみで、その他の遺物はみられなかった。上半部には土壙上方(西側)から多量の土砂が流入しており、平面上で土壙プランを確認するのは困難であった。上層の黄褐色土を除くと、土壙全体に炭化物を多量に含む層がみられる。底面には焼土が広がっている。

第3土壙(第93図、図版5)

5E5区で検出された。両端が不明確なために平面形・長さは推測になるが、長軸約400cm、短軸約150cmの長楕円形を呈し、主軸を南北に向ける。深さは約20cmを測る。突出部は確認されなかった。底面の傾斜は北側がやや高く南側に向かって緩やかに下っている。埋土には炭化物を含むのみで、その他の遺物はみられなかった。上方からの土砂の流入は比較的小ない。炭化物は下層ほど多量に含まれている。底面には焼土がわずかに分布する。



第91図 中世の土壤配置図(赤い点は土壤落り)

第4 土 壤 (第94図, 図版5)

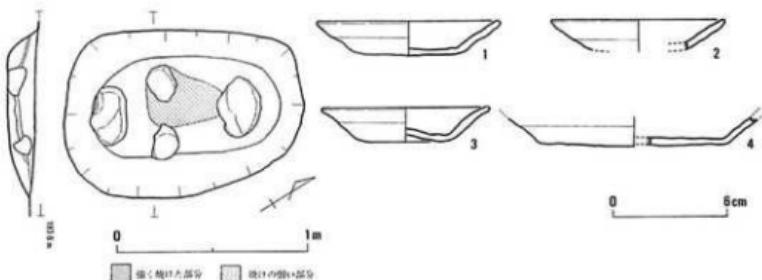
6 D2・3・4区で検出された。試掘調査時のトレーナによって切らされている。長軸約570cm, 短軸約200cmの隅丸長方形を呈し, 主軸を南北に向ける。深さは約15cmを測る。北端と南端に径約30cmの半円状の突出部があり, その底面は本体底面より一段高くなっている。底面の傾斜は南側がやや高く北側に向かって緩やかに下っている。また本体底面中央に長さ約470cm, 幅20~30cm, 深さ約5cmで断面半円形の溝が通っている。埋土は炭化物を含むのみで, 他の遺物はみられなかった。上方からの土砂の流入が激しく, 平面上で土壤プランを確認するのは困難であった。炭化物は下層ほど多くなり, 底面には薄く焼土が広がっている。

第5 土 壤 (第95図, 図版5)

第4土壤の西側に隣接する。長軸約80cm, 短軸約60cmの楕円形を呈し, 深さは約15cmである。埋土は炭化物・焼土を含むのみで, 他の遺物はみられない。下層ほど炭化物の量は少なくなる。土壤壁面や底面には火熱を受けた痕跡はない。

第6 土 壤 (第95図, 図版5)

第4土壤の西側に隣接する。長軸約120cm, 短軸約90cmの楕円形で, 深さは約25cmを測る。埋土は炭化物・焼土を含むのみで, 他の遺物はみられない。上方からの流入による土層を除くと炭化物を多量に含む黒



第92図 第1土壤と出土土師器（凡例は第93・94図も同じ）

褐色土がみられる。土壤壁面や底面には火熱を受けた痕跡はない。

第8土壤（第95図、図版5）

6E21・7E1区で検出された。長軸約140cm、短軸約120cmの楕円形で、深さは約30cmである。埋土は炭化物を含むのみで、その他の遺物はみられない。炭化物を多量に含む部分が中層部と最下層にみられ、互層になっている。土壤壁面や底面には火熱を受けた痕跡はない。

焼土造構

8D23・24区で検出された。径50~60cmの不整円形を呈し、深さは約7cmである。埋土は炭化物・焼土を含んでいるのみで、その他の遺物はみられなかった。最下層で粘土の堆積がみられる。

検出された土壤の性格を検討するには不明な部分も多いが、火葬場あるいは火葬墓の可能性がある。そこで最初に火葬について概説する⁸⁾。

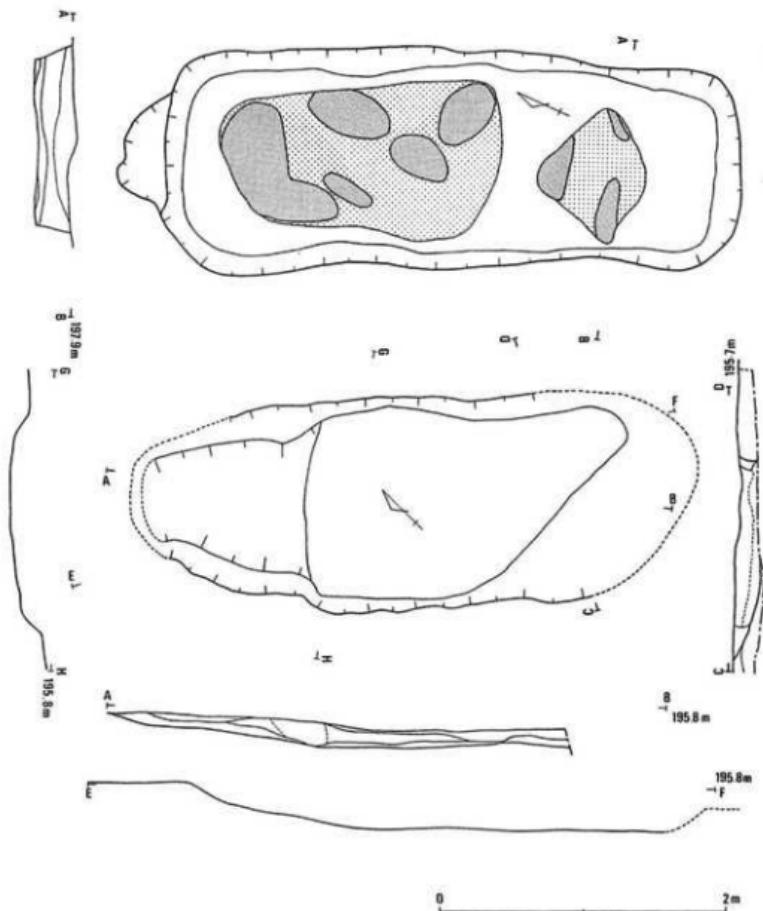
遺体を焼いて火葬骨にする施設が火葬場である。河原・山麓などで薪を積んで火葬する方法（斎藤1978）や野天に穴を掘り薪を積んで火葬する方法が一般に行なわれたと考えられる。埋土に炭化物・焼土・骨片等を含み、底面・壁面に火を受けた痕跡がある土壤は火葬場としての機能を果していたものと推測される。京都府長岡京市西陣町遺跡（木村他1985）では、火を受けて壁面が赤化し大量の炭に混じって骨片が出土した土壤（報告書中「焼土壤SX13001」）を火葬を行なった施設であると判断している。

火葬場で遺体を焼いた後、火葬骨を埋葬する場所が火葬墓である。火葬墓には火葬場をそのまま埋葬施設とする形態（以下、火葬墓A類とする）と火葬場と位置を変えて埋葬する形態（以下、火葬墓B類とする）があり、火葬墓A類・B類とも火葬骨を直接土中に埋葬するものと蔵骨器に納めて埋葬するものがあったと考えられる（安井1960・石田1975他）。

溝口遺跡検出の土壤は形状と伴出資料から3つに分類することができる。

A類：楕円形を呈する。底面に人頭大の礫を配置し、その下に焼土が広がる。土師器皿・炭化物が出土している。（第1土壤）

礫が意識的に配置されていること、底面に火熱を受けた痕跡があること、土師器皿を副葬品

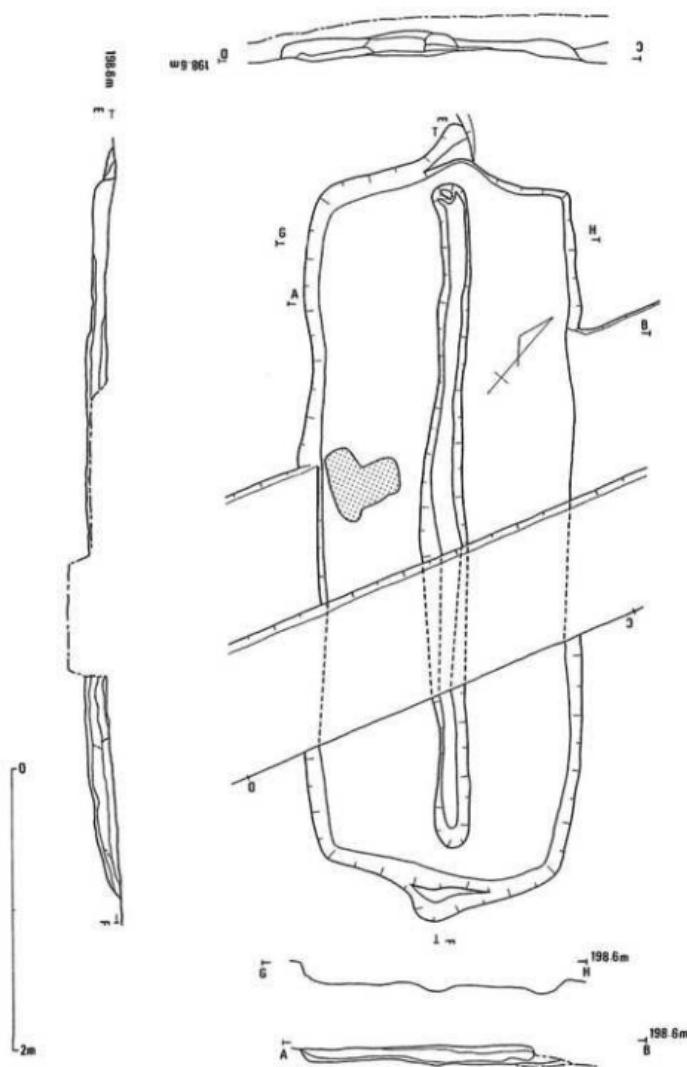


第93図 第2(上)・3(下) 土壙

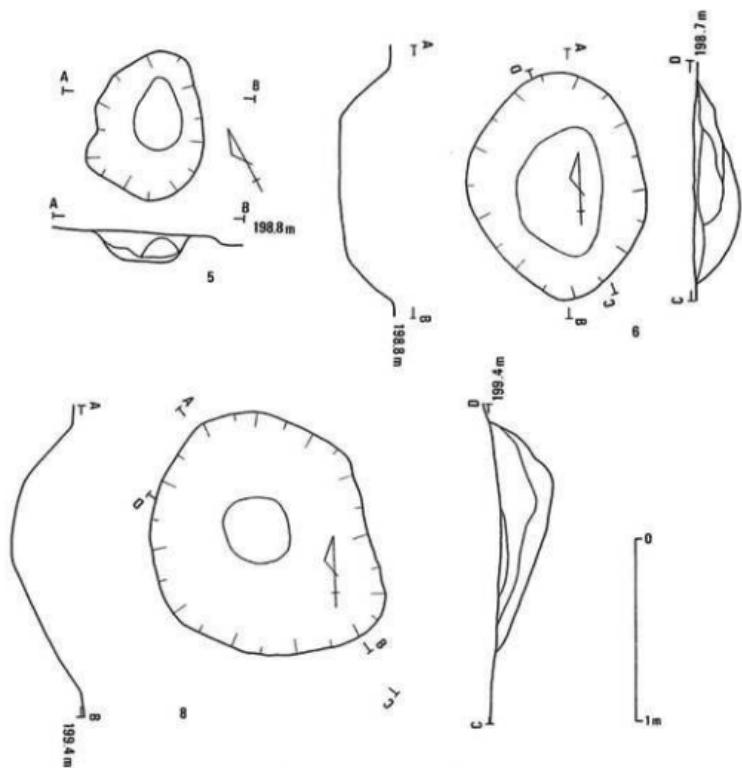
とみなし得ることから、火葬場あるいは火葬墓A類の可能性が考えられる。しかし土壙内から骨片が出土していないため断定はできなかった。

II類：隅丸長方形か長楕円形を呈する。底面に焼土が広がる。埋土は炭化物を含むのみ他の遺物は皆無である。(第2・3・4土壙)

底面に火熱を受けた痕跡があることや炭化物が出土したことから、火葬場あるいは火葬墓A類の可能性が考えられる。この3基はほぼ等間隔に位置し主軸方向がいずれも南北を向くことから、何らかの規制によって構築され機能を果していたものと判断される。兵庫県下では神戸



第94図 第4土壤



第95図 第5・6・8土壙

市西神中央線長谷遺跡(宮本1984)・淡路島大森谷遺跡(市橋他1985)で類似例が発見されている。長谷遺跡は谷平野に立地する。土壙7基は長軸2.3~4.2mで、一方に突出部をもつ長方形土壙である。それぞれの位置関係は不明である。埋土は炭化物を含むのみであった。注意されるのはいずれの土壙も主軸が東西を向く点である。大森谷遺跡は主尾根からのびた標高50mの小さな張り出し部に立地する。隅丸長方形土壙は1基検出され、長軸約4.5mを測る。一方に突出部をもち、主軸方向は南北である。土壙内は炭化物が充満する。両遺跡とも報告では火葬墓の可能性をあげているが、土壙内から骨片が出土していないことから断定するに至っていない。当遺跡II類土壙も同様で、骨片が出土していないため断定はできなかった。

III類：楕円形を呈し、埋土は炭化物を含むのみで他の遺物は皆無である。底面は火熱を受けた痕跡がない。(第5・6・8土壙)

第5・6土壙が第4土壙の極めて近くに位置することから、II類土壙と何らかの関連がある

ものと考えられるが、性格は不明である。長谷遺跡においても類似例(報告書中「SK09」)が検出されている。

土壙の性格について、火葬場あるいは火葬墓の可能性という面から検討を行なった。中世墓の多くが丘陵斜面に営まれることを合わせて考えると、この土地が葬送に関する地域であった可能性は高い。しかし、第1土壙で土師器が出土した以外は他の土壙内からは土器・錢貨等の副葬品がみられないこと、配石・石塔等の地上標識がないことなどから、墓地としての機能を果していたかという点では疑問を残したといえる。調査区域外の段丘平坦面あるいは先端部に同様の土壙が存在し、墓群として広がる可能性が残されている。しかし本地域が継続して葬送のために利用されたとは考え難い。

中世の土地利用については不明な点が多いが、今回の調査によって一様相が示されたといえる。三田地域における中世遺跡の発見は数少なく、他の中世墓との関連は検討できなかった。今後、集落・墓等の資料の増加を待って、当遺跡の立地する丘陵の性格を検討していきたい。

第2節 遺 物

土師器皿が第1土壙から7個体出土した。その中で4個体が図示し得た(第92図)。いずれも口縁部内面、口縁上部外面を横ナデしている。

1は外底面に凹凸がある。口縁部は直線状に開く。口縁端部は丸くおさめる。胎土はわずかに砂粒を含む。焼成は良好。色調は淡茶褐色を呈する。

2は底部が欠損する。口縁部は外上方へ直線状に開く。口縁端部は丸くおさめる。胎土はやや粗い。焼成は良好。色調は淡橙色を呈する。

3は底部中央が指押えによって上方へ凹む。口縁部はやや外反する。口縁端部は丸い。胎土は精緻である。焼成は良好。色調は淡橙色を呈する。

4は口縁部が欠損する。外底面は指押えによって凹凸がある。胎土はやや粗く、1~2mmの砂粒が混じる。焼成はややあまい。色調は淡橙色を呈する。

以上の土師器皿は形態的にみて16世紀の年代が考えられる。

(藤平)

第Ⅷ章 結 語

本遺跡調査の成果を以下箇条書きにまとめることで、本書の結語としたい。

1) およそ2.3~3万年前位に当る古い石器群が発見された。それらの石器組成については今一つ不明な点が多いが、技術的には特徴的なものであった。打面・石核の各種調整は全く行なわず、円礫の礫表からいきなり、長幅比1.5:1~1:1.5の間の不定形剥片を剥がしている。この頃すでに瀬戸内地方には横長剥片剥離技術が出現しているようで、本遺跡にもそれによると考えられるサヌカイト製石核が2点出土している。これを除くと、石材には鉄石英、玉髓、チャートを多用しており、在地産のものを有効に利用するという特色を持っている。

2) この石器群を残した人々の集落は少なくとも3世帯で構成されている。各世帯は自立的であるが、より近縁なものが寄り合って二つの生活領域を作っている。二つの領域の間には両者の交流の場とも呼べる広場が広がっており、そこには何等かの機能ユニットが配されたと考えられる。集落景観・構造はこのように独特なものに見えるが、尾根上に営なまれたものとして地勢に左右されている可能性もある。集落規模は、我々がこれまで調査・報告して来た2.2~1.4万年前頃の諸遺跡と大きな違いはない。

3) 繩文時代の様相も独特である。77点もの石鏃が尾根全体に散在し、石鏃・楔形石器の製作址も検出されているながら、1片の土器片も発見されていない。通常の集落址と捉えることは難しいかもしれないが、性格の推定ができず、今後の課題としている。

4) 中世では、焼土を伴った長方形の土壙が3基発見されている。性格を特定することはできなかったが、近年類例が増加しつつある遺構が、地形的に限定された状況の中でまとまって発見された意義は大きい。これも今後の課題である。

以上、調査の成果を略記したが、三田市北部がまだまだ未開発地域であるためか、歴史的な連続性・特色など不明な点が多い。今回の成果を見ても、いずれも「特色」として記述されることが多かった。これが当地域全体の地域色として一般化し得るものか、それとも別の要因による「特色」なのか今後の展開に待つ所が多かろう。

(山下)

註

- 1) 丹波帯研究者の最近の成果によると、丹波帯のかなりの部分は三世紀(中世代)に堆積したものであるということである。
- 2) 三田市教育委員会高島信之・国井和哉両氏の御教示による。
- 3) 三田市教育委員会高島信之氏の御教示による。
- 4) 兵庫県教育委員会岡崎正雄氏の御教示による。
- 5) 高島信之氏の御教示による。
- 6) 対中遺跡調査中に実見させて頂いた。
- 7) 最近、神戸市北区の竜ヶ谷遺跡において石器や骨片類が多量に出土した。さらに、石器集中部分もみられるが、土器がまったく出土していないという。調査が終了してないため土器の有無については今後に待ちたいが注目できる。しかし、石器の中には石臼やスクレーパーなどのツール類が認められており、溝口遺跡ともやや異なる。(神戸市教育委員会宮本郁雄氏、田中素子氏に御教示頂いた。)
- 8) 中世の葬制は多様性があり、不明な点が多い。火葬についても一概に論じきれないため、ここでは大まかな捉え方をした。

参考文献

- 青木哲哉1983「三田盆地およびその周辺地域の地形」(『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ所収、三田)。
- 阿部朝衛1979「第5章 ピエス・エスキュー(楔形石器)」(『聖山』所収、仙台)。
- 阿部洋人1984「No.852遺跡」(『多摩ニュータウン遺跡昭和58年度(第6分冊)』所収、多摩)。
- 池辺伸生他1961「兵庫県地質鉱産図ならびに同説明書」(神戸市)。
- 石田茂作1975「新版仏教考古学講座第7巻墳墓」(東京、雄山閣)。
- 石野博信1979「縄文時代の兵庫」(神戸)。
- 市橋重喜・平田博幸・別府洋二1985「大森谷遺跡・淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」(神戸)。
- 福田孝司1978「旧石器時代の小集団について」(『考古学研究』第24巻第2号所収、岡山)。
- 福田孝司1986 a「岡山県恩原遺跡の旧石器時代石器群」(『日本考古学協会第52回総会研究発表要旨』所収、東京)。
- 福田孝司1986 b「恩原遺跡」(『岡山県史』第18巻所収、岡山)。
- 宇野隆夫1984「後半期の須恵器」(『史林』第67巻第6号所収、京都)。
- 梅本健治1983「(3) 1980年度の調査」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』)。
- 告J(4)所収、広島)。
- 岡村道雄・芹沢長介・小林博昭1974「幕石遺跡」(大船渡)。
- 岡村道雄1976「ピエス・エスキューについて」(『東北考古学の諸問題』所収、東京、東出版事業社)。
- 岡村道雄1983「ピエス・エスキュー、楔形石器」(『縄文文化の研究』7所収、東京、雄山閣)。
- 鎌木義昌・小林博昭1984「岡山県八束村戸谷遺跡第5地点の発掘調査」(『考古学ジャーナル』No.233所収、東京)。
- 鎌木義昌・小林博昭1986「戸谷遺跡」(『岡山県史』第18巻所収、岡山)。
- 木下亀城・小川留太郎1967「標準原色図鑑全集 岩石鉱物」(東京、保育社)。
- 木村泰彦・北村大輔・中井正幸1985「第2章長岡京跡右京第130次(7ANKNC地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第2集』所収、長岡京)。
- 栗島義章1986「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」(『土曜考古』第11号所収、大宮)。
- 桑原隆博編1981「下本谷遺跡第2次発掘調査報告」(広島)。
- 小堀一夫・尾垣勝彦・丹野雅人1984「No.818地点」(『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度(第

- 6分冊)J所収、多摩)。
- 齊藤 忠1978『墳墓 日本史小百科 4』(東京、近藤出版社)。
- 三枝健二編1982『地宗寺遺跡発掘調査報告』(広島)。
- 佐藤良二1983『第4章第2節石器』(「北北北ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」J所収、三田)。
- 鈴木忠司編1980『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』(京都)。
- 鈴木忠司編1982『富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書』(京都)。
- 高島信之1981『三田市木器・木器在闇内遺跡出土の有舌尖頭器』(「三田考古」第1号所収、三田)。
- 高島信之1982『三田市上根瀬・大蔵遺跡採集の繩文土器片』(「三田考古」第6号所収、三田)。
- 高島信之・潮崎 誠1983『北北北ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』(神戸)。
- 竹村恵二・檀原 徹1986『遺跡土壤中のテフラ分析による火山灰降灰層準の認定一兵庫県篠山板井遺跡を例としてー』(「第四紀研究」投稿稿、東京)。
- 田中英司1977『縄文時代における剥片石器の製作について』(「埼玉考古」第16号所収、浦和)。
- 檀原 徹・山下 透・佐藤良二他1985『温度変化法による火山ガラスの屈折率精密測定』(「日本地質学会第92年学術大会講演要旨」所収、東京)。
- 富樫泰史1971『使用痕のある石器について』(「米ケ森遺跡発掘調査報告書」所収、秋田県協和町)。
- 中田 昭編1980『下本谷遺跡発掘調査概報』(広島)。
- 中村 浩他1980『札馬』(加古川)。
- 西井龍義・山本正敏1973『福光町鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡』(富山)。
- 榎井 勝編1983『下本谷遺跡第4次発掘調査概報』(広島)。
- 浜崎一志1984『マイクロコンピュータと遺跡調査』(「京都大学構内遺跡調査年報昭和57年度」所収、京都)。
- 橋本誠一・井守徳男・水口富夫他1979『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』(神戸)。
- 橋本誠一・山本三郎他1978『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』(神戸)。
- 橋本誠一・山本三郎他1982『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(3)』(神戸)。
- 兵庫県教育委員会1984a『兵庫県埋蔵文化財調査事務所開所記念展示の解説』(神戸)。
- 兵庫県教育委員会1984b『板井・寺ヶ谷遺跡現地説明会資料2』(神戸)。
- 平井 勝1979『野原遺跡群早屋A地点』(岡山)。
- 藤田 淳1985『春日・七日市遺跡』(「シンボジウム『旧石器時代の人間と自然』」所収、神戸)。
- 藤野次史1986『ガガラ山西南麓地区の予備調査』(「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報V」所収、広島)。
- 保坂康夫1982『第IV章先土器時代の遺構一確一』(「富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書」所収、京都)。
- 保坂康夫1986『先土器時代の隈群の分布とその背景』(「山梨考古学論集I」所収、甲府)。
- 間壁茂子1968『香川県坂出市櫛石島島採集の石器』(「倉敷考古館研究集報」第4号所収、倉敷)。
- 町田 洋・新井房夫1976『広域に分布する火山灰一开始炎Tn火山灰の発見とその意義ー』(「科学」第46巻第6号所収、東京)。
- 町田 洋・新井房夫1978『南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰』(「第四紀研究」第17巻第3号所収、東京)。
- 町田 洋・新井房夫1979『大山倉吉輕石層一分布の広域性と第四紀編年上の意義』(「地学雑誌」第88巻所収、東京)。
- 町田 洋・新井房夫1983『広域テフラと考古学』(「第四紀研究」第22巻第3号所収、東京)。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫他1984『テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログー』(「古文化財の自然科学的研究」所収、京都)。
- 松下 進1954『日本の地方地誌 近畿地方』(東京、朝倉書店)。
- 松藤和人1985『西日本におけるナイフ形石器文化の諸様相』(「信濃」第37巻第4号所収、松本)。
- 宮城一男1983『日本列島石の旅 東日本編』(町田、玉川大学出版部)。

- 宮本都雄1985「2.西神中央線長谷遺跡」(『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』所収、神戸)。
- 森内秀造1986「平安時代の窯業生産」(『北山茂夫追悼日本史学論集歴史における政治と民衆』所収、滋賀県志賀町)。
- 矢島國雄1977「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての考察」(『考古学研究』第23巻第4号所収、岡山)。
- 安井良三1960「日本における古代火葬墓の分類」(『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』所収、東京、吉川弘文館)。
- 山口卓也1985「板井・寺ヶ谷遺跡発掘調査の概要」(『シンポジウム『旧石器時代の人間と自然』』所収、神戸)。
- 山下秀樹1982「光沢を有する石器」(『富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書』所収、京都)。
- 山下秀樹編1985「静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』(京都)。
- 山田昌久1985「縄文時代における石器研究序説」(『論集日本原史』所収、東京、吉川弘文館)
- 横山卓雄・植原徹・山下透1986「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」(『第四紀研究』第25巻第1号所収、東京)。
- 吉川周作1981「堆積物中の火山ガラスの研究一大阪平野の更新一完新統について」(『第四紀研究』第20巻第2号所収、東京)。

さ　い　ご　に

試掘調査から本調査、そして報告書の作成と駆け足の1年半であったが、急ぎの仕事だけに各方面の方々に御迷惑をかけ、また御世話になった。特に現地は我々に馴染みがうすかっただけに、三田市教育委員会の塩山忠義課長、高島信之氏、兵庫県教育委員会の榎本誠一氏には何かにつけて終始御高配いただいた。また学生諸氏には、本分を曲げてまで調査・整理に手を割いていただいたこともあった。発掘調査においては、1日に1~2点しか遺物が出土しないような日もある中で、作業員の方には固くしまった土と根気との両面での苦労を強いてしまった。

遺物の取り上げ整理に当たってのコンピューターの操作・プログラミングでは、京都大学埋蔵文化財研究センターの浜崎一志氏、奈良国立文化財研究所の伊東太作氏、(株)京都コンピューター・システムの援助を得た。特に(株)京都コンピューター・システムには全面的な御協力をいただき、この御協力なくしては、今回の報告は成し得なかつたと言つても過言ではない。遺物の実測図作成に当たっては、遠方であるのにかかわらず石田美代子・保坂康夫・松谷幹子・林(市野)浩世の諸氏に、お世話になった。また石器のトレースは、ひとえに花田八千代氏によっている。徳永裕氏には、石器接合作業の統括をお願いするとともに、原石の入手経路についても御検討いただいた。少ながらぬ資料が得られた縄文時代については、大下明氏に下図作りから原稿までお願いすることになってしまった。

火山灰の分析では、京都大学の竹村恵二氏と(株)京都フィッショントラックの御世話になった。遺跡の立地・地形面の観察では、立命館大学の青木哲哉氏、岩石については花園大学の上田健夫先生に現地踏査をお願いし、多くの御助言を賜わった。

この他、調査・整理を通じて以下に列記する方々に御協力いただいた。衷心より謝意を表する次第である。

発掘調査・整理補助員

大下 明、千喜良淳、藤平 寧、松村由美、森下英治、沢山孝之、瀧川友子、土江伸明、中村健二(関西大学)、柳沢 順、井上千津、浦田美由紀、竹内朋世、田中智子、宮内智加、竹中愛語(京都女子大学)、竹内義治、柳下信宏(京都大学)、五十嵐 彰(慶應大学)、下原裕司(立正大学)、柴田潮音(同志社大学)、坂田孝彦(花園大学)、木村元浩(別府大学)、大本純子(大谷大学)、徳永 裕、藤田有利子、花田八千代、鈴木初美、藤田知鶴、

協力者

青木哲哉(立命館大学)、鈴木公雄、阿部祥人、工藤敏久(慶應大学)、綱干善教、山口卓也(関西大学)、上田健夫(花園大学)、加藤 稔(山形県立博物館)、岡崎正雄、久保弘幸、榎本誠一、山本三郎(兵庫県教育委員会)、佐藤良二(香芝町教育委員会)、島立 桂、竹広文明、藤野次史(広島大学)、瀬川裕市郎(沼津市歴史民俗資料館)、竹村恵二、鎮西清高、浜崎一志、山中一郎(京都大学)、国井和哉、塩山忠義、高島信之(三田市教育委員会)、橋

昌信(別府大学), 西井龍儀(富山県考古学会), 平口哲夫(金沢医科大学), 麻柄一志(魚津市教育委員会), 松島吉信, 山本正敏(富山県埋蔵文化財センター), 松藤和人(同志社大学), 山崎克己(磐田市教育委員会), 山村 宏(遠江考古学会), 鶴丸俊明(札幌学院大学), 宮本郁雄, 田中素子(神戸市教育委員会), 吉田英敏, 京都フィッシュン・トラック(株), 京都コンピューター・システム(株) (順不同, 敬称略)

地元作業員

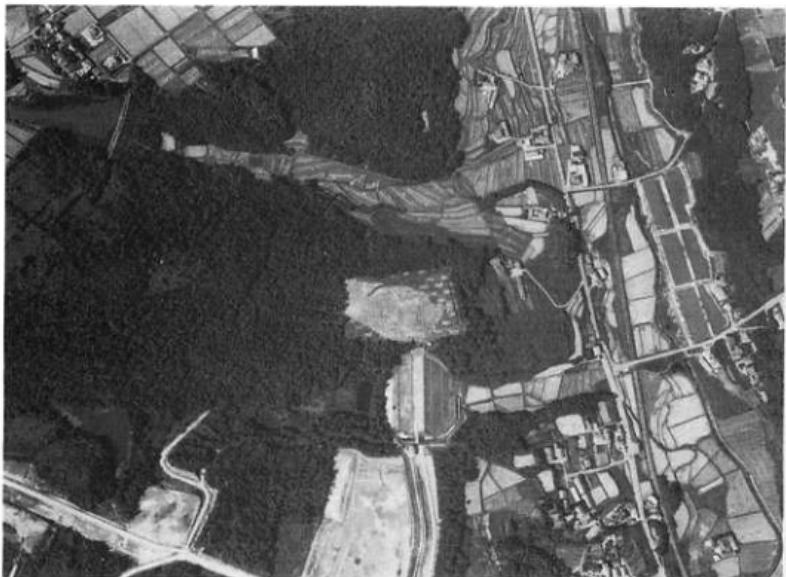
上田愛子, 上田幸江, 大西健二, 倉垣啓治郎, 小池清逸, 小西テルコ, 坂西伊三男, 坂本昭代, 坂本節子, 坂本ミエ, 佐野四郎, 芝本 繁, 城谷テルコ, 城谷久子, 関山津八子, 土取和子, 土取美津, 土手下秀夫, 中上さかゑ, 中前千里, 前西房江, 水船 保, 宮本繁雄, 向井和夫, 森本岩雄, 山下八千代 (五十音順, 敬称略)

図 版



遺跡全景(上：東北方より、下：東南方より)

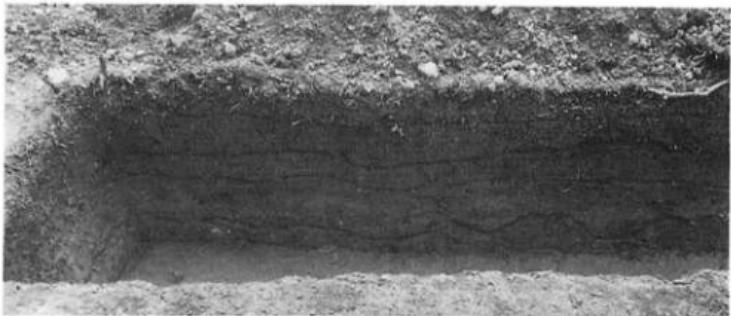
図版 2



上：遺跡全景(上空より), 下：遺跡近景(調査終了後)



試掘調査



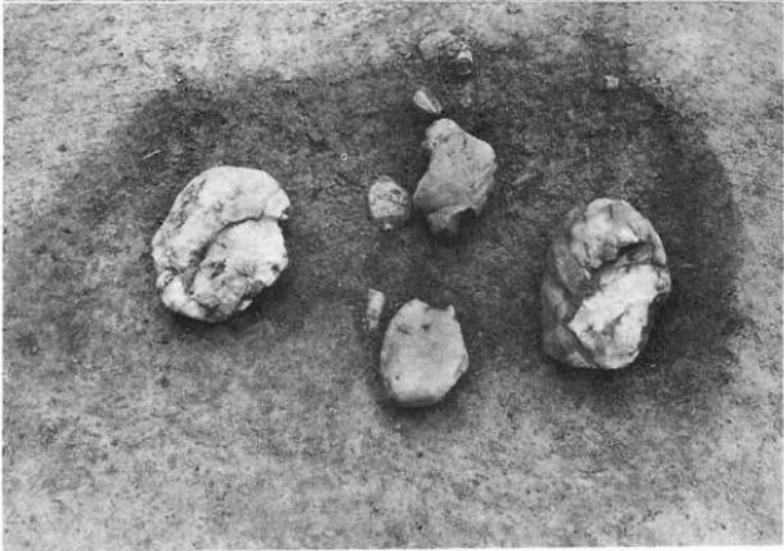
7D区土層断面



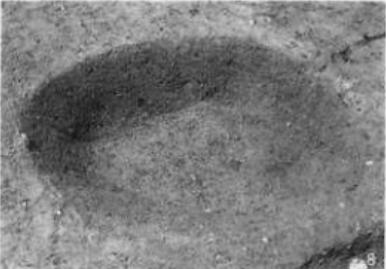
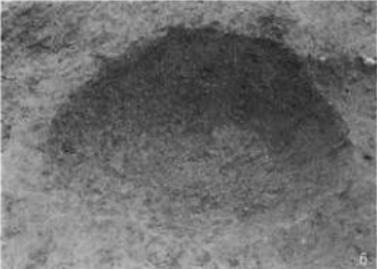
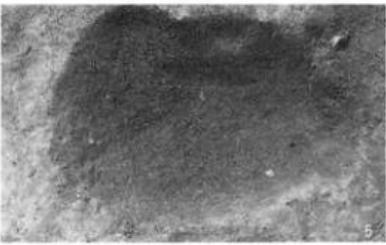
光波距離計とコンピューターによる遺物とりあげ

図版 4

発掘風景

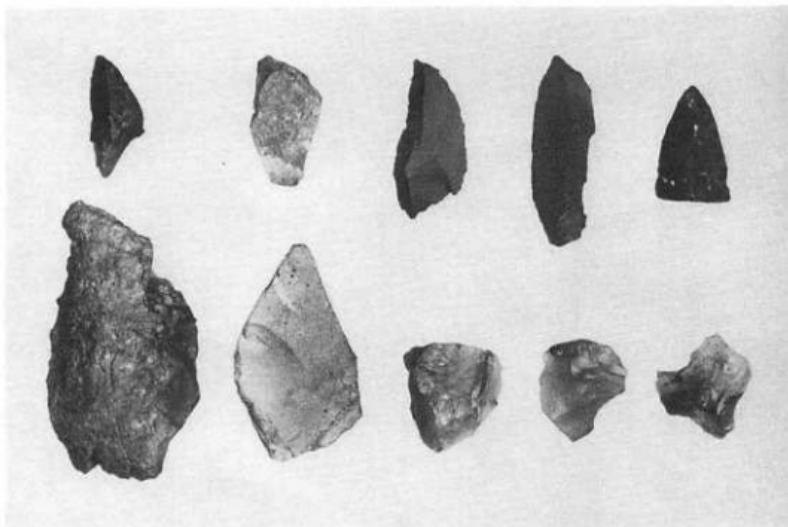


中：先土器時代の礎ブロック、下：第1土壤の礎配置状態

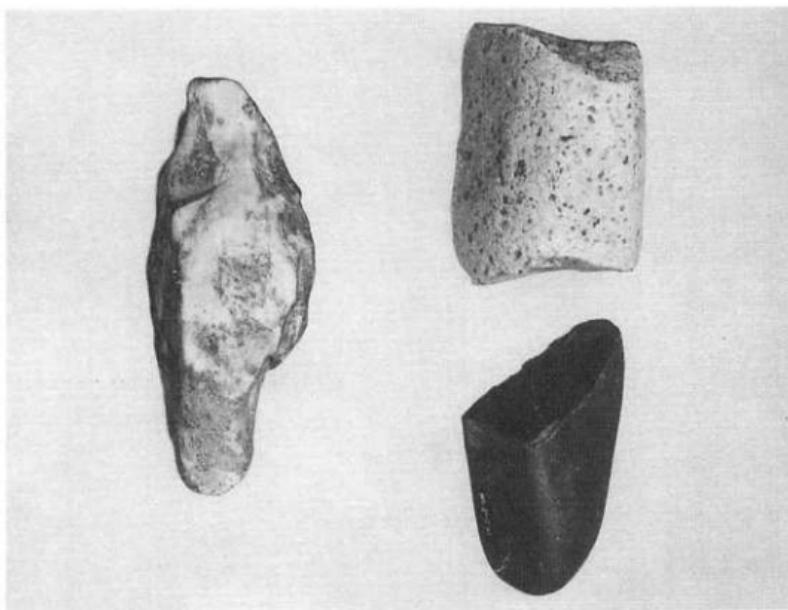


中世の土壤（番号は土壤番号と一致する）

図版 6



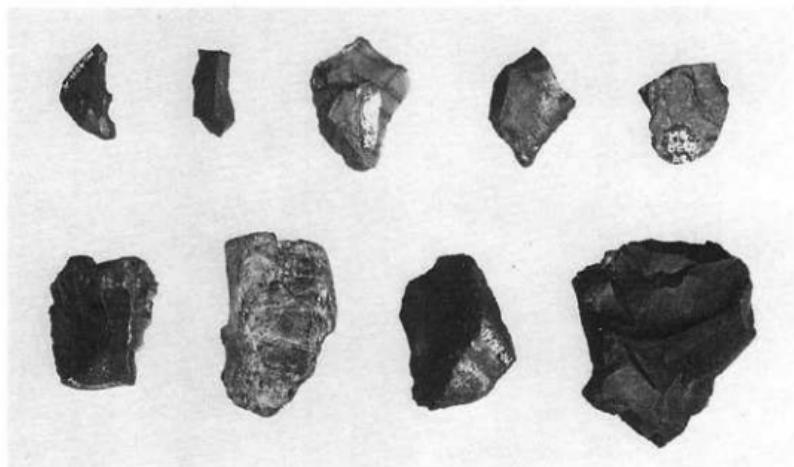
ナイフ形石器、尖頭器様石器、スクレイパー



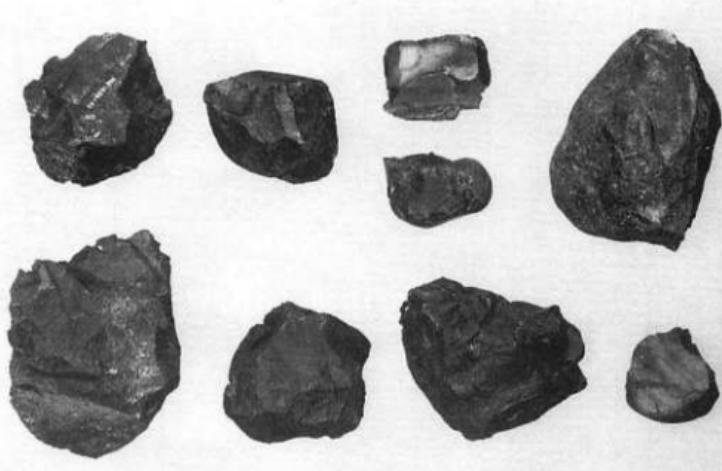
石斧、敲石、鏨石



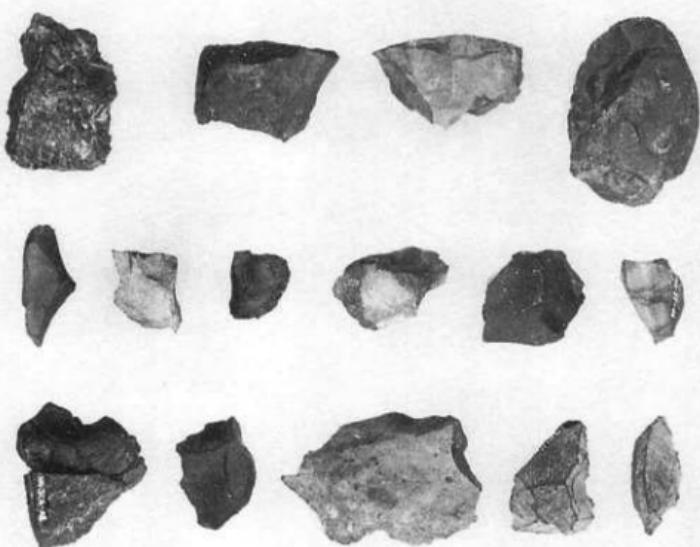
RF (A+B+C類)



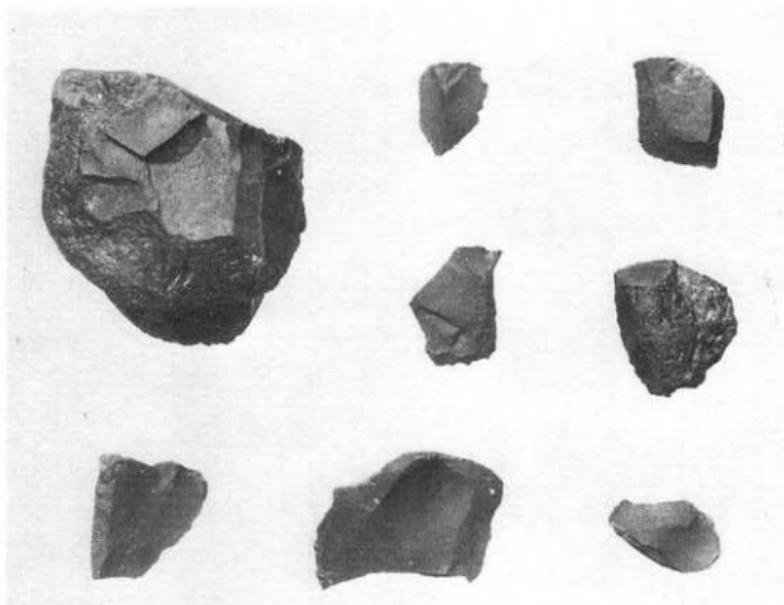
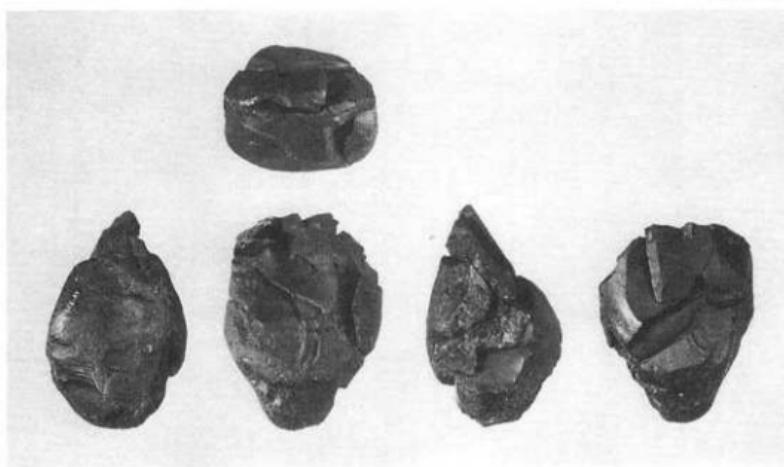
RF (D+E+F類, その他)



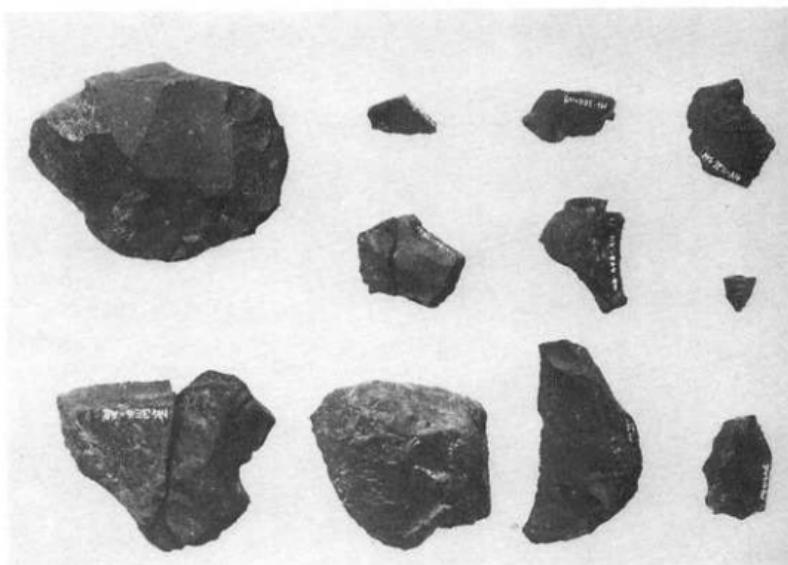
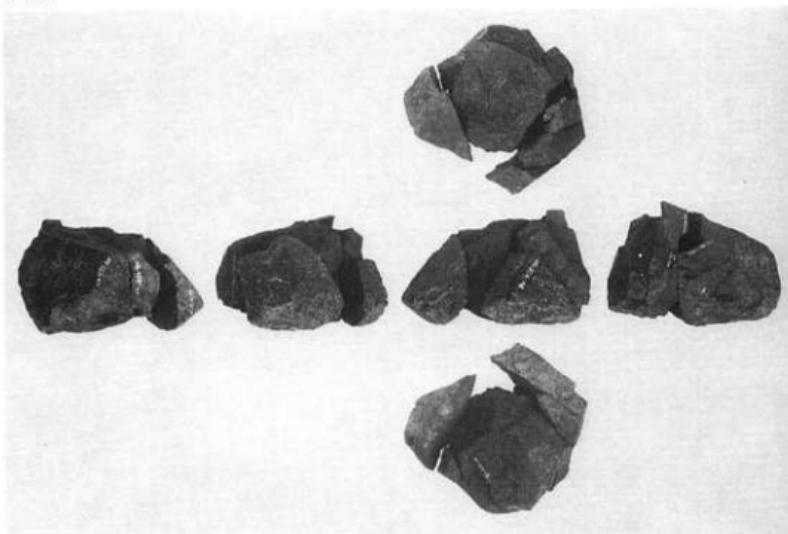
石核 (A・B類)



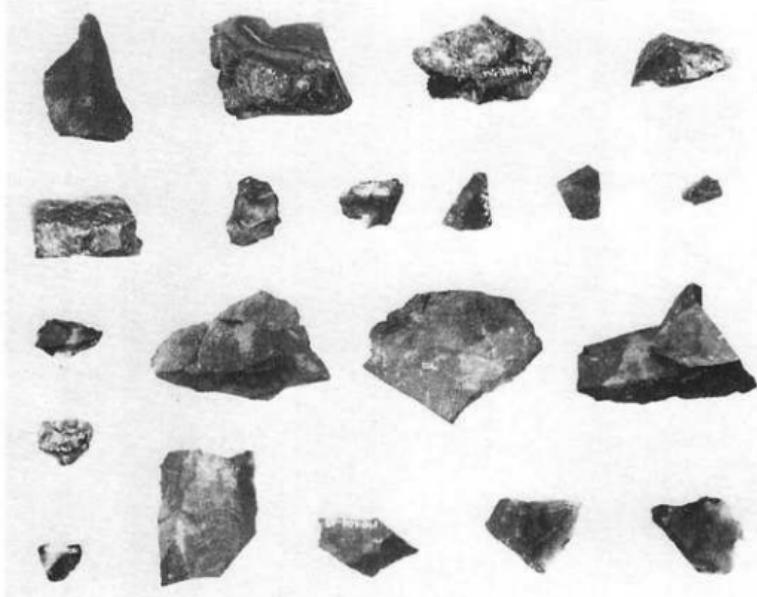
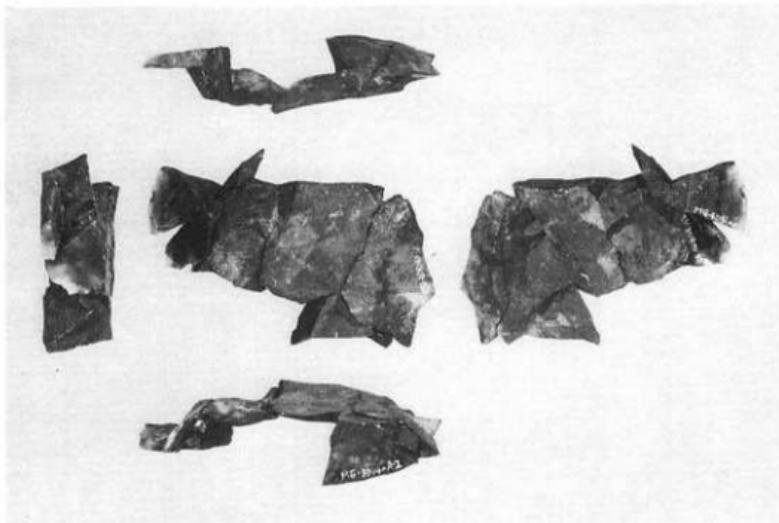
石核 (C・D・E・F類)



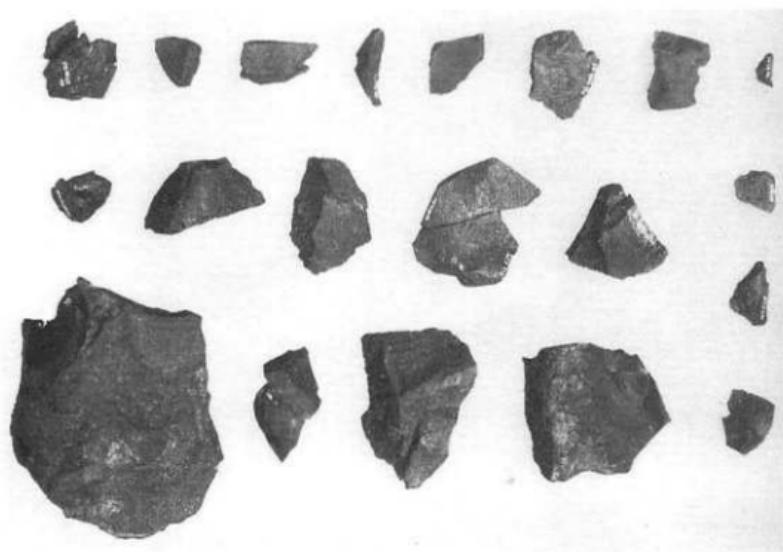
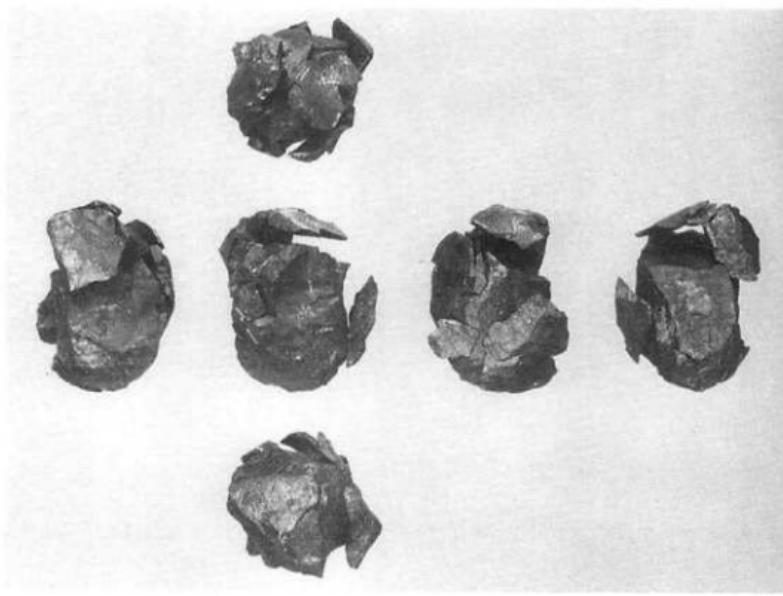
個体別資料Te ① 3 E (上は接合状態)



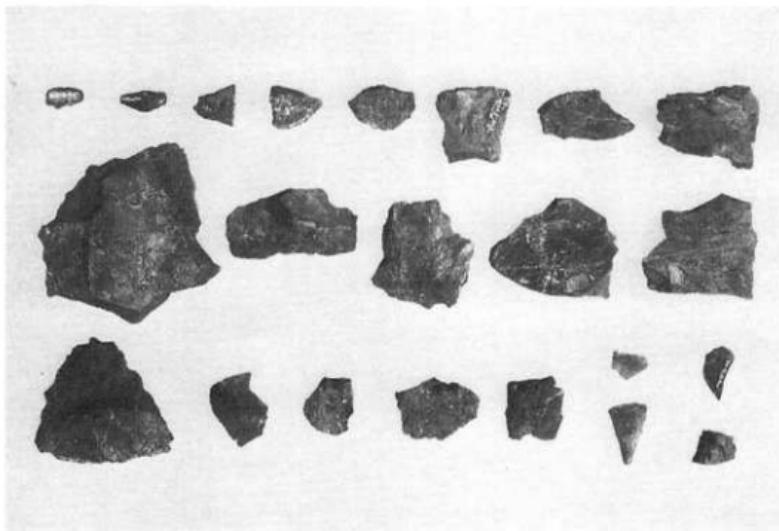
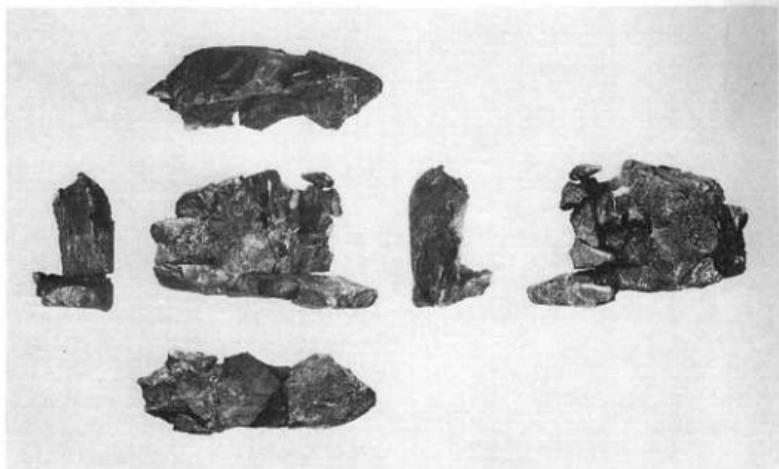
個体別資料Te ④ 3 E (上は接合状態)



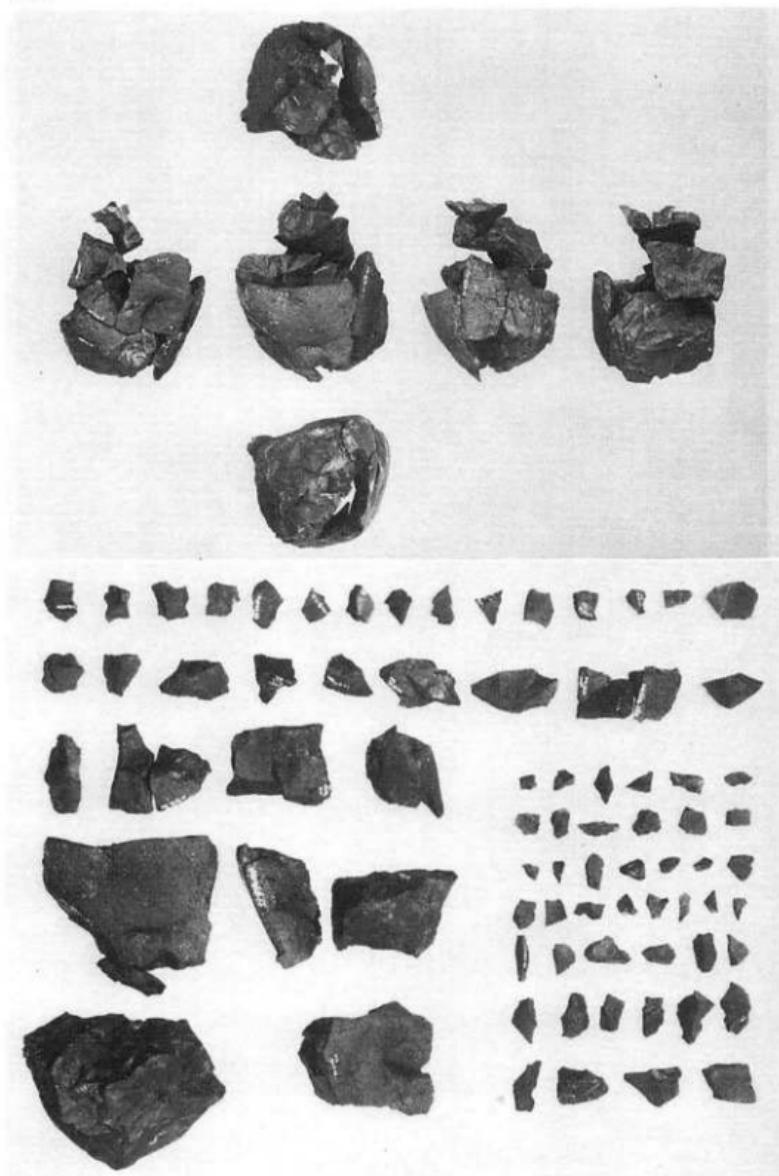
個体別資料Te ② 4 D (上は接合状態)



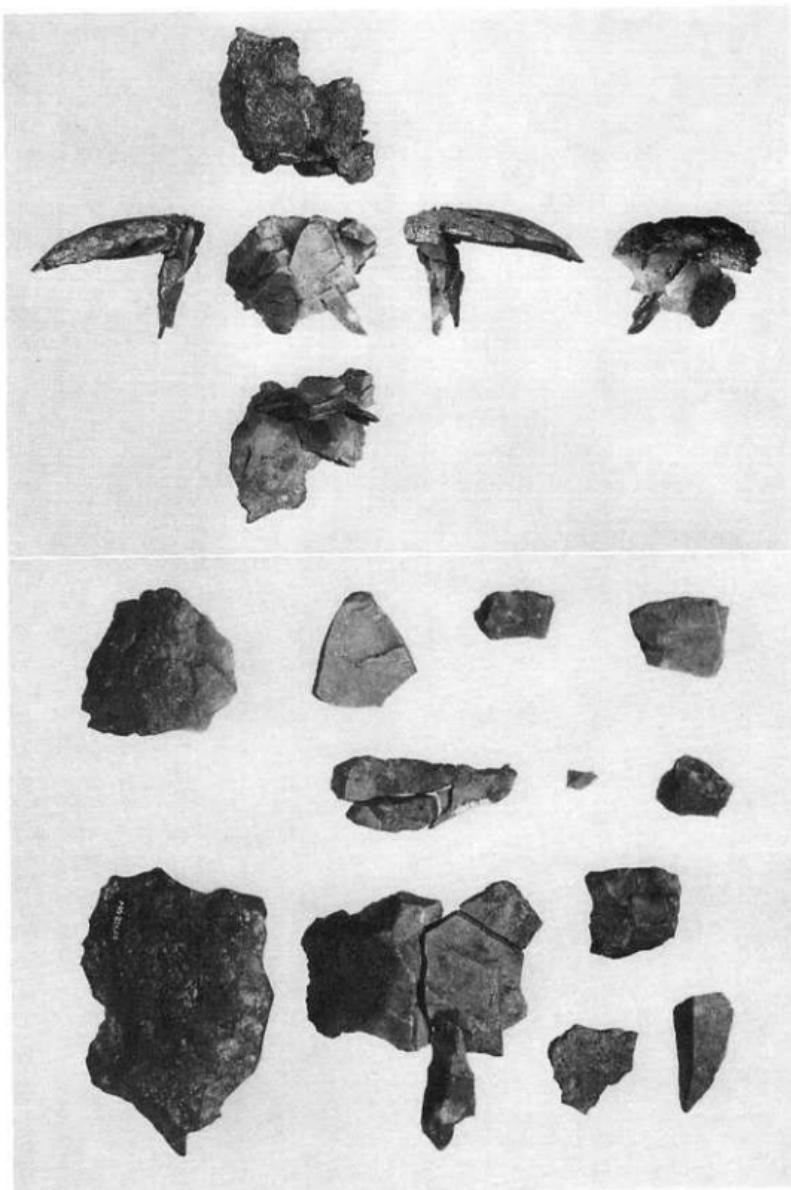
個体別資料Te ① 7 C (上は接合状態)



個体別資料Te ④ 7 C (上は接合状態)

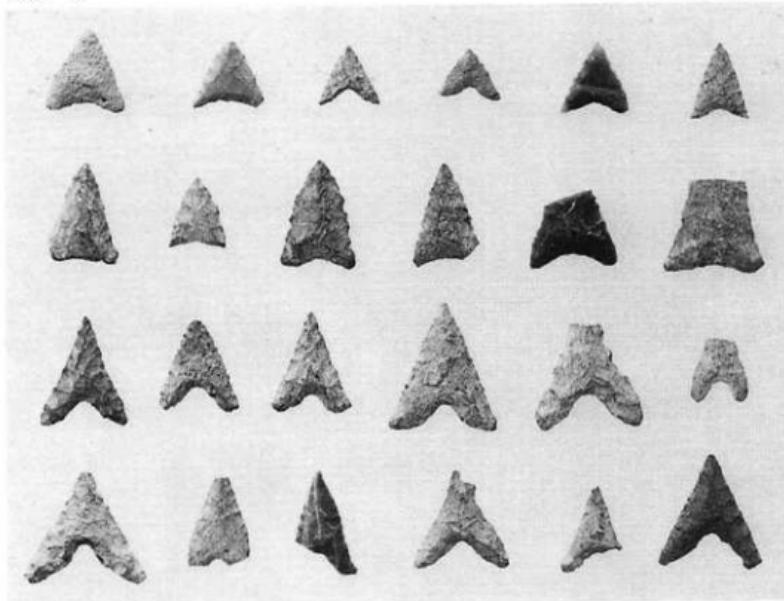


個体別資料Te ⑧ C (上は接合状態)

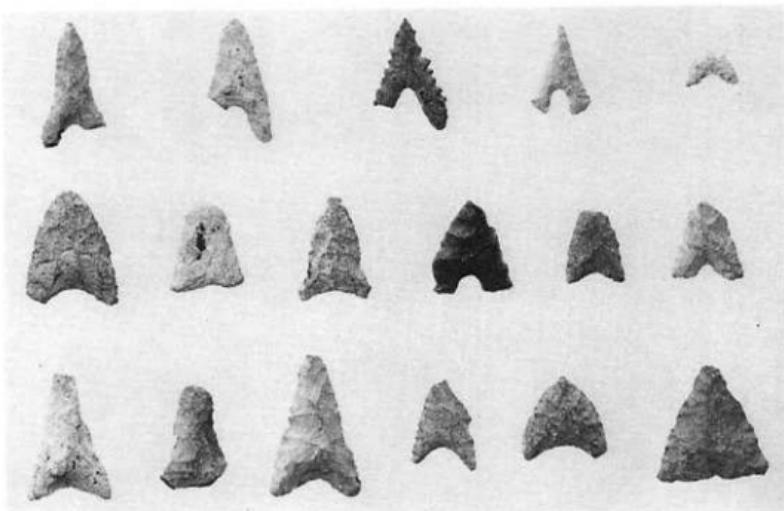


個体別資料Cha ① 3 D (上は接合状態)

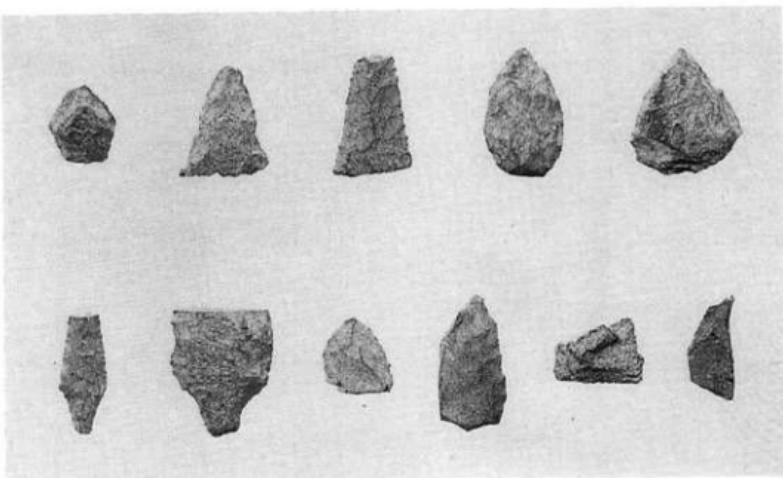
図版 16



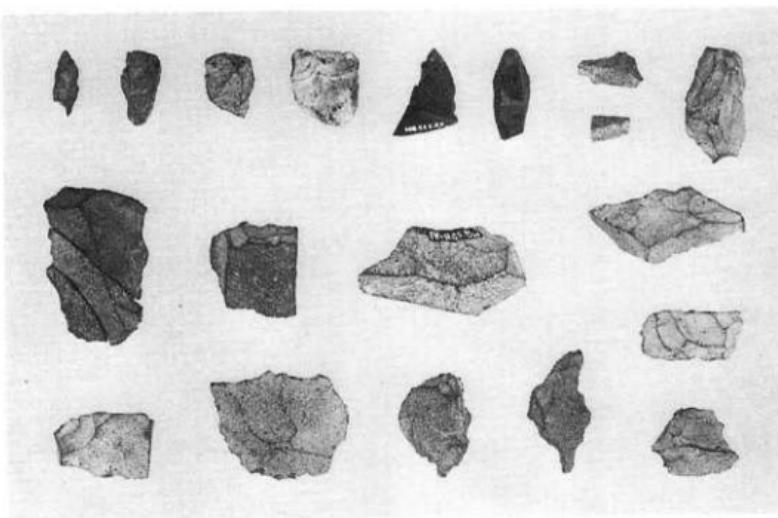
石 鐛 (Ia・Ib・Ic類)



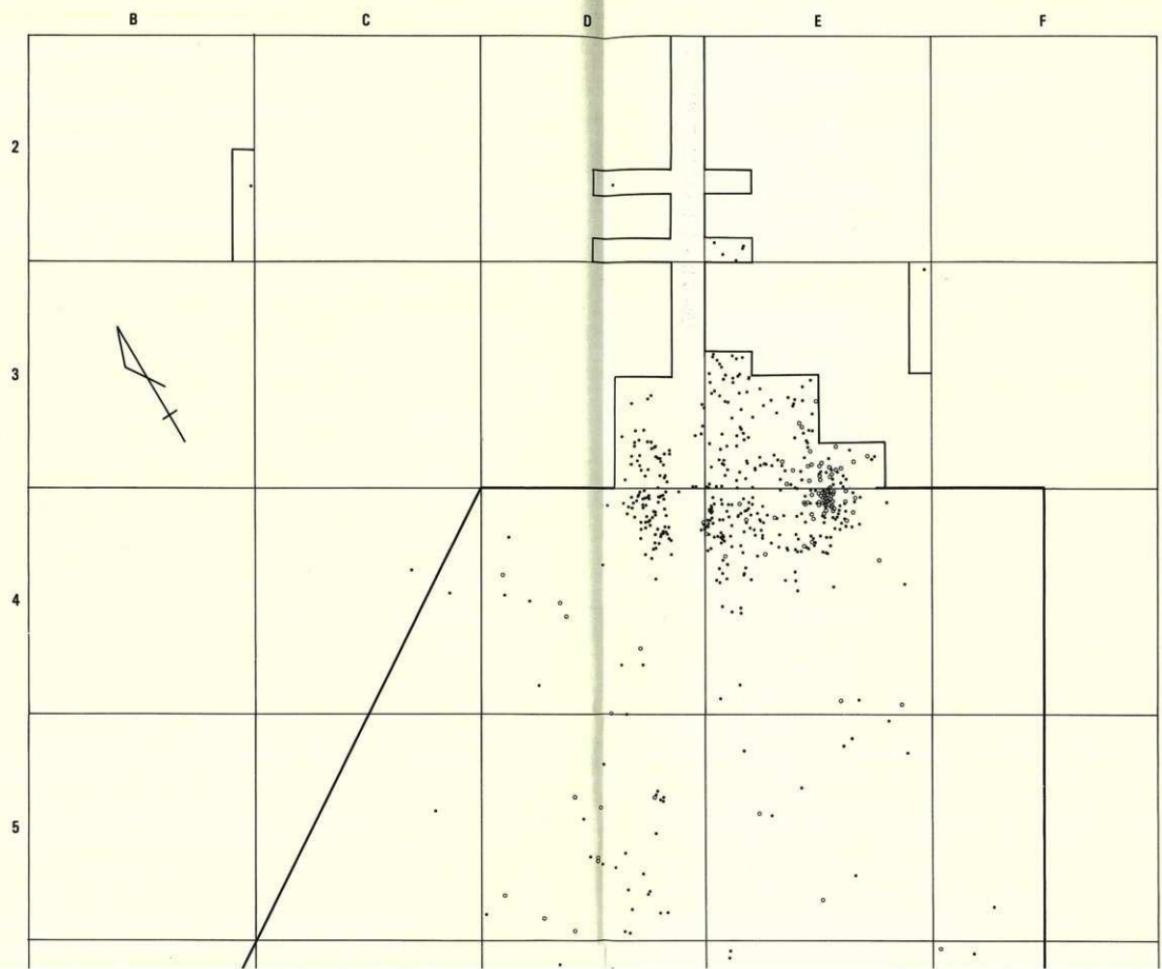
石 鐛 (Ia・Ie・If・Ig・Ih類)

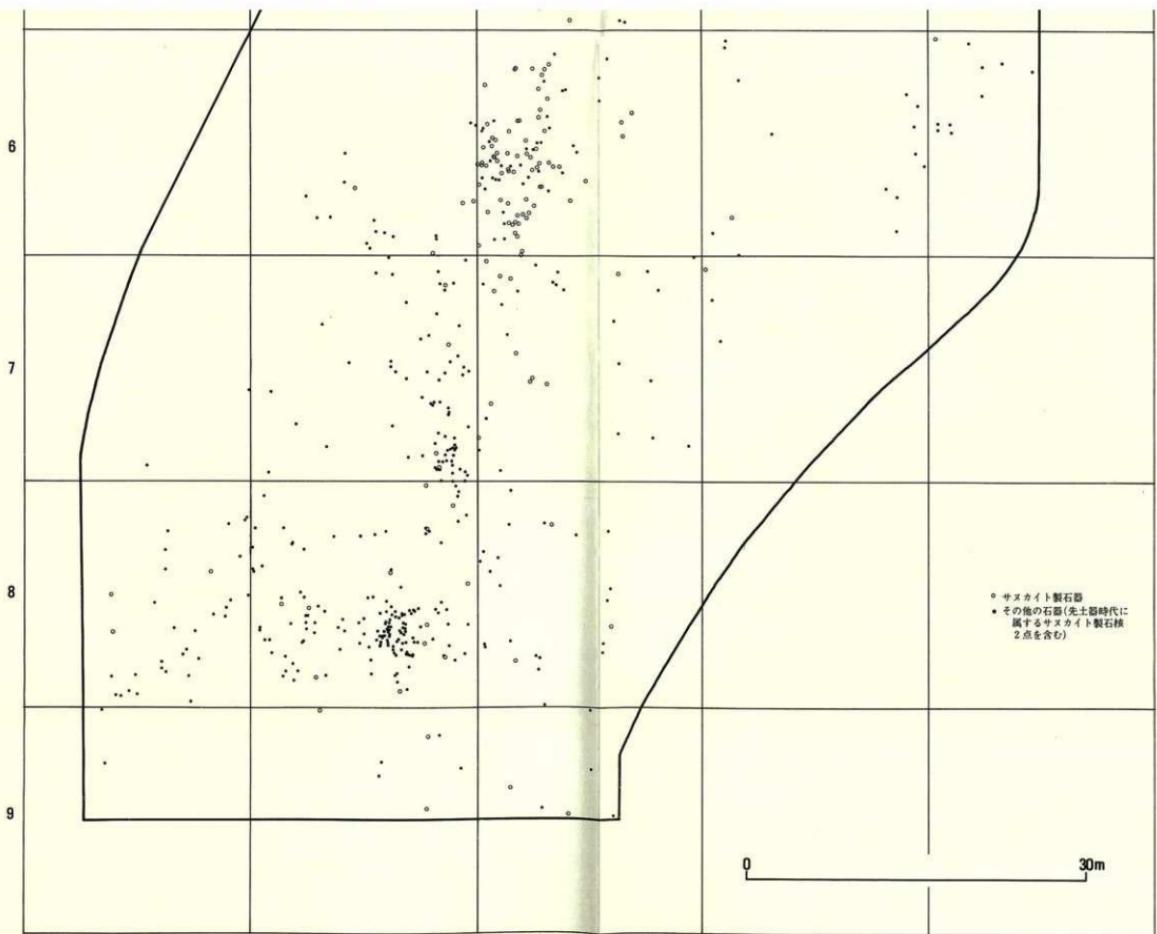


石 鐵 (II・III・IV類)

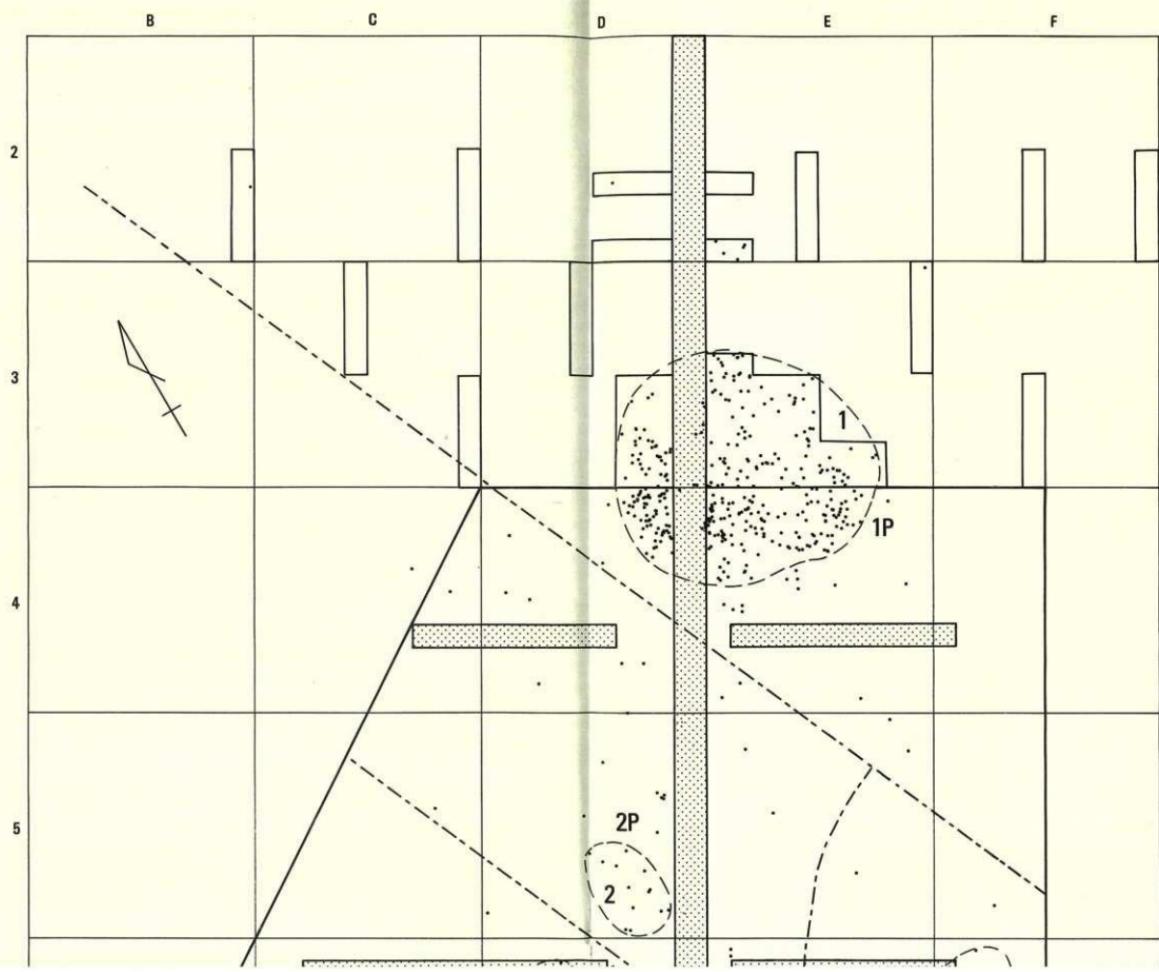


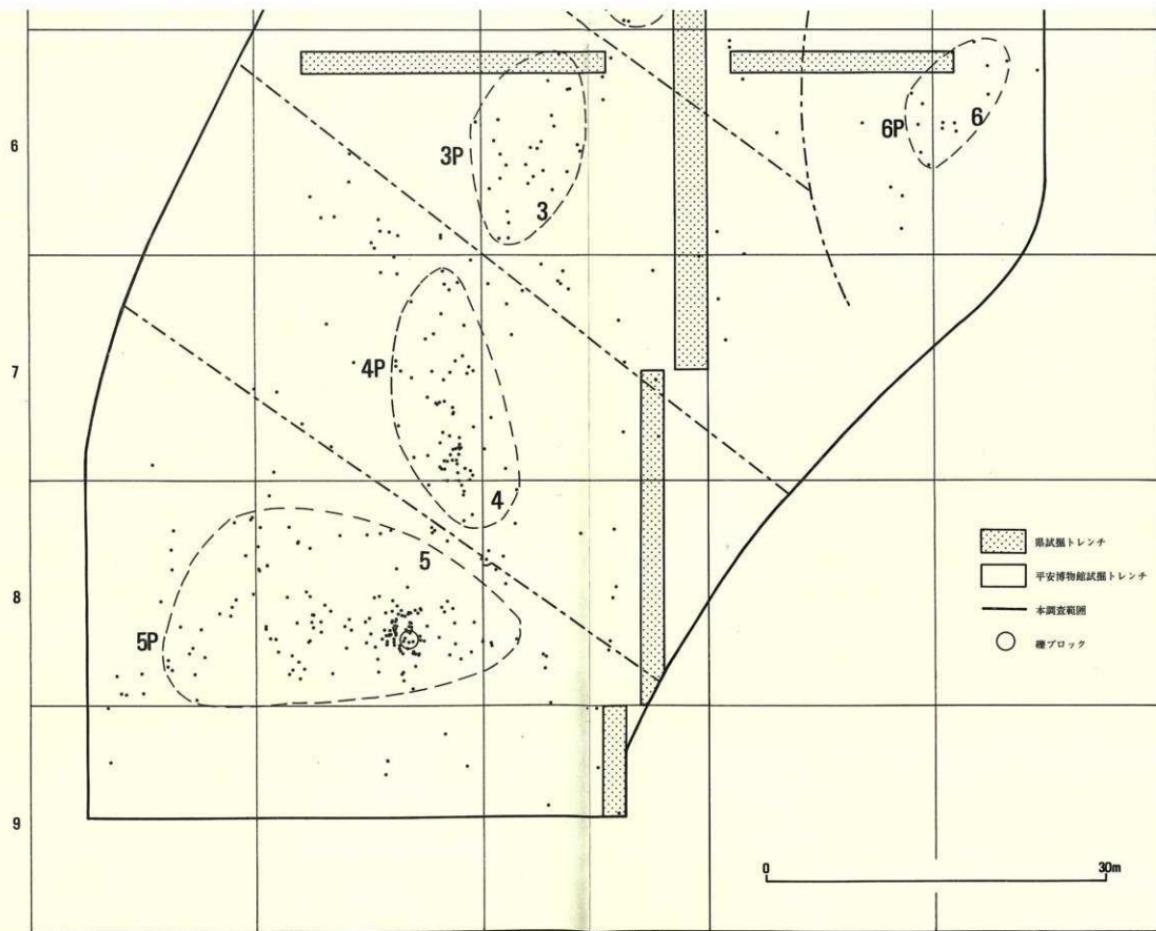
刮器, 楔形石器, R.F., U.F.他



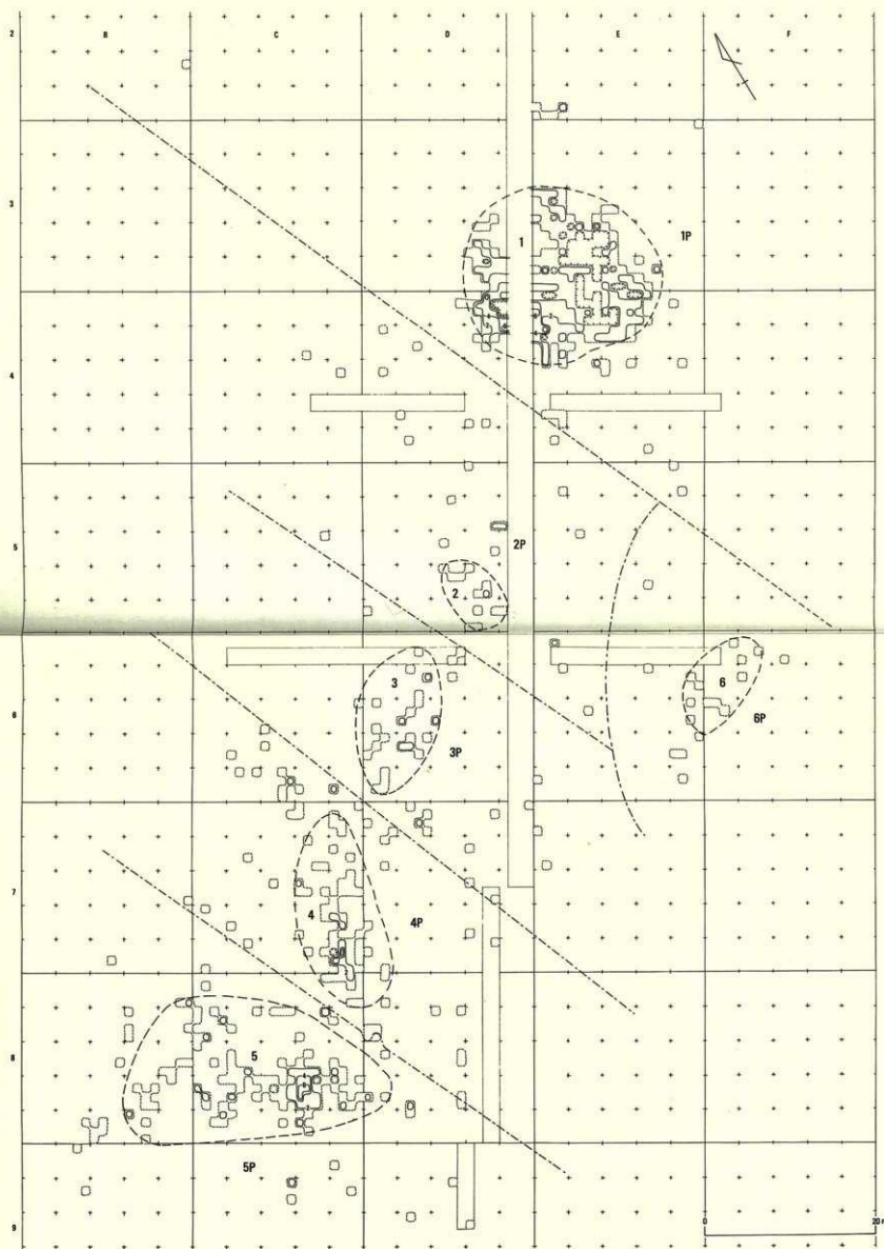


別添第1図 遺跡出土石器全点分布図





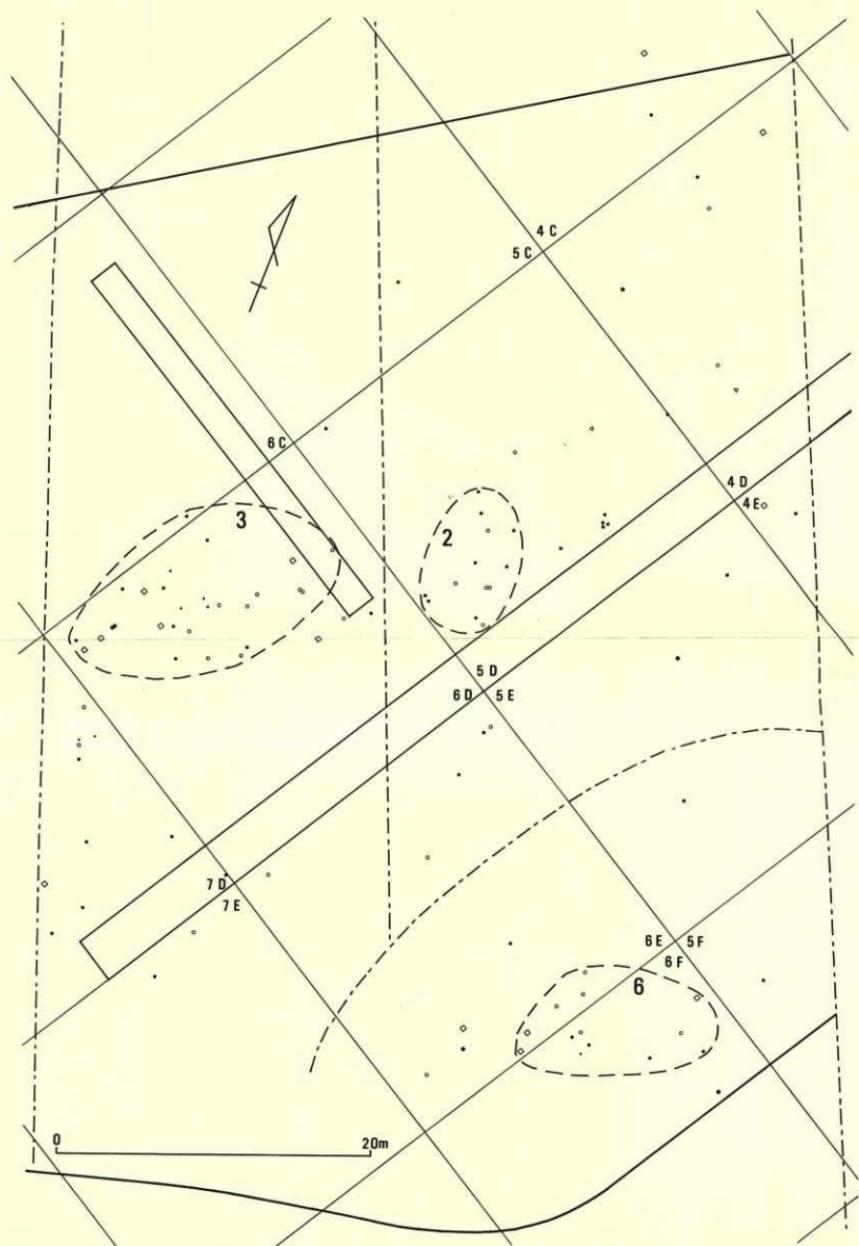
別添第2図 先土器時代の石器全点分布図



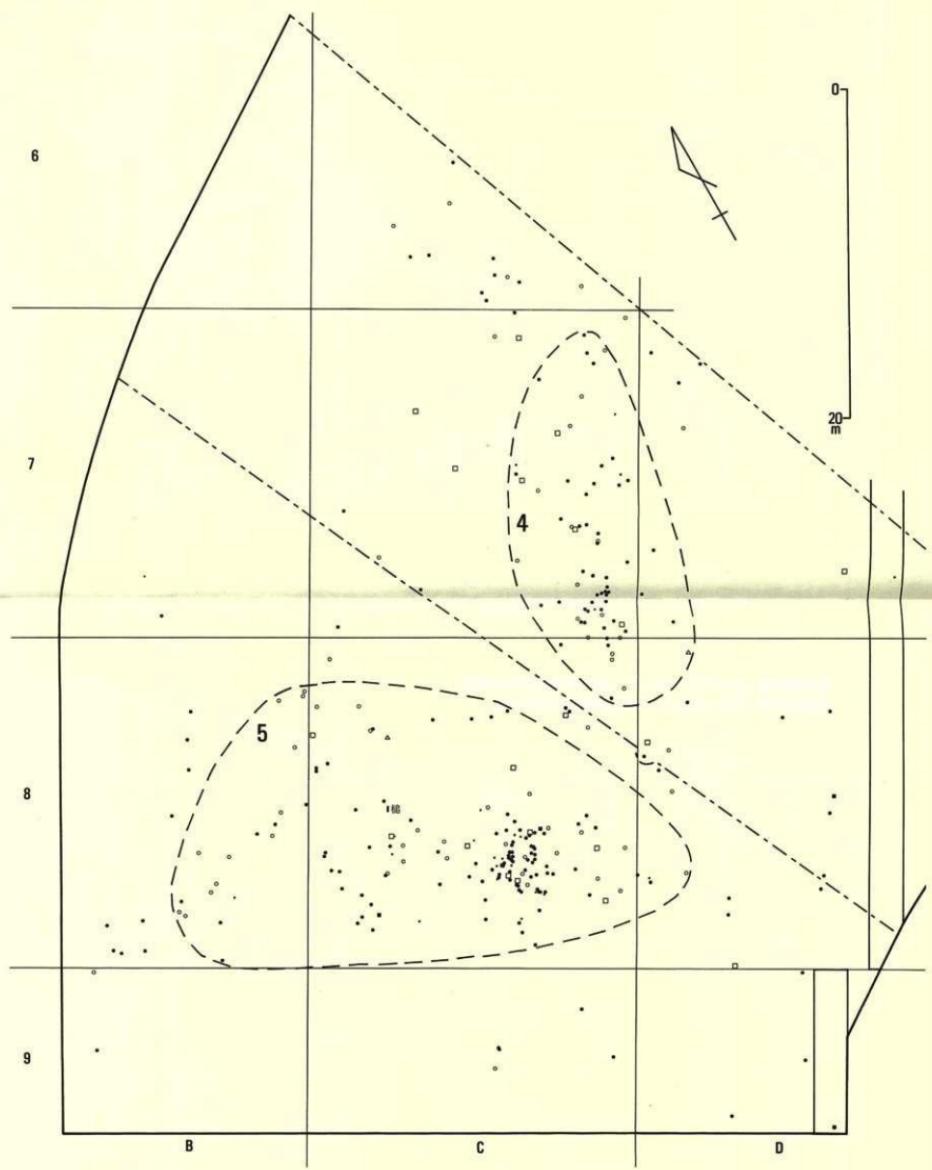
別添第3図 先土器時代の石器分布等量線図（1mメッシュで集計。破線は1点を表わす。）



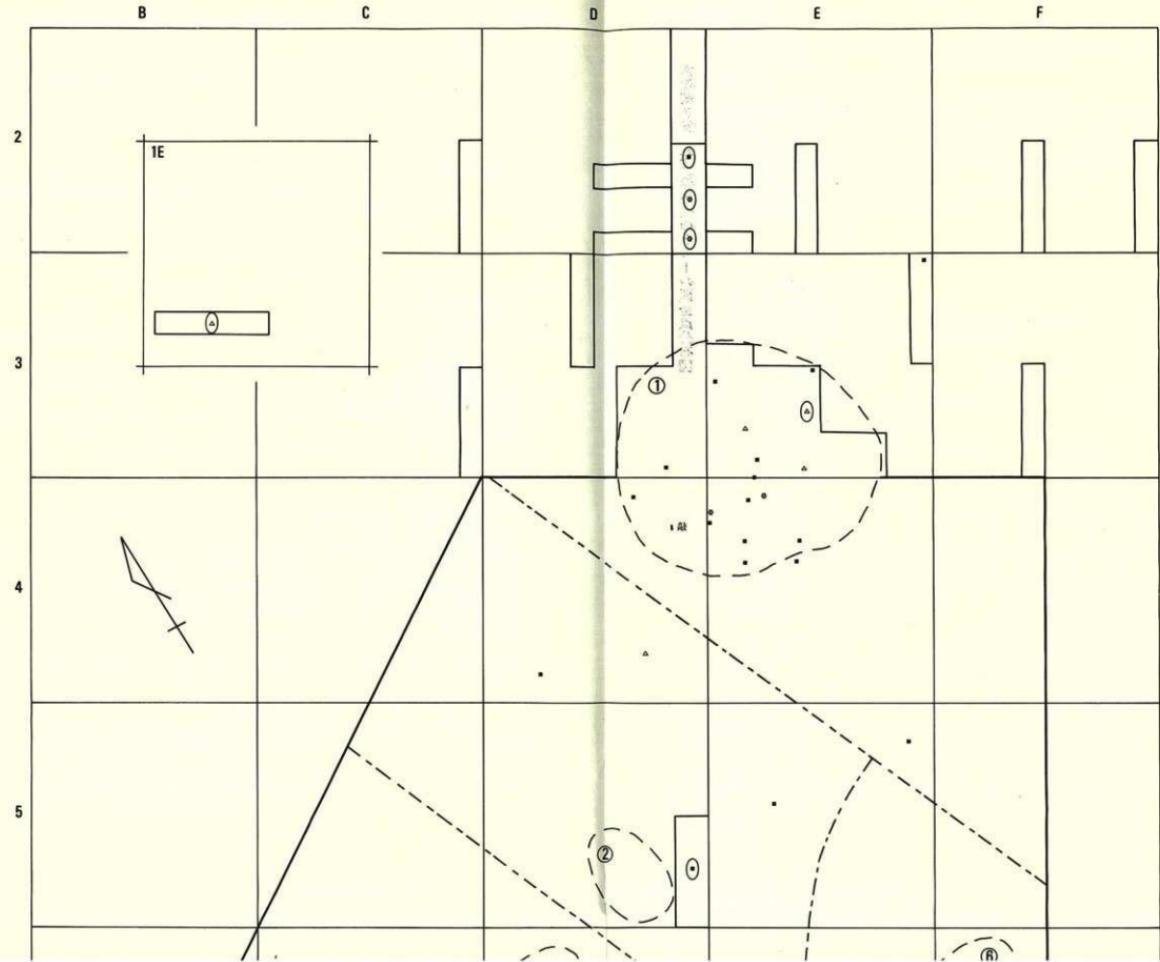
別添第4図 第1ブロック周辺器種別石器分布図

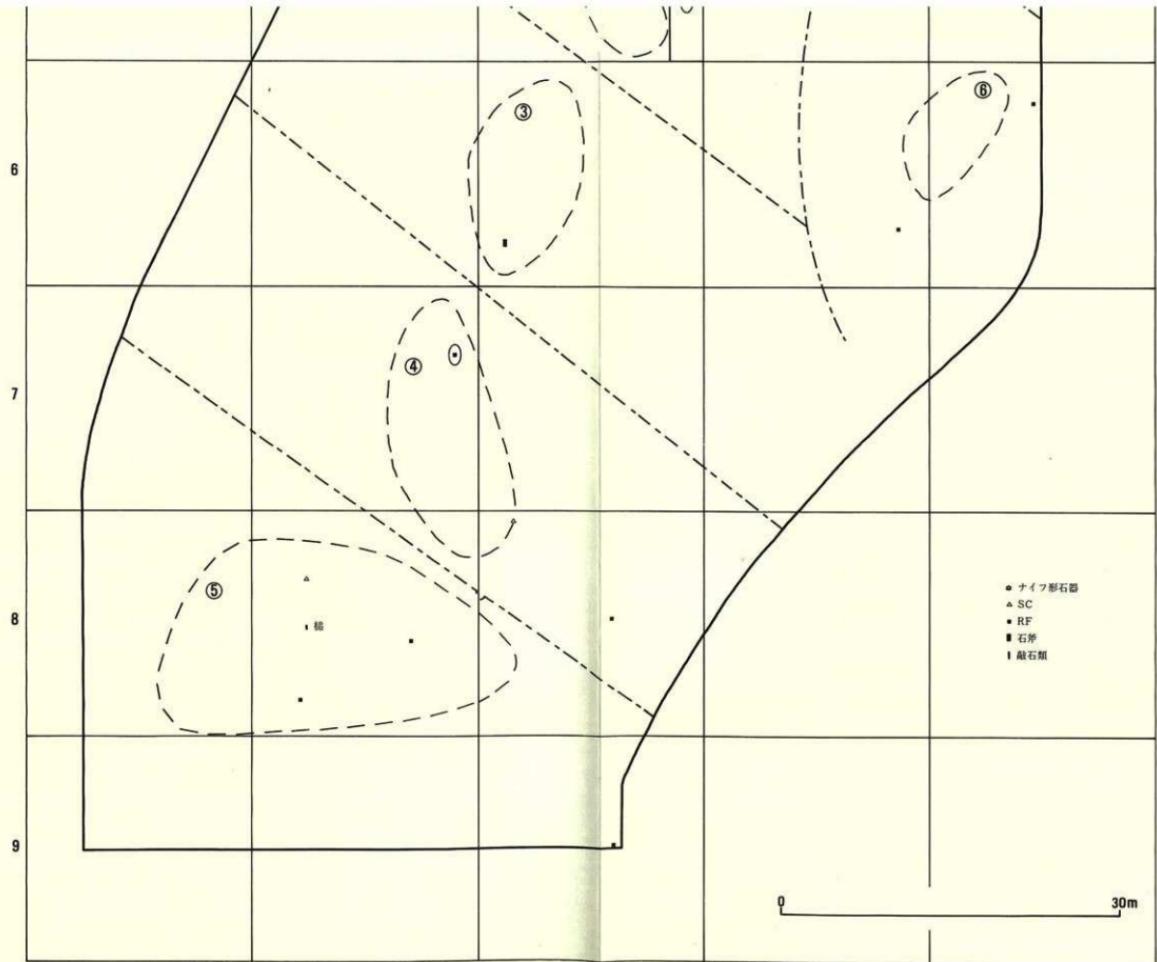


別添第5図 第2・3・6 ブロック周辺器種別石器分布図（凡例は別添第4図と同じ）

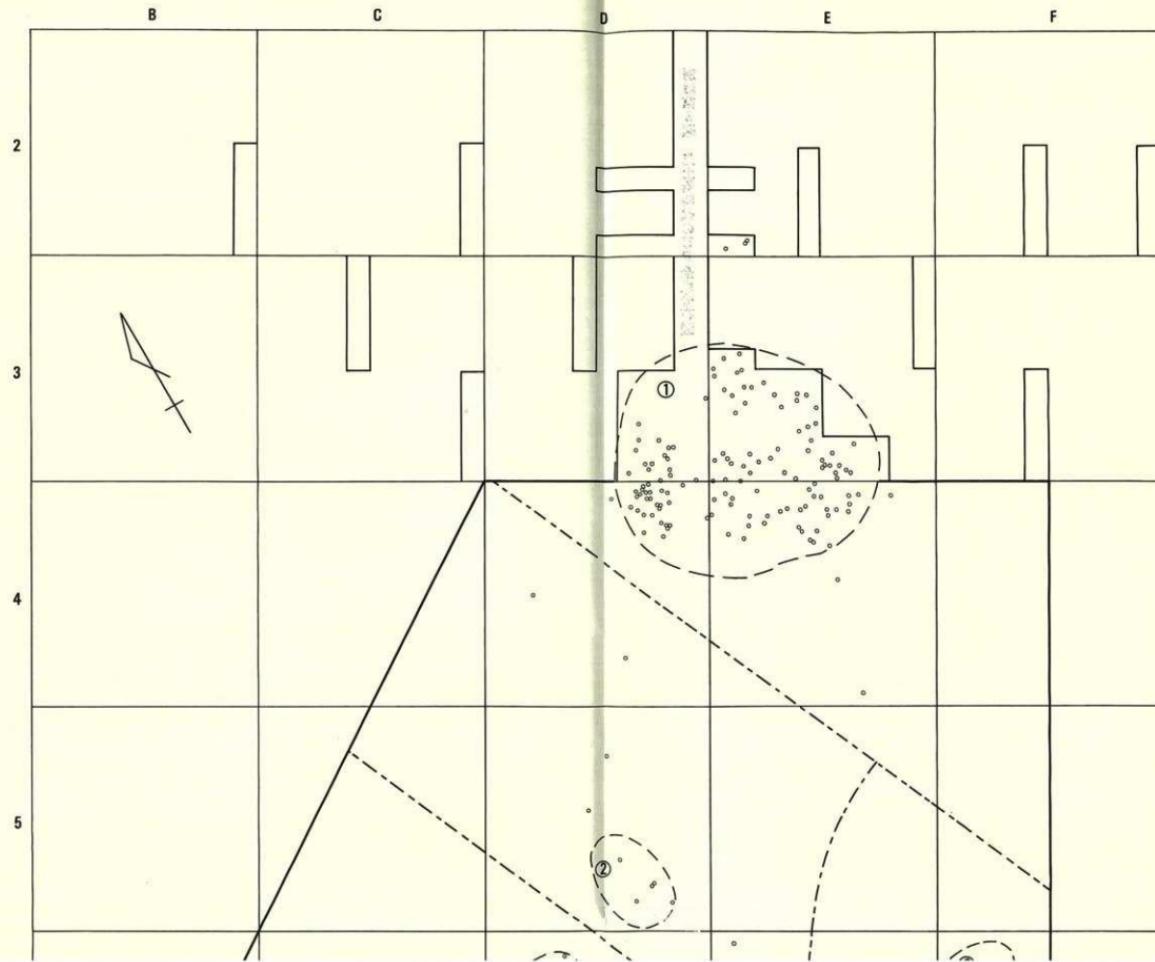


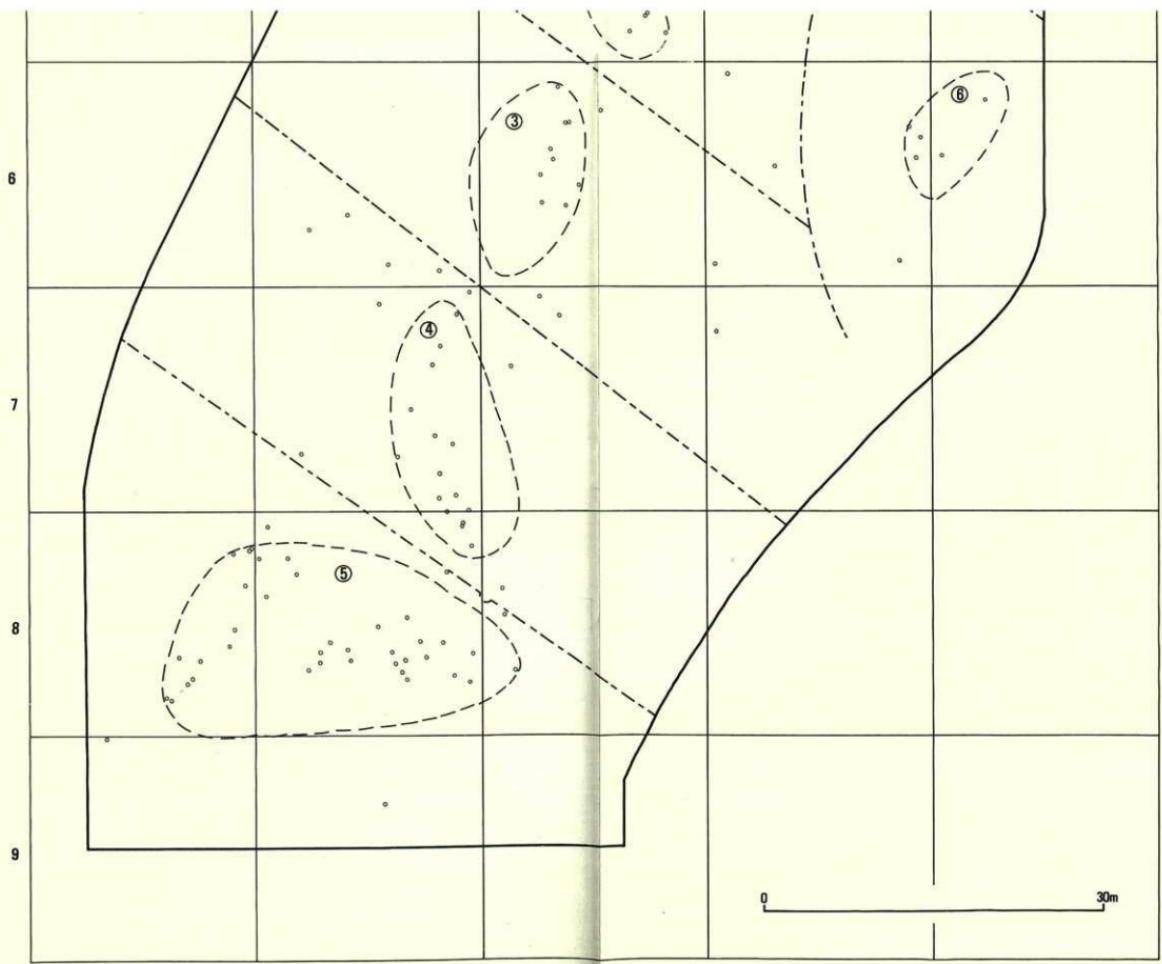
別添図6図 第4・5ブロック周辺器種別石器分布図（凡例は別添図4図と同じ）



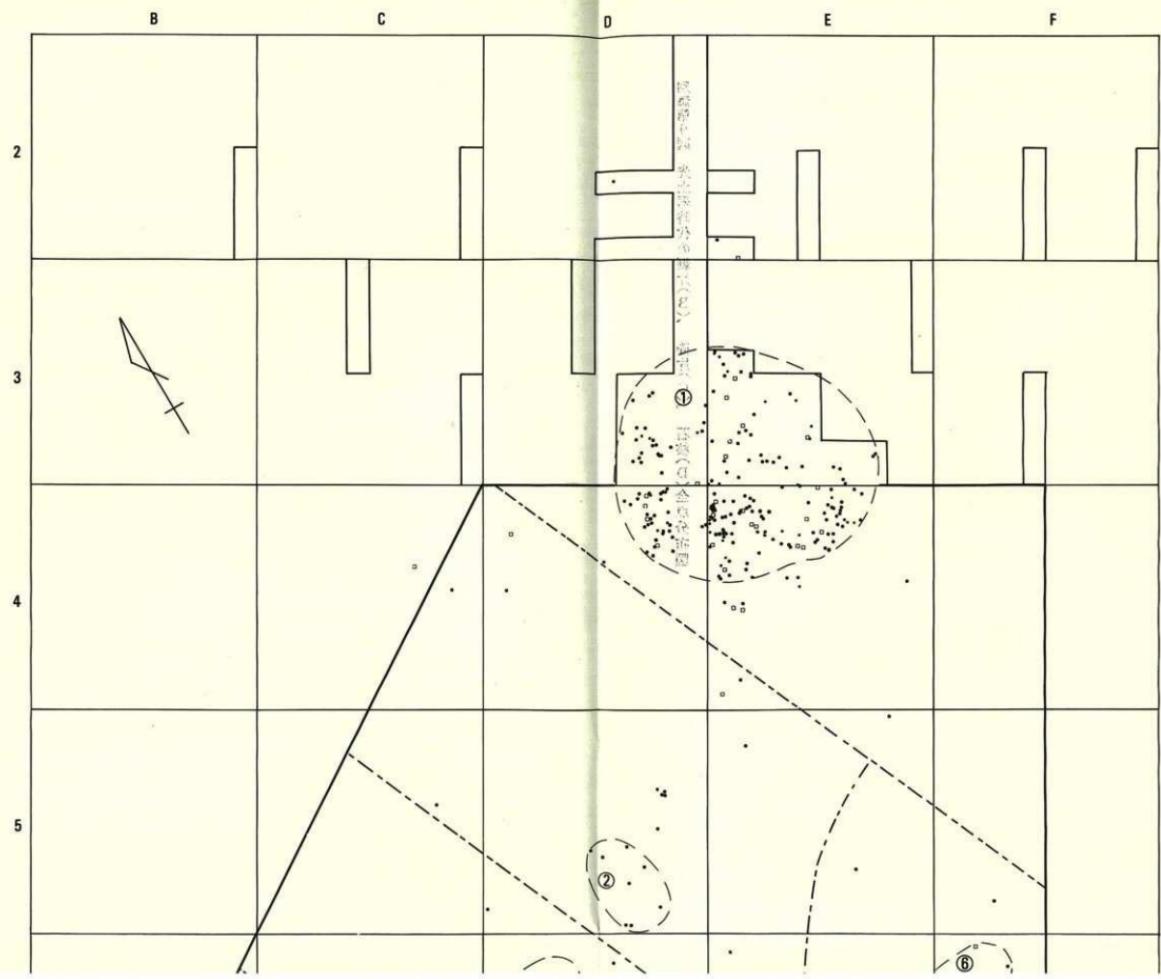


別添第7図 先土器時代のトゥール類全点分布図 (○で囲った遺物はおよその出土位置)



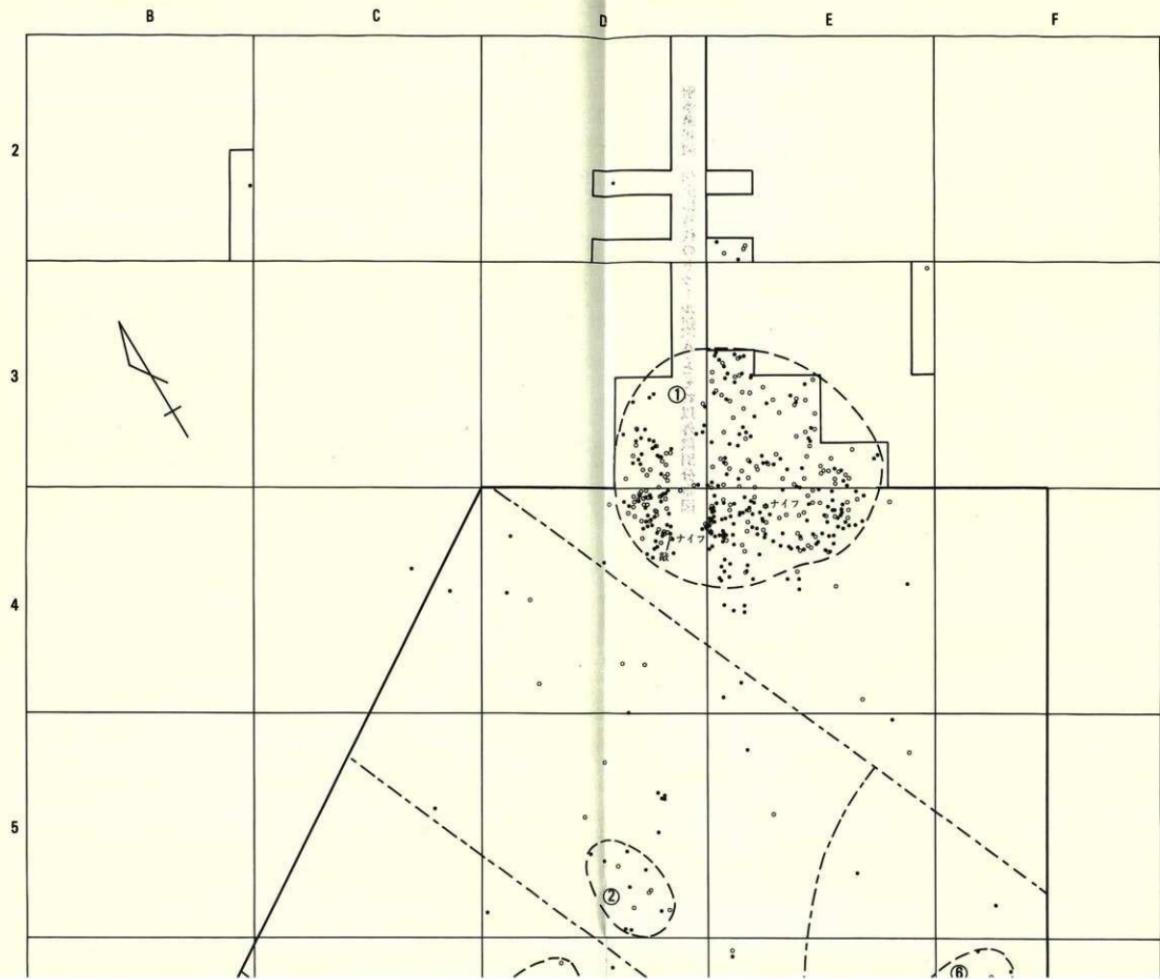


別添第8図 先土器時代のUF全点分布図



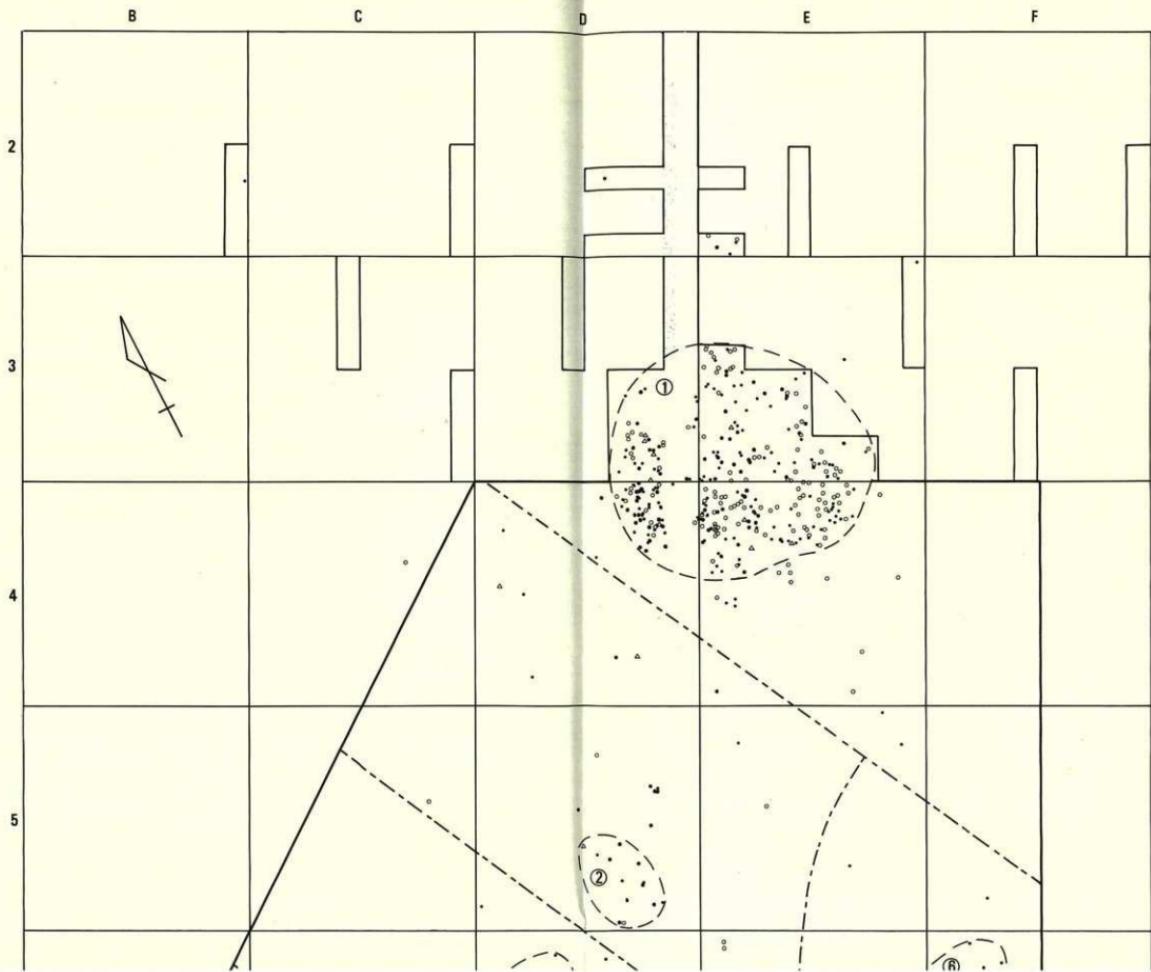


別添第9図 先土器時代の剥片(B), 砕片(C), 石核(D)全点分布図



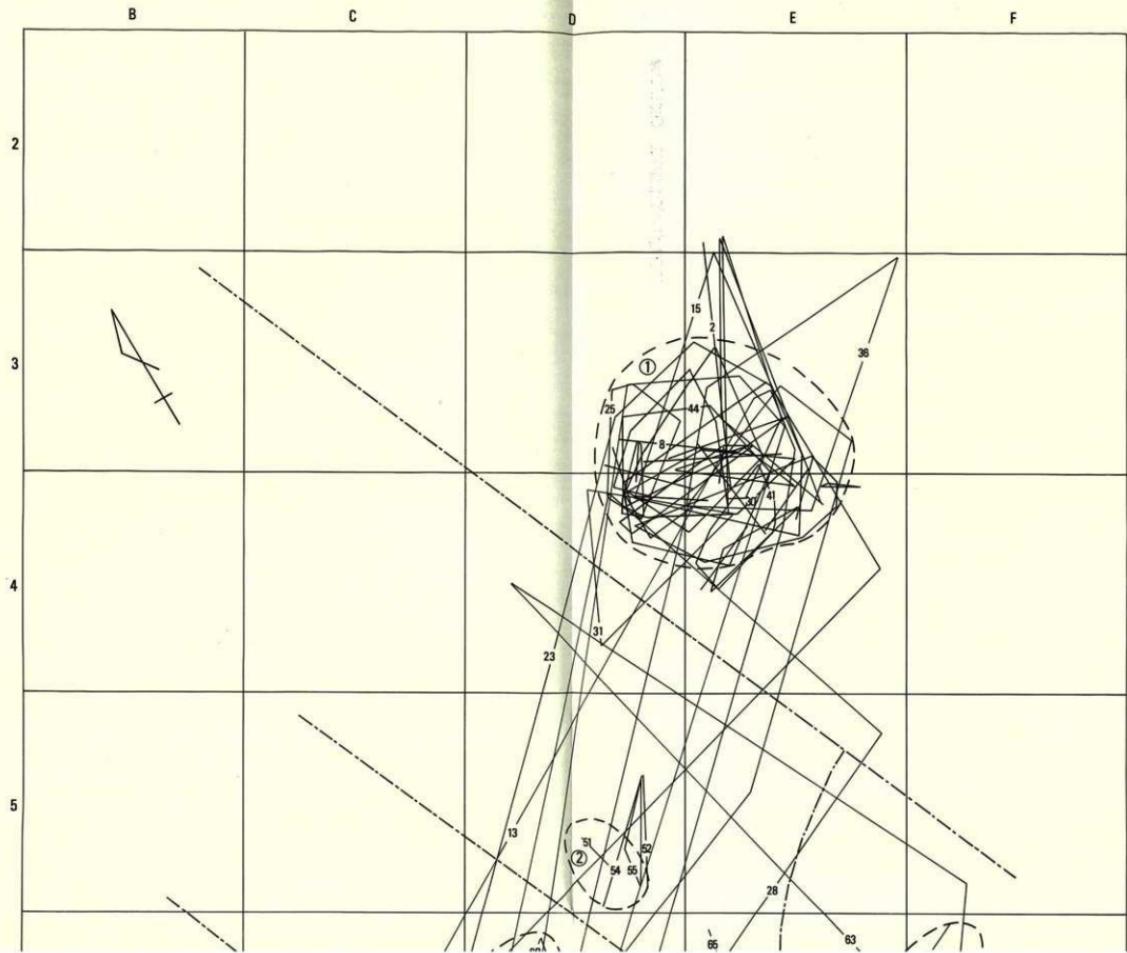


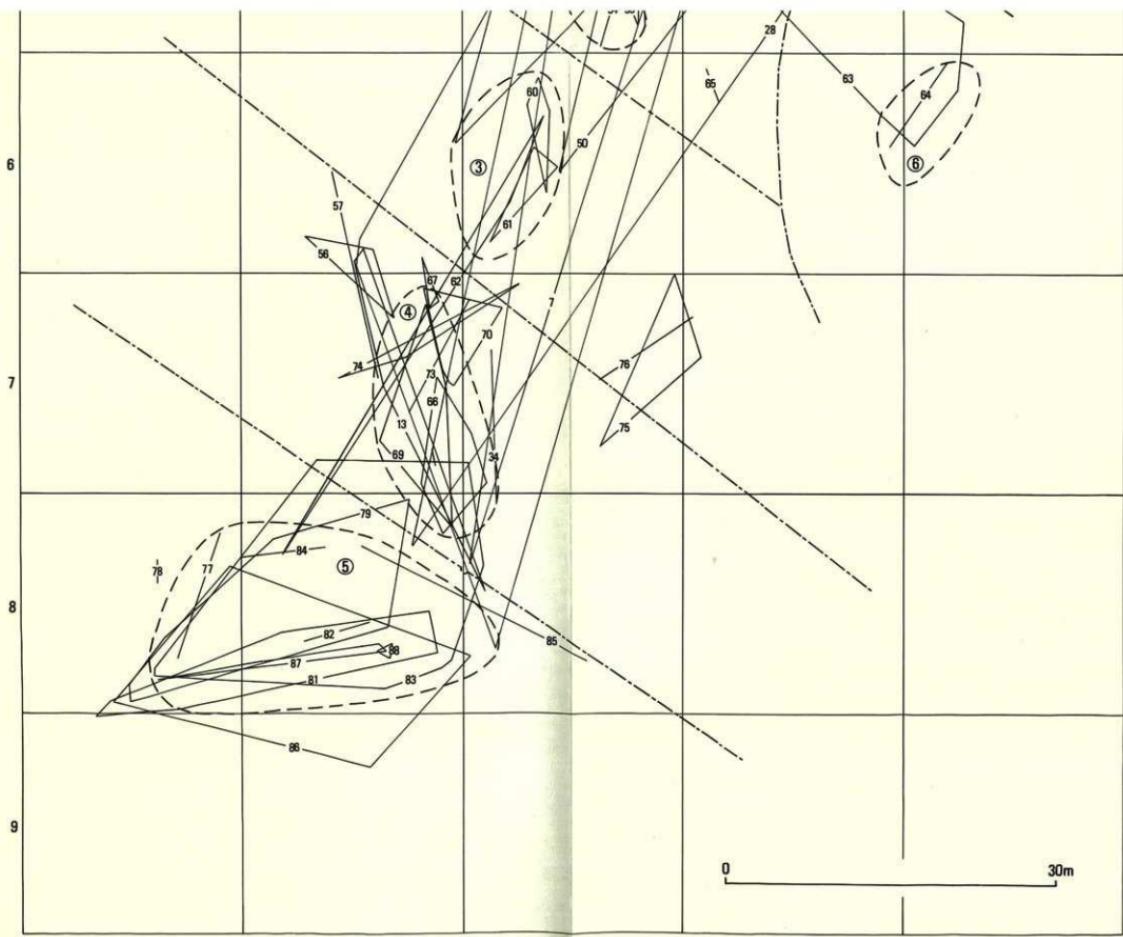
別添第10図 先土器時代のトゥール類(A)とそれ以外識別分布図



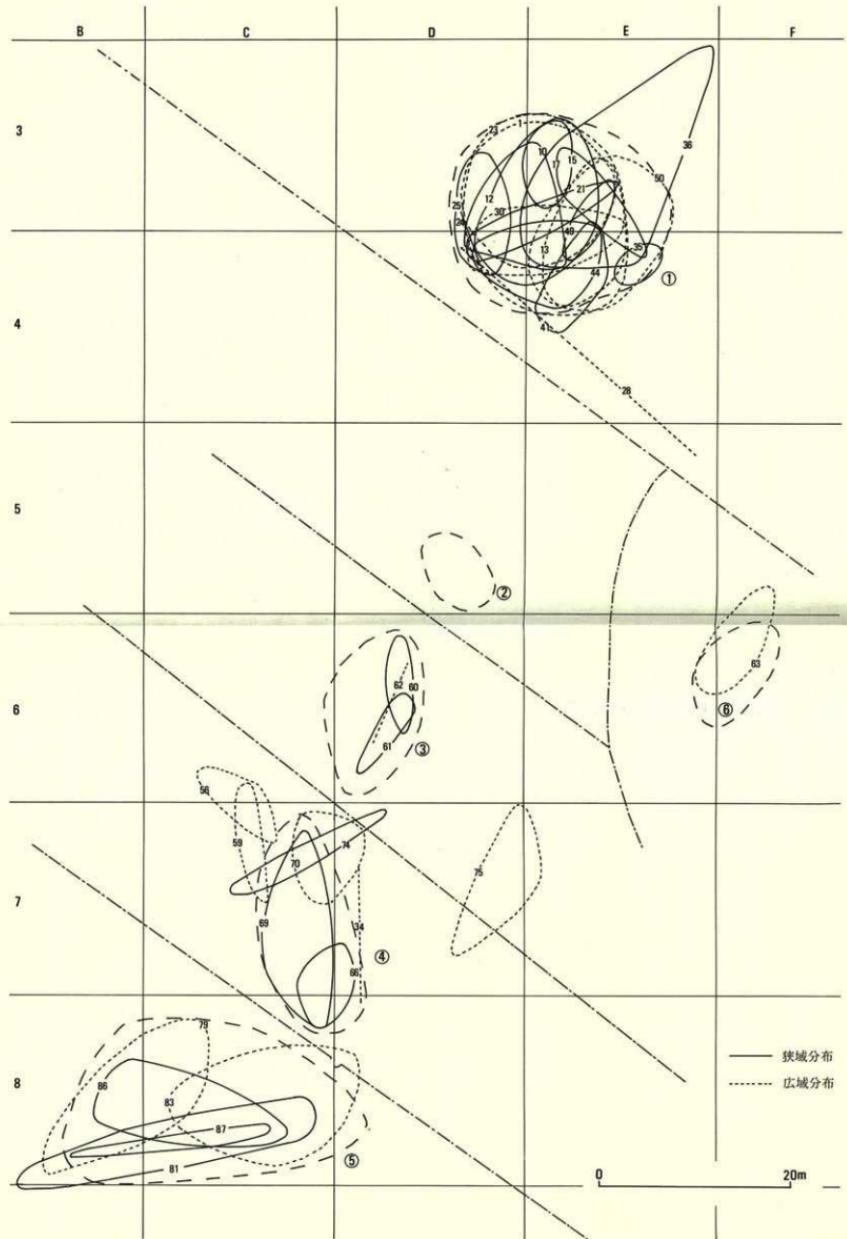


別添第11図 先土器時代の石器石材別分布図

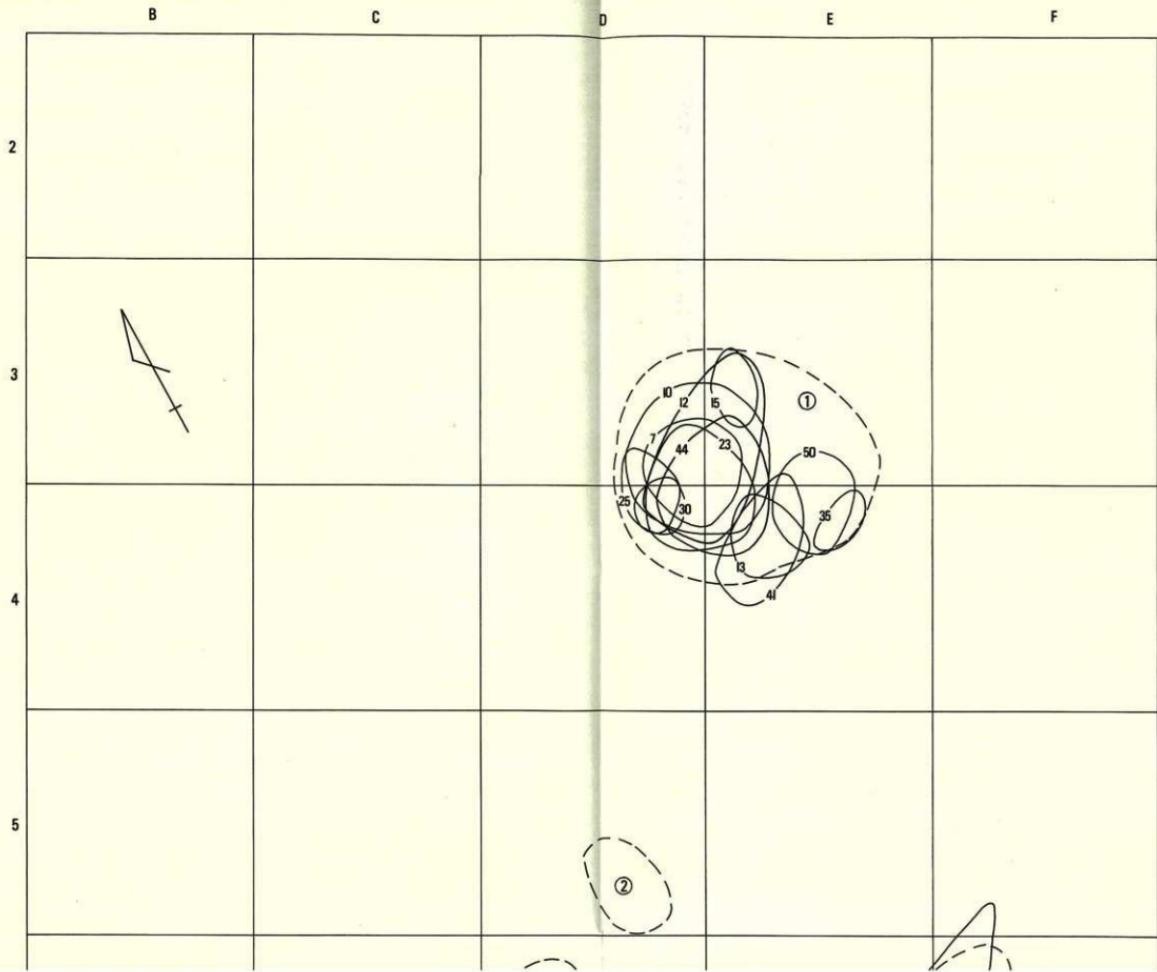


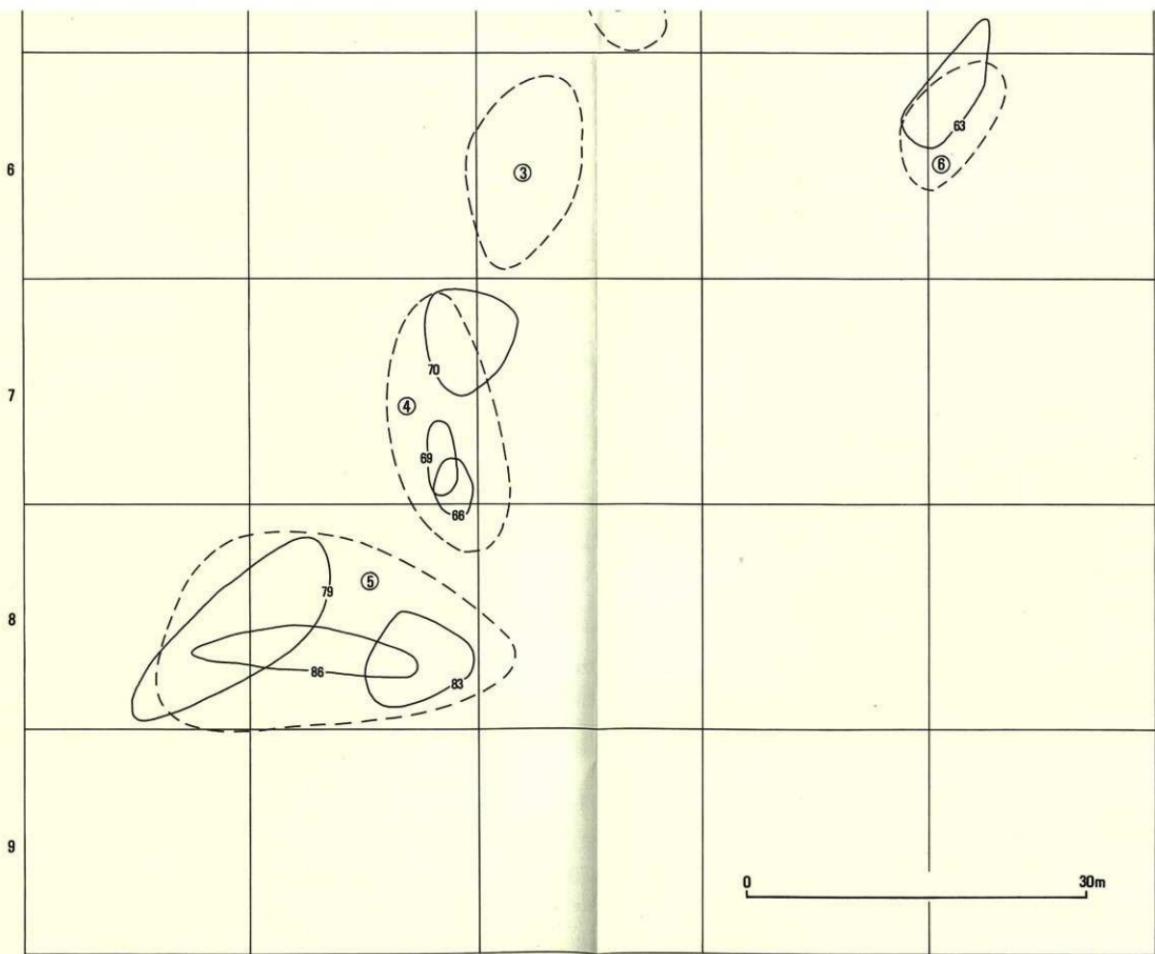


別添第12図 個体別資料分布範囲図（数字は、個体別資料の通し番号（第10表）を表わす。別添第1588まで同じ）



別添第13図 個体別資料中心分布図（資料総点数5点以上に限る）





別添第14図 個体別剥片剥離作業域分布図（凡例は別添第12図と同じ）

B

C

D

E

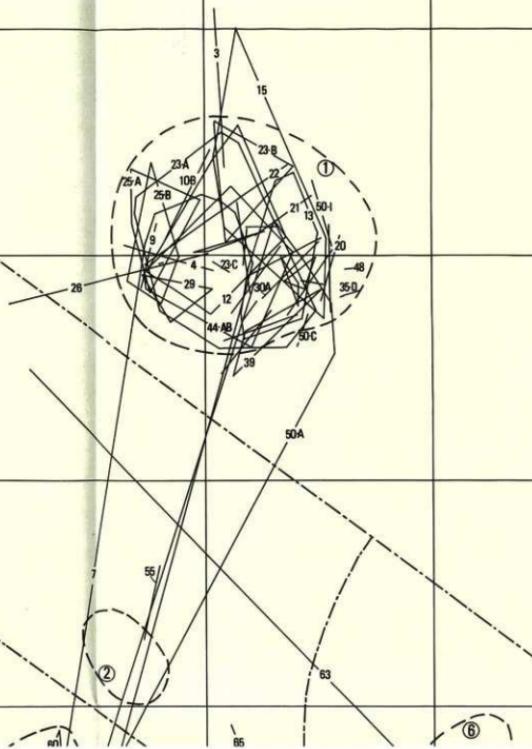
F

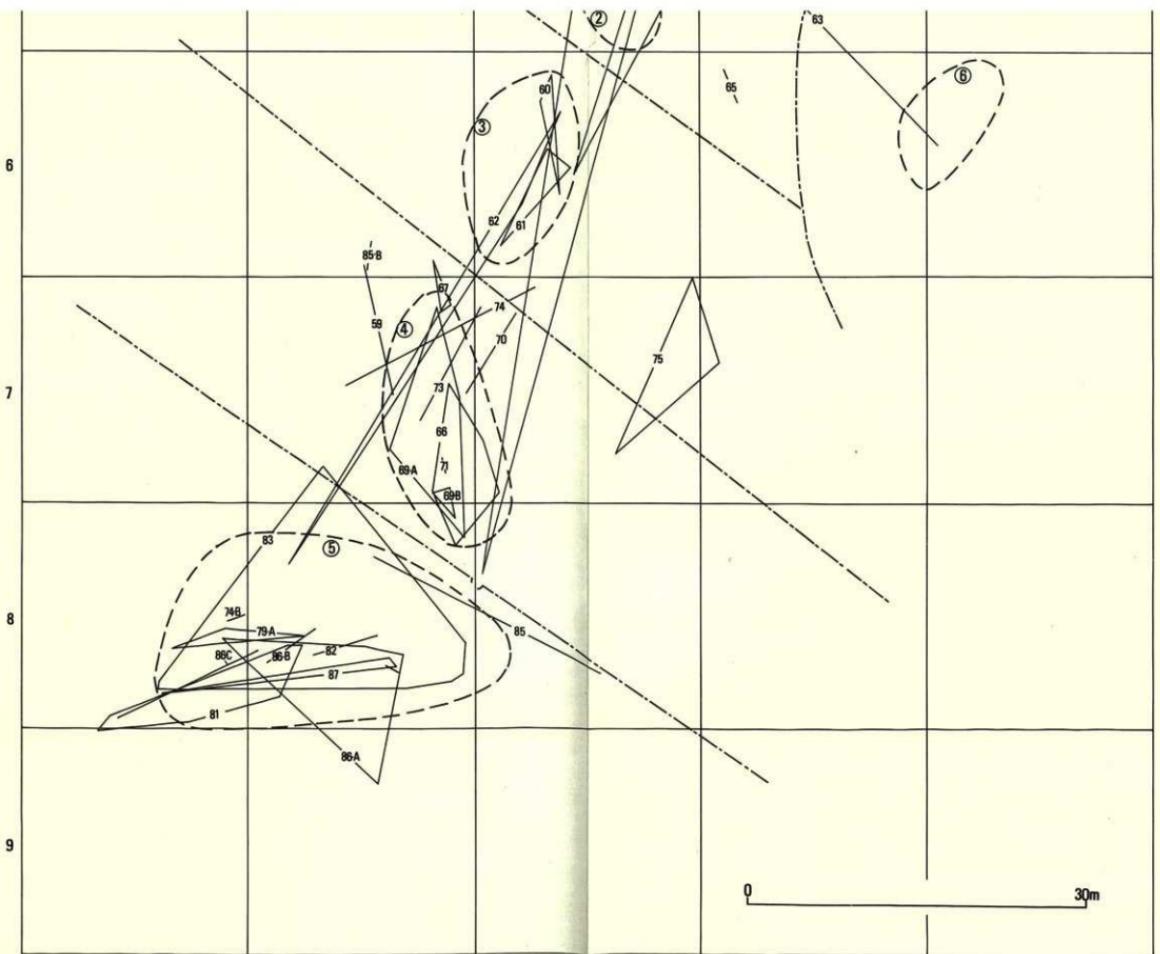
2

3

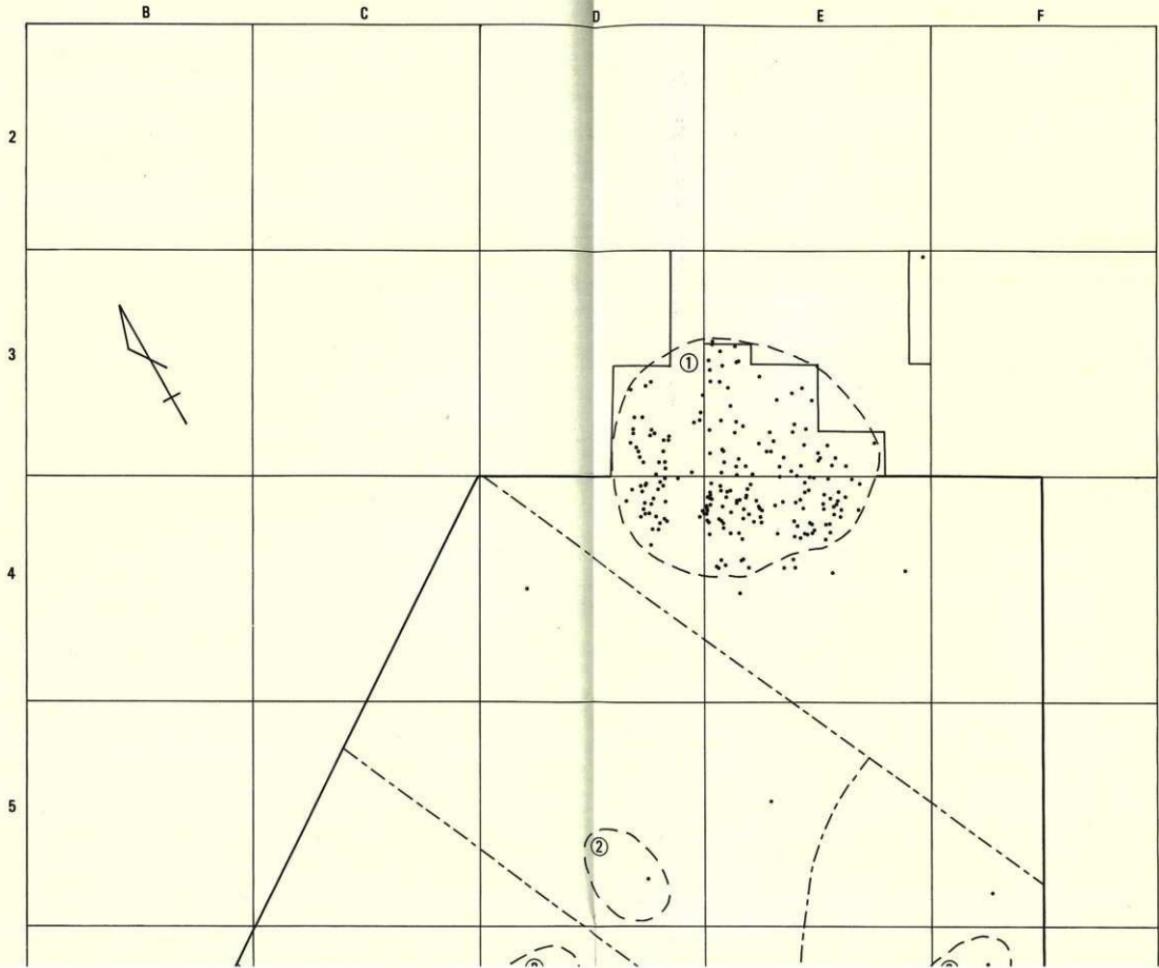
4

5





別添第15図 接合資料分布範囲図（凡例は別添第12図と同じ。番号の後のアルファベットは接合群を示す）





別添第16図 剥片剥離作業の明瞭な個体別資料分布図（個体別資料番号7・10・12・13・15・23・25・30・35・36・41・44・50・63・66・69・70・79・81・83・86）

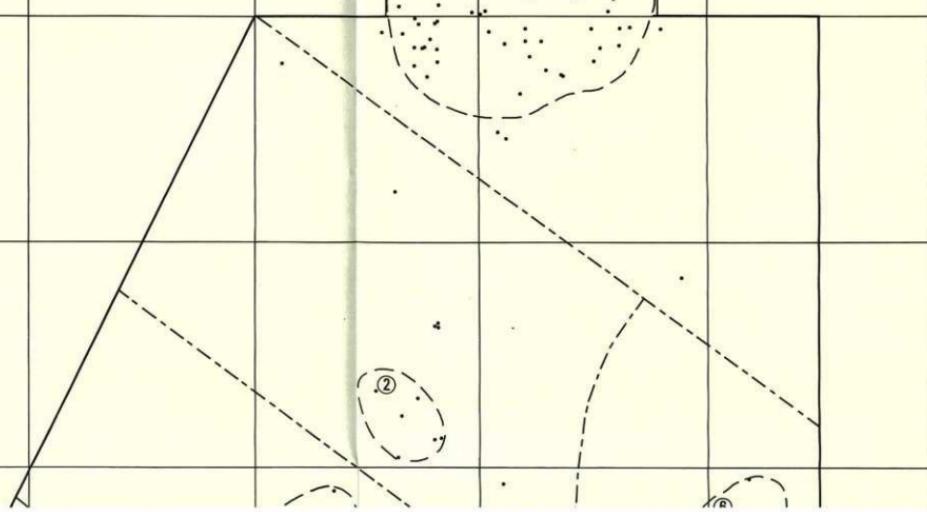
B C D E F

2

3

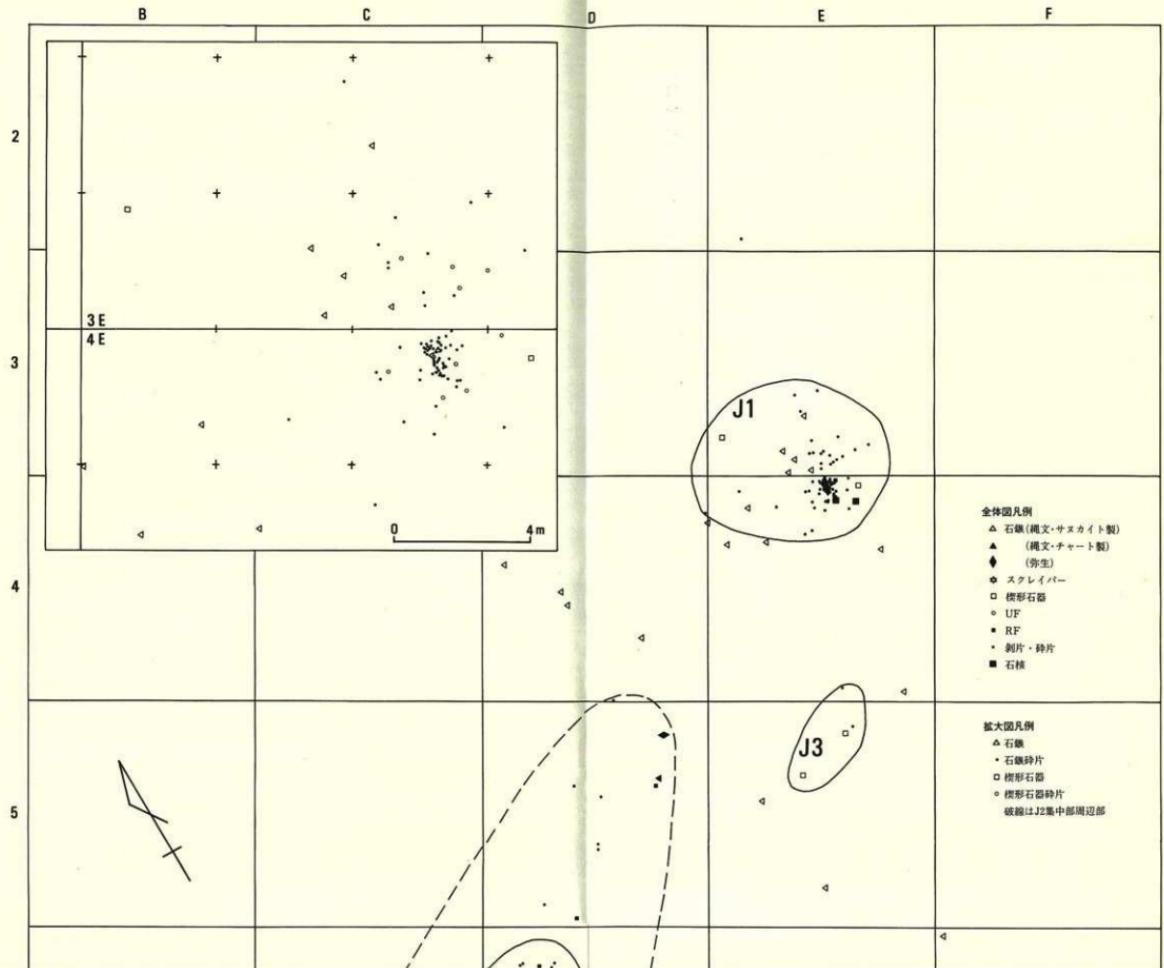
4

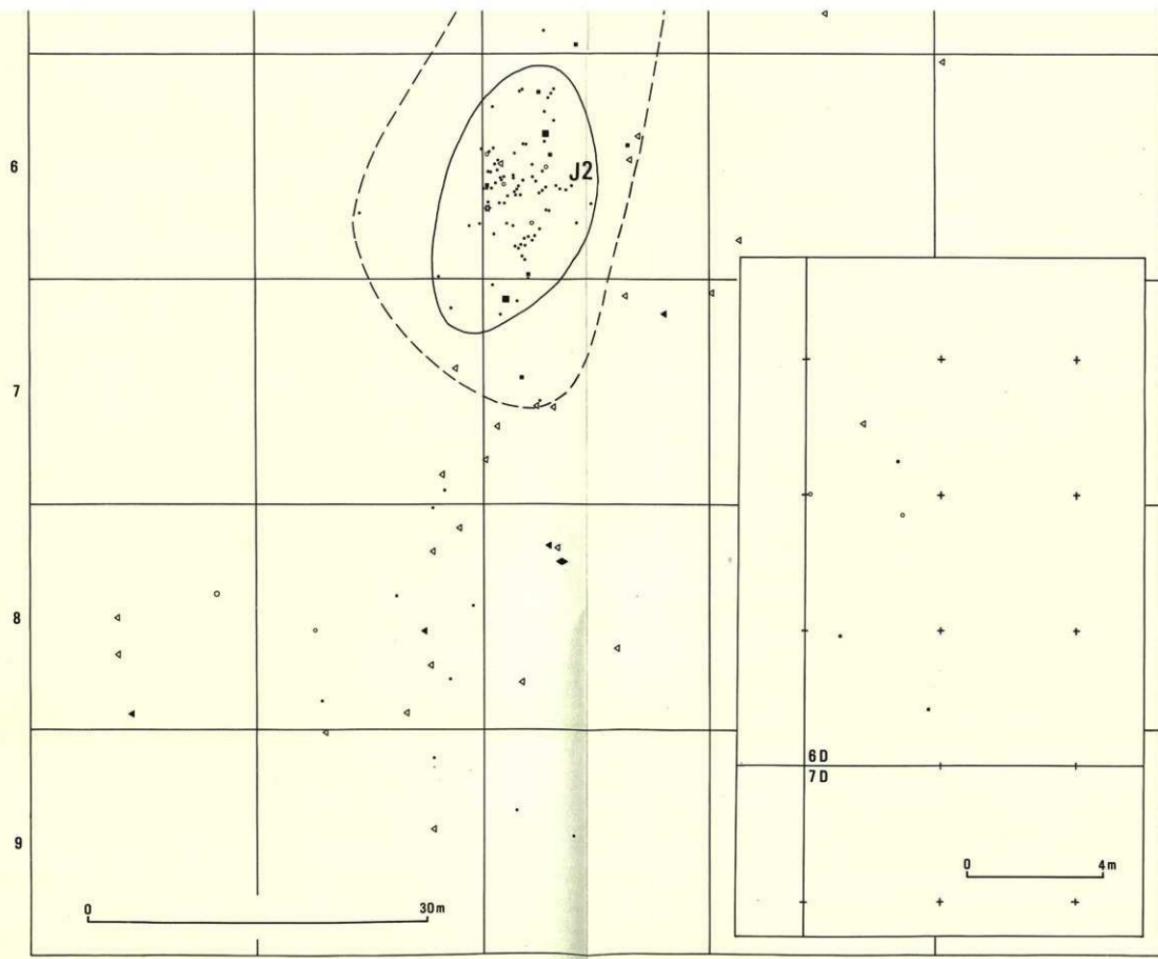
5





別添第17図 剥片剥離作業の不明確な個体別資料分布図





別添第18図 縄文・弥生時代石器全点分布図（石鏃・石鎚チップ・楔形石器・楔形石器碎片分布の大體(左上: J1, 右下: J2)）

兵庫県三田市
溝口遺跡
—北摂工業地区—

発行日 昭和61年10月31日
編集 平安博物館考古学第1研究室
山下秀樹
同 考古学第2研究室
南博史
発行 住宅・都市整備公団関西支社
〒536 大阪市城東区森之宮1-6-85
財團法人古代學協會
〒604 京都市中京区三条高倉
制作 ピクトリー社
〒604 京都市中京区油小路通上ル
TEL.075(221)1420

EXCAVATIONS AT THE MIZOGUCHI SITE
IN SANDA CITY JAPAN

THE PALAEONTOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXVI